熊本県文化財調査報告　第170集

迫ノ上遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９．３

熊本県教育委員会

迫ノ上遺跡遠景

平成３、４年度調査区全景

平成６年度調査区全景

熊本県文化財調査報告　第170集

迫（さこ）ノ上（のうえ）遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９．３

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、建設省の委託により、平成３年度から７年度にかけて、一般国道３号熊本北バイパス改築事業地内に所在する３遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしましたが、このうち迫ノ上遺跡の出土資料の整理が終わり、報告書を出版する運びとなりました。

迫ノ上遺跡の発掘調査は、平成３・４年度、６年度、７年度の３次にわたって実施し、縄文時代、古墳時代を中心とする多数の遺構・遺物が出土いたしました。中でも古墳時代の３つの炉をもつ大型住居跡や、かまど付きの住居跡群は、この時代の熊本周辺の人々の生活を知るうえで、大変貴重な資料となると思われます。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、まことに喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった建設省九州地方建設局熊本工事事務所、ならびに御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成11年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　　佐々木正典

例　　言

1　本書は、一般国道３号熊本北バイパス改築事業に関連して、平成３年度から７年度にかけて実施した熊本市龍田町上立田に所在する「迫ノ上遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が行った。

3　現地での発掘調査は、平成３年度から７年度にかけて、長谷部善一、磯野雄二、西住欣一郎、濱田彰久、池本利直、長尾至明、岡本勇人、三好伴典、田中康雄、山田大輔が行った。

4　遺物の整理および本書の編集は、平成８年度に熊本県文化財収蔵庫で実施し、濱田、赤坂希、知名石揚子が主にこれにあたった。遺物実測および製図は、濱田、赤坂、知名石、池田由希子、水本佳子が行った。また、土器実測の一部については、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

5　本書に使用した挿図のうち、第１図については、建設省熊本工事事務所から提供を受けたものを基礎にした。また、第２図および第２、３表は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図を使用し、「熊本県遺跡地図」をもとに作成した。

6　本書の執筆は熊本県文化財収蔵庫において、濱田が行った。

7　遺物の写真撮影は、熊本県文化財収蔵庫において、今村龍太郎が行った。

8　整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿３丁目15－12）に保管されている。

凡　　例

1　本書に示した方位は、第１、２図を除き、すべて磁北である。

2　遺構の実測図は以下の縮尺で掲載した。

　埋甕・集石…20分の１　竪穴住居跡・掘立柱建物跡…60分の１

3　遺構における高度は、海抜高である。

4　遺構の深さで特に断りのないものは、検出面からの深さである。

5　遺物の実測図は以下の縮尺で掲載した。

　縄文土器…２分の１、第16図のみ３分の１　古墳・歴史時代土器…３分の１

　石器…原則として原寸大、第26、29、30図は２分の１、第31、32図は４分の１、第33～35図は３分の１、第39図139は３分の２

6　出土遺物観察表における計測値は現存値であるが、土器の口底径については復原値を示した。

本　文　目　次

口　絵
序　文
例言・凡例

第Ⅰ章　序　説
第１節　調査に到る経緯 …… 1
１　調査に到る経緯 …… 1
２　調査組織 …… 2
第２節　遺跡の概要と環境 …… 2
１　遺跡の概要と地理的環境 …… 2
２　歴史的環境 …… 4

第Ⅱ章　調査の成果 …… 9
第１節　調査の概要 …… 9
１　調査の概要 …… 9
２　遺跡の基本層位 …… 16
第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 17
１　竪穴住居跡 …… 17
２　集石遺構 …… 18
３　埋甕遺構 …… 18
４　土器 …… 18
５　石器 …… 36
第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 57
１　竪穴住居跡 …… 57
２　掘立柱建物跡 …… 77
３　土師器 …… 79
４　その他の遺物 …… 79
第４節　歴史時代の遺物 …… 87
１　土器 …… 87

第Ⅲ章　まとめ …… 89
１　縄文時代 …… 89
２　古墳時代 …… 89
３　歴史時代 …… 90

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　迫ノ上遺跡調査区位置図 …… 3
第２図　熊本北バイパス周辺文化財分布図 …… 5
第３図　迫ノ上遺跡調査区グリッド図 …… 9
第４図　Ⅰ区遺構配置図 …… 10
第５図　Ⅱ区、Ⅲ区遺構配置図 …… 11
第６図　Ⅳ区、Ⅴ区遺構配置図 …… 12
第７図　Ⅵ区、Ⅶ区、Ⅸ区遺構配置図 …… 14
第８図　Ⅷ区遺構配置図 …… 15
第９図　基本土層図 …… 16
第10図　Ⅵ区１号・２号住居跡 …… 17
第11図　Ⅱ区集石遺構、Ⅴ区埋甕遺構 …… 19
第12図　出土縄文土器 (1) …… 21
第13図　出土縄文土器 (2) …… 22
第14図　出土縄文土器 (3) …… 23
第15図　出土縄文土器 (4) …… 24
第16図　出土縄文土器 (5) …… 25
第17図　出土縄文土器 (6) …… 27
第18図　出土縄文土器 (7) …… 29
第19図　出土縄文土器 (8) …… 30
第20図　出土縄文土器 (9) …… 31
第21図　出土縄文土器 (10) …… 32
第22図　出土縄文土器 (11) …… 33
第23図　出土縄文石器 (1) …… 37
第24図　出土縄文石器 (2) …… 38
第25図　出土縄文石器 (3) …… 40
第26図　出土縄文石器 (4) …… 41
第27図　出土縄文石器 (5) …… 42
第28図　出土縄文石器 (6) …… 43
第29図　出土縄文石器 (7) …… 44
第30図　出土縄文石器 (8) …… 45
第31図　出土縄文石器 (9) …… 46
第32図　出土縄文石器 (10) …… 47
第33図　出土縄文石器 (11) …… 48
第34図　出土縄文石器 (12) …… 49
第35図　出土縄文石器 (13) …… 50
第36図　出土縄文石器 (14) …… 51
第37図　出土縄文石器 (15) …… 52
第38図　出土縄文石器 (16) …… 53
第39図　出土縄文石器 (17) …… 54
第40図　Ⅵ区１号住居跡および出土土器 …… 59
第41図　Ⅵ区２号、４号住居跡および２号住居跡出土土器 …… 60
第42図　Ⅵ区３号住居跡および出土土器 …… 61
第43図　Ⅶ区５号住居跡出土土器 …… 64
第44図　Ⅶ区５号住居跡 …… 65～66

第45図　Ⅶ区６号、Ⅷ区７号住居跡および６号住居跡出土土器 ……67
第46図　Ⅷ区８号住居跡および出土土器……68
第47図　Ⅷ区９号住居跡および出土土器……69
第48図　Ⅷ区10号、11号住居跡および10号住居跡出土土器……70
第49図　Ⅷ区12号住居跡および出土土器……72
第50図　Ⅷ区13号、14号住居跡および13号住居跡出土土器……73
第51図　Ⅷ区15号、16号、17号、18号住居跡 ……74
第52図　Ⅷ区15号、16号、17号、18号住居跡出土土器 ……75
第53図　Ⅷ区19号住居跡および出土土器 (1)……76
第54図　Ⅷ区19号住居跡出土土器 (2)……77
第55図　Ⅷ区１号掘立柱建物跡……78
第56図　出土土師器 (1) ……80
第57図　出土土師器 (2) ……81
第58図　出土土師器 (3) ……82
第59図　その他の古墳時代の遺物 (1)……84
第60図　その他の古墳時代の遺物 (2)……85
第61図　その他の古墳時代の遺物 (3)……86
第62図　出土歴史時代土器 ……88

表　目　次

第１表　熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表 …… 1
第２表　熊本北バイパス周辺文化財分布図 (1) …… 6
第３表　熊本北バイパス周辺文化財分布図 (2) ……17
第４表　出土縄文土器観察表 (1) ……34
第５表　出土縄文土器観察表 (2) ……35
第６表　出土縄文石器観察表 (1) ……55
第７表　出土縄文石器観察表 (2) ……56
第８表　住居跡出土土器観察表……58
第９表　出土土師器観察表 ……82
第10表　歴史時代土器観察表 ……87

写　真　図　版

図版１　Ⅰ区全景（完掘）、Ⅰ区調査風景、Ⅱ区全景（完掘）
図版２　Ⅱ区集石遺構、Ⅱ区土師器出土状況、Ⅱ区土師器出土状況
図版３　Ⅲ区全景（完掘）、Ⅳ区全景（完掘）、Ⅳ区１号、２号住居跡
図版４　Ⅴ区全景、Ⅴ区埋甕遺構、Ⅵ区全景（表土剥ぎ後）
図版５　Ⅶ区、Ⅷ区全景（表土剥ぎ後）、１号住居跡（完掘）、２号住居跡（完掘）

図版６　３号住居跡（遺物出土状況）、４号住居跡（遺物出土状況）、５号住居跡（完掘、南より）
図版７　５号住居跡（完掘、西より）、５号住居跡遺物出土状況、６号住居跡（完掘）
図版８　７号住居跡（完掘）、８号住居跡（完掘）、８号住居跡かまど検出状況
図版９　８号住居跡鉄鋤出土状況、９号住居跡（完掘）、９号住居跡かまど検出状況
図版10　10号住居跡（完掘）、11号住居跡（完掘）、12号住居跡（完掘）
図版11　13号住居跡（完掘）、14号住居跡（完掘）、15、16、17、18号住居跡（遺物出土状況）
図版12　15号住居跡かまど検出状況、16、17、18号住居跡（完掘）、19号住居跡（完掘）
図版13　19号住居跡（遺物出土状況）、１号掘立柱建物跡（完掘）、Ⅸ区全景（完掘）
図版14　出土縄文土器（１～22）
図版15　出土縄文土器（23～44）
図版16　出土縄文土器（45、46）
図版17　出土縄文土器（47～62）
図版18　出土縄文土器（63～86）
図版19　出土縄文土器（87～110）
図版20　出土縄文土器（111～122）、出土縄文石器（1～17）
図版21　出土縄文石器（18～40）
図版22　出土縄文石器（41～47）
図版23　出土縄文石器（48～66）
図版24　出土縄文石器（67～79）
図版25　出土縄文石器（80～87）
図版26　出土縄文石器（88～101）
図版27　出土縄文石器（102～107）、出土縄文石器（108～115）
図版28　出土縄文石器（116～132）
図版29　出土縄文石器（133～143）
図版30　住居跡出土土器（１～15）
図版31　住居跡出土土器（11、12、16～18）
図版32　住居跡出土土器（19～33）
図版33　住居跡出土土器（34～41）
図版34　住居跡出土土器（42～51）
図版35　住居跡出土土器（52～63）
図版36　住居跡出土土器（64～67）
図版37　出土土師器（１～７、９、10）
図版38　出土土師器（８、11～13）
図版39　出土土師器（14～23）
図版40　出土土師器（24～30）、かまど支柱
図版41　出土砥石、出土鉄器、紡錘車、玉類
図版42　出土歴史時代土器

第Ⅰ章　序　説

第１節　調査に到る経緯

１　調査に到る経緯

昭和47年度、建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、松橋バイパスや玉名バイパスと共に、熊本北バイパスの路線について、分布調査の依頼があった。依頼を受けた熊本県教育庁文化課では、３路線の踏査を行い、松橋バイパス９ヶ所、玉名バイパス12ヶ所、熊本北バイパスについては、下記の「熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表」（第１表）の12ヶ所を確認して、熊本工事事務所に報告した。

このうち、第４工区にあたる西谷遺跡・上西原遺跡（新南部遺跡群の一部）は昭和58～60年度、竜田陳内遺跡（調査時に竜田陳内南遺跡を改称）は昭和61年度にそれぞれ発掘調査を実施し、平成３年に供用が開始された。

また、竜田陳内北遺跡、緑ヶ丘遺跡、緑ヶ丘山ノ神遺跡については、確認調査を行ったが、遺構、遺物等は検出されなかった。

平成２年、熊本工事事務所と県文化課の協議の結果、第３工区の施工に伴い、区内に存在する庵ノ前遺跡、迫ノ上遺跡、および試掘調査により新たに確認された古閑山遺跡（調査後に山ノ神遺跡を改称）の３か所を対象に発掘調査を実施することが決まり、平成３年度から７年度にかけて、発掘調査が実施された。

迫ノ上遺跡の発掘調査は、道路用地の買収状況や工事の進捗状況等に応じて、平成３年11月から平成４年６月、平成６年４月から９月、平成７年６月の３次にわたって行った。このうち、平成３、４年度調査は学芸員長谷部善一、平成６、７年度調査は文化財保護主事濱田彰久がそれぞれ主査として担当した。

なお、平成６年10月に麻生田包含地の確認調査を実施したが、遺構・遺物等は確認されなかったため、熊本工事事務所に発掘調査は不要であるとの通知をおこなった。

また、迫ノ上遺跡の整理及び報告書作成作業は、平成８年度に濱田を主査として、熊本県文化財収蔵庫において行った。

第１表　熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表

遺跡名	面積(㎡)	所在地	時代	内容等
四方寄御馬下遺跡	17,500	北部町四方寄御馬下	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の住居跡
鶴羽田横穴群	3,600	北部町鶴羽田	古墳	古墳時代後期の横穴群
須屋城跡	11,500	西合志町須屋	中世	天正年間、菊池氏一族の須屋市蔵の居館跡と伝えられる。 濠、土塁に囲まれた要害である。
新地包含地	19,400	熊本市清水町新地	弥生、古代、中世	弥生、古代、中世の集落跡
麻生田包含地	6,100	熊本市清水町麻生田	弥生、古墳	弥生、古墳時代の集落跡、甕棺遺跡
楡木庵ノ前遺跡	10,900	熊本市清水町楡木	縄文、弥生	縄文時代の集落跡 弥生時代の甕棺遺跡
迫ノ上遺跡	18,500	熊本市龍田町上立田	縄文、弥生	縄文時代の集落跡 弥生時代の集落、甕棺遺跡
緑ヶ丘山ノ神遺跡	5,400	熊本市龍田町上立田	縄文	縄文時代の集落跡
緑ヶ丘遺跡	14,000	熊本市龍田町上立田	縄文、古墳、古代	縄文時代、古墳時代の集落跡 古代の窯跡群
竜田陳内北遺跡	6,600	熊本市龍田町陳内	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の集落跡
竜田陳内南遺跡	10,500	熊本市龍田町陳内	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の集落跡
新南部遺跡	9,200	熊本市新南部町	縄文～奈良	縄文、弥生、古墳時代の集落跡、弥生時代の甕棺遺跡の他、奈良時代の寺院跡

２　調査組織

調査主体　　熊本県教育委員会
調査責任者　　大塚　正信（平成３、４年度主席教育審議員・文化課長）
　　桑山　裕好（平成６～８年度文化課長）
調査総括　　松本　健郎（主幹・文化財調査第二係長）
調査担当　　（平成３、４年度）長谷部善一、磯野　雄二、西住欣一郎、長尾　至明、岡本　勇人
　　（平成５、６年度）濱田　彰久、池本　利直、三好　伴典、田中　康雄、山田　大輔
報告書担当　　濱田　彰久、赤坂　希、池田由希子、知名石揚子、水本　佳子

第２節　遺跡の概要と環境

１　遺跡の概要と地理的環境（第１図）

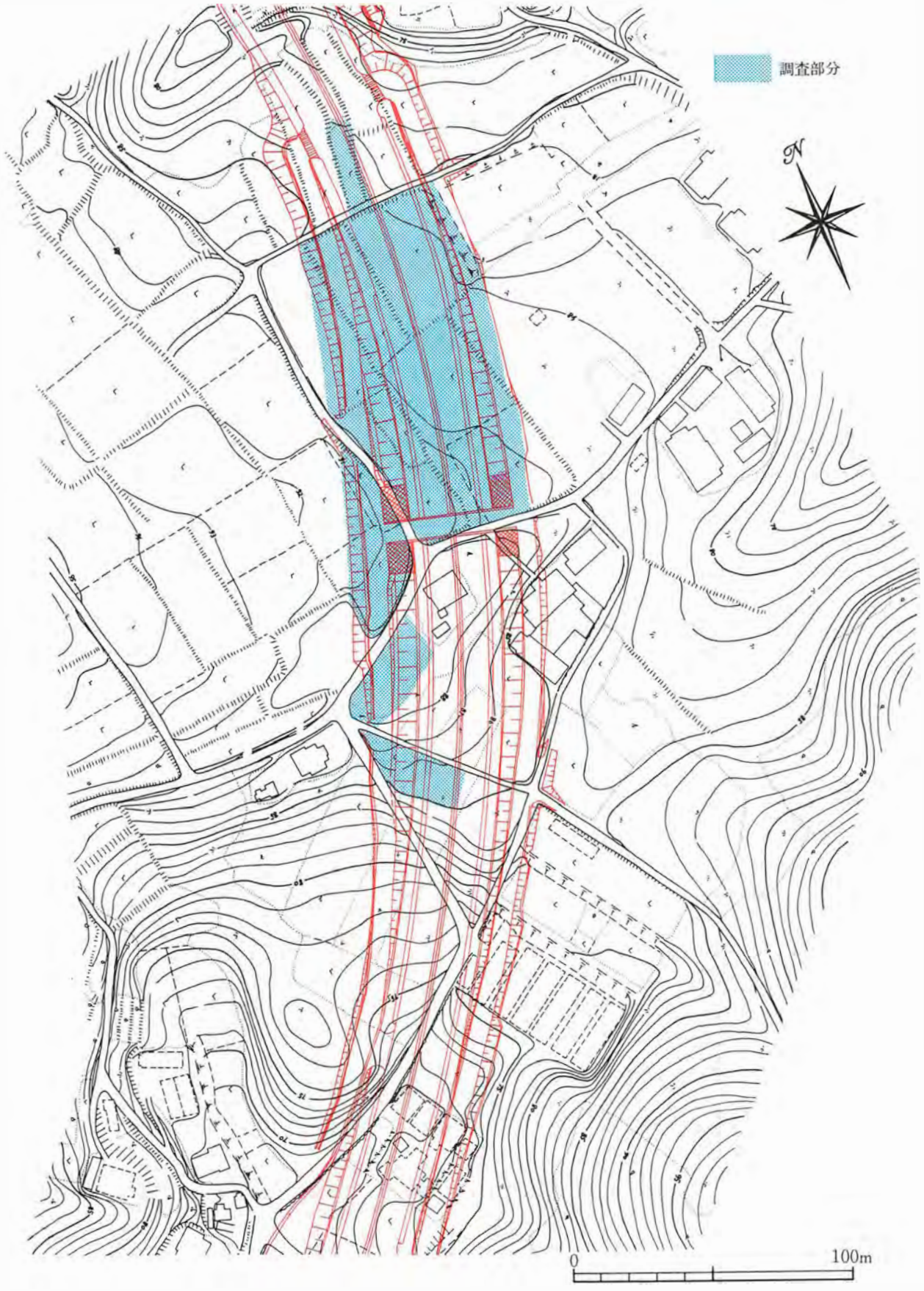
迫ノ上遺跡は、白川北岸に展開する合志台地の西端にある立田山山系の一部にあたる天拝山の南東側、標高80～90ｍの緩やかな斜面上に位置する。このあたりの丘陵地帯は、戦後開拓されて「緑ヶ丘」とよばれるようになったが、この全域にわたって、旧石器時代から奈良・平安時代に至る各種各様の遺物が散布しており、一大遺跡群を形成している。迫ノ上遺跡は、この遺跡群を形成する遺跡の１つで、遺跡名は所在地の小字名より採られている。

昭和35年には、農作業中に人骨を伴う甕棺が発見され、熊本市立博物館により緊急調査が行われている。このとき出土した甕棺は須玖式の合口甕棺であり、上棺は平底から大きく外反した胴部を持つ鉢形土器、下棺は胴部中央に最大径を持ち、断面三角形の突帯２条を持つ大型の甕型土器であった。また、人骨は、頭骨、下顎骨、大腿骨、骨盤などが出土した。現在、甕棺は熊本市立博物館、人骨は熊本大学医学部第二解剖学教室に保管されている。

また、近接する天拝山Ａ遺跡からは、旧石器時代に属する安山岩製の尖頭器のほか、縄文時代早期から晩期の土器が採集されている。

遺跡北側の尾根上には古閑山遺跡が広がる。両遺跡の間には小さな谷があり、一部を堰き止めて、灌漑用の溜池が造られている。また、遺跡の東側には迫集落が位置する。一方、遺跡付近を谷頭として、南方向の龍田町陳内方面に開ける谷があり、この谷に沿う形で熊本北バイパスの予定路線が設定されている。

この一帯は、表土が保水性の悪い火山灰堆積層であるため、ゴボウやニンジン、サツマイモなどを主とする畑作や栗などの果樹園芸作物の栽培が行われているが、昭和40年頃から、周囲の楠、武蔵ヶ丘などに大型の住宅団地が造成されるなど、周辺の宅地開発が相次ぎ、急速な市街地化が進んでいる。平成10年度に予定されるバイパスの供用開始によって、市街地化は一層進み、周辺の環境も大きく変わっていくものと思われる。



第１図　迫ノ上遺跡調査区位置図

２　歴史的環境

迫ノ上遺跡の周辺には、各時代の遺跡が集中的に分布しており、熊本市内でも有数の遺跡群を形成している。詳しくは「熊本北バイパス周辺文化財分布図」（第２図）及び「熊本北バイパス周辺文化財一覧表」（第２、３表）にまとめたが、ここでは周辺の主な遺跡について、簡単にまとめてみたい。

(1)

熊本地方における歴史上の最初の痕跡である旧石器時代の遺跡であるが、最近では発見される遺跡数も増加し、次第にこの時代の文化の様相が明らかにされつつある。天拝山Ａ遺跡からは安山岩製の尖頭器、楡木遺跡からは黒曜石製の細石核、庵ノ前遺跡と竜田陳内遺跡からは三稜尖頭器、さらに、清水町谷口遺跡からはナイフ形石器が出土している。また、国体主会場予定地である熊本市平山町の石の本遺跡からは約22,000年前の火山灰堆積層である「姶良・丹沢（ＡＴ）層」の下にあたる赤褐色土層から局部磨製石斧や剥片石器などの石器が出土し、熊本のみならず九州でも最も古い段階の石器群として注目されている。

(2)

白川両岸の河岸段丘を中心に遺跡が点在している。一般には丘陵地で傾斜のある地形が多い北岸より、平坦な南岸の方に大規模な遺跡が立地しており、縄文早～晩期にわたる多量の土器が採集された新南部遺跡群、縄文後期の土器や土偶が多数出土した上南部遺跡、鐘崎式土器などが出土した渡鹿貝塚、後期中葉の北久根山式土器が出土し、その標識遺跡となった北久根山遺跡などが代表的な遺跡としてあげられる。

一方、北岸では、縄文早～晩期にわたる各種の土器を出土したカブト山遺跡や、縄文前期の曽畑式土器が多数出土した竜田陳内遺跡、縄文晩期の土器、土偶、配石遺構等が確認された竹ノ後遺跡が著名である。

(3)

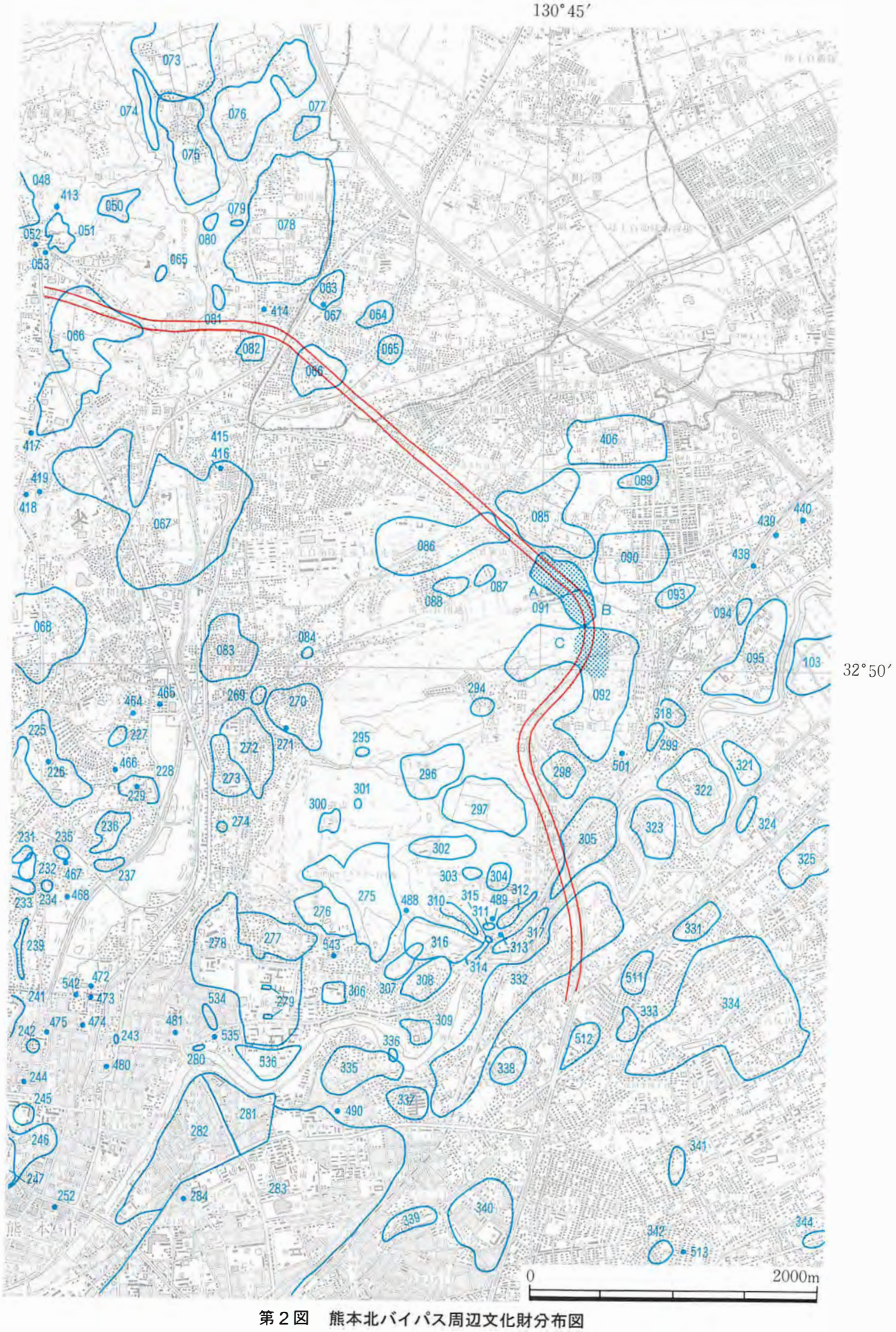
弥生時代の遺跡は、立田山周辺を中心に多数分布している。特に甕棺遺跡は黒髪式土器の標識となった黒髪町遺跡群をはじめ、清水町遺跡群や、竹ノ後遺跡、中牧鶴遺跡など、熊本市内でも有数の分布を示している。迫ノ上遺跡の周辺では平成５年に調査され、人骨の残る須玖式の合口甕棺が出土した庵ノ前遺跡や、楡木遺跡があり、岩倉山でも、住宅団地造成の際に多くの甕棺が出土している。

住居跡を伴う遺跡では、白川南岸の西谷遺跡で中・後期の住居跡や磨製石鏃、鉄器など、下南部遺跡で後期の住居跡や磨製石鏃、石包丁などがそれぞれ出土している。また、県運動公園建設の際に調査が行われた石原亀の甲遺跡からは後期を中心とする集落の跡が確認され、銅鏡や土器、石器など多くの遺物が出土している。

(4)

古墳時代になると、立田山一帯でも、万石茶山古墳や立田山南麓古墳などの古墳が築かれているが、その一方で、膨大な数の横穴群が立田山麓から白川北岸にかけて築かれている。これは、比較的加工しやすい凝灰岩の崖面が立田山周辺に多く存在するためで、宇留毛小碩橋際横穴群や浦山横穴群など、一大横穴群地帯を形成している。特につつじヶ丘横穴群は墓前祭祀の様子がわかる好資料として注目され、県指定文化財になっている。

また、集落関係では迫ノ上遺跡の他に下南部遺跡や竜田陳内遺跡などでかまどの付いた住居跡が確認されている。



第２図　熊本北バイパス周辺文化財分布図

第２表　　熊本北バイパス周辺文化財分布図 (1)

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
熊本市	91A	庵ノ前	清水町兎谷、龍田町上立田ほか	旧石器～古墳	包蔵地			縄文早期住居跡、弥生甕棺墓群、古墳時代集落、県報告書
	91B	古閑山	龍田町上立田	旧石器～古墳	包蔵地			円形周溝墓、石棺墓、木棺墓、古墳時代住居跡
	92C	迫ノ上	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地			弥生甕棺墓、古墳時代集落
	48	四方寄	四方寄町	縄文	包蔵地		村上屋敷板碑	縄文後晩大集落、
	50	城ヶ辻城跡	四方寄町	中世	城			田螺の貝塚あり、城主は西牟田常陸守
	51	四方寄御馬下	四方寄町	縄文	包蔵地			後晩期土器、土偶、住居跡
	52	御馬下の角小屋	四方寄町	江戸	建造物	市		細川、島津の参勤交代休憩所
	53	四方寄六地蔵・庚申塔	四方寄町	中世	石造物	市		六地蔵…文明年間、九州でも希有の塔、庚申塔…天和元年銘
	65	辻横穴群	四方寄町	古墳	古墳			
	66	飛田遺跡群	四方寄町、飛田1･2丁目、大窪１丁目	縄文～中世	包蔵地		飛田塔の木・飛田上ノ原・飛田葉山塚古墳	葉山塚古墳…報告書、塔の木…縄文晩期土器、土師器
	67	清水町遺跡群	山室2～6丁目、八景水谷１丁目、 大窪1･3～5丁目	縄文～中世	包蔵地		楢山A～C・山室A･山室打出（山室地区）屋敷・八景水谷・ 八景水谷甕棺群・山室東屋敷阿弥陀堂墓碑	弥生甕棺群、土師器、縄文前後晩土器
	68	徳王	山室１丁目、徳王町ほか	縄文～平安	包蔵地		徳王寺跡・徳王寺跡板碑	縄文後期、弥生土器、土師・須恵器、内行花文鏡
	73	大鳥居遺跡群	大鳥居町、梶尾町ほか	縄文～中世	包蔵地		大鳥居・井出原禅房参考地	
	74	梶尾横穴群	梶尾町	古墳	古墳			風化、防空壕利用、数・原形不詳
	75	梶尾遺跡群	梶尾町	弥生	包蔵地		甲佐大明神遺跡	弥生中後期土器、甕棺群
	76	梶尾古閑原・古屋敷	梶尾町	縄文～中世	包蔵地		梶尾谷山お茶屋跡	
	77	梶尾立野	梶尾町	縄文～中世	包蔵地			
	78	鶴羽田(鶴ノ原･垣ノ外)	鶴羽田町	縄文～古墳	包蔵地			縄文後晩期土器、土偶、県報告書、須恵・土師器、銅戈
	79	鶴羽田かぶと塚古墳	鶴羽田町	古墳	古墳			円墳
	80	竹の下横穴群	鶴羽田町	古墳	古墳			
	81		鶴羽田町	縄文～中世	包蔵地		山際畑	
	82	羽田	鶴羽田町	古代～近代	包蔵地		飛田眼鏡橋	土師器
	83	亀井遺跡群	清水亀井町	縄文～中世	包蔵地		亀井・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地・亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文２年銘、縄文土器、土師器、瓦器など
	84	万石昭和団地前	清水万石５丁目、清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			
	85	楡木	清水町楡木	縄文・弥生	包蔵地			縄文早・前・後・晩期土器、弥生甕棺群
	86	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			弥生甕棺
	87	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵地			
	88	岩倉山	清水町兎谷	旧石器～中世	包蔵地			
	89	楠	楠３丁目	縄文～中世	包蔵地			縄文晩期土器
	90	堂ノ前遺跡群	清水町楡木、龍田町上立田ほか	旧石器～中世	包蔵地		堂ノ前遺跡・一丁畑遺跡	縄文早・前・晩期土器、弥生甕棺、土師・須恵器、須恵器窯跡
	92	迫ノ上遺跡群	龍田町上立田・陳内	縄文～平安	包蔵地		迫ノ上甕棺群・緑が丘・緑ヶ丘山ノ神 堂ノ前屋敷窯跡・長嶺寺窯跡	堂ノ前窯跡は平安期か？　縄文土器、弥生甕棺群、土師・須恵器
	93	壱町鶴	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地			
	94	吉ノ平	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地			
	95	竹ノ後・芭蕉遺跡群	龍田町上立田・弓削	縄文～平安	包蔵地		竹ノ後・竹ノ後甕棺群・芭蕉	竹の後…縄文後期土器、土偶、弥生甕棺
	103	上南部	上南部町	縄文	包蔵地			縄文前・後・晩期土器、土偶、後晩期集落、市報告書
	225	池田山伏塚遺跡群	池田2･3丁目、高平１丁目、津浦町	弥生・古墳	包蔵地		山伏塚A～C・長迫古墳・電通学園石棺・長迫	山伏塚…弥生土器、土師器、電通石棺…鏡・鉄剣、長迫…横穴式石室
	226	山伏塚	池田２丁目	近世	墳墓	市		
	227	高平箱式石棺	高平２丁目	古墳	埋葬		名義尾塚	
	228	永浦遺跡群	打越町	古墳～中世	包蔵地		稲荷山古墳・白川学園石棺・永浦城跡・天福寺	永浦城…代官長浦氏居城
	229	稲荷山古墳	打越町	古墳	古墳	県		円墳、装飾古墳、横穴式小口積石室
	231	津浦一ノ谷横穴群	津浦町	古墳	古墳			防空壕利用、数・原形不詳
	232	一ノ谷	津浦町	古墳～平安	包蔵地			土師器
	233	稗田横穴群	稗田町、津浦町	古墳	古墳			防空壕利用、数・原形不詳
	234	舟場	津浦町	縄文～中世	包蔵地			
	235	舟場山古墳	津浦町	古墳	古墳			円墳、石棺
	236	打越遺跡群	打越町	弥生・中世	包蔵地		打越城跡・打越甕棺	
	237	打越貝塚	打越町	縄文	貝塚			北久根山式、
	239	寺原横穴群	京町本丁･2丁目、壺川1･2丁目ほか	古墳	古墳			多数の横穴
	241	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地			伝大道寺跡を含む
	242	内坪井	内坪井町、壺川１丁目	弥生	包蔵地			弥生土器
	243	安元元年笠塔婆塔身	坪井４丁目	古代	石造物	県		県重要文化財、本光寺
		安元元年笠塔婆	坪井４丁目	古代	石造物	市		市指定建造物
	244	夏目漱石内坪井旧居	内坪井町	明治	建造物	市		市指定建造物
	245	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地			甕棺群
	246	熊本城跡遺跡群	本丸、二の丸、宮内、古城町、 古京町、千葉城町ほか	古墳～近代	包蔵地		古城横穴群･千葉城横穴群･磐根橋際横穴群･茶臼山廃寺跡･ 藤崎宮跡・段山・千葉城跡・千葉城箱式石棺・古城跡・ 古城洋学校・医学校・新町一丁目御門跡	古城横穴…県報告書
	247	熊本城跡	本丸、二の丸、宮内、古城町、 古京町、千葉城町ほか	近世・近代	城	国	熊本城跡･監物台・歩兵13連隊跡・一日亭跡・不開門六地蔵・ 小天守台・国立病院(一字一石碑・六地蔵)・陸軍兵器廠	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長12年築城
	252	小泉八雲熊本旧居	安政町	明治	建造物	市		市指定建造物
	269	古閑前	清水亀井町、清水本町ほか	縄文～中世	包蔵地			旧石器
	270	清水町谷口	清水万石４丁目	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	ナイフ型石器、県調査
	271	万石塚坊主古墳群	清水万石４丁目	古墳	古墳			２基円墳
	272	松崎遺跡群	清水本町、清水万石３丁目ほか	弥生～平安	包蔵地		松崎甕棺・松崎中世・松崎葉山天神跡	弥生甕棺、土師器、瓦器、青磁、白磁
	273	松崎八幡箱式石棺	清水本町	古墳	埋葬		松崎石棺	鉄剣
	274	室園	室園町	縄文～中世	包蔵地			
	275	黒髪町下立田遺跡群	黒髪4･5･8丁目	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石・立田山南中腹・城床古墳群・豊国廟跡	土師・須恵器、豊国廟跡…金箔瓦
	276	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪４丁目	江戸	寺社	国	泰勝寺墓地古塔碑群・六地蔵	細川家霊廟は国指定史跡、寺跡を含む庭園は県指定
	277	小峰	黒髪3～5丁目	縄文～平安	包蔵地		金光山無相寺跡	縄文土器、弥生甕棺、土師・須恵器
	278	黒髪町遺跡群	黒髪1～3丁目	縄文～中世	包蔵地		黒髪町(済々黌敷地)･九州女学院･坪井古屋敷甕棺	縄文土器、弥生甕棺墓群、土師・須恵器、古代住居跡、瓦など
	279	旧第五高等中学校本館 ・化学実験場・表門	黒髪２丁目	明治	建造物	国		国指定重要文化財、イギリスのクイーン・アン様式
	280	子飼	子飼本町	縄文～中世	包蔵地			縄文後期土器
	281	大江白川	大江１丁目	縄文～近世	包蔵地		旧往生院跡・普行寺の板碑・放牛地蔵	縄文早・前期土器、弥生甕棺
	282	新屋敷	新屋敷1～3丁目	弥生～中世	包蔵地			弥生住居・環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
	283	大江遺跡群	大江2～6丁目、新大江1･2丁目、 大江本町、九品寺2～4丁目、 白山３丁目、渡鹿1～4丁目ほか	縄文～明治	包蔵地		大江･大江背藁･大江東原･白川中学校校庭･渡鹿・杉ノ本・ 旧電波高校・熊高敷地･熊高通り･託麻郡家推定地・ 渡鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館ほか	市報告書
	284	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江４丁目	明治	建造物	県		大江義塾…県指定史跡、徳富旧邸…市指定史跡
	294	天拝山	龍田町上立田	旧石器～弥生	包蔵地			石槍、縄文早期土器、弥生甕棺

第３表　熊本北バイパス周辺文化財分布図 (2)

市町村	番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
	295	万石乗越	乗越ヶ丘	縄～古代	包蔵地			
	296	万石茶山	龍田町陳内、黒髪８丁目	縄文・弥生	包蔵地			
	297	秣野	龍田町陳内	縄文～平安	包蔵地			縄文晩期土器、土師・須恵器
	298	陳内上ノ園遺跡群	龍田町陳内	縄文～中世	包蔵地		上ノ園A·B・竜田陳内館跡	縄文早・後期土器、弥生甕棺、方形周溝墓
	299	三の宮（牧崎宮脇）	龍田町上立田	縄文	包蔵地			縄文晩期土器
	300	立田山山頂	室園町	古墳～平安	包蔵地			土師・須恵器
	301	万石茶山古墳	室園町	古墳	古墳			横穴式石室
	302	立田山東中腹	黒髪８丁目	古代・中世	包蔵地			
	303	宇留毛浦山市営墓地	黒髪７丁目	縄文～平安	墓地			縄文土器、土師・須恵器
	304	九女グランド	龍田町陳内		包蔵地			
	305	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陳内・陳内宮の前	竜田陳内…県報告書
	306	桜山中学校校庭	黒髪５丁目	古墳～平安	包蔵地		下立田・・里木	
	307	カブト山	黒髪８丁目	縄文	包蔵地			縄文早・前・後・晩期土器
	308	宇留毛A	黒髪６丁目	縄文	包蔵地			
	309	宇留毛B	黒髪６丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文土器、土師器
	310	浦山第２横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		
	311	浦山第１横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		18基
	312	女瀬平横穴群	龍田町陳内	古墳	古墳		長薫寺横穴群を含む	
	313	長薫寺古墳	黒髪７丁目	古墳	古墳			円墳、横穴式石室
	314	宇留毛小磧横廠横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳			
	315	つつじヶ丘横穴群	黒髪７丁目	古墳	古墳	県		
	316	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪6～8丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群·立田山南麓古墳(上·下)・宇留毛浦山火葬墓・立田山城跡	立田山南麓古墳…円墳２基、横穴式石室
	317	竜田口	龍田町陳内、黒髪７丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文、弥生、土師・須恵器
	318	堂前島	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
	321	王田	上南部町	縄文～平安	包蔵地			黒髪式合口甕棺
	322	牧崎遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地		牧崎古墳・西牧崎箱式石棺群・中牧崎箱式石棺群	
	323	下南部	下南部２丁目	縄文～古墳	包蔵地			須玖式甕棺
	324	平ノ山	上南部町		包蔵地			
	325	北小迫	御領2·3丁目		包蔵地			
	331	松の窪	西原３丁目、御領１丁目		包蔵地			
	332	新南部遺跡群	新南部1～6丁目、渡鹿8·9丁目ほか	旧石器～平安	包蔵地		新南部A～D·北久根山·西谷·小関原・小関小松	西谷…県報告書
	333	南原	保田窪５丁目、八反田１丁目ほか		包蔵地			
	334	乾原・迎八反田	保田窪５丁目、八反田1·2丁目ほか	縄文～平安	包蔵地		乾原・迎八反田・田の迎	乾原…縄文後・晩期、迎八反田…縄文早期、市報告書
	335	渡鹿遺跡群	渡鹿5·6丁目	縄文～中世	包蔵地		渡鹿貝塚・北原甕棺	渡鹿貝塚…阿高・鐘崎式、北原…弥生甕棺、
	336	渡鹿菅原神社境内	渡鹿６丁目		寺社	市		市指定史跡
	337	辻	渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文後・晩期、へら描き土器・墨書土器
	338	新南部西原	渡鹿９丁目、保田窪本町	縄文～平安	集落		保田窪地蔵碑	
	339	南平上	新大江３丁目	奈良・平安	包蔵地			
	340	帯山遺跡群	帯山1·2丁目	縄文～平安	包蔵地		帯山・保田窪	布目瓦、縄文前・中・後期土器
	341	保田窪東一本松	帯山6·7丁目	縄文～平安	包蔵地			
	342	三郎塚	三郎１丁目	縄文～平安	包蔵地			
	343	豪潮宝篋印塔	尾ノ上４丁目	中世	石造物	市		元は天福寺境内にあった
	344	新外A	新外２丁目	縄文	包蔵地			
	406	麻生田	清水町麻生田、楠５丁目	縄文～平安	包蔵地			
	413	半田天神板碑・石仏	四方寄町	中世	石造物			板碑大永６年銘
	414	古代官道	鶴羽田町	古代	包蔵地			
	415	須屈園観音堂板碑	八景水谷１丁目	中世	石造物			
	416	八景水谷塔の本五輪残欠	八景水谷１丁目	中世	石造物			
	417	吉次往還追分け石	下硯川町	近世	石造物			
	418	大窪五輪塔	大窪２丁目	中世	石造物			
	419	大窪高笠観音堂前板碑	大窪２丁目	中世	石造物			
	438	二里木跡	龍田町弓削	近世	交通			
	439	武蔵塚	龍田町弓削	近世	墓			宮本武蔵墓、正保2年
	440	センボサン	龍田町弓削	中世	墳墓			経文ある小石出土
	464	永福寺跡	高平２丁目	中世・近世	寺社			臨済宗天文21年
	465	浄国禅寺古塔碑	高平２丁目	中世～明治	石造物	県		昭和42年本山より移転、塑像巡礼姿観音立像、松本喜三郎の作
	466	天福寺跡	打越町	中世	寺社			天台、布目瓦出土
	467	船場山古墳	津浦町	古墳	古墳			円墳、墳丘破壊
	468	宗巌寺跡	津浦町	中世	寺社			寛文12年
	472	採釣園跡	坪井4丁目	近世	園池			長岡監物邸庭園
	473	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	包蔵地			
	474	成就院大喜山覚勝寺跡	坪井4丁目	中世	寺社			
	475	浄国寺跡	壺川1丁目	中世	寺社			
	480	報恩禅寺境内石造物	坪井3丁目	中世	石造物			豪潮宝篋印塔・坪井の跡
	481	お茶園跡	菜園町	近世	包蔵地			藩主重賢開園
	488	弧穴古墳参考地	黒髪８丁目	古墳	古墳			
	489	宇留毛城床古墳	黒髪７丁目	古墳	古墳			石材各所に散乱
	490	渡鹿板碑	渡鹿４丁目	中世	石造物			釈迦座像、天文16年
	501	伝立田将監墓・古塔碑群	龍田町上立田	中世	石造物			五輪塔
	511	市営託麻団地	西原２丁目	縄文	包蔵地			押型文、御領式
	512	西原	西原１丁目	縄文	包蔵地			押型文
	513	三郎塚古墳	三郎２丁目	古墳	古墳			
	534	七軒町	子飼本町	縄文～中世	包蔵地			
	535	一夜塘	黒髪２丁目	近世	建造物			藩主斉茲築造
	536	上河原	黒髪２丁目	縄文～古代	包蔵地			
	542	峰雲院跡墓地	坪井５丁目	中世	墓地			
	543	常楽寺	黒髪５丁目	中世	寺社			
西合志町	63	宿の山（須屈）	須屈	弥生	埋葬			弥生合口甕棺・土師器片一括
	64	梨の木	須屈	縄文	包蔵地			
	65	向島	須屈	縄文・弥生	包蔵地			甕棺
	66	須屈城跡	須屈	中世	城			中世城跡、菊池一族・須屈市蔵居館
	67	妙泉寺跡	須屈	中世	寺社			

(5)

奈良・平安時代になると、律令体制の導入に伴い、肥後においても行政組織の整備、条里制の施行が進められ、その影響が周囲に及んでくる。現在の熊本市北部は、白川を境に北は飽田郡、南は託麻郡に属し、飽田郡家は京町付近、託麻郡家は渡鹿付近にあったとされる。また、立田山西麓を官道（西海道）が通り、現在の子飼に蚕養駅が設置されたと推定されている。

立田山の東部では、須恵器の生産が行われるようになり、窯が作られた。当時の生産遺跡として長蓮寺窯跡や堂の前屋敷窯跡などがある。

また、白川南岸の大江遺跡群や新南部遺跡群の調査では、須恵器、土師器を伴う住居跡が多く確認され、西谷遺跡からは平安期の住居跡が出土している。

中世、立田山周辺では、西麓の亀井や南麓の宇留毛に城が築かれたが、生活の中心は主に白川と坪井川の沿岸の低地にあり、台地上は未開発であった。

近世になると、肥後藩によって、台地上の開拓が行われるようになった。現在の清水町、龍田町一帯は五町手永に属し、細川忠利は麻生田、楡木、兎谷などに地筒衆をおいて、開拓と防御の任にあたらせている。

現在の遺跡周辺は、熊本市域の拡大に伴う農地の宅地化が進み、また、造成によって旧地形が削られるなど、急速に昔の面影を失いつつある。また、交通混雑の緩和など、市街地化に伴う道路、施設などの環境整備が、早急な課題となっている。

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　調査の概要

１　調査の概要

迫ノ上遺跡はほぼ東西方向にのびる丘陵の尾根上に位置し、北バイパスの予定路線はこの丘陵を南北方向に切り通す形で設定されている。本調査に先立って実施された予定路線内の確認調査の結果をもとに、遺物が出土した部分を中心に、約9,500㎡を調査対象範囲とした。

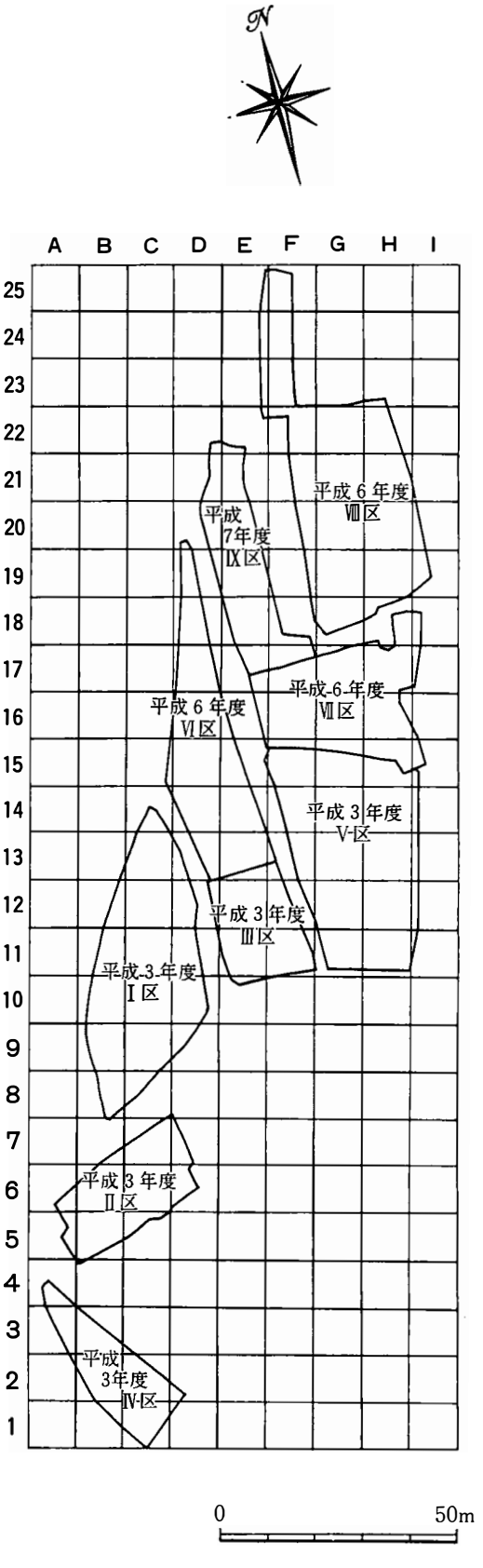
本調査は、調査年度および地形によって、Ⅰ区からⅨ区の９つの調査区に分け、平成３、４年度にⅠ区からⅤ区、平成６年度にⅥ区からⅧ区、平成７年度にⅨ区の調査を行った。

Ⅰ区の調査の際に10m四方のグリッドを設定し、Ⅱ区以降もⅠ区の軸線を延長する形でグリッドを設定した。なお、調査年度によって、調査区とグリッドの表記方法が不統一であったため、整理の際に改めて表記の統一を行った（第３図）。

各調査区の地番及び調査面積は、Ⅰ区が龍田町大字上立田字迫ノ上2,191、2,192番地の約980㎡、Ⅱ区が字迫屋敷1,912番地の約480㎡、Ⅲ区が字高阪1,933番地の約380㎡、Ⅳ区が字迫屋敷1,885－82、1,885－105、1,885－107番地の約340㎡、Ⅴ区が字高阪1,933番地の約1,130㎡、Ⅵ区が字高阪1,934、1,935番地の約730㎡、Ⅶ区が字高阪1,932、1,933番地の約690㎡、Ⅷ区が字高阪1,937、1,938、1,943番地の約1,160㎡、Ⅸ区が字高阪1,936番地の約510㎡である。

(1)

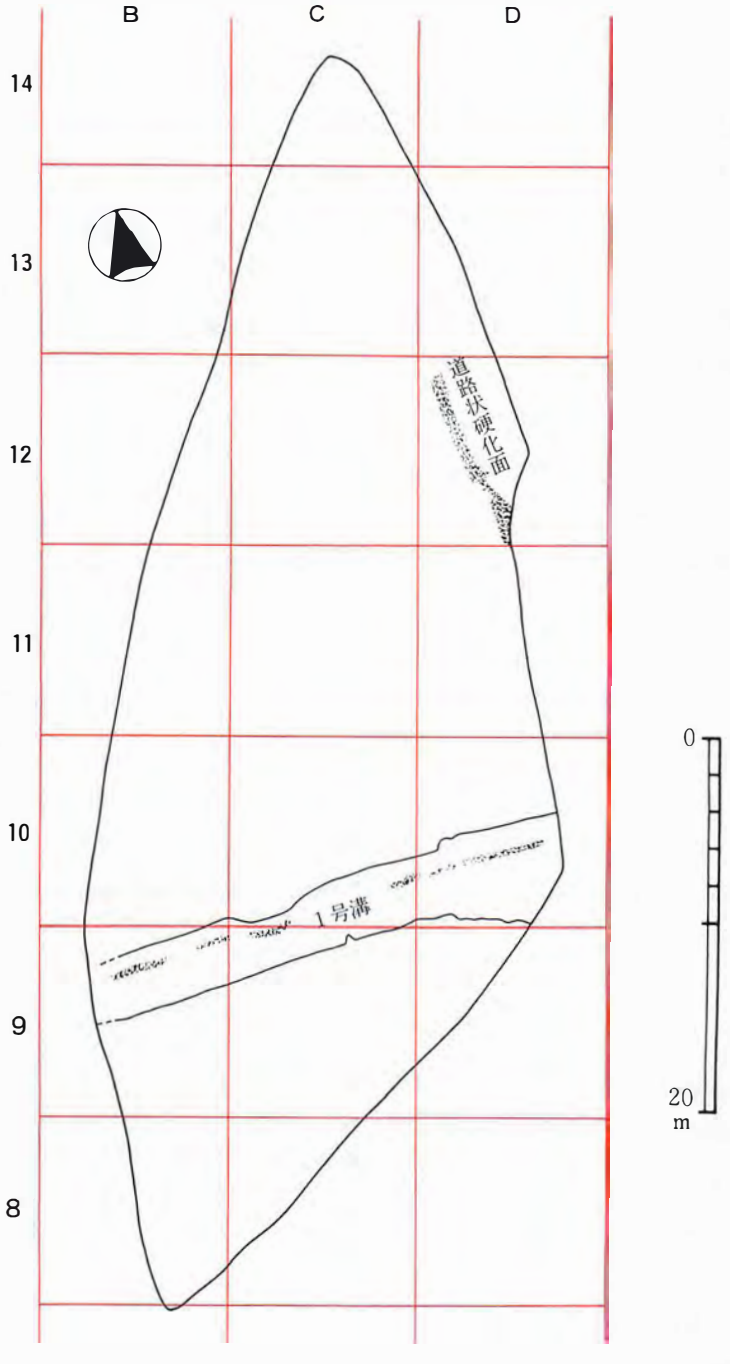
迫ノ上遺跡の調査は、平成３年11月５日より開始した。調査区は地形により５つに分け、調査順にⅠ区からⅤ区とした。まず、Ⅰ区、Ⅱ区について重機による表土剥ぎを行い、Ⅲ区以降は、調査の進行に従って順次表土剥ぎを行うこととした。グリッド設定と清掃、測量を行った後、Ⅱ区より包含層の掘り下げにかかった（第５図）。掘り下げは原則としてグリッドごとに行い、出土遺物については、遺物台帳に出土位置、絶



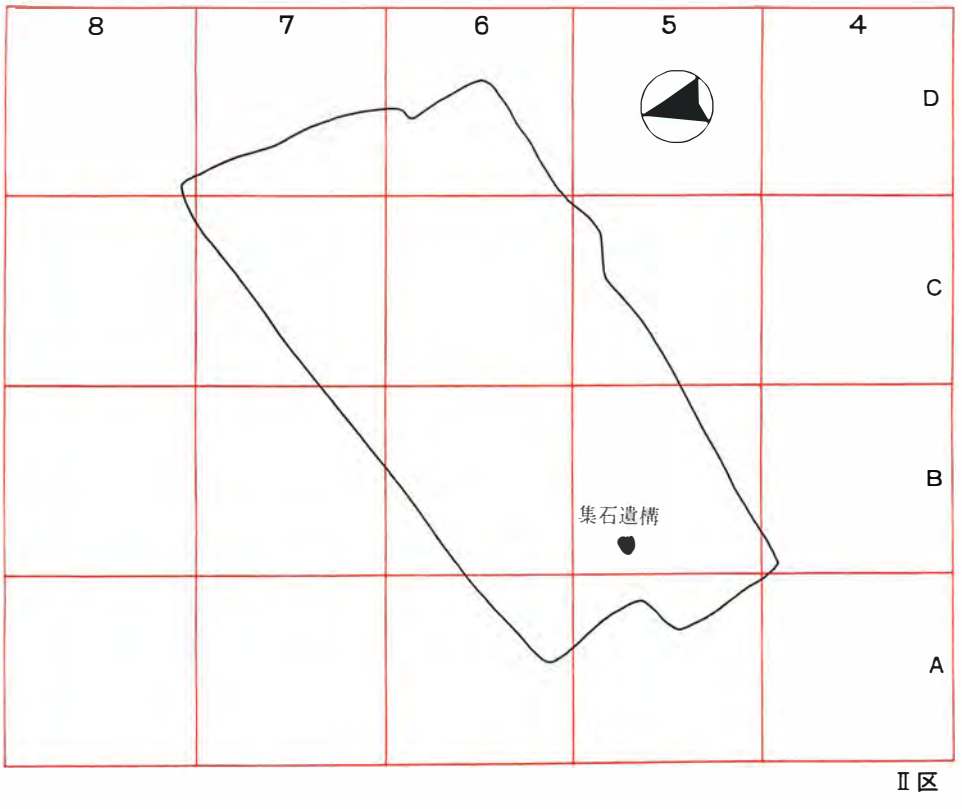
第３図　迫ノ上遺跡調査区グリッド図

対高を記入して取り上げた。また、包含層の掘り下げごとに遺構の確認をおこない、確認された遺構は掘り下げた後、平面や断面の実測及び写真撮影を行った。調査区一帯は畑地で、以前はゴボウの栽培が行われており、それに伴ってできたＶ層にまで達する溝状の攪乱が調査区内を縦横に走っているため、包含層の残りが悪かったが、縄文早期、後期、晩期の土器や石鏃などの石器が出土し、縄文早期と思われる集石遺構１基を検出した。

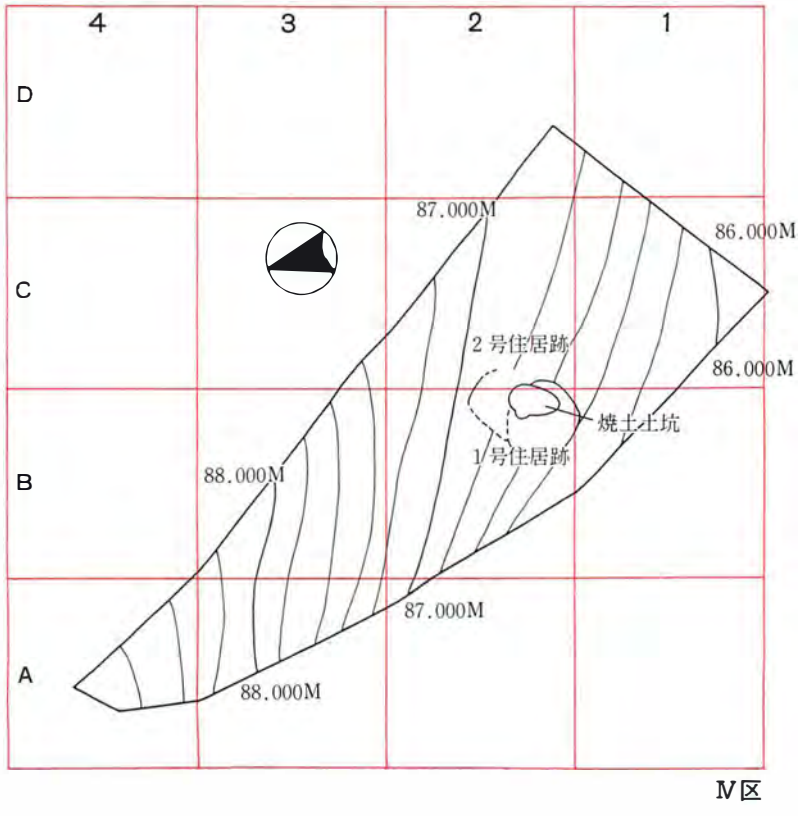
Ⅱ区終了後、平成４年１月17日よりⅠ区の調査に取りかかった（第４図）。Ⅰ区もゴボウ穴等の攪乱を受けていたが、縄文早期、後期、晩期の土器および古墳時代の土師器、石鏃、石斧などが出土し、特に縄文早期の押型文土器が多数出土した。遺構としては、調査区南側で東西方向に走る溝を検出し、内部から道路状

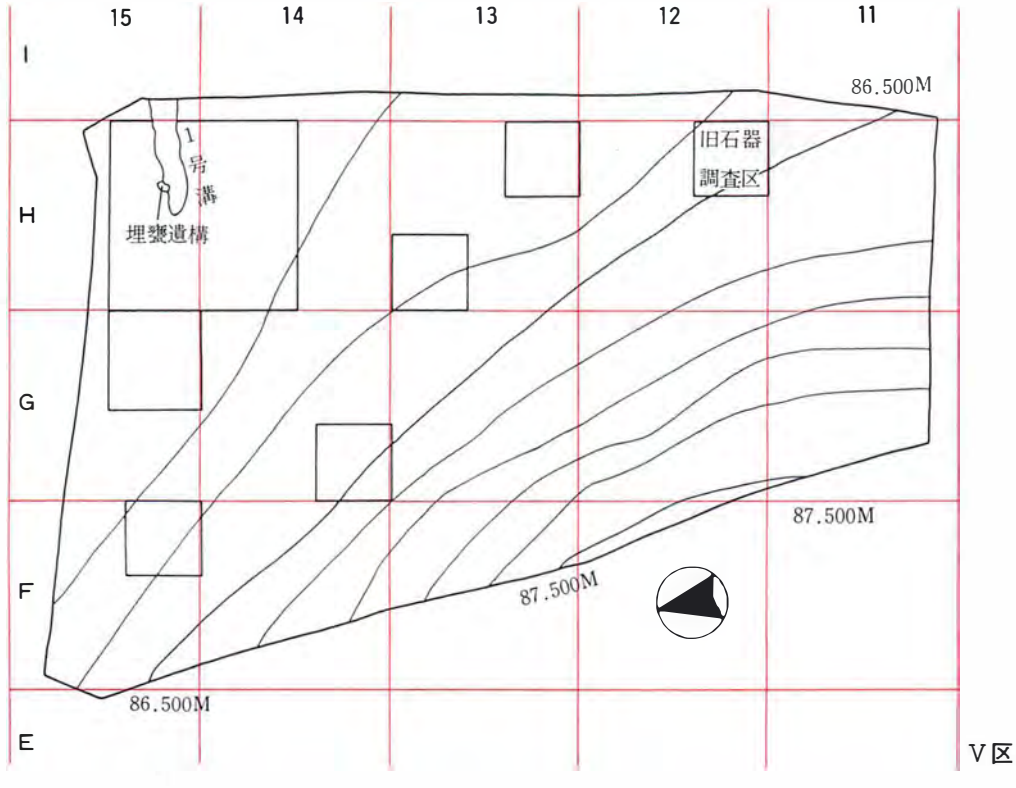


第４図　Ⅰ区遺構配置図



第５図　Ⅱ区、Ⅲ区遺構配置図





第６図　Ⅳ区、Ⅴ区遺構配置図

の硬化面が検出された。また、Ｄ－12グリッドにおいても道路状の硬化面が検出された。溝の埋土中より、近世以降の遺物が出土していることから、いずれも近世以降のものと考えられる。さらに、旧石器文化の存在確認のため、調査区の一部を坪掘りした。Ⅳ層より黒曜石の剥片が出土したが、石器となり得るものの出土はなかった。

Ｉ区の遺構実測作業と並行して、２月18日よりⅢ区の掘り下げにはいった（第５図）。Ⅲ区は削平によってローム層がかなりの部分露出して、包含層があまり残っておらず、遺物の出土もあまりなかった。

Ｉ区とⅢ区の調査が終了した３月30日をもって平成３年度の調査を終了した。

平成４年度の調査は、４月22日にⅣ区から開始した（第６図）。南側Ｃ－１グリッドの流れ込みと思われる遺物層より縄文晩期土器、石鏃、石斧、黒曜石の剥片などが出土し、Ｃ－２グリッドからは土師器の小型丸底壷が出土した。また、Ｃ－２グリッドで確認された焼土遺構を精査したところ、２基の縄文晩期と考えられる住居跡が確認された。

Ⅳ区の調査と並行して、５月11日よりＶ区の調査を開始した（第６図）。ゴボウ穴の攪乱がひどく、包含層がかなり影響を受けていたため、出土遺物はほとんど一括でとりあげた。遺物は縄文早期、後期、晩期の土器および古墳時代の土師器、石鏃、石斧などの石器が出土した。また、Ｈ－15グリッドで、縄文晩期の埋甕１基と、土師器を伴った溝状遺構１本を確認した。縄文時代包含層の掘り下げ終了後、引き続き旧石器確認のための坪掘りを行ったが、遺物が出土しなかったため、実測、写真撮影の終了後、６月10日に調査を終了した。

(2)

平成６年度の調査は、４月19日より開始した。調査部分は、平成３、４年度調査区の北側にあたる。重機による表土剥ぎの後、前回調査の軸線を延長する形で１辺10ｍのグリッドを設定した。調査区は、地形により３つに分けられ、Ⅲ区の北に隣接する部分をⅥ区、Ⅴ区の北に隣接する部分をⅦ区、さらにⅥ区の北に隣接する部分をⅧ区とした。

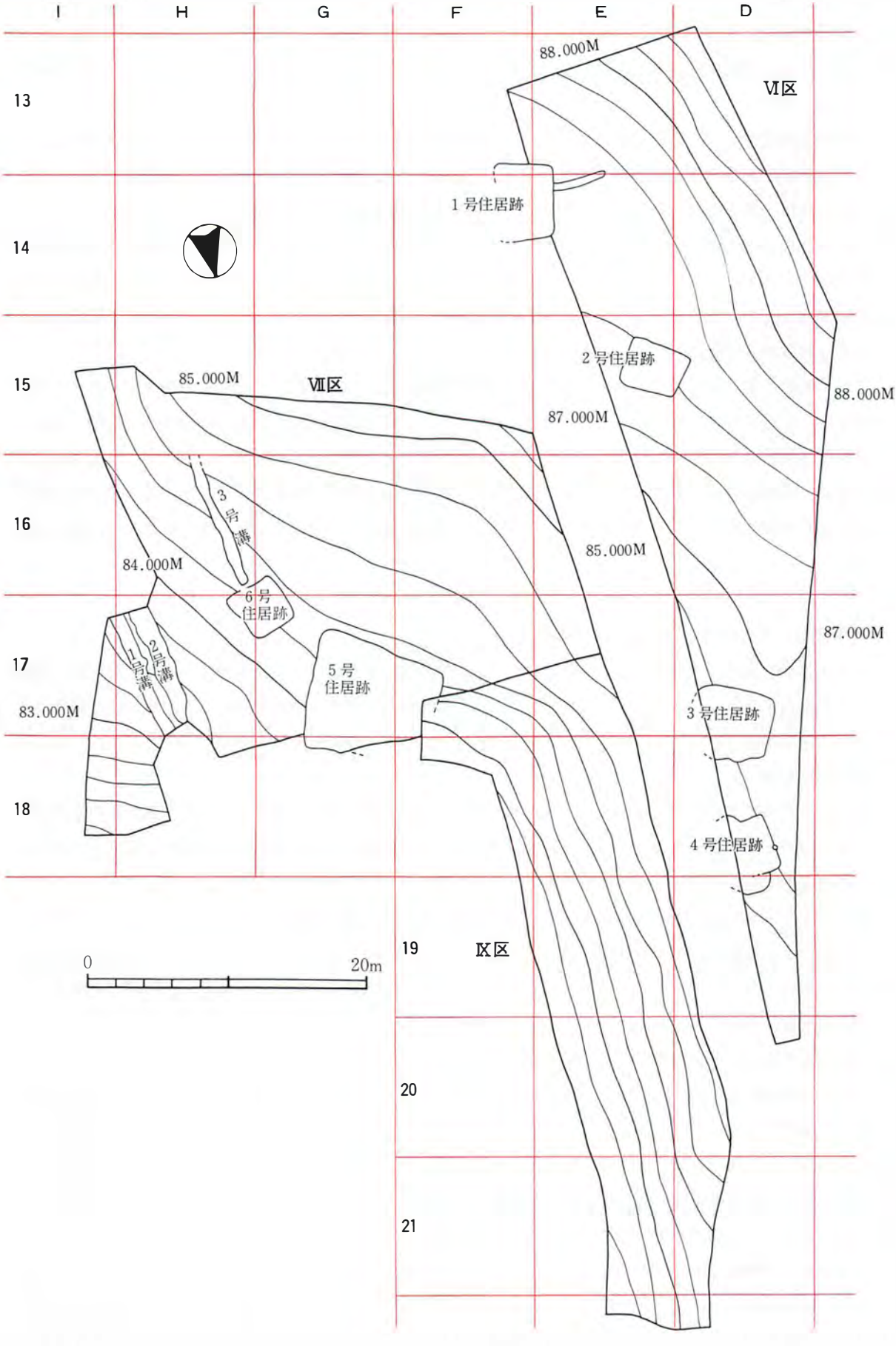
調査区は開墾による削平をかなり受けており、さらに、ゴボウ穴による攪乱もひどく、包含層の残りはあまり良くなかった。また、調査区全体を清掃した時点で、十数基の竪穴住居跡らしき遺構が確認されたため、さらに精査して確認した後、住居跡等の遺構の調査をまず行い、その後に包含層の調査を行うというかたちで進めることとした。住居跡等の遺構は掘り下げを行いながら、適宜20分の１で実測図を作成した。また、遺構から出土した遺物については、上層のものは原則として一括で取り上げ、下層のものである程度の大きさをもつものについては、実測したあと番号をつけて取り上げた。包含層出土の遺物については、遺物分布図に出土地点、絶対高を記入後に取り上げた。

調査はまずⅥ区からとりかかり、Ⅶ区、Ⅷ区の順に行った（第７、８図）。

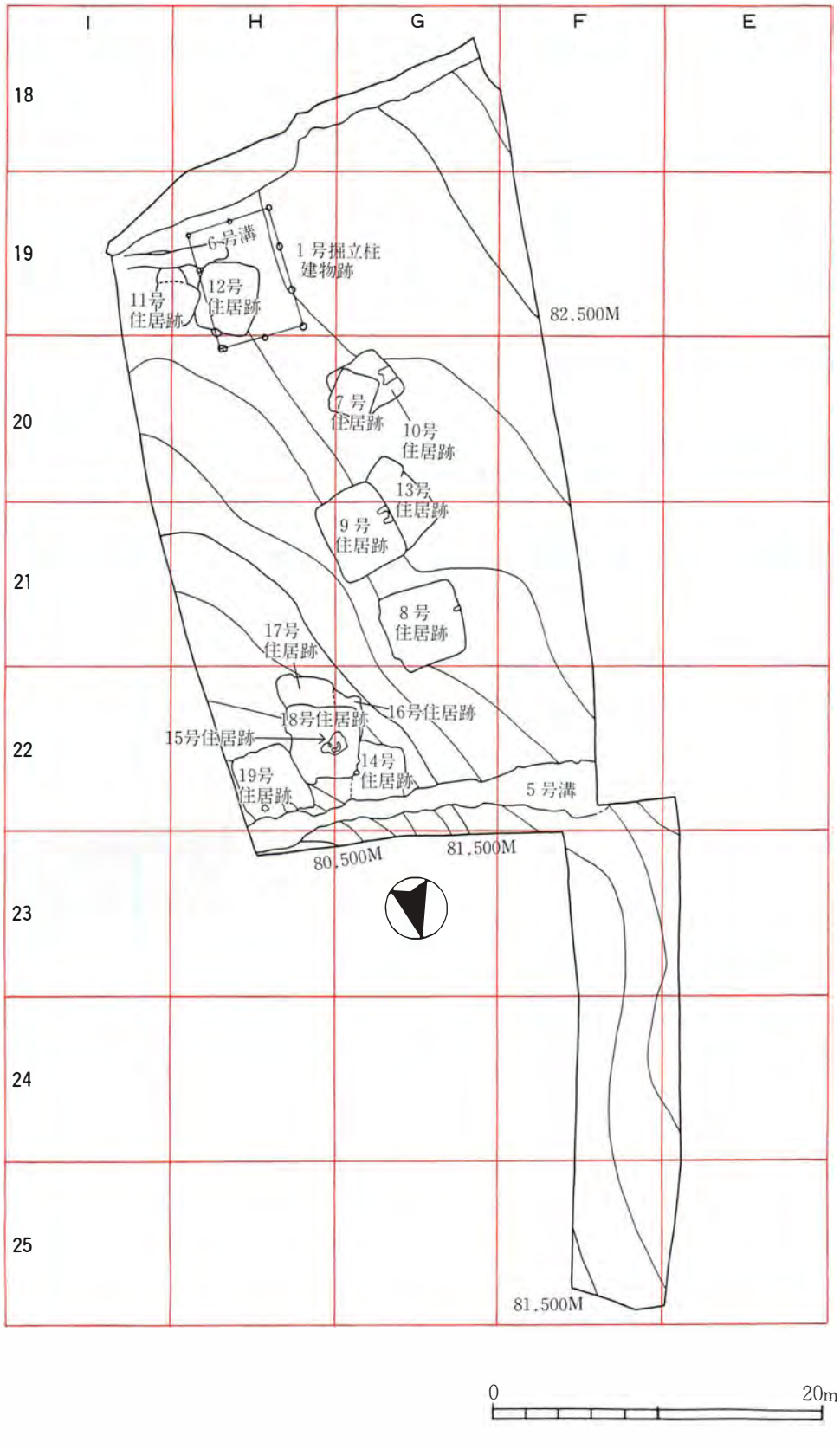
Ⅵ区の西側部分は、削平により包含層は存在しなかったが、東側部分より縄文早期、後期、晩期の土器や石器、古墳時代の土師器などが出土した。また、東側部分から４基の古墳時代の竪穴住居跡が検出された。

Ⅶ区からは、２基の古墳時代の竪穴住居跡が検出された。このうち、５号住居跡は一辺が10ｍを越え、３基の炉を持つ大型の住居跡であった。また、近世以降のものと思われる溝が３本確認された。包含層からは縄文早期、後期、晩期の土器や石器、古墳時代の土師器などが出土した。

６月中旬よりⅧ区の調査に入ったが、この年の夏は史上まれにみる猛暑で、空梅雨になり、特に７、８月はほとんど雨が降らなかった。このため、調査区は乾燥状態で、遺構確認は困難を極め、特にⅧ区北東部の数基の住居跡が切り合った一角は上部からの確認がほとんどできず、小トレンチを入れながら確認作業を行う状態であった。この結果、Ⅷ区全体では13基の古墳時代の竪穴住居跡と同時代の掘立柱建物跡が１棟、さ



第７図　Ⅵ区、Ⅶ区、Ⅸ区遺構配置図


I
H
G
F
E
18
19
20
21
22
23
24
25
6号溝
1号掘立柱
建物跡
11号
住居跡
12号
住居跡
82.500M
7号
住居跡
10号
住居跡
13号
住居跡
9号
住居跡
8号
住居跡
17号
住居跡
16号住居跡
18号住居跡
15号住居跡
19号
住居跡
14号
住居跡
5号溝
80.500M
81.500M
81.500M
0
20m

第８図　Ⅷ区遺構配置図

らに近世以降のものと思われる溝を２本検出することができた。Ⅷ区で検出した竪穴住居跡の多くはかまど付きで、埋土からは土師器に加えて、鉄器、須恵器が出土した。また、包含層からは縄文、古墳時代の遺物の他に歴史時代の土器も出土した。遺構実測と包含層の掘り下げ終了後に高所作業車から調査区全景の写真を撮影して、９月７日に調査を終了した。

平成７年度は、前年度未買収であったため調査ができなかった部分の調査を行った。Ⅶ区北側の、Ⅵ、Ⅷ区に挟まれた部分で、Ⅸ区とした（第７図）。５月12日より重機による表土剥ぎを行い、グリッド設定後、26日より掘り下げに入ったが、包含層が薄く、遺物はほとんど出土しなかった。また、遺構も小土坑がほとんどであり、遺構分布図を作成して、調査を終了した。

２　遺跡の基本層位

迫ノ上遺跡の層序は、熊本平野に基本的に見られるもので、阿蘇山の火山灰堆積土層である（第９図）。

Ⅰａ層は黒色土で、耕作土層である。

Ⅰｂ層はしまりのない、サラサラした暗褐色土層で、黄色土を粒状に含む。耕作土層である。

Ⅱ層は暗褐色土層である。状態はⅠｂ層とほとんど変わらないが、ややしまっている。

Ⅲａ層はしまりのない、サラサラした暗黄色土層で、色調はアカホヤを含むためか、やや明るい。

Ⅲｂ層は暗茶褐色土層である。Ⅲａ層より密につまり、色調はかなり暗くなる。

Ⅳ層は暗褐色土層である。さくさくして、やや引き締まった土である。姶良Ｔｎ火山灰を含むと思われる。

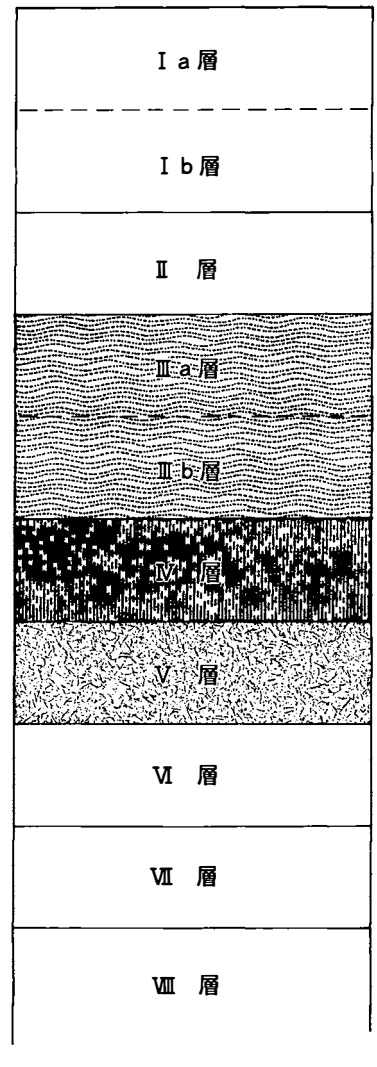
Ⅴ層は、ニガシロと通称される黒褐色土層で、層が塊状に硬化し、中には長石、石英、火山ガラスなどを多量に含んでいる。

Ⅵ層は、明褐色ローム質土層で、いわゆる「ハードローム」と称されるものに類似し、かなり硬くしまっている。あずき粒大の軽石を少量含む。

Ⅶ層は黄色ローム層で、「トスローム」にあたると思われる。やや粘質で、小石を多く含む。

Ⅷ層も暗黄色ローム層で、Ⅶ層と同じ性質を持っている。

遺物包含層は、削平や攪乱などによって残りが悪く、明確に分離できる状態ではなかったが、出土状況から、おもにⅡ層上面が古墳・歴史時代、Ⅲ層上面が縄文中～晩期、Ⅲ層下面～Ⅳ層上面が縄文早期にそれぞれ対応するものと考えられる。

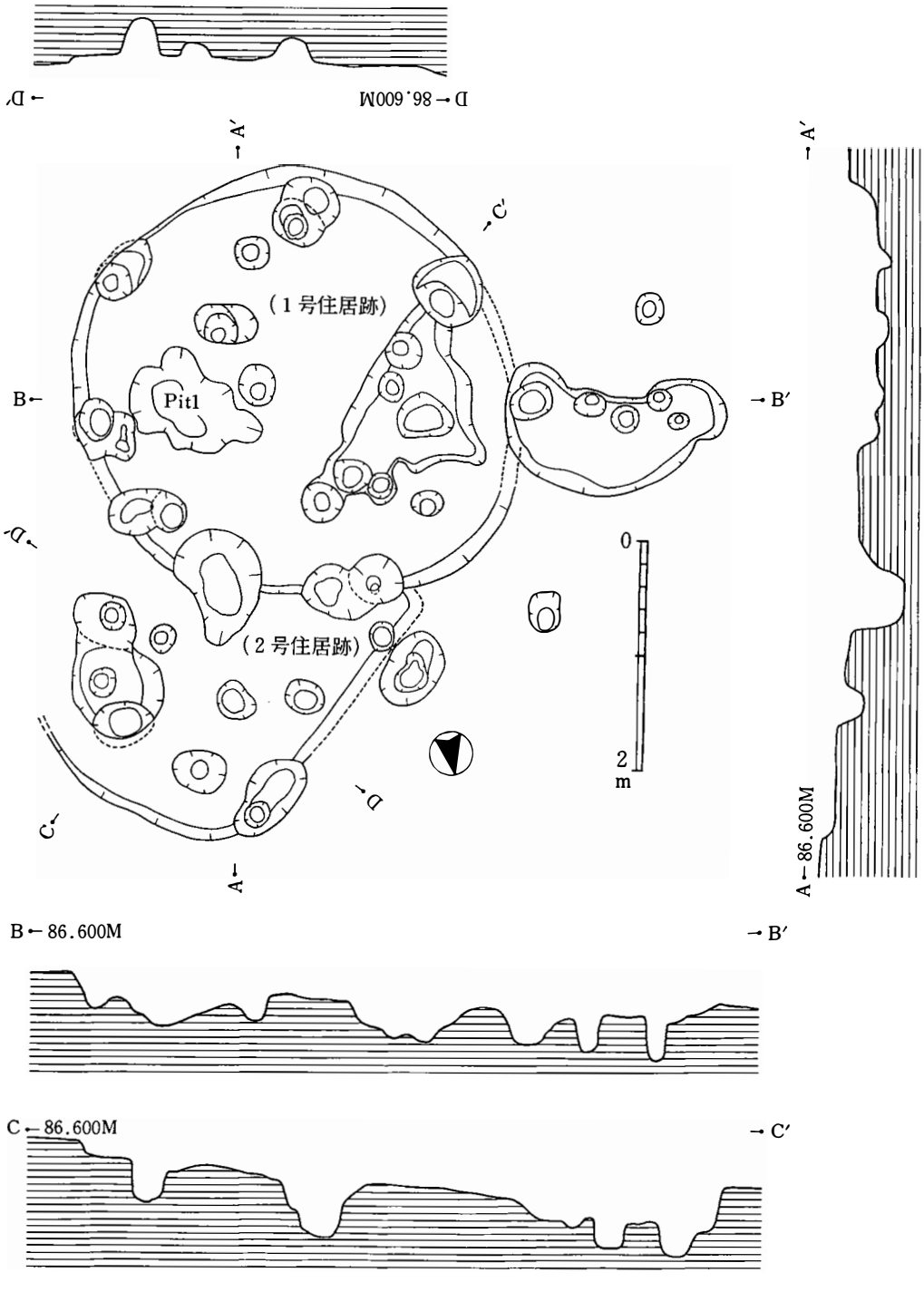


第９図　基本土層図

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

Ⅳ区の調査中、Ｃ－12、Ｄ－12グリッドにおいて、焼土を伴った遺構が確認された。上面からの遺構検出が難しかったため、少しずつ掘り下げながら確認を行ったところ、壁が円形に巡り、竪穴住居跡であることが確認された。また、この住居跡と切り合う形で住居跡がもう１基確認された。埋土から出土した遺物は少なかったが、床面近くで縄文晩期の土器片が数点出土したため、２基とも縄文時代晩期の住居跡であると考



第10図　Ⅵ区１号、２号住居跡

えられる。

Ⅳ区１号住居跡・２号住居跡（第10図）

Ⅳ区１号住居跡は直径3.6～3.8ｍの円形の住居跡である。Ⅴ層上面で確認されたが、本来はⅢ、Ⅳ層から掘り込まれていたものと推定される。壁面近くに掘り込まれている数基の土坑が柱穴にあたるものと思われるが、はっきりと確認はできなかった。また、床面に硬化面は確認できなかった。埋土はⅢ、Ⅳ層の土を基本とし、中に焼土がブロック状で多量に入っており、床面にも焼土粒が張り付いた状態で見られた。土坑Pit１には他より焼土が多く入っていたため、炉跡ではないかと思われる。

Ⅳ区２号住居跡は１号住居跡に切られたかたちで確認された。非常に浅く、全体の規模は不明であるが、一辺の長さが1.4ｍ程度の方形に近い形になるものと思われる。埋土は１号住居跡とほぼ同じで、硬化面は確認できなかった。

２　集石遺構（第11図）

Ⅱ区Ｂ－５グリッドにおいて、集石遺構１基を確認した。径約２ｍの範囲内に、拳大程度の礫が集中していた。掘り込み等は確認できず、平面および断面の実測図を作成して石を取り除いた。実測終了後に掘り下げを行ったところ、下面からさらに石が出土したため、再実測を行った。遺物は出土しなかったが、縄文時代早期のものであると思われる。

３　埋甕遺構（第11図）

Ⅴ区Ｈ－15グリッドから、埋甕と思われる遺構を１基検出した。直径70cmの土坑内に土器が埋納されていた。平面および断面図を作成して取り上げたが、削平で遺構の上部は消滅しており、さらにゴボウ穴による攪乱によってかなり破壊され、胴部下半の一部のみが残存している状態であった。このため、土器も復元することができなかったが、特徴から縄文晩期のものと考えられる。

４　土器（第12～22図）

迫ノ上遺跡から出土した縄文土器の時期は、早期、中期、後期、晩期にわたるが、早期と後晩期の土器がその多くを占める。このうち、口縁部と底部を中心に器形の推定が可能なものを122点掲載した。以下、これらの土器について時期別に見ていきたい。

なお、個別の土器の計測値および観察結果については［出土縄文土器観察表］（第４、５表）にまとめている。

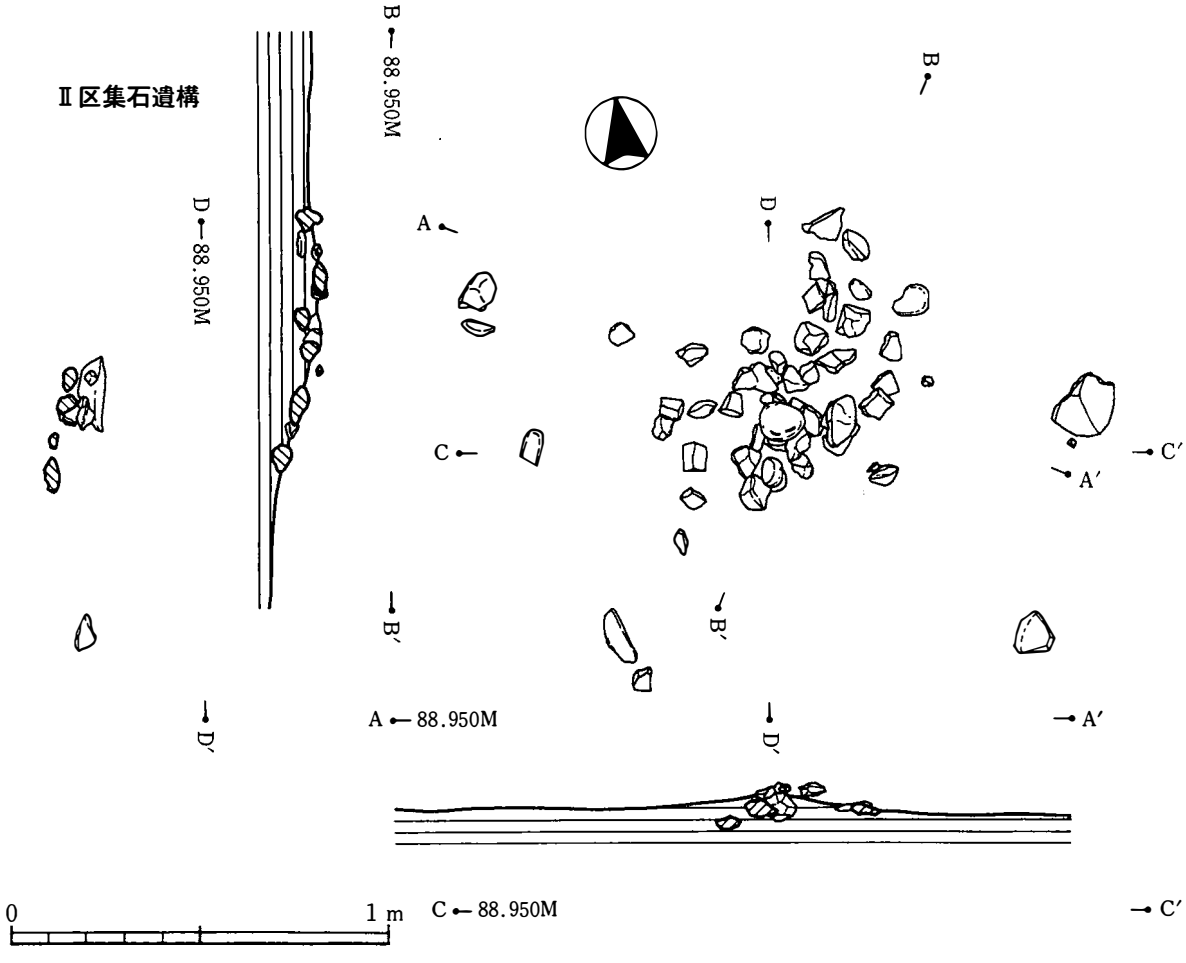
⑴ ．

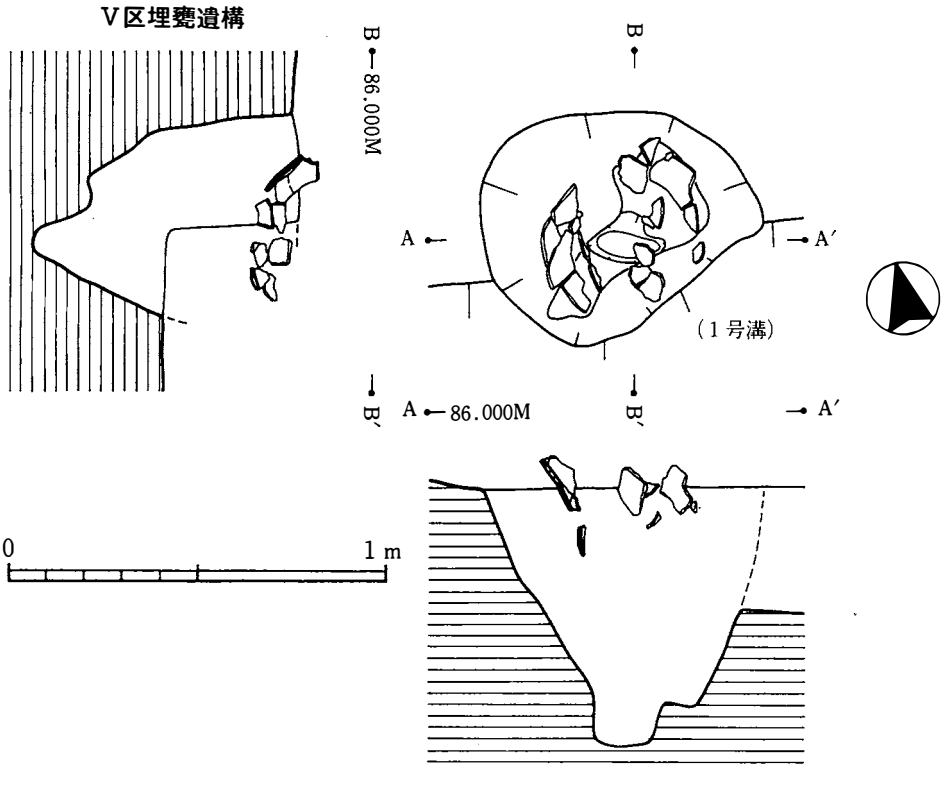
押型文土器、撚糸文土器、条痕土器などが出土した。

押型文土器（第12図１～第15図37、第16図44、45）

Ⅰ区から出土した押型文土器は、山形文（１～20、34、44）、楕円文（21～36、45）、格子目文（37）の３種類である。

口縁部周辺の施文の特徴から、外面のみに押型文を施文したもの（Ⅰ類）、外面は押型文、内面は原体条痕が施文されたもの（Ⅱ類）、内外面とも押型文が施文されたもの（Ⅲ類）、外面は押型文、内面に原体条痕





第11図　Ⅱ区集石遺構、Ⅴ区埋甕遺構

と押型文が施文されたもの（Ⅳ類）の４つに分けることができる。

また、口縁部の器形からは、口縁部が直口するもの（Ａ類）、端部がわずかに外反するもの（Ｂ類）、大きく外反するもの（Ｃ類）に分けることができる。

これらを組み合わせた形で、出土した押型文土器をＩＡ、ＩＢ、ⅡＢ、ⅢＡ、ⅢＢ、ⅣＢの６類に分類した。

ＩＡ類（山形１、２、楕円21～24、格子37）

直口口縁で、外面に押型文を施文しているものである。内面は主にナデ調整で、施文はすべて横位施文である。

ＩＢ類（山形３、４、楕円25、26）

口縁端部がわずかに外反し、外面に押型文を施文しているものである。内面は主にナデ調整である。横位施文が多くを占めるが、縦位施文のもの（26）もある。

ⅡＢ類（山形５、楕円27）

５は口縁端部がわずかに外反し、口縁部内面に原体条痕、外面に山形押型文を横位施文している。27は口縁端部がわずかに外反し、外面に楕円押型文が縦位施文されているが、口縁部内面には細い棒状の工具によると思われる連続刺突文が施されている。

ⅢＢ類（楕円28）

口縁端部がわずかに外反し、口縁部内面と外面に押型文を横位施文している。

ⅢＣ類（山形６）

外反口縁で、口縁部内面と外面に押型文を横位施文している。

ⅣＡ類（山形44、楕円29）

直口口縁で、口縁部内面に原体条痕と押型文、外面に押型文を施文しているものである。内外面とも横位施文である。

ⅣＢ類（山形７～12、楕円30～32）

口縁端部がわずかに外反し、口縁部内面に原体条痕と押型文、外面に押型文を施文しているものである。内外面とも横位施文のもの（７、８、10）、内面横位、外面縦位のもの（９、11）がある。30は外面に楕円押型文を横位施文しているが、口縁内面には押型文のかわりに横位の条痕文が施文されている。なお、31、32の残存部の外面はナデ調整のみであるが、他の例から見て、下部に押型文が施文されている可能性が強いためⅣＢ類に含めた。

ⅣＣ類（山形13～16、34、楕円33、34、45）

外反口縁で、内面口縁部に原体条痕と押形文、外面に押形文を施文しているものである。内外面とも横位施文のものが多くを占めるが、外面縦位施文、内面横位施文のもの（13）もある。34は外面に楕円文、内面に山形文を施文している。45は波状口縁である。

底部（山形17～20、楕円35、36）

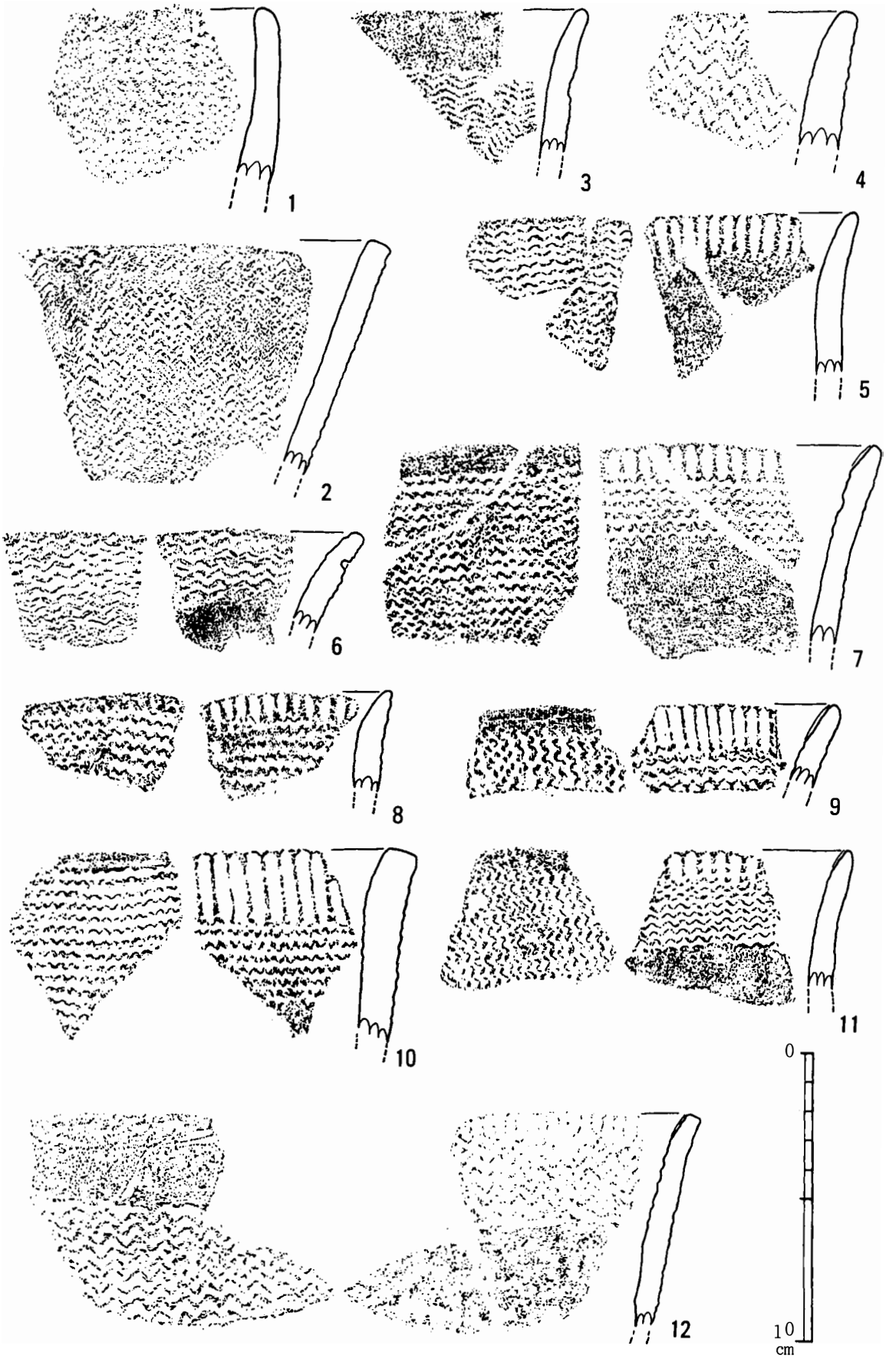
出土した押型文土器の底部は、すべて平底のものである。底部と胴部が直線的につながるもの（17、18、20、35、36）と、外反気味に開いてつながるもの（19）に分けられる。また、17は底面に網代圧痕をもつ。

撚糸文土器（第15図38、39）

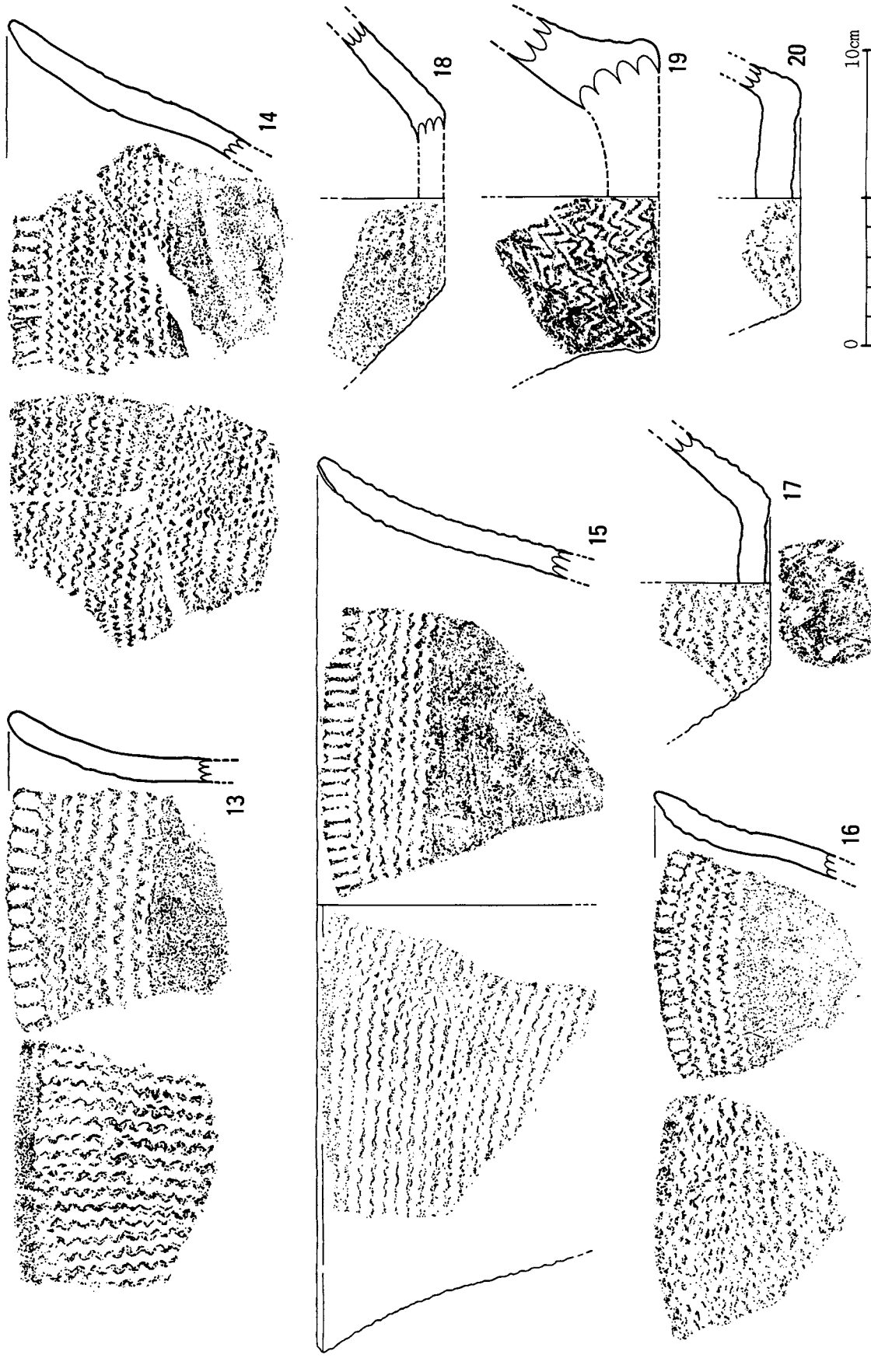
撚糸文土器についても、形態的に押型文土器と同様の分類が可能である。ここで図示した口縁部２点ともＩＡ類に分類される。施文方向は38が斜位施文、39が斜位と横位の併用である。

条痕土器（第15図40～42）

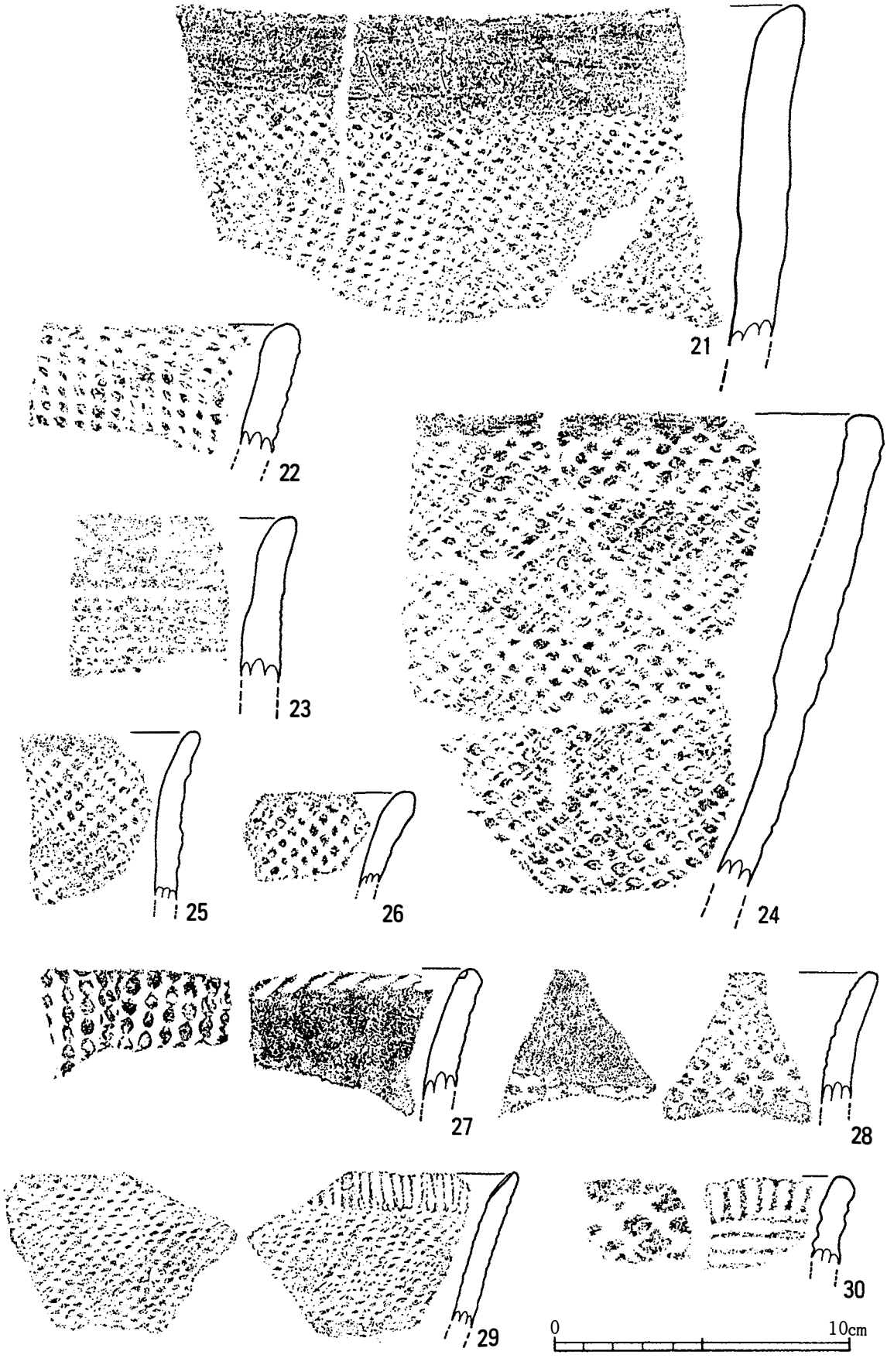
口縁部３点を示した。いずれも直口口縁である。40、41は外面上部に横位条痕、下部に斜位条痕が施され、



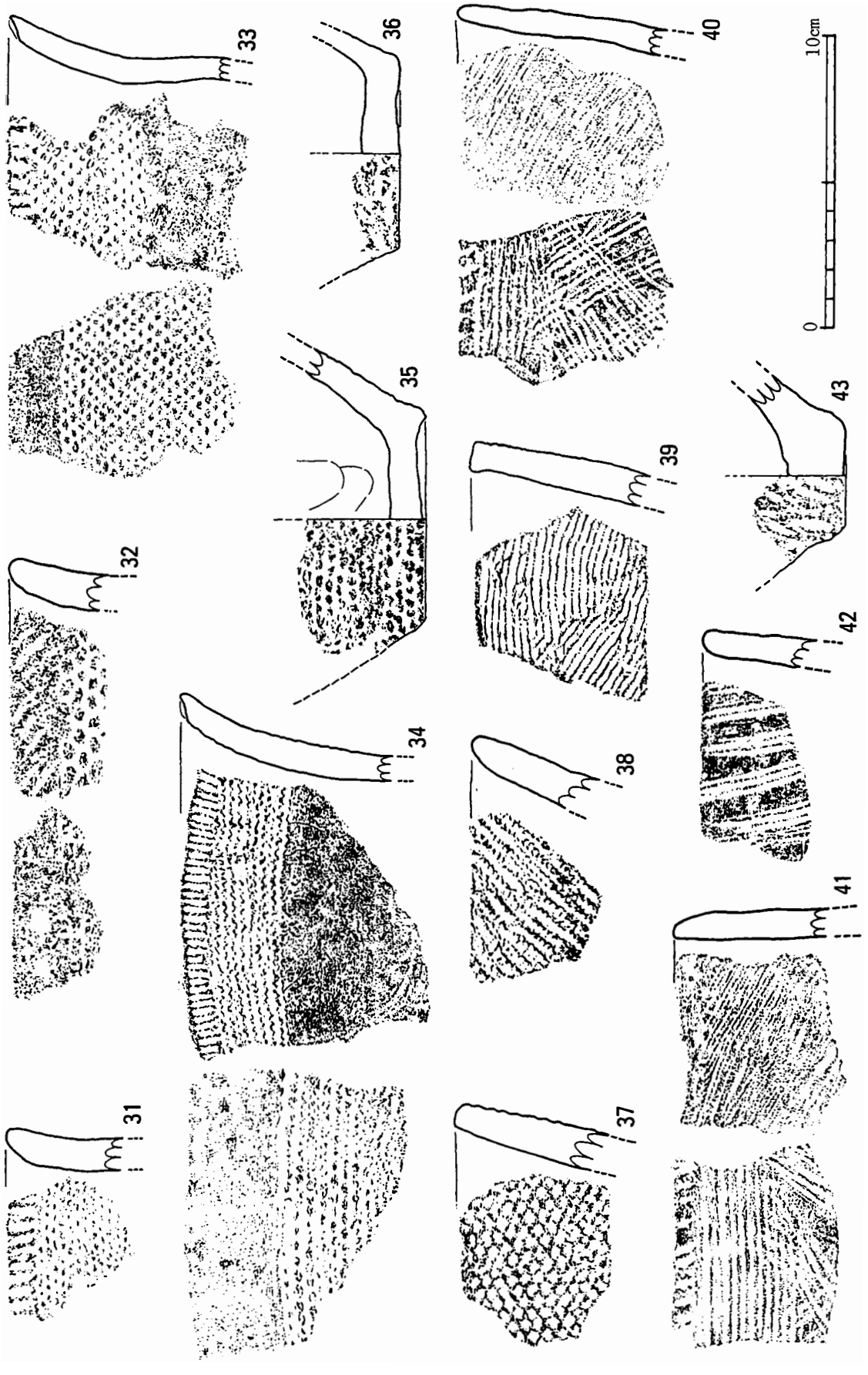
第12図　出土縄文土器 (1)



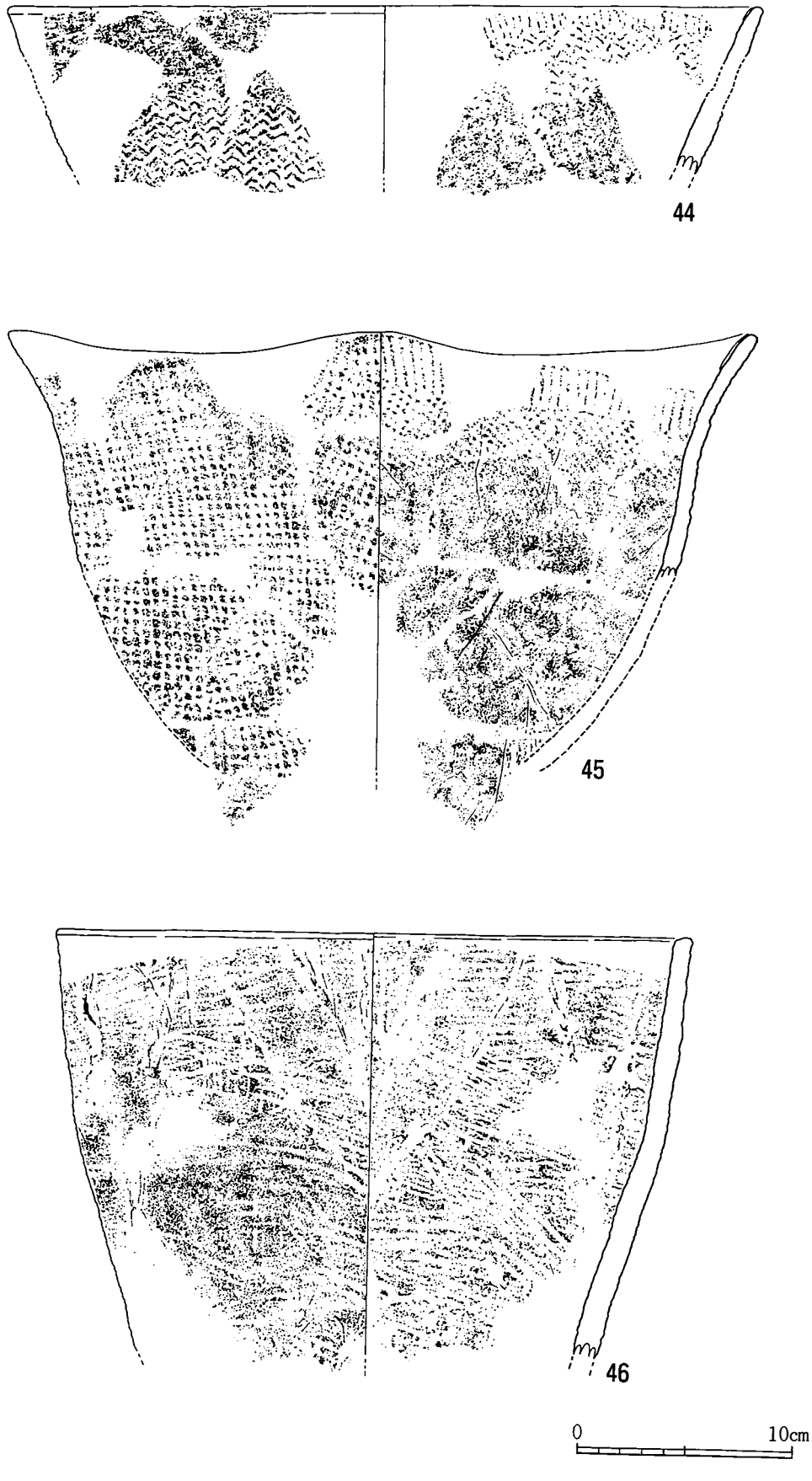
第13図　出土縄文土器 (2)



第14図　出土縄文土器 (3)



第15図　出土縄文土器 (4)



第16図　出土縄文土器 (5)

口唇部には刻目がある。42は外面に櫛描状の条痕文が縦位に施文されている。

その他の早期土器（第15図43）

43は早期土器の底と思われる破片である。内面ナデ調整、外面条痕調整で、底部と胴部が外反気味に開いてつながっている。

(2)

阿高式土器（第17図47、49）

出土した縄文中期の土器は、いずれも阿高式にあたるものである。口縁部破片１点と底部破片１点を掲載した。47は直口口縁で、口唇部はねじった粘土紐による貼付口縁になっている。胴部中位上部に凹線で区画された文様帯があり、文様は凹線による直線的モチーフである。49は底部端が外に張り出し、胴部から底部端にかけてほぼ直線的に連なる。底面には木の葉と思われる圧痕が残っている。

後期前半土器（第17図48、50、51）

口縁部３点を図示した。48は口唇上部に刻み目を持つ直口口縁で、凹線による縦位の平行直線文が施され、南福寺式に近似した特徴を持つ。50は外反口縁で、口唇の一部に貼付突起がある。51は外反する口縁の下部に断面三角形の突帯を貼り付けたもので、市来式に似た特徴を持っている。

(3)

多数の後期後半、晩期土器が出土した。器形の特徴から深鉢型土器と浅鉢型土器に分け、さらに残存部、形態の特徴をもとに細分を行った。

深鉢型土器（第17図52～第19図78）

口縁部の形態によってＡ～Ｇ類に分類した。

Ａ類（52～54））

外に開く頸部から断面くの字型に内傾する口縁を持つもの。内外面ともミガキ調整で、口縁帯は無文のもの（52）と数条の凹線をもつもの（53、54）がある。53は口縁帯に貝殻横点文をもつ。

Ｂ類（55、56）

外に開く頸部から直立、あるいは内彎気味に立ち上がる口縁帯を持つもの。口縁帯には数条の凹線をもつ。55は口縁帯に貝殻横点文をもつ。

Ｃ類（57）

外に開く頸部から外傾する口縁部を持つもの。口縁帯は無文である。

Ｄ類（70）

頸部で屈曲し、外傾する口縁部を持つもの。外面は条痕調整、内面はﾅﾃﾞ調整である。

Ｅ類（58～69、71～75）

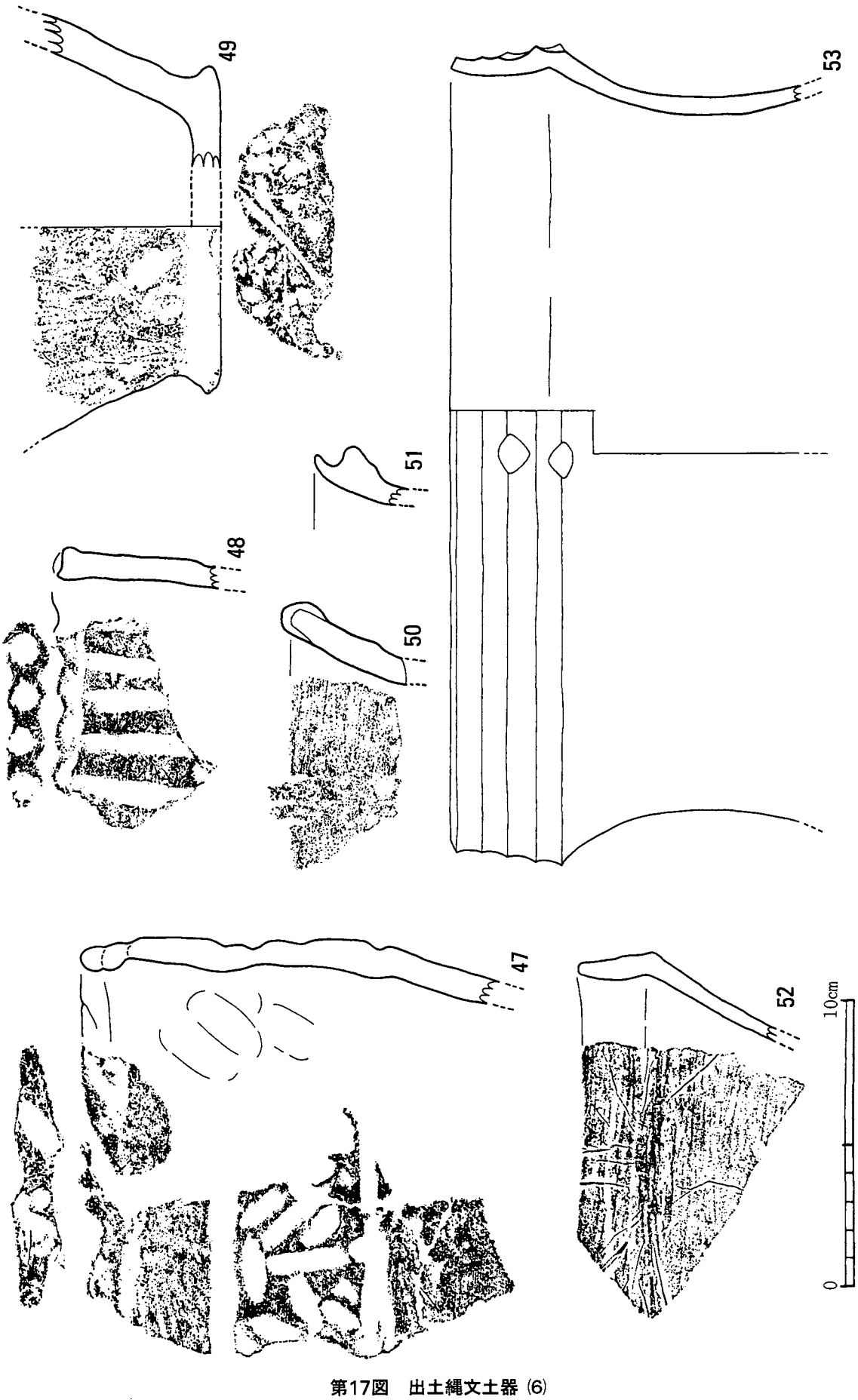
直口口縁のもの。口縁部のみの破片が多く、下部の形態が不明なものが多い。ほとんどが粗製で、外面は条痕調整である。形態により２種に細分した。

Ｅａ類（58、60～63、65～69、73～75）

直立か、外反気味に開く口縁部を持つもの。58は内外面ともミガキ調整である。

Ｅｂ類（59、64、71、72）

内彎気味に開く口縁部を持つもの。64の内面はミガキ調整である。71は焼成後の両方向からの穿孔跡があるが、位置がずれ、中途で終わっている。



第17図　出土縄文土器 (6)

Ｆ類（76）

頸部で屈曲して外反気味に直立した口縁部に粘土を貼り付けて口唇部を分厚くしたもの。１点のみの出土である。

Ｇ類（77、78）

口縁部に刻目突帯を持つもの。

浅鉢形土器（第20図79～第21図98）

口縁部の形態によってＨ～Ｌ類に分類した。

Ｈ類（79）

胴部から頸部にかけて内側に屈曲し、頸部から立ち上がる口縁帯を持つもの。内外面はミガキ調整である。

口縁帯外面に沈線１条を持ち、波状口縁の頂部に押点を持つ。

Ｉ類（80～90）

外反する口縁部の内面に突帯を貼り付け、短い口縁帯を作り出したもの。内外面ともミガキ調整で、口縁帯には１条の沈線または凹線があるが、90は無文である。

Ｊ類（91）

外反する口縁部の内面に突帯を貼り付けるが、口縁帯を持たないもの。

Ｋ類（93）

肩部と頸部が屈曲し、ほぼ外開きする直口口縁を持つもの。波状口縁で、口縁直下の内外面にそれぞれ１条の沈線を持つ。また、内外面とも丁寧に研磨されている。

Ｌ類（92、94～98）

外側に張り出す胴部を持ち、頸部で屈曲するもの。内外面ともミガキ調整である。２つに細分した。

Ｌａ類（92、94、95）

頸部から口縁部にかけて直立か、やや外傾して立ち上がるもの。92、94は口縁直下の内外面にそれぞれ１条の沈線を持つ。95は沈線はないが、分厚い口唇部を作り出している。

Ｌｂ類（96～98）

頸部でくの字状に屈曲し、強く外傾する口縁部を持つもの。口唇部は分厚く、96は段をなしている。98は薄い口唇で、内面に沈線１条を持つ。

胴部（第21図99～101）

99、100は内外面ともナデ調整の粗製土器である。内彎する頸部を持ち、肩部には沈線文が施されている。101は内外面ともミガキ調整の精製土器で、肩部で屈曲し、頸部で少し変化し、内彎気味に口縁部に連なる。

底部（第21図102～第22図122）

底部は形態によりＭ～Ｏ類に分類した。

Ｍ類（102～112）

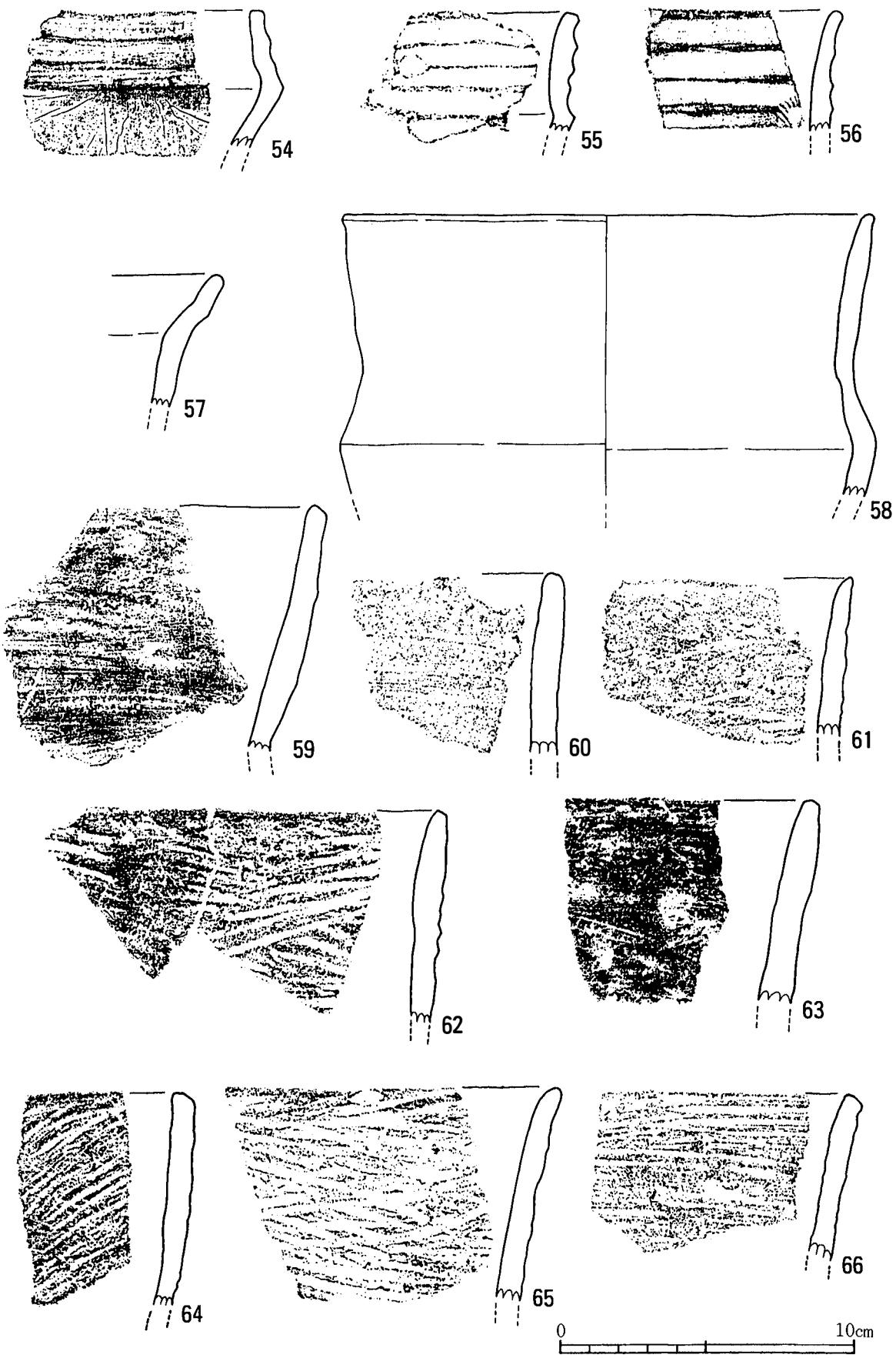
底部端が張り出すもの。底面の形状により、底面が上げ底のＭａ類（112）と、底面が平らのＭｂ類（102～111）の２つに細分できる。

Ｎ類（113～120）

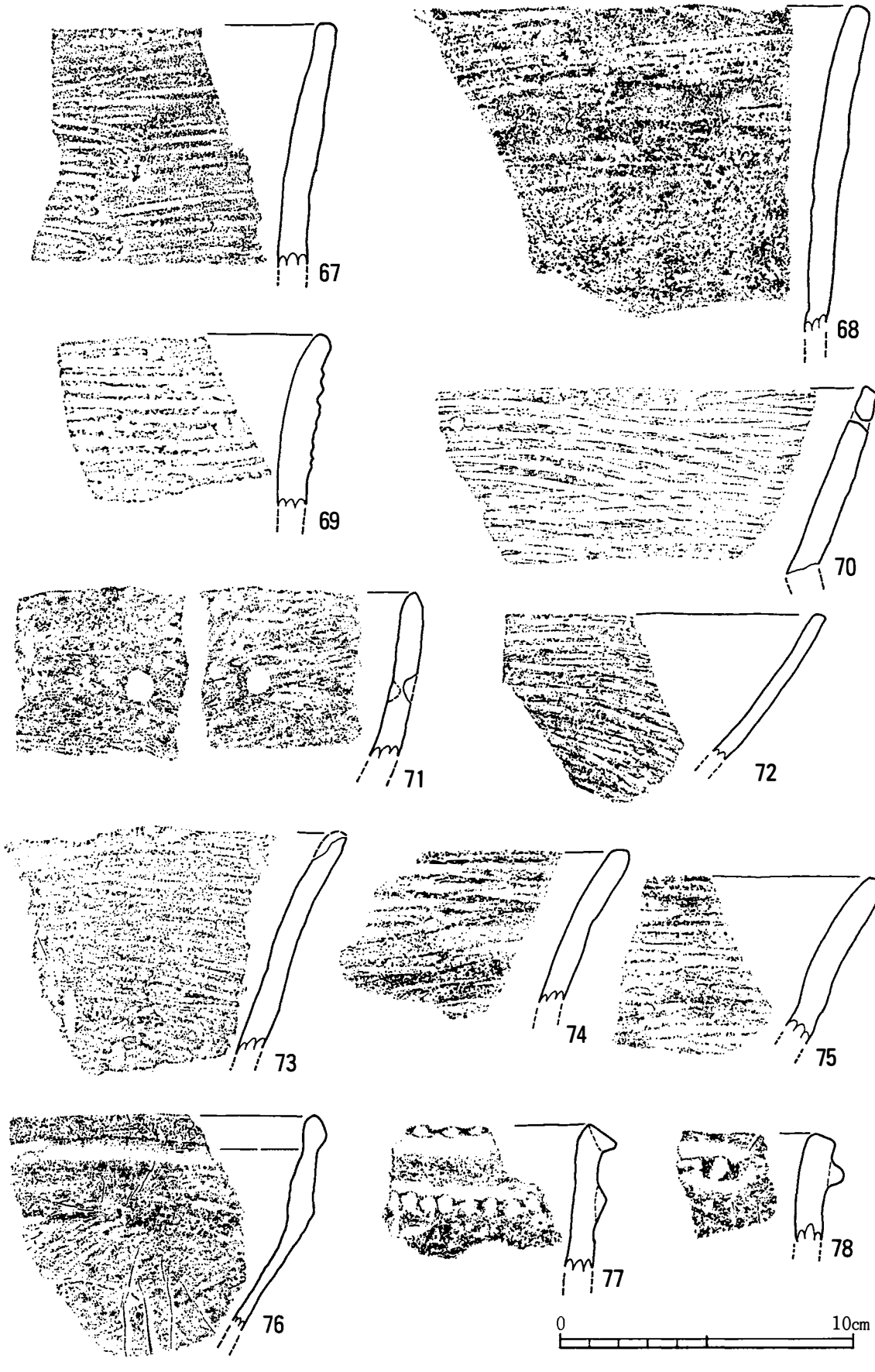
胴部から底部端にかけてほぼ直線的に連なるもの。底面の形状はいずれも上げ底気味である。

Ｏ類（121、122）

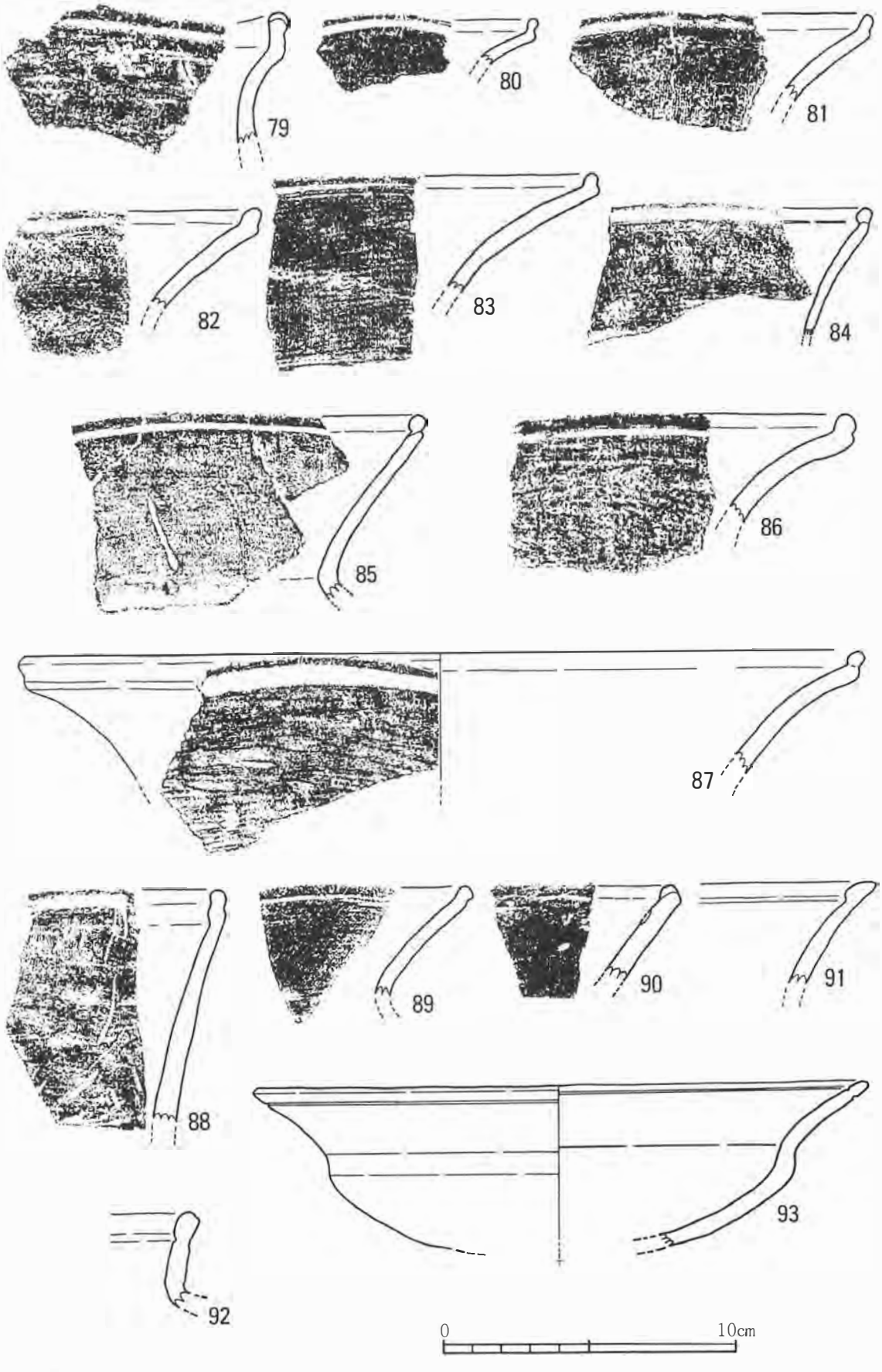
胴部が外反し、ほぼ垂直に底部端に連なるもの。底面の形状はいずれも平らである。



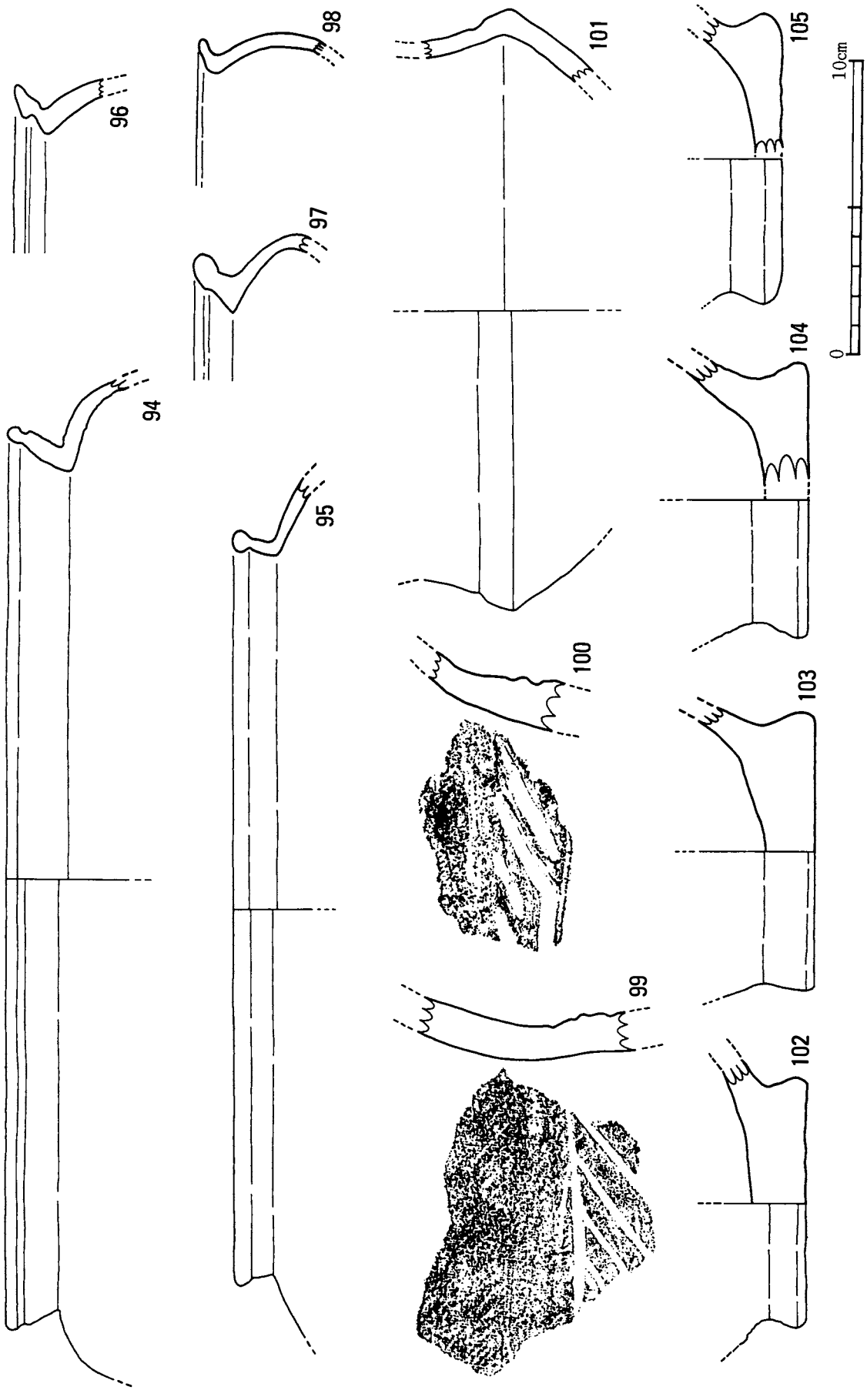
第18図　出土縄文土器 (7)



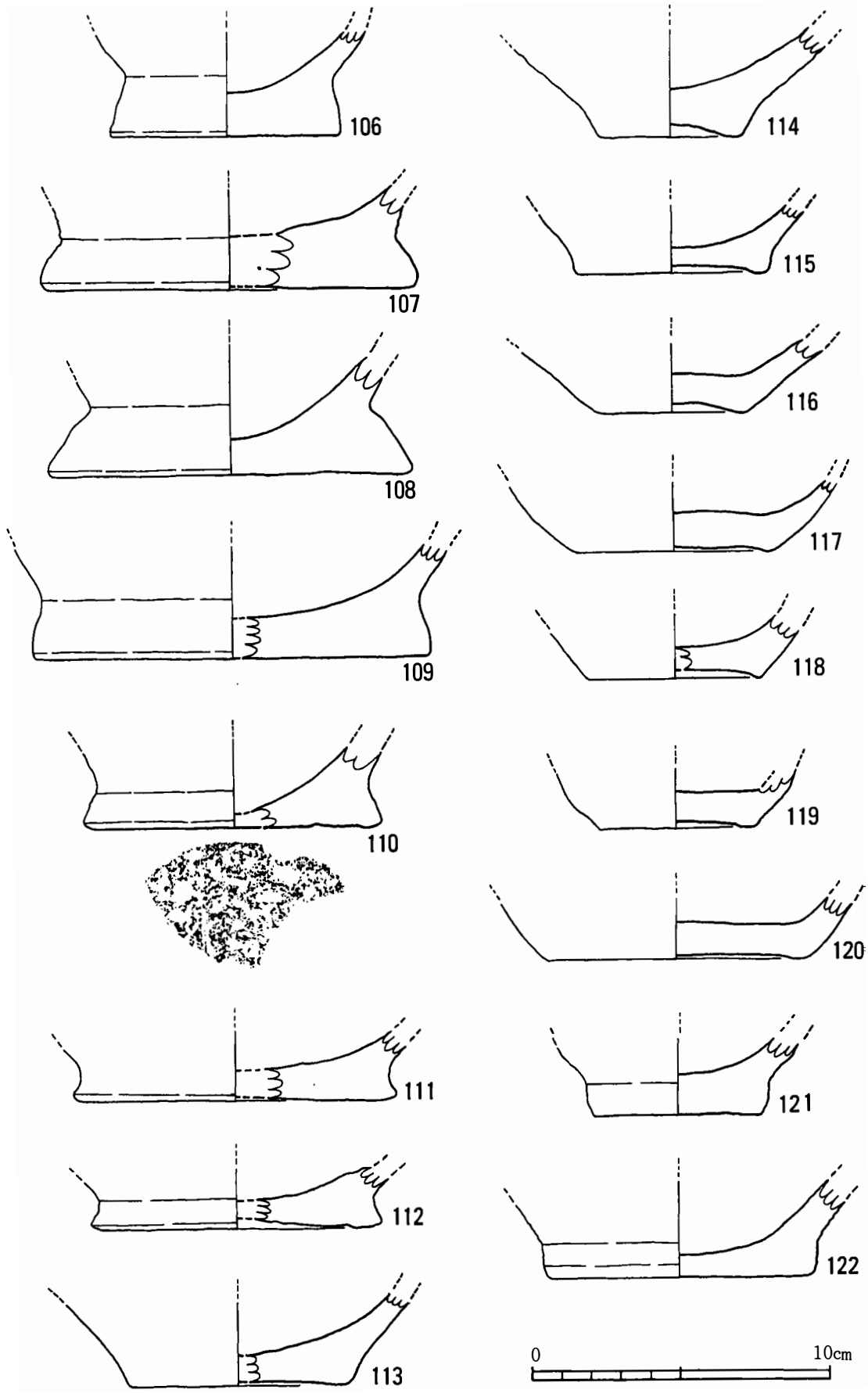
第19図　出土縄文土器 (8)



第20図　出土縄文土器 (9)



第21図　出土縄文土器（10）



第22図　出土縄文土器（11）

第４表　出土縄文土器観察表 (1)

遺物番号	器種	口底径 (cm)	現存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査区	出土地点	取上番号	備考
1	鉢口縁		6.0	ナデ	山形文	褐(10YR4/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	8-12	I区8-3 1321	
2	鉢口縁		8.0	ナデ	山形文	にぶ黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR4/2)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住上層	
3	鉢口縁		4.9	ナデ	ナデ、山形文	灰黄褐(10YR4/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 817	
4	鉢口縁		4.7	ナデ	山形文	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	18住	94追18住	
5	鉢口縁		5.4	原体条痕、ナデ	山形文	にぶ橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/8)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 528	
6	鉢口縁		3.8	山形文、ナデ	山形文	にぶ橙(7.5YR6/4)	灰褐(7.5YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
7	鉢口縁		6.8	原体条痕、山形文、ナデ	ナデ、山形文	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ橙(7.5YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	V	1溝	V区H-0 1号溝	
8	鉢口縁		3.4	原体条痕、山形文	山形文	明黄褐(10YR6/6)	にぶ黄褐(10YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-13	I区C-2	
9	鉢口縁		2.8	原体条痕、山形文	ナデ、山形文	にぶ赤褐(5YR4/3)	褐灰(5YR4/1)	砂粒多量、長石を含む	良好	V	H-15	V区H-0	
10	鉢口縁		6.8	原体条痕、山形文	山形文	黄橙(7.5YR7/8)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	D-12	I区D-3溝状	
11	鉢口縁		4.8	原体条痕、山形文、ナデ	山形文	灰黄褐(10YR4/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	粗砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 811	
12	鉢口縁		7.3	原体条痕、山形文、ナデ	ナデ、山形文	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄褐(10YR5/3)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅵ	3住	94追3住 11	
13	鉢口縁		6.9	原体条痕、山形文、ナデ	山形文	褐灰(7.5YR4/1)	灰褐(7.5YR4/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 485	
14	鉢口縁		8.2	原体条痕、山形文、ナデ	山形文	にぶ黄橙(10YR6/3)	灰黄褐(10YR5/2)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 500	
15	鉢口縁	30.4	8.7	原体条痕、山形文、ナデ	山形文	灰黄褐(10YR4/2)	暗褐(10YR3/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
16	鉢口縁		5.4	原体条痕、山形文、ナデ	山形文	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
17	鉢底部	5.6	3.5	ナデ	山形文、底面網代圧痕	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅶ	G-16	94追D-5 27	
18	鉢底部	5.8	3.5	ナデ	山形文	橙(7.5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-20	94追H-5	
19	鉢底部	10.6	5.1	ナデ	山形文	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ橙(7.5YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	I	C-12	I区7号土坑 2076	
20	鉢底部	7.2	2.0	ナデ	山形文	にぶ黒(7.5YR5/3)	にぶ橙(7.5YR6/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅵ	E-15	94追C-3 31	
21	鉢口縁		11.5	ナデ	ナデ、楕円文	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(5YR5/6)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-14	I区C-1 21	
22	鉢口縁		4.4	ナデ	楕円文	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	12住	94追12住床直 4	
23	鉢口縁		5.6	ナデ	ナデ、楕円文	にぶ黄橙(10YR6/4)	明黄橙(10YR7/6)	砂粒微量、長石、角閃石を含む	良好	I	C-14	I区C-1 20	
24	鉢口縁		16.4	ナデ	楕円文	橙(7.5YR6/8)	橙(7.5YR6/8)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 501	
25	鉢口縁		5.8	ナデ	楕円文	黒褐(10YR3/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
26	鉢口縁		3.2	ナデ	楕円文	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住上層	
27	鉢口縁		4.4	ナデ、刺突文	楕円文	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	V	H-15	V区H-0 2449	
28	鉢口縁		4.5	楕円文、ナデ	ナデ、楕円文	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅸ		95追調査区排土内	
29	鉢口縁		5.3	原体条痕、楕円文	楕円文	にぶ褐(7.5YR5/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅵ	D-18	94追F-2 14	
30	鉢口縁		3.1	原体条痕、複位条痕	楕円文	橙(7.5YR7/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、長石、角閃石を含む	良好	Ⅶ	6住	94追6住上層	
31	鉢口縁		4.0	原体条痕、楕円文	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 1285	
32	鉢口縁		3.4	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	橙(7.5YR7/6)	にぶ褐(7.5YR5/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	D-10	I区D-5	
33	鉢口縁		7.8	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	にぶ褐(7.5YR5/4)	明褐(7.5YR5/4)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追表土	
34	鉢口縁		7.3	原体条痕、山形文、ナデ	楕円文、ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-13	I区C-2 4	
35	鉢底部	7.0	4.1	ナデ	楕円文、ナデ	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-13	I区C-2	
36	鉢底部	6.6	2.3	ナデ	楕円文	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 167	
37	鉢口縁		5.3	ナデ	格子目文	灰褐(7.5YR5/2)	灰褐(7.5YR4/2)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅵ	D-19	94追G-2 43	
38	鉢口縁		4.5	ナデ	撚糸文	橙(7.5YR7/6)	灰褐(7.5YR4/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-11	I区C-4 947	
39	鉢口縁		6.2	ナデ	撚糸文	にぶ褐(7.5YR5/4)	褐(7.5YR4/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-17	94追E-5 29	
40	鉢口縁		7.3	条痕	条痕、口唇刻目	橙(7.5YR6/6)	明褐(7.5YR5/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-11	I区C-4 1932	
41	鉢口縁		5.3	条痕	条痕、口唇刻目	橙(7.5YR7/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 146	
42	鉢口縁		3.9	ナデ	櫛描条線文	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6	
43	鉢底部	4.4	3.3	ナデ	条痕文	明赤褐(5YR5/6)	にぶ褐(7.5YR5/3)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅱ	A-5	Ⅱ区B-9 4	
44	鉢口縁	35.4	7.7	原体条痕、山形文、ナデ	ナデ、山形文	にぶ黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR4/2)	粗砂粒少量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅵ	3住	94追3住	
45	鉢口縁	35.0	20.1	原体条痕、楕円文、ナデ	楕円文	にぶ黄褐(10YR4/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-16	94追D-6 29	
46	鉢口縁	29.8	29.4	条痕	条痕	褐(7.5YR4/3)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ	E-11	Ⅲ区E-4 2097	
47	鉢口縁		14.8	ナデ、指頭痕	口唇貼付、凹線文、ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6 2	
48	鉢口縁		5.8	ナデ	口唇波状、凹線文	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、滑石を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6	
49	鉢底部	11.2	6.2	ナデ	ナデ、底面木葉状圧痕	灰黄褐(10YR6/2)	にぶ黄橙(10YR7/3)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住北西上層	
50	鉢口縁		5.0	ナデ、	ナデ、口唇貼付突起	灰黄褐(10YR5/2)	黒褐(10YR3/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6	
51	鉢口縁		3.7	ナデ	条痕の上ナデ、口唇下突帯	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ赤褐(5YR5/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	18住	94追18住上層	
52	深鉢口縁		7.0	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	褐灰(10YR4/1)	灰黄褐(10YR4/2)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住 23	
53	深鉢口縁	27.7	12.2	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、回線4条、貝殻押点文	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	G-16	94追D-5 15	
54	深鉢口縁		4.7	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、回線3条	黒褐(10YR3/1)	黒褐(10YR3/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
55	深鉢口縁		4.2	ナデ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、回線4条、貝殻押点文	にぶ黄橙(10YR6/3)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	15住	94追15住ｶﾏﾄﾞ内	
56	深鉢口縁		3.9	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、凹線4条、貝殻押点文	にぶ黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒微量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6	
57	深鉢口縁		4.5	ナデ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶ黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	I	C-11	I区C-4 1934	
58	深鉢口縁	18.2	9.7	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-17	94追E-6 12	
59	深鉢口縁		8.4	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	褐灰(7.5YR4/1)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 1284	
60	深鉢口縁		6.2	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/3)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-13	I区C-2	
61	深鉢口縁		5.4	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	8-12	I区B-3	

第５表　出土縄文土器観察表 (2)

遺物番号	器種	口底径 (cm)	現存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査区	出土地点	取上番号	備考
62	深鉢口縁		7.3	条痕の上ナデ	条痕	黄灰(2.5YR4/1)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	G-21	94追Ⅰ-5 13	
63	深鉢口縁		7.0	ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	小石、粗砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-13	Ⅰ区 C-2	
64	深鉢口縁		7.3	ナデ	条痕	橙(7.5YR6/6)	灰褐(7.5YR4/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	B-12	Ⅰ区B-3	
65	深鉢口縁		7.3	条痕の上ナデ	条痕	褐灰(10YR5/1)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、長石、雲母を含む	良好	H6		94追上層	
66	深鉢口縁		5.7	条痕の上ナデ	条痕	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅴ	H-15	Ⅴ区H-0 2331	
67	深鉢口縁		8.2	条痕の上ナデ	条痕	黒(10YR2/1)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅰ	B-12	Ⅰ区B-3 1324	
68	深鉢口縁		11.0	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	灰白(2.5Y8/2)	砂粒少量、石英、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追Ⅰ-6 15	
69	深鉢口縁		5.7	条痕の上ナデ	条痕	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	13住	94追13住 5	
70	深鉢口縁		6.3	ナデ	条痕	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	Ⅵ	D-19	94追G-2 35	穿孔1
71	深鉢口縁		5.5	条痕の上ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR4/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	4層	94追4層上層	穿孔途中2
72	深鉢口縁		4.7	ﾍﾗｹﾞﾒ	条痕	黒褐(10YR3/1)	黒褐(10YR3/1)	砂粒微量、石英、長石を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6 P-7	
73	深鉢口縁		7.5	条痕	条痕	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅴ		Ⅴ区H	
74	深鉢口縁		5.1	条痕の上ナデ	条痕	にぶ橙(5YR6/4)	にぶ橙(5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-17	94追E-5 22	
75	深鉢口縁		6.5	条痕の上ナデ	条痕	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ褐(7.5YR5/3)	砂粒多量、石英、長石を含む	良好	Ⅰ	C-12	Ⅰ区7号土坑 2018	
76	深鉢口縁		7.3	条痕、ナデ	口唇部突帯、条痕の上ナデ	にぶ褐(7.5YR6/3)	にぶ黄褐(10YR4/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅱ	A-6	Ⅱ区B-8	
77	深鉢口縁		4.8	ナデ	刻目突帯2条、ナデ	にぶ褐(7.5YR5/4)	にぶ赤褐(2.5YR4/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追Ⅰ-6	
78	深鉢口縁		3.4	ナデ	刻目突帯1条、ナデ	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、長石を含む	良好	Ⅱ	B-7	Ⅱ区C-7	
79	浅鉢口縁		4.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条、波状頂部に押点	褐灰(7.5YR5/1)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	E-16	94追D-3	
80	浅鉢口縁		1.3	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	灰黄褐(10YR4/2)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅰ	B-11	Ⅰ区B-4	
81	浅鉢口縁		3.1	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、円線1条	褐灰(10YR4/1)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-12	Ⅰ区C-3 273	
82	浅鉢口縁		3.3	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、円線1条	褐灰(7.5YR5/1)	灰褐(7.5YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2	
83	浅鉢口縁		4.0	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	灰黄(2.5Y5/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒少量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	D-19	94追G-2 7	
84	浅鉢口縁		4.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、円線1条	暗灰黄(2.5Y5/2)	黄灰(2.5YR5/1)	砂粒少量、長石を含む	良好	Ⅱ		Ⅱ区	
85	浅鉢口縁		6.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	暗ｵﾘｰﾌﾞ(5Y4/3)	灰ｵﾘｰﾌﾞ(5Y5/2)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-12	Ⅰ区C-3	
86	浅鉢口縁		3.7	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	にぶ褐(7.5YR6/3)	灰褐(7.5YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	4住	94追4住	
87	浅鉢口縁	28.5	4.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、円線1条	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2	
88	浅鉢口縁		8.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、円線1条	灰黄褐(10YR5/2)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、長石、石英を含む	良好	Ⅱ	A-5	Ⅱ区B-9	
89	浅鉢口縁		3.7	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	にぶ黄橙(10YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	D-19	94追G-2 38	
90	浅鉢口縁		3.2	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	灰ｵﾘｰﾌﾞ(5Y5/2)	黄灰(2.5YR4/1)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅱ	C-6	Ⅱ区D-8	
91	浅鉢口縁		3.4	ﾍﾗｹﾞﾒ、口縁突帯	ﾍﾗｹﾞﾒ	黒褐(10YR3/1)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒微量、長石、角閃石、雲母を含む	良好	Ⅳ	C-2	Ⅳ区D-12 2259	
92	浅鉢口縁		3.2	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂粒微量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅴ		Ⅴ区ｽﾄｰﾌﾞ穴攪乱	
93	浅鉢口縁	21.0	5.3	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	小石、砂粒少量、石英、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	4住	94追4住北東上層	
94	浅鉢口縁	30.8	4.1	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条、ナデ	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	灰黄褐(10YR6/2)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	1住	94追1住床直 8	
95	浅鉢口縁	25.8	2.6	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	灰黄褐(10YR5/2)	黄灰(2.5YR4/1)	砂粒微量、長石、角閃石を含む	良好	Ⅳ	B-3	Ⅳ区C-11 2267	
96	浅鉢口縁		3.0	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-22	94追J-6	
97	浅鉢口縁		3.9	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	ｵﾘｰﾌﾞ黒 (5Y3/2)	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂粒微量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅳ	C-1	Ⅳ区D-13 2164	
98	浅鉢口縁		4.3	ﾍﾗｹﾞﾒ、沈線1条	ﾍﾗｹﾞﾒ	灰褐(7.5YR4/2)	褐灰(7.5YR4/1)	砂粒微量、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	4住	94追4住北東上層	
99	鉢胴部			ナデ	ナデ、沈線文	にぶ褐(7.5YR5/3)	にぶ橙(7.5YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石を含む	良好	Ⅵ	D-19	94追G-2 15	
100	鉢胴部		4.8	ナデ	ナデ、沈線文	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ褐(7.5YR5/3)	砂粒多量、石英、長石、角閃石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6 P-10	
101	鉢胴部			ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	褐灰(10YR4/1)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-17	94追E-6 7	
102	鉢底部	8.6	2.8	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	粗砂粒多量、長石、石英、角閃石、雲母を含む	良好	Ⅱ	B-5	Ⅱ区C-9	
103	鉢底部	9.2	3.9	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅵ	4住	94追4住 9	
104	鉢底部	9.4	4.1	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅴ	H-15	Ⅴ区H-0 2442	
105	鉢底部	9.8	2.7	ナデ	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅳ	C-1	Ⅳ区C-13 2176	
106	鉢底部	9.8	3.4	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-20	94追H-6	
107	鉢底部	12.8	3.4	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2 15	
108	鉢底部	12.2	3.9	ナデ	ナデ	にぶ橙(5YR6/4)	明赤褐(5YR5/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅰ	C-12	Ⅰ区7号土坑 2017	
109	鉢底部	13.4	3.7	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	G-20	94追H-5 19	
110	鉢底部	10.0	2.6	ナデ	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR7/4)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 927	
111	鉢底部	10.8	2.3	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	1層	Ⅰ区1層	
112	鉢底部	9.8	2.0	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	D-11	Ⅰ区D-4 1448	
113	鉢底部	7.4	2.8	ナデ	ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	橙(7.5YR6/6)	小石、砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住南東上層	
114	鉢底部	4.8	3.6	ナデ	ナデ	黒褐(7.5YR3/2)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 1935	
115	鉢底部	6.2	2.2	ナデ	ﾍﾗｹﾞﾒ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5住	94追5住北東上層	
116	鉢底部	5.0	2.4	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR5/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	H6		94追	
117	鉢底部	6.6	2.3	ﾍﾗｹﾞﾒ、ナデ	ﾍﾗｹﾞﾒ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
118	鉢底部	5.8	2.1	ﾍﾗｹﾞﾒ	ﾍﾗｹﾞﾒ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ橙(7.5YR5/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-17	94追E-5 53	
119	鉢底部	5.2	1.9	ナデ	ﾍﾗｹﾞﾒ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒微量、長石、石英、雲母を含む	良好	Ⅶ	G-21	94追Ⅰ-5 8	
120	鉢底部	8.4	1.9	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR5/3)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅵ	E-16	94追D-3	
121	鉢底部	6.1	2.5	ナデ	ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 907	
122	鉢底部	9.2	3.2	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 62	

５　石器（第23～39図）

調査区から出土した縄文時代の石器のうち、主要な遺物144点を掲載した。以下、器種ごとに、特徴について見ていきたい。

なお、それぞれの遺物の計測値については、「出土石器観察表」（第６、７表）にまとめている。

石鏃（第23図１～第24図28、30）

石鏃は、29点出土した。石材としては、黒曜石製が18点、チャート製が３点、安山岩製が８点となっている。出土した石鏃は、すべて無茎鏃にあたるが、その形状によって、正三角形を呈するもの（Ⅰ群）、二等辺三角形を呈するもの（Ⅱ群）、その他の形状のもの（Ⅲ群）の３種類に分けられる。さらに、基部の形状の特徴から、平基のもの（Ａ類）、Ｖ字状に浅い抉りが入るもの（Ｂ類）、Ｕ字状に抉りが入るもの（Ｃ類）、深く抉られた長脚のもの（Ｄ類）に分けることができる。このうち、実際に出土したのは６種類で、ⅡＢ類が11点で一番多く、次いでⅡＣ類が６点、ⅡＡ類が３点出土している。

ⅡＡ類（１～３）

平基で、二等辺三角形を呈する石鏃である。３点出土した。２は先端と下半の一部、３は上半部をそれぞれ欠損している。

ⅡＢ類（４～11、13～15）

二等辺三角形で、基部にＶ字状の浅い抉りが入る石鏃である。11点出土している。11、13は小型の石鏃である。７は調整が中途で終わっており、製作に失敗したか、製作途中に何らかの理由で放棄された未完成品と考えられる。６、７、８、13、14は素材剥片の剥離面が一部残っている。また、15は側縁が内彎気味になっている。なお、６、８、９は上半部、14、15は先端部を欠損している。

ⅠＣ類（17）

正三角形で、基部がＵ字状に抉られた凹基の石鏃である。側縁は下半部で内側に変化している。また、左脚部を欠損している。

ⅡＣ類（16､18～22）

二等辺三角形で、基部がＵ字状に抉られた凹基の石鏃である。６点出土している。側縁が直線になるもの(16、18、19）と、下半部で変化するもの（20)、外彎気味のもの（21、22）がある。19は長さ3.4cmの大型の石鏃で、直線状の側縁を持つ。20も長さ3.4cmの大型の石鏃で、側縁は下半部で変化している。なお、19は先端部、18は脚の一部、20、22は先端と脚の一部を、それぞれ欠損している。

ⅡＤ類（23、24）

二等辺三角形を呈し、基部が深く抉られて長脚になる石鏃である。２点出土した。23は側縁が直線状で、先端と左脚部を欠損している。24は側縁が外彎気味で、先端部を欠損している。

ⅢＣ類（27）

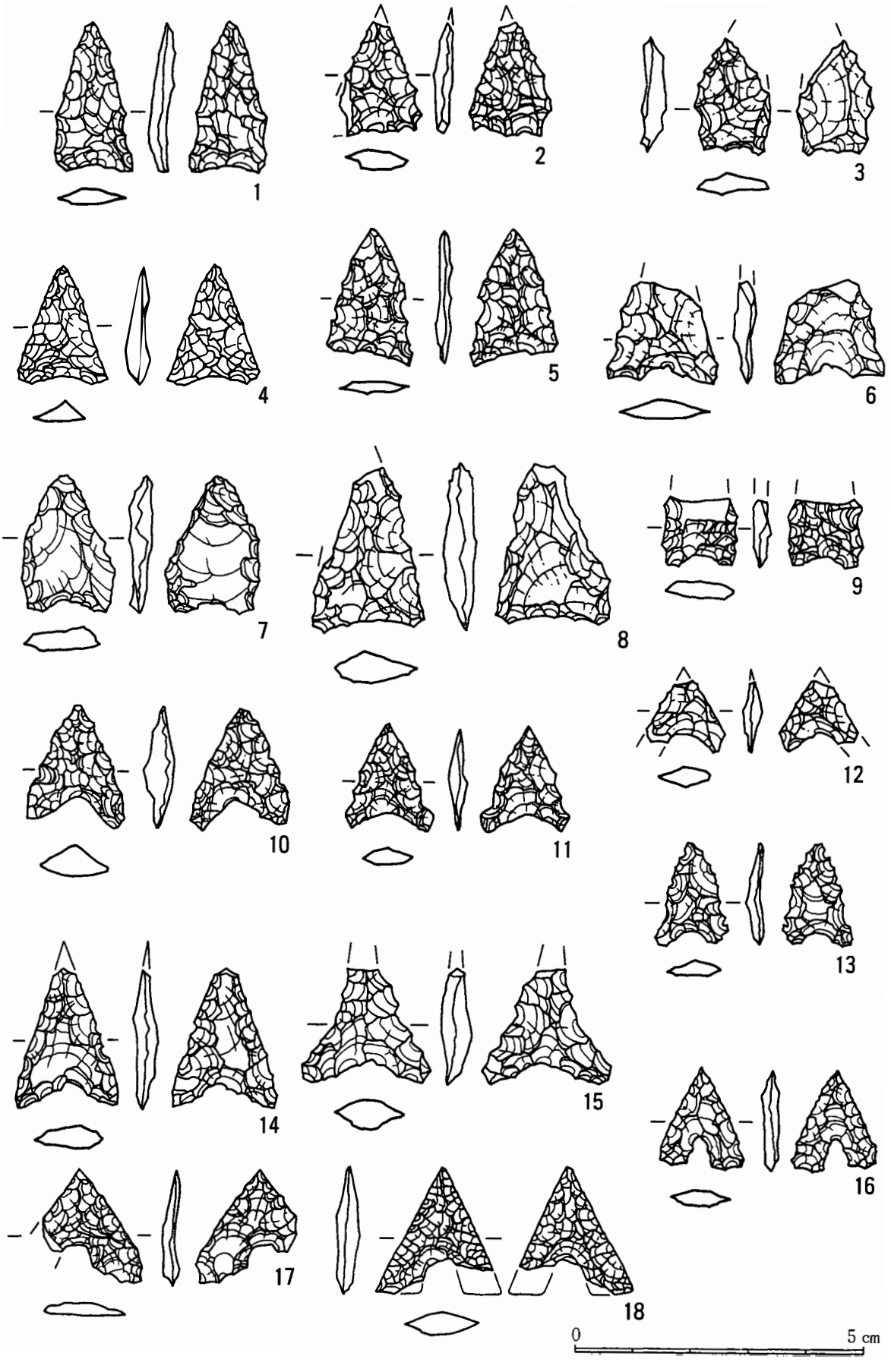
基部がＵ字状に抉られた凹基の石鏃である。側縁が上半で角をなして屈曲する特異な形をしているが、ⅡＣ類の先端が折損したものを再加工したものと考えられる。

所属不明の石鏃（12、25、26、28、30）

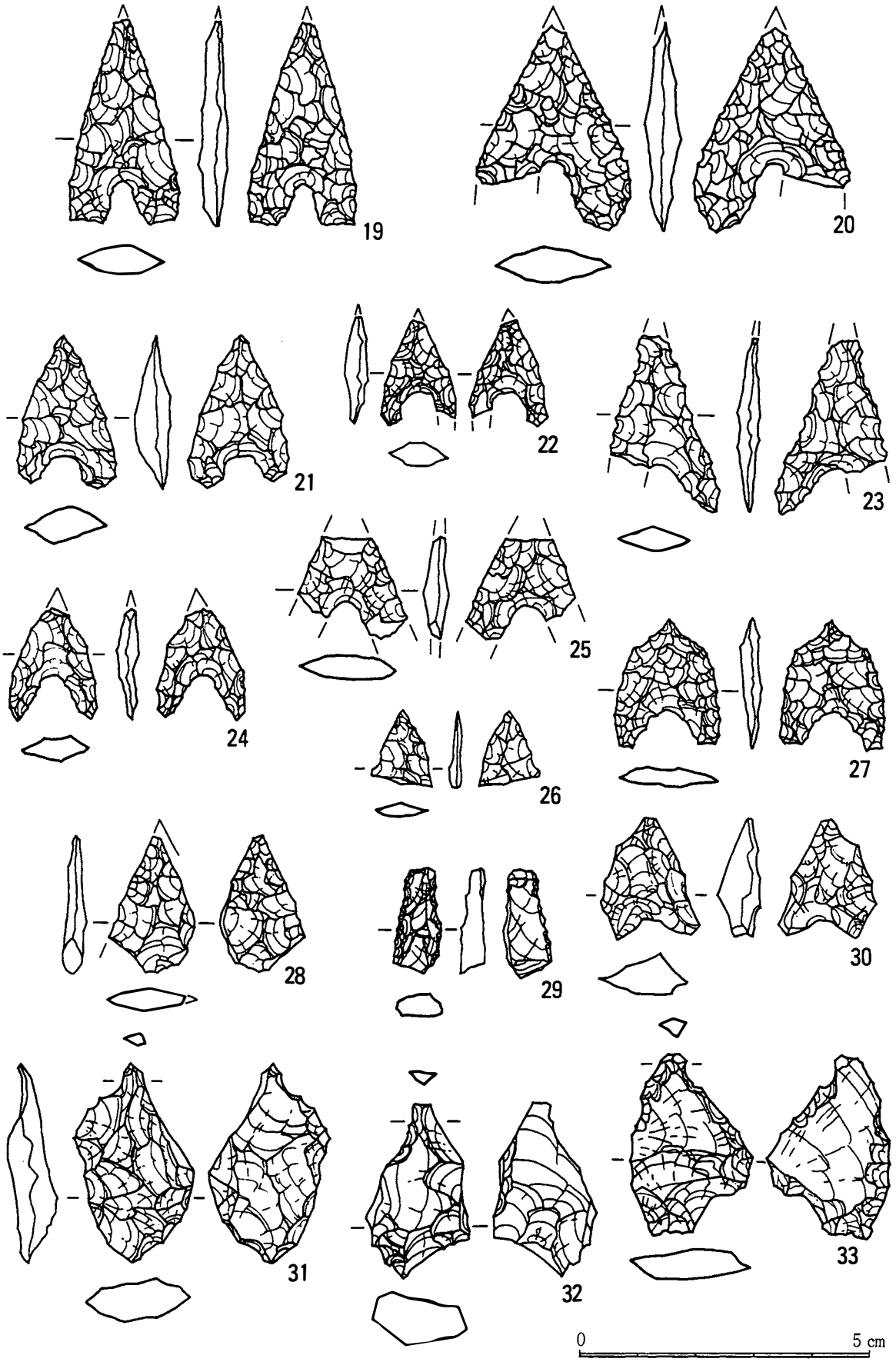
欠損等によって、分類できなかった石鏃が５点ある。30は調整が中途で終わっており、未加工品の可能性がある。

石錐（第24図29、31～33）

石錐は、４点出土した。いずれも黒曜石製である。不定形の剥片の一部を加工して錐部を作り出し、はっきりしたつまみ部を持っていないもの（31～33）が多い。29は細身の棒状で、断面は半円形である。



第23図　出土縄文石器（1）



第24図　出土縄文石器 (2)

石匙（第25図34、35、第26図42）

石匙は、全部で３点出土した。34、35は黒曜石製、42は安山岩製である。34は横型石匙で、調整が一部にとどまっている未加工品である。35は縦型石匙で、左側側縁を欠損している。42も縦型であるが、調整は縁辺のみで、素材剥片の剥離面がかなり残っている。

削器（第25図36～41、第26図43～48）

剥片の側縁部に連続的に調整を加えて作られた刃部を持つ石器を削器とし、12点を掲載した。大型のもの(43～48）と小型のもの（36～41）に分けられ、石材は、大型のものはすべてが安山岩、小型のものは安山岩（37、38、40)、黒曜石（39、41)、チャート（36）である。

抉入石器（第27図49～55）

石器本体の一部に抉入加工による彎入部が見られるもので、７点を掲載した。いずれも黒曜石製である。49は右側縁に彎入部があり、表裏両面から調整が行われている。50、51、54は左側縁に彎入部があり、裏面からの片面調整が行われている。52は右側縁に彎入部があり、表面からの片面調整が行われている。53、55は左側縁に表面片面調整の彎入部がある。

二次加工のある不定形石器（第27図56～第28図66）

ここでは11点を掲載している。石材は、56～59、61、63～65が黒曜石、60、66が粘板岩、62がチャートである。

59、65は剥片の両側縁に調整を加えて突出部を作り出しており、石錐の未加工品の可能性がある。また、57は一部を折損して全体の形状は不明であるが、石錐のつまみ部の可能性がある。58、62は一部を折損しているが、調整の特徴から石鏃の一部の可能性がある。60、66は粘板岩の片側側縁に調整痕がある。

打製石斧（第29図67～第30図75）

打製石斧は、９点出土した。石材は多くが砂岩であるが、72は安山岩、75は片岩である。また、形態は両側縁がほぼ平行な短冊形（長方形）のものがほとんどであるが、上端の小さい撥形のものも１点（68）出土している。68、70、72、74、75は表面に礫面を残している。また、70、73～75は下半部を欠損している。74は大型の打製石斧である。75は素材剥片の縁辺調整の途中で放棄された未完成品である。

磨製石斧（第30図76～79）

磨製石斧は、４点出土した。76は蛇紋岩製の小型片刃石斧で、基部を欠損している。形態は棒状で、全体が研磨され、主面と側面の境に小さな稜を持つ。77は蛇紋岩製の小型両刃石斧である。刃部のみの破片のため、全体の形は不明であるが、側面も研磨されている。78は砂岩製で大型の両刃石斧である。刃部のみの破片で、全体の形は不明である。断面は楕円形を呈する。丁寧に研磨されており、側面の一部には調整痕を残している。79は小型石斧の基部の破片で、蛇紋岩製である。

石皿・台石（第31図80～第32図87）

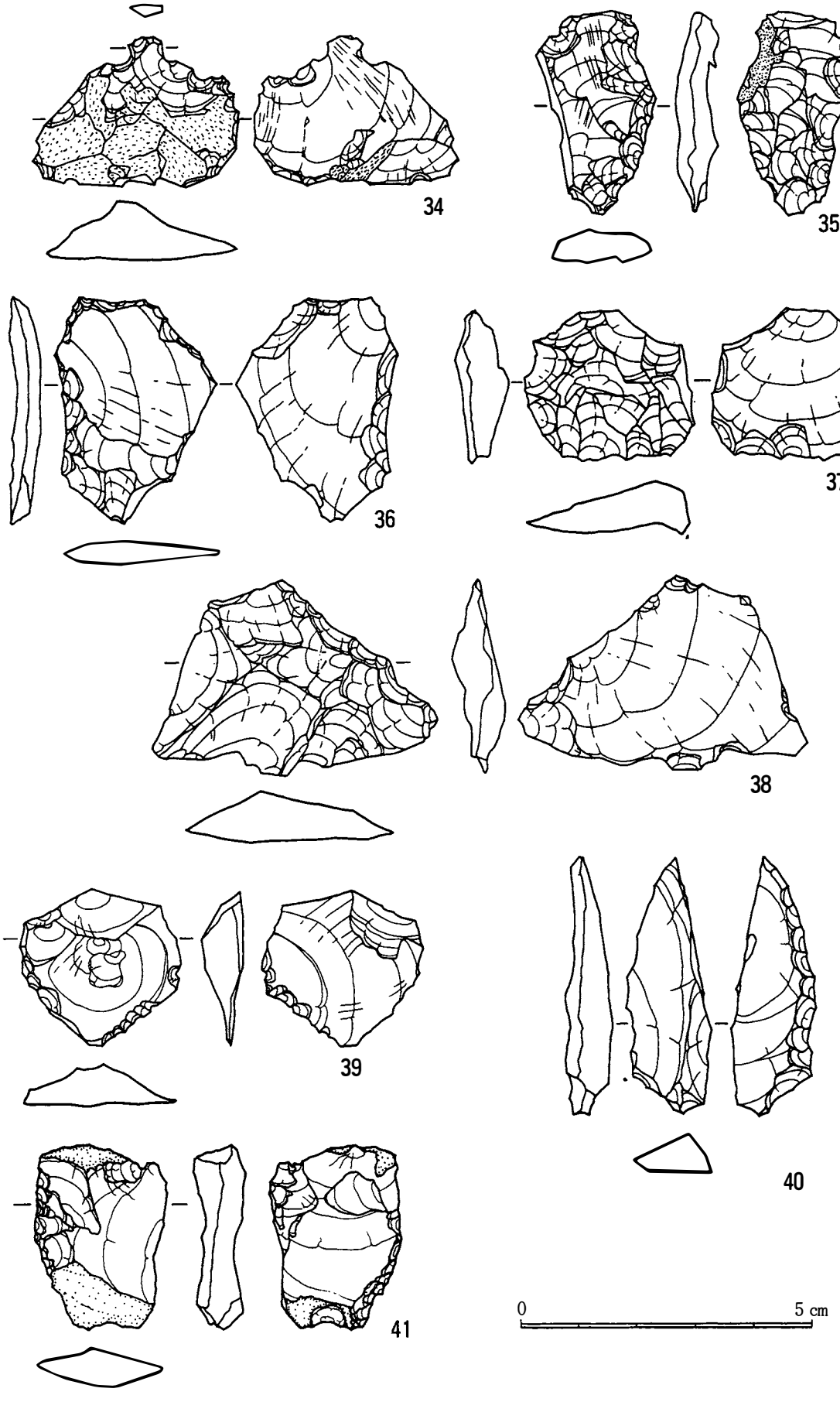
８点掲載した。いずれも大型の扁平な石で、表面に凹状の磨痕や敲き痕を持つ。82、83を除く６点は一部を欠損している。

磨石・敲石（第33図88～第35図107）

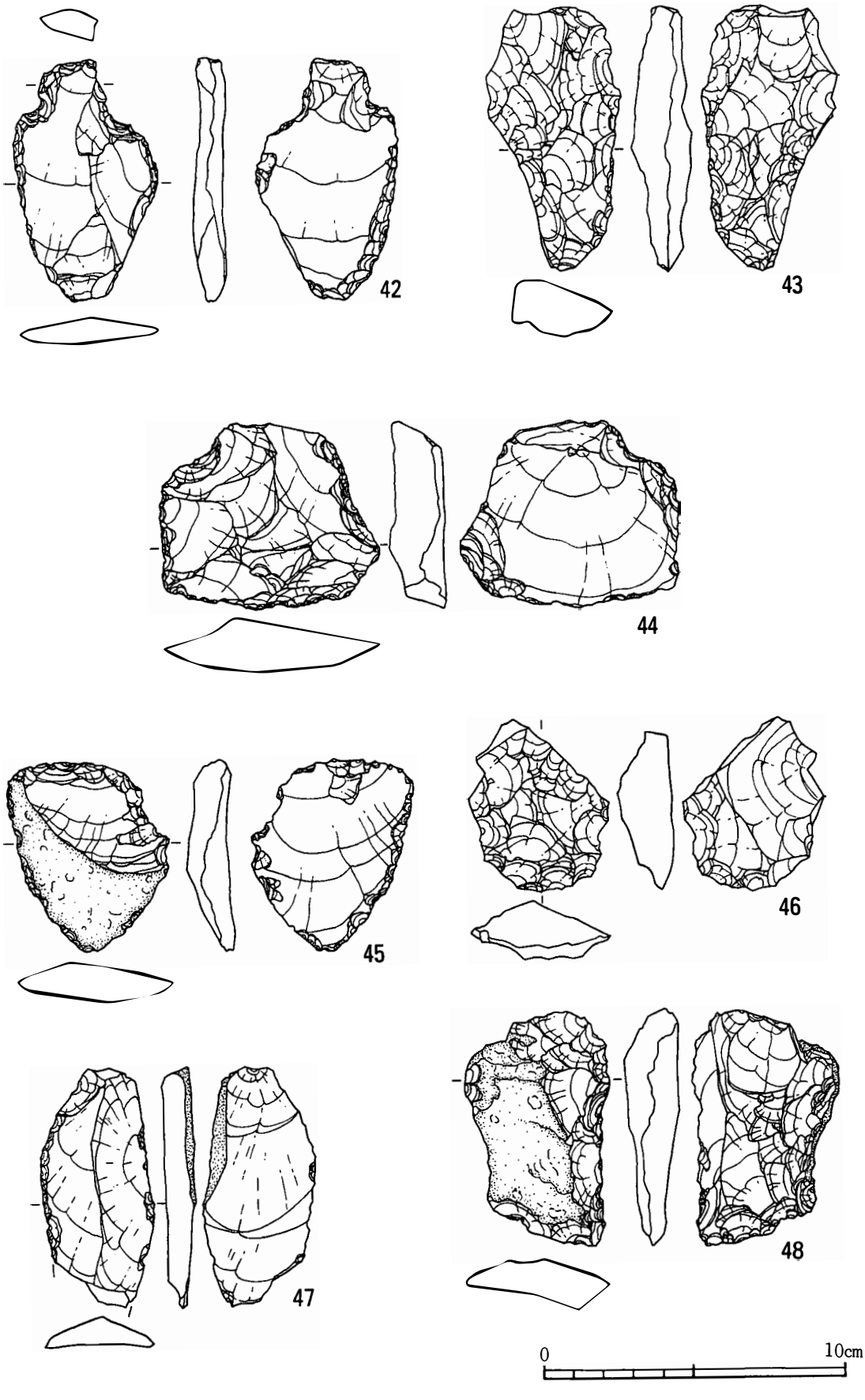
20点を掲載した。石材は凝灰岩が多く、砂岩がこれに次ぐ。形態は扁平な円盤状のもの（88、90～94、100、101、104、106、107)、卵状のもの（89、98、99、102、105)、棒状のもの（95～97)、その他不定型なもの（103）に分けられる。94、95、107は一部を欠損している。

楔形石器（第36図108～第37図125）

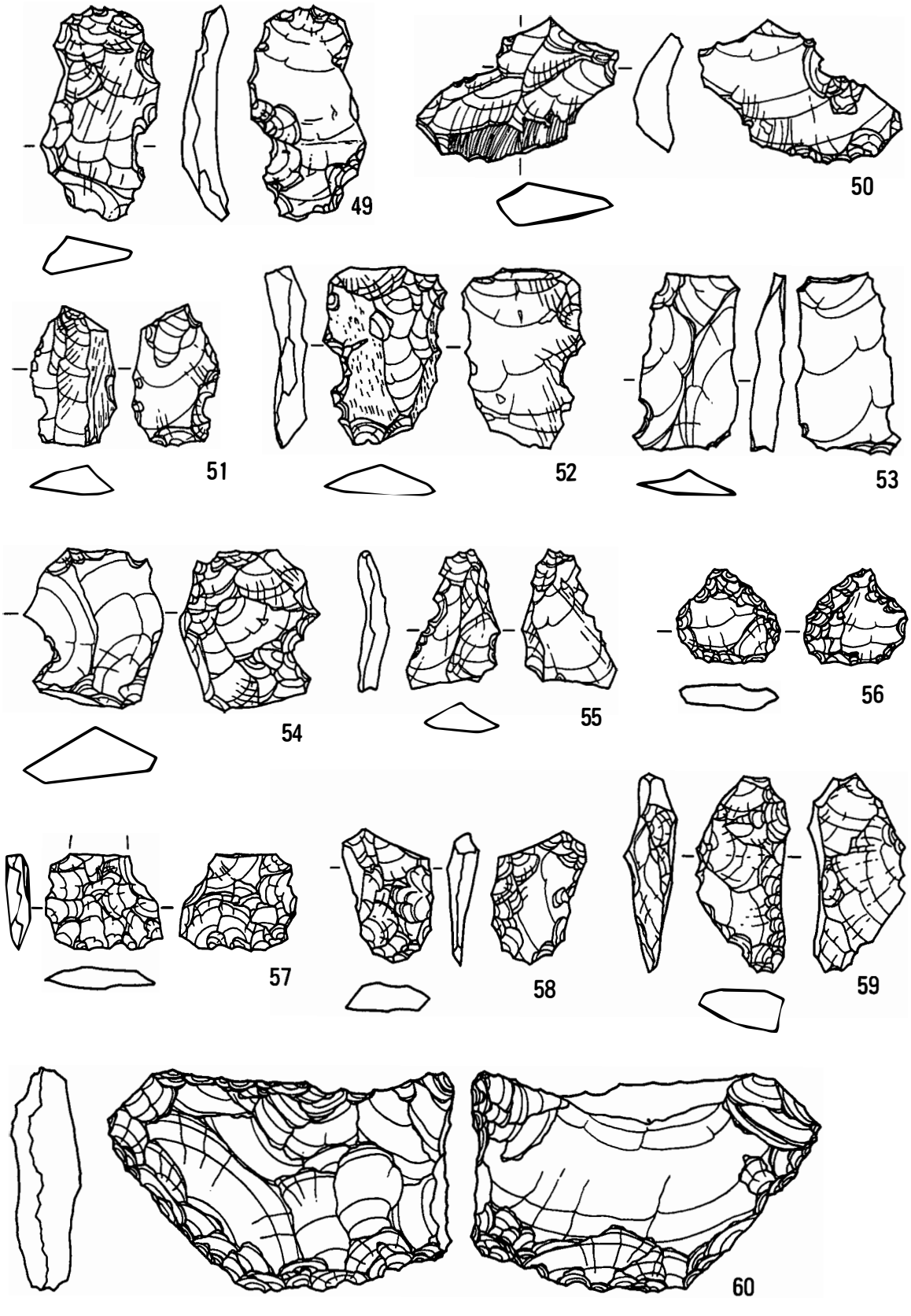
向かい合った２辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になる石器で、18点を掲載した。チャート製は１点のみ(119）で、残りはすべて黒曜石製である。上下両端に対向する剥離痕があるもの（108、109、111～113、



第25図　出土縄文石器 (3)



第26図　出土縄文石器 (4)



第27図　出土縄文石器 (5)

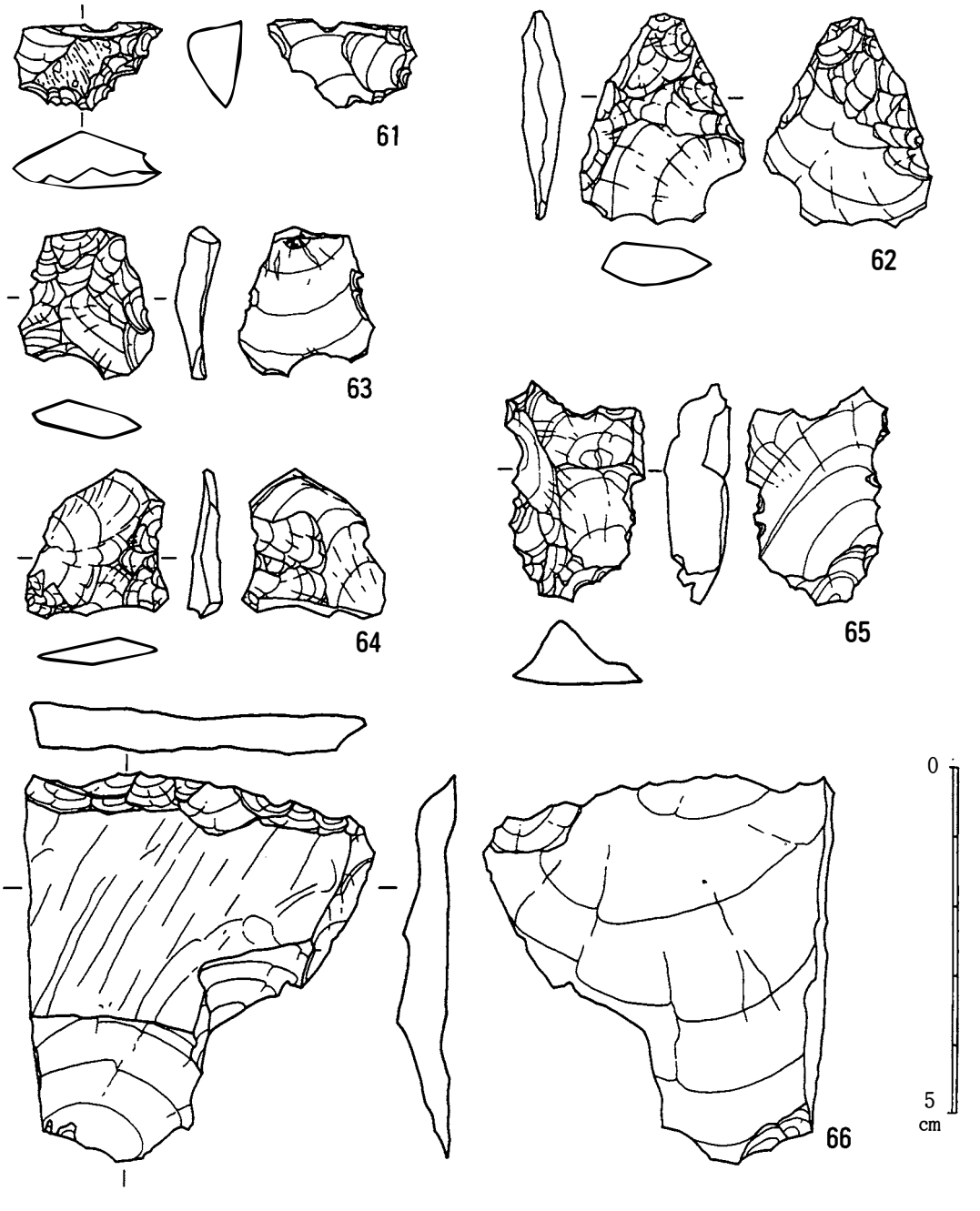
116、120、123～125)、両側縁に対向する剥離痕があるもの（115、117、118)、上下両端と両側縁に対向する剥離痕があるもの（110、114、119、121、122）に分けられる。108、118は下部、119～124は側縁の一部に折れ面がある。

使用痕のある剥片（第38図126～138）

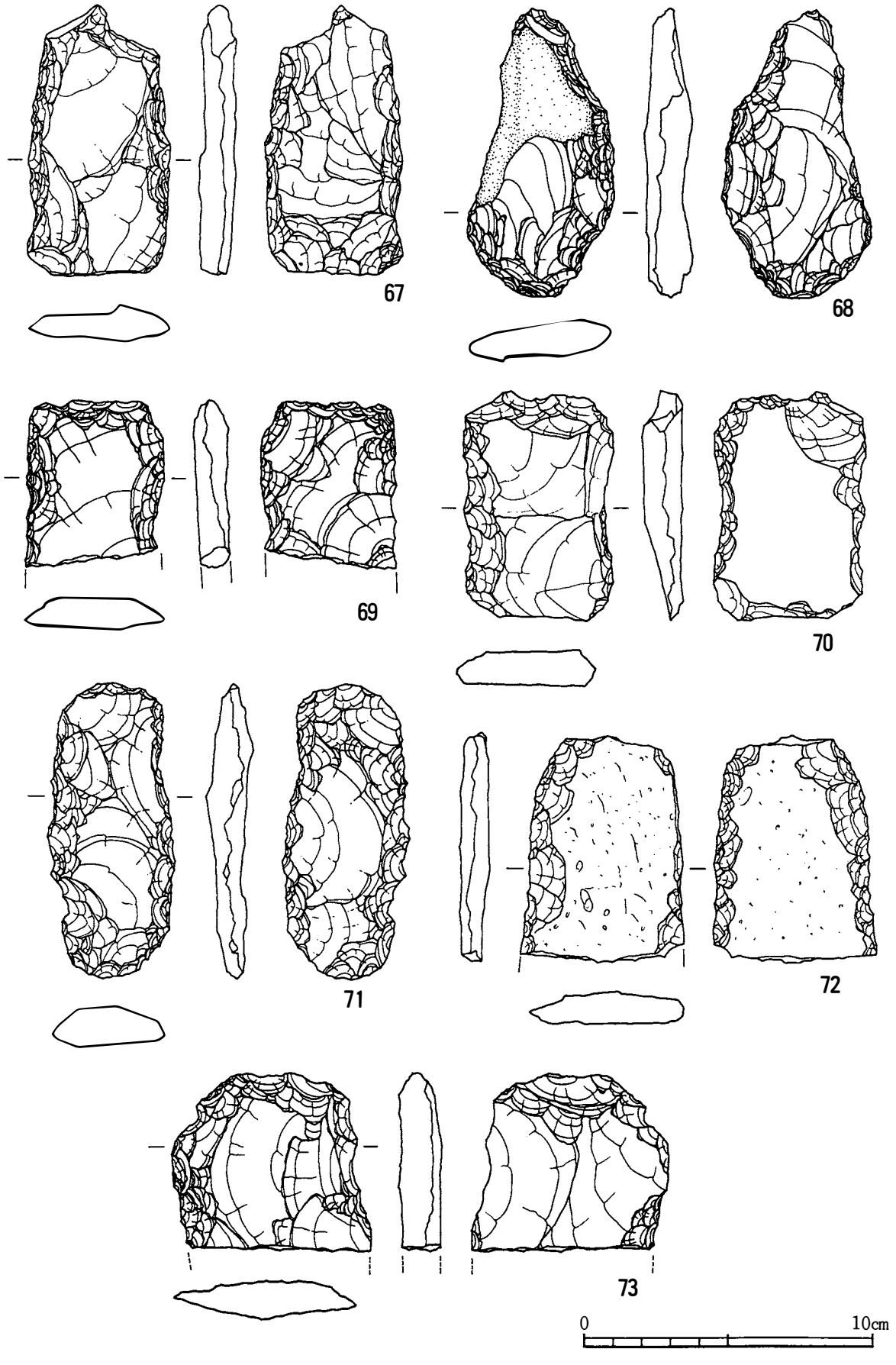
縁辺に刃こぼれ状の使用痕が残る剥片で、13点を掲載した。石材は127がチャート、138が安山岩で、残りは黒曜石である。両側縁がほぼ平行している刃器状剥片を使用しているもの（129、131、133、135）と、それ以外の不定形剥片を使用しているものの２つに分けることができる。

石核（第39図139～141）

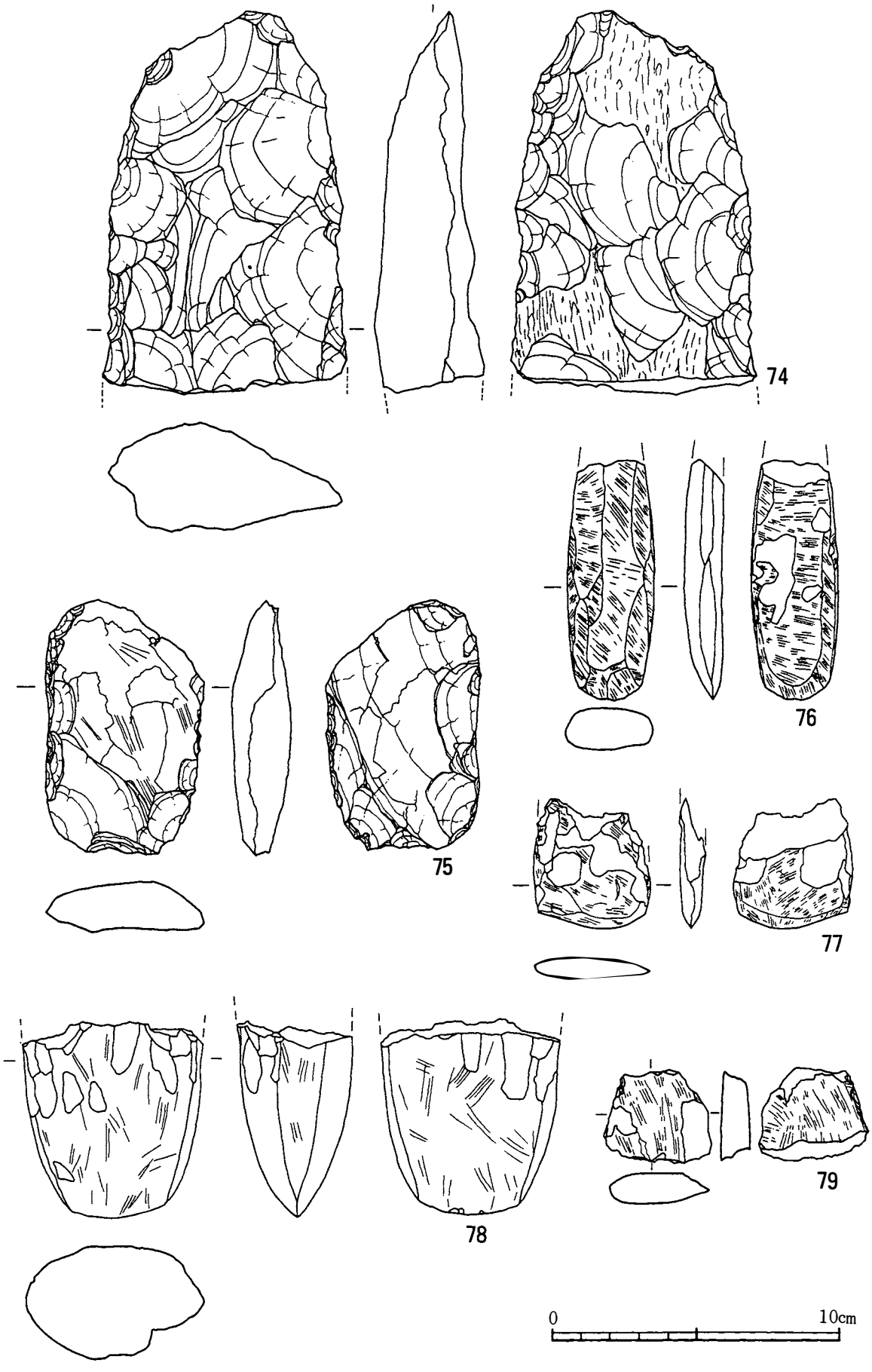
ここでは３点を掲載している。139は安山岩、140、141は黒曜石である。



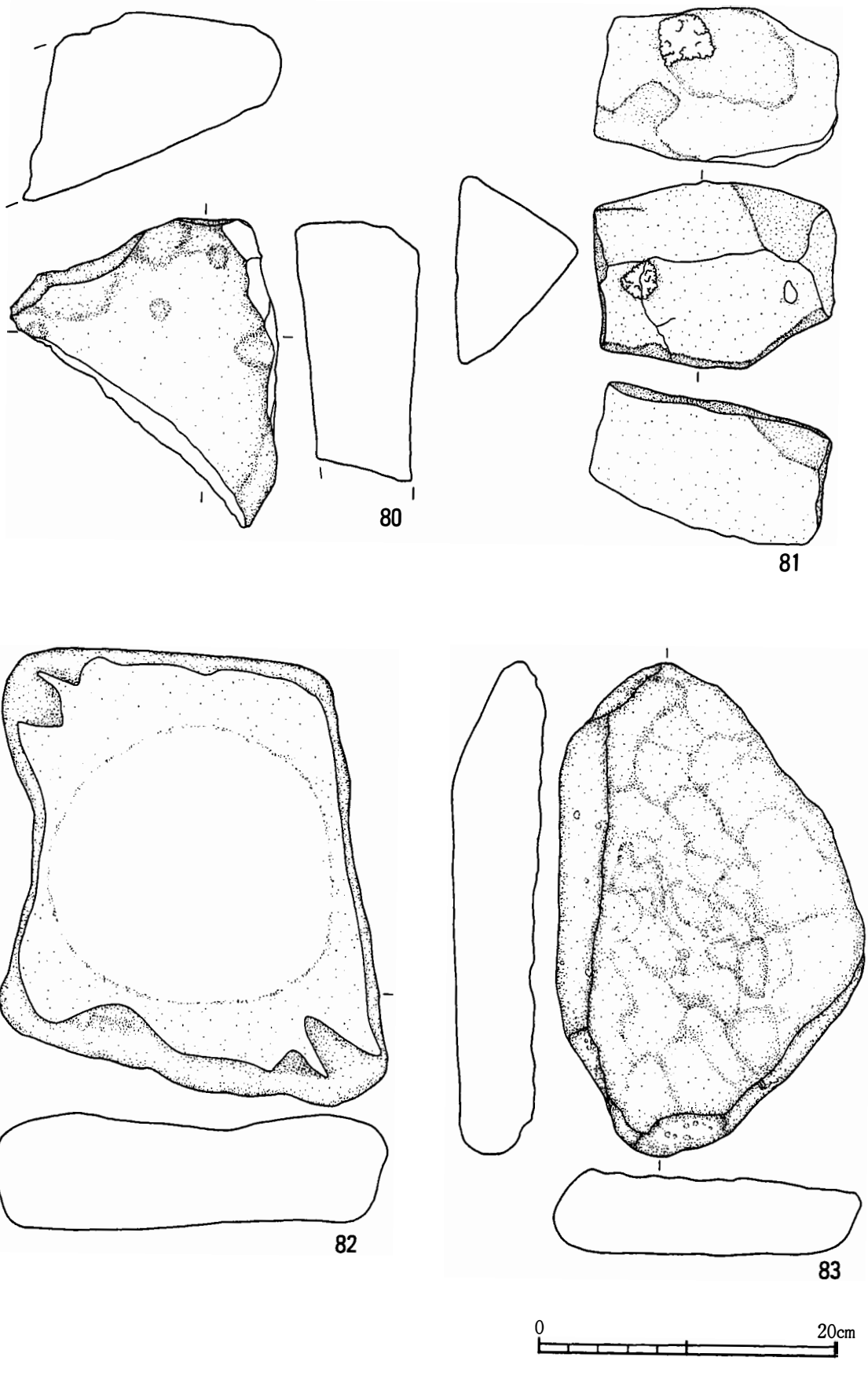
第28図　出土縄文石器 (6)



第29図　出土縄文石器（7）



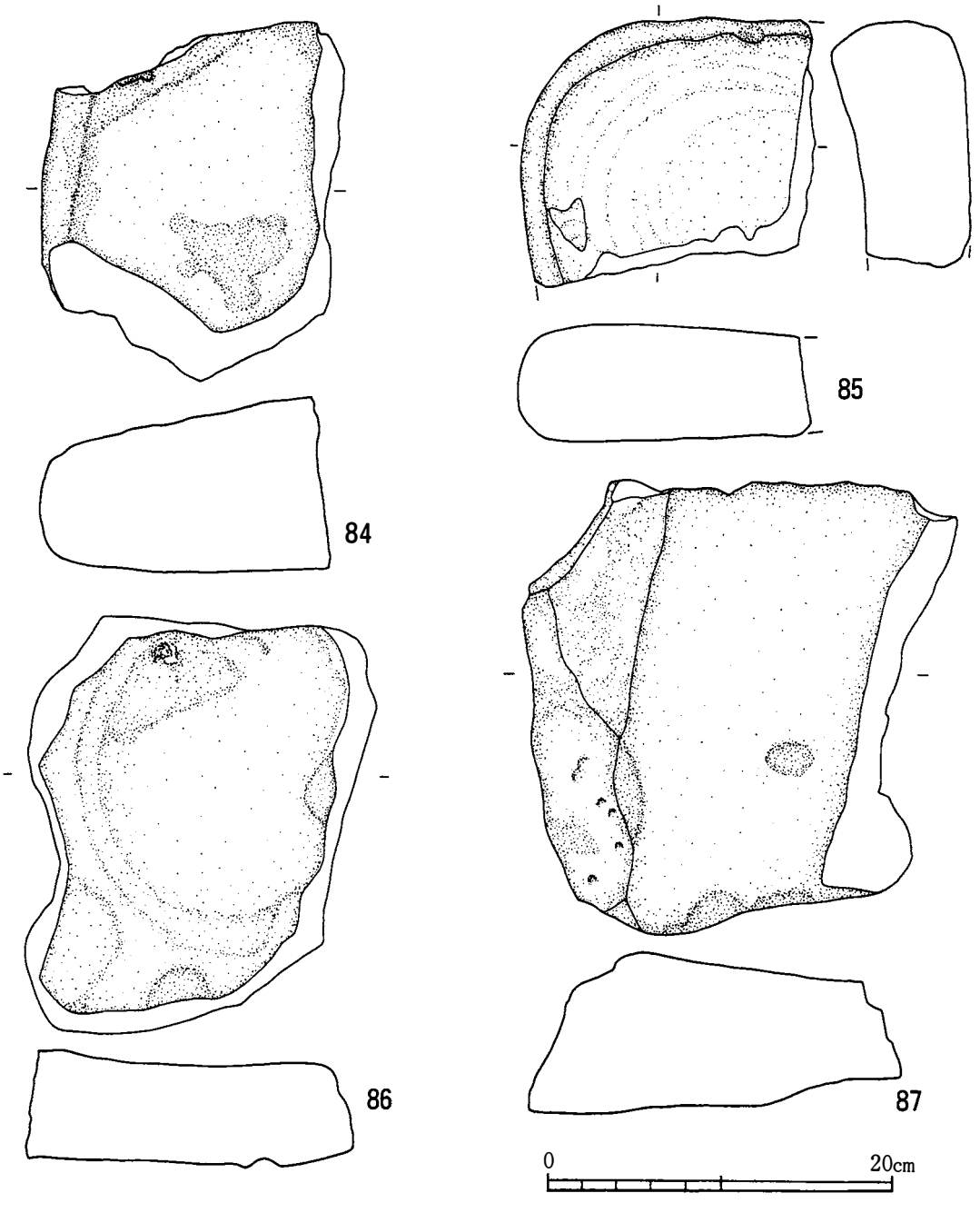
第30図　出土縄文石器 (8)



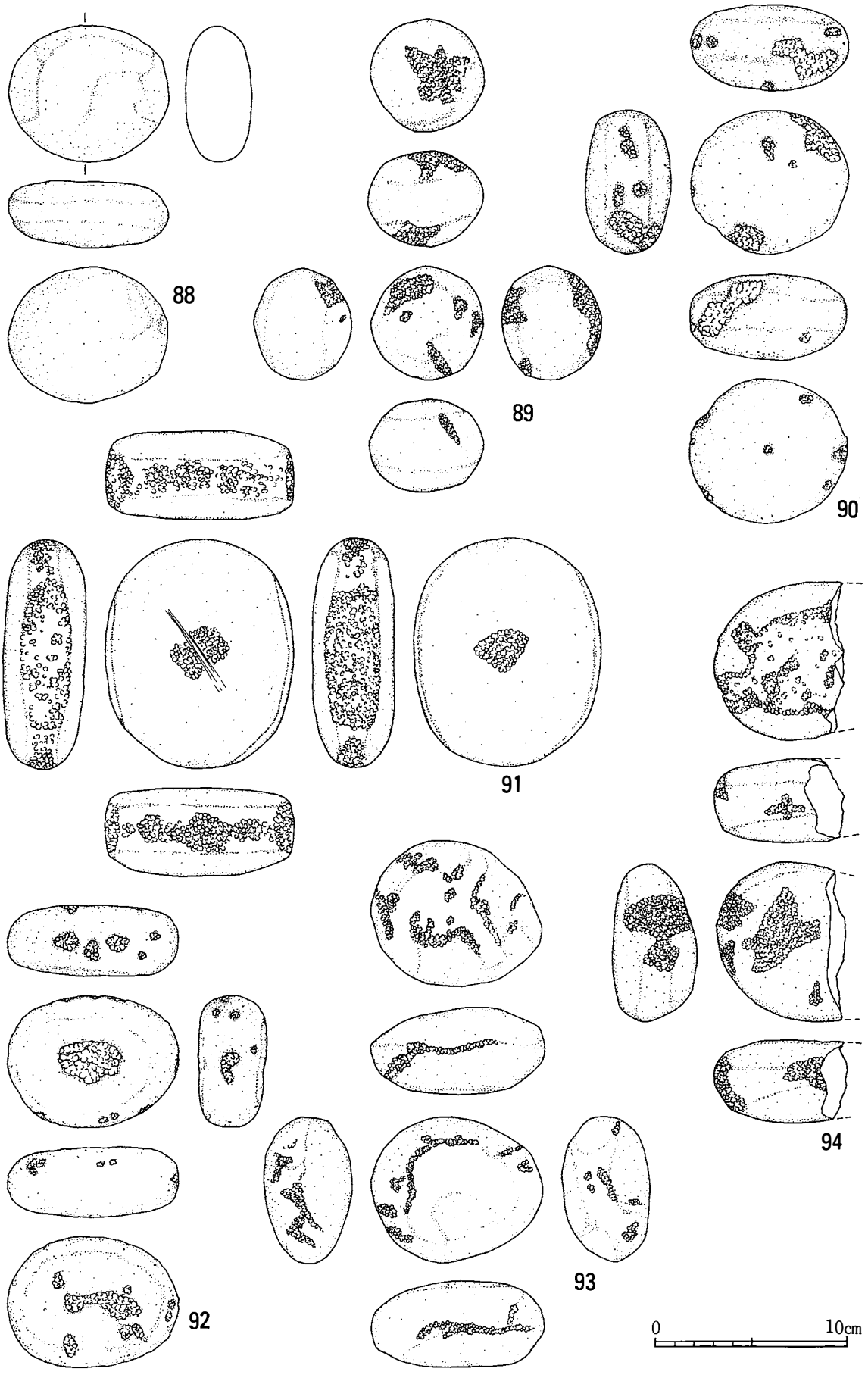
第31図　出土縄文石器 (9)

その他の石器（第39図142、143）

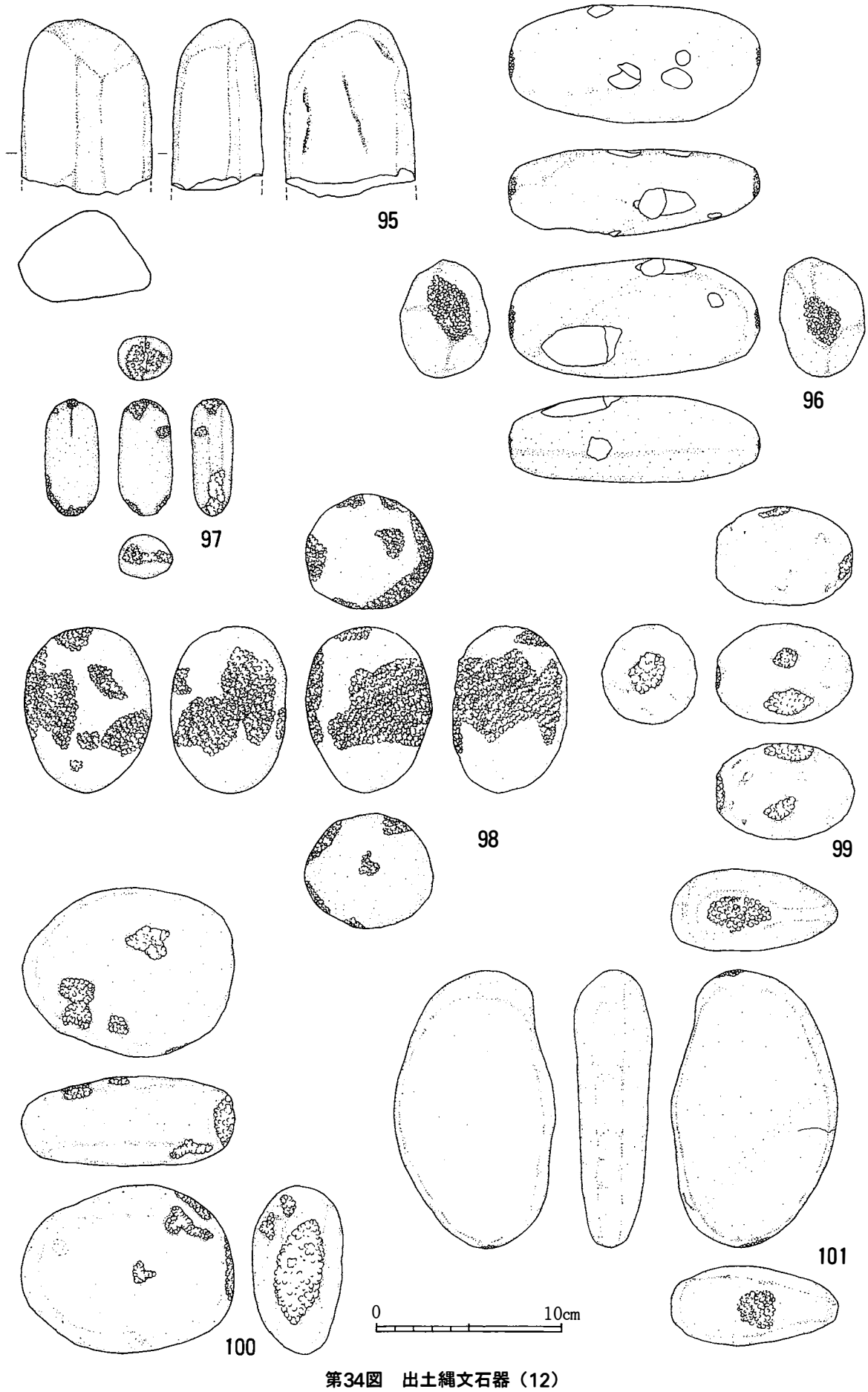
142は棒状の黒曜石の縁辺に調整を施した用途不明の石器である。下部を欠損しており、錐的な使われ方をした可能性がある。また、表面の一部に研磨痕、裏面には煤状のものが付着しており、装着に伴う痕跡である可能性がある。143は俗に「トロトロ石器」と称される石器である。チャート製で、先端部は丸く、脚部に角状の突起を持つ。



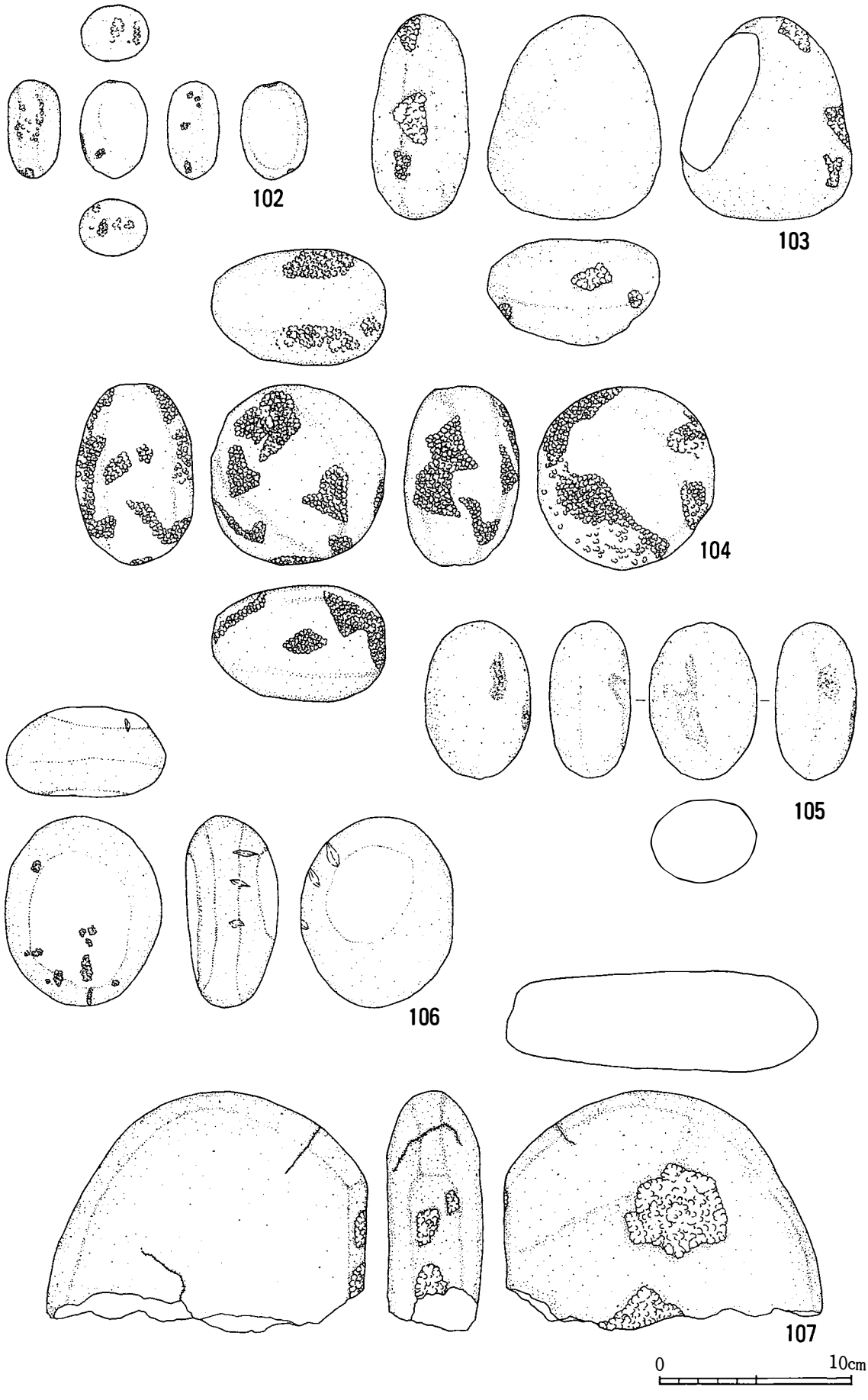
第32図　出土縄文石器（10）



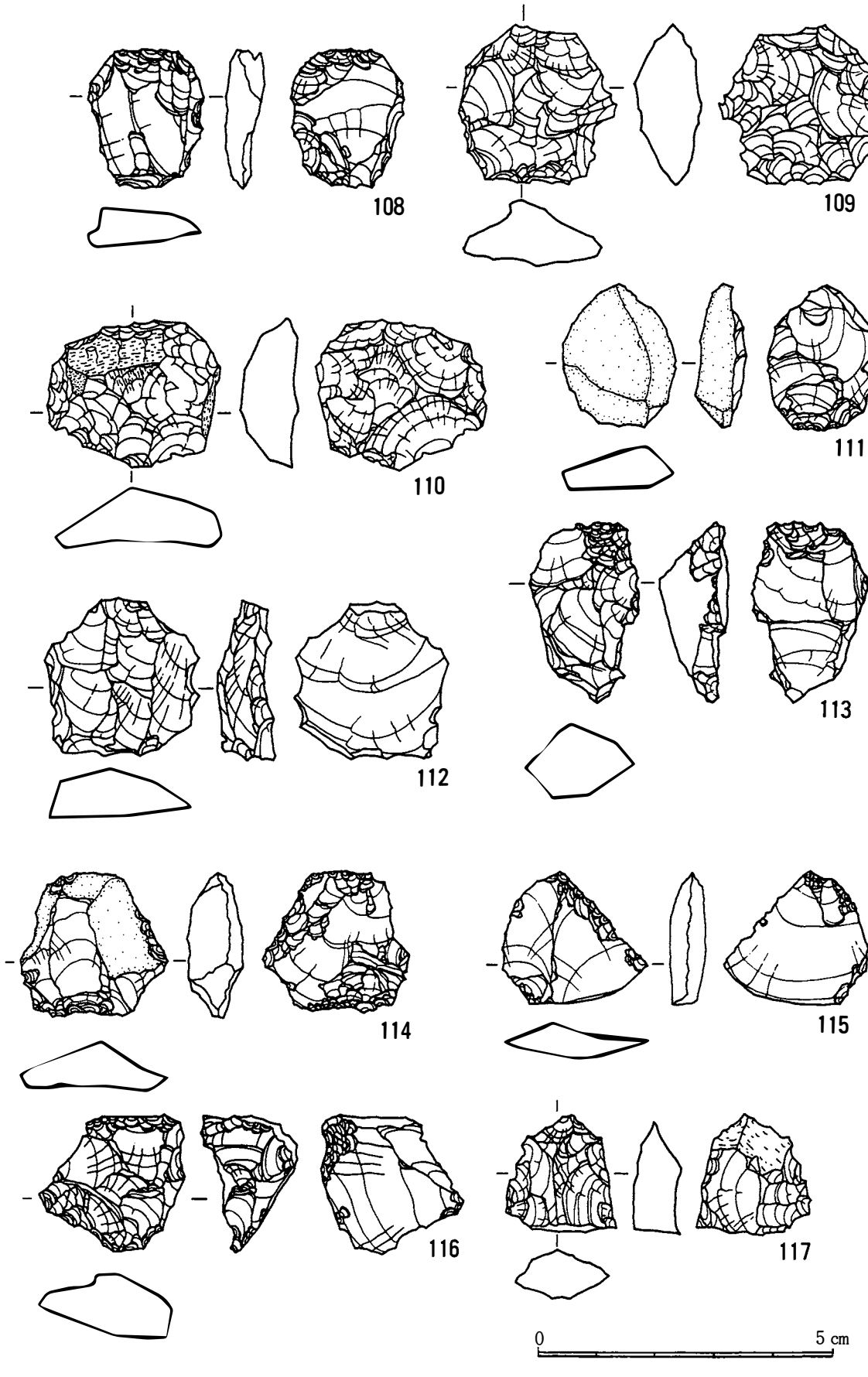
第33図　出土縄文石器（11）



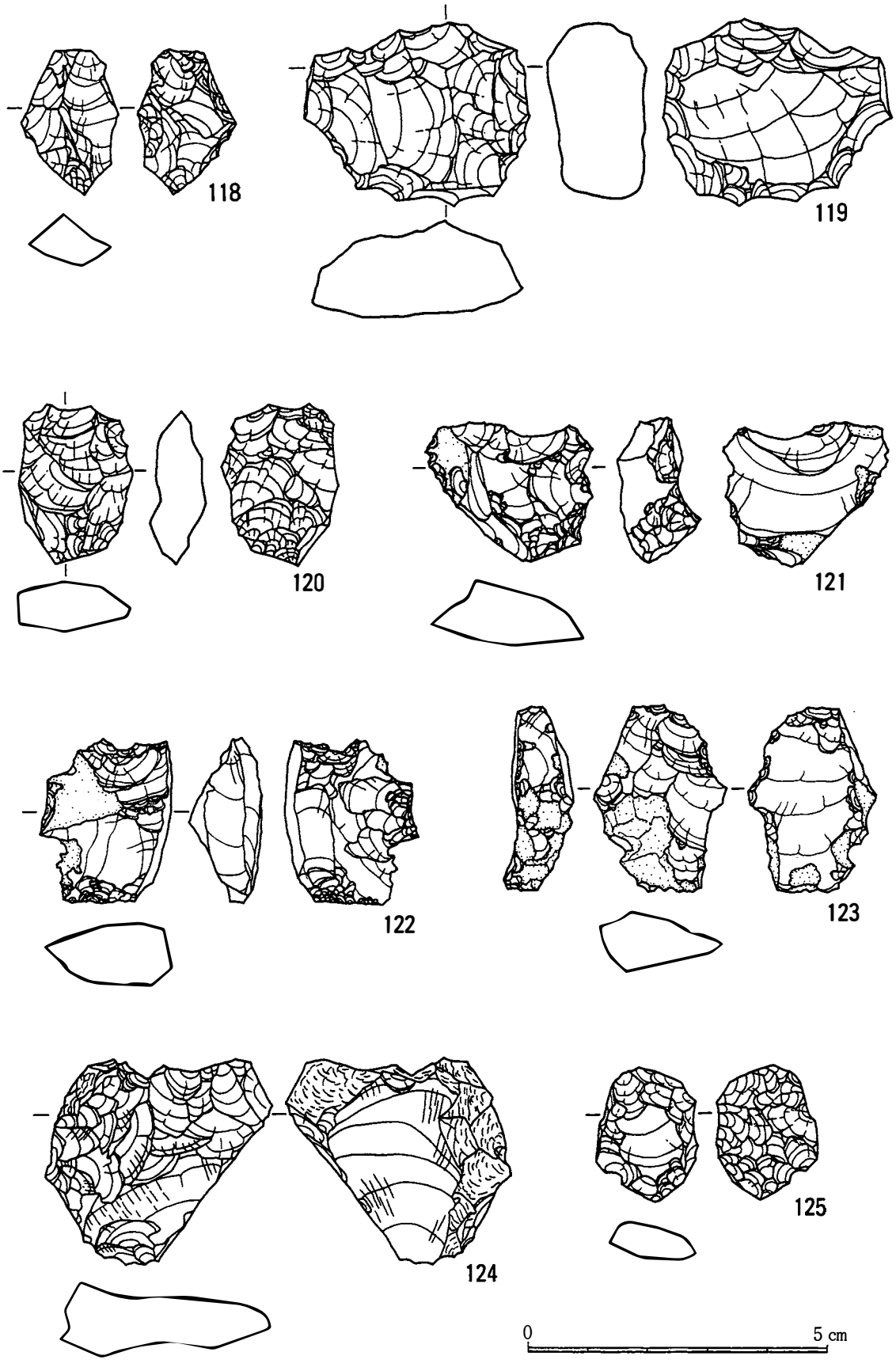
第34図　出土縄文石器（12）



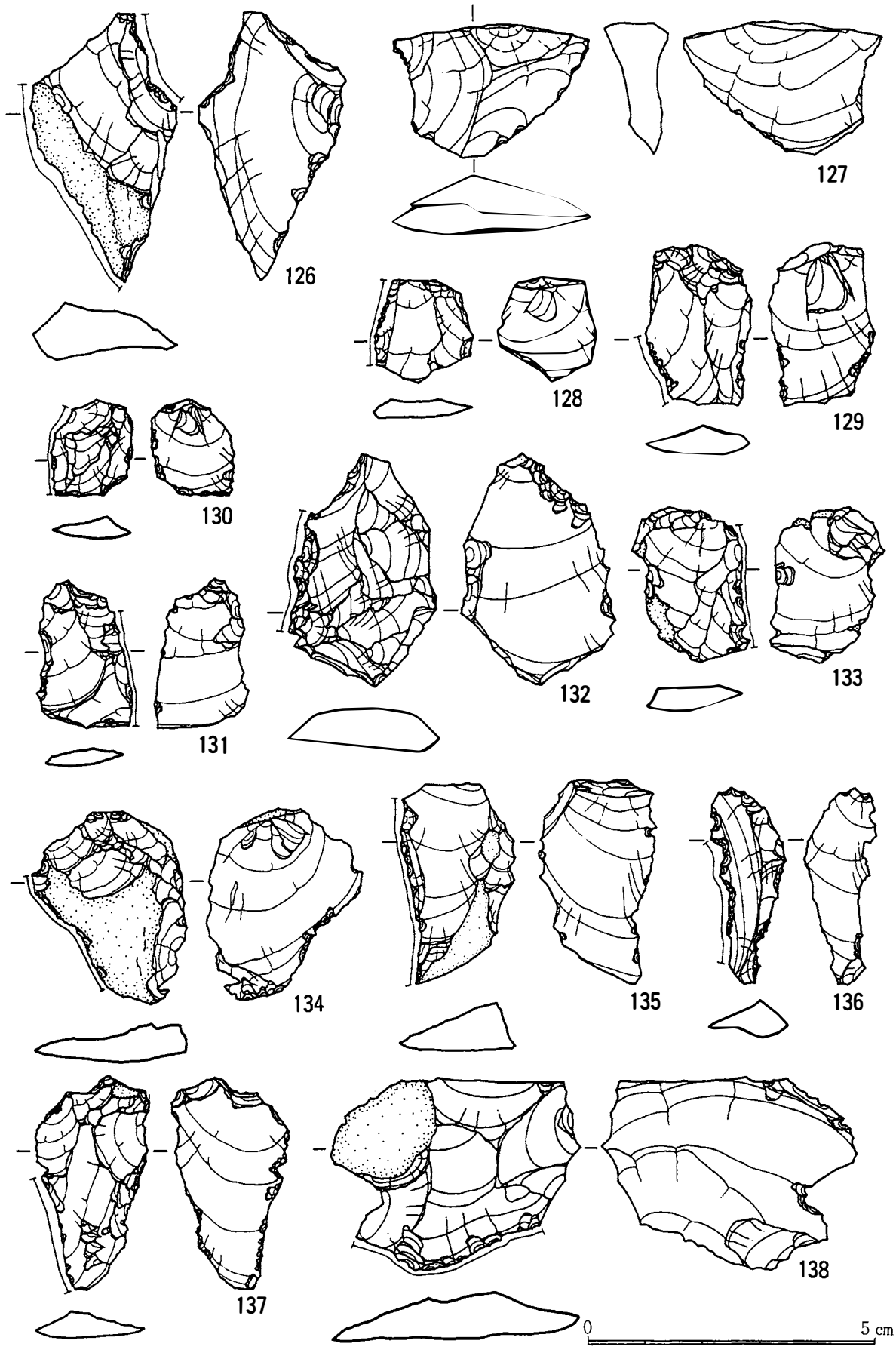
第35図　出土縄文石器（13）



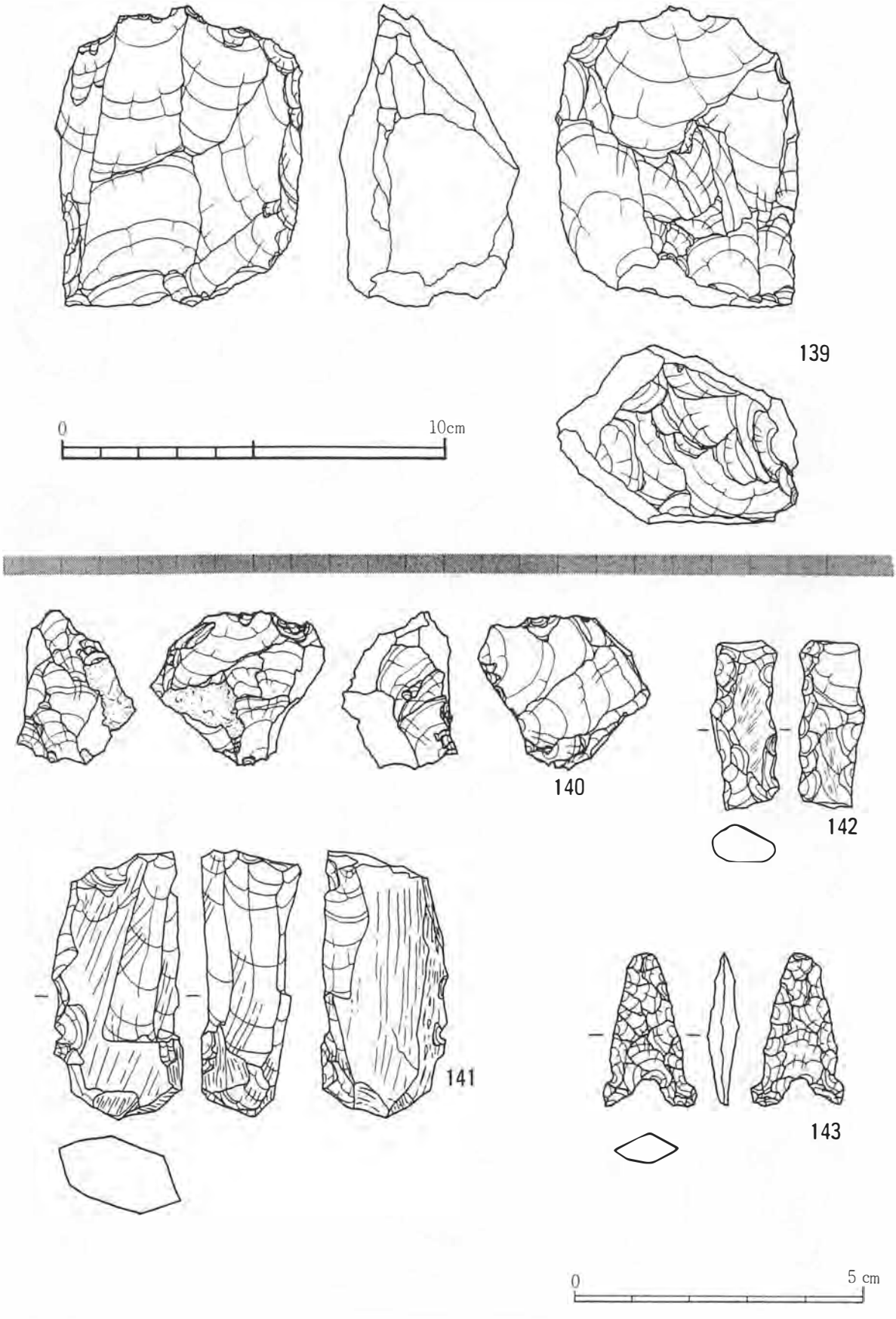
第36図　出土縄文石器（14）



第37図　出土縄文石器（15）



第38図　出土縄文石器（16）



第39図　出土縄文石器（17）

第6表　出土縄文石器観察表 (1)

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	調査区	出土地点	取上番号	備考
1	石鏃	黒曜石	2.5	1.3	0.3	0.9	Ⅶ	H-16	94迫D-6 14	
2	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.8	Ⅰ	C-12	Ⅰ区C-3 397	先端、下半の一部欠損
3	石鏃	安山岩	2.0	1.2	0.4	0.9	Ⅰ	B-11	Ⅰ区B-4 1528	先端部欠損
4	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.8	Ⅷ	G-20	94迫H-5	
5	石鏃	ﾁｬｰﾄ	2.3	1.4	0.3	0.6	Ⅴ	H-15	Ⅴ区H-0 2429	
6	石鏃	安山岩	1.7	1.9	0.3	1.1	Ⅰ	D-10	Ⅰ区D-5	上半部欠損
7	石鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.4	1.6	Ⅵ	4住	94迫4住上層	未成品
8	石鏃	安山岩	2.8	2.0	0.6	2.6	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2	上半の一部欠損
9	石鏃	黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.5	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 1487	上半部欠損
10	石鏃	ﾁｬｰﾄ	2.1	1.6	0.5	1.0	Ⅳ	C-1	Ⅳ区D-13 2209	
11	石鏃	安山岩	1.8	1.6	0.3	0.4	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 1931	
12	石鏃	安山岩	1.2	1.4	0.3	0.4	Ⅱ	B-5	Ⅱ区C-9	先端と脚の一部欠損
13	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.3	H6		94迫	
14	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.3	1.1	Ⅷ	5溝	94迫5溝	先端部欠損
15	石鏃	黒曜石	2.0	2.2	0.5	1.4	Ⅷ	G-20	94迫H-5	先端部欠損
16	石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.4	Ⅷ	G-22	94迫J-5上層	
17	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.6	Ⅱ		Ⅱ区	左脚欠損
18	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	0.9	Ⅴ		Ⅴ区	脚の一部欠損
19	石鏃	ﾁｬｰﾄ	3.4	1.9	0.5	1.3	Ⅷ	4溝	94迫4溝北側周辺	先端部欠損
20	石鏃	黒曜石	3.4	2.6	0.6	3.1	Ⅵ	4住	94迫4住上層	先端と脚の一部欠損
21	石鏃	黒曜石	2.5	1.7	0.6	1.6	Ⅷ	G-22	94迫J-5	
22	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.6	Ⅰ	C-11	Ⅰ区C-4 1482	先端部欠損
23	石鏃	安山岩	2.9	1.7	0.4	1.4	Ⅷ	G-21	94迫I-5	先端と脚の一部欠損
24	石鏃	安山岩	1.4	1.5	0.4	0.6	Ⅷ	14-17住	94迫14-17住上層	先端部欠損
25	石鏃	黒曜石	1.7	1.7	0.4	0.9	Ⅵ	4住	94迫4住上層	先端と脚部欠損
26	石鏃	黒曜石	1.3	0.9	0.2	0.2	Ⅱ		Ⅱ区	下半部欠損
27	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.3	1.1	Ⅶ		94迫Ⅱ区	先端部再生
28	石鏃	安山岩	2.3	1.3	0.4	1.2	Ⅰ	B-11	Ⅰ区B-4 1547	先端と脚部欠損
29	石錐	黒曜石	1.7	0.7	0.4	0.6	Ⅵ	3住	94迫3住南東上層	先端と基部欠損
30	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.7	1.6	Ⅲ		Ⅲ区排土	未成品
31	石錐	安山岩	3.4	1.8	0.8	3.7	Ⅰ	C-10	Ⅰ区C-5	縁辺に使用痕
32	石錐	黒曜石	2.9	1.7	0.9	3.0	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2 2030	
33	石錐	黒曜石	3.1	2.1	0.5	2.2	Ⅱ	A-5	Ⅱ区B-9	
34	石匙	黒曜石	2.5	3.4	1.0	6.1	Ⅰ	1溝	Ⅰ区1溝	未成品
35	石匙	黒曜石	3.4	1.8	0.7	4.1	Ⅶ		94迫Ⅱ区	未成品
36	削器	ﾁｬｰﾄ	3.8	2.6	0.4	4.9	Ⅰ	B-11	Ⅰ区B-4 1358	
37	削器	安山岩	2.5	2.8	0.7	5.5	Ⅳ	C-1	Ⅳ区D-13 2167	
38	削器	安山岩	3.3	4.7	0.8	9.5	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2	
39	削器	黒曜石	2.6	2.7	0.7	3.7	Ⅵ		94迫Ⅰ区	
40	削器	安山岩	4.3	1.3	0.7	3.8	H6		94迫	
41	削器	黒曜石	3.1	2.2	0.9	5.2	Ⅷ	H-20	94迫H-6	
42	石匙	安山岩	8.0	4.6	0.8	37.8	Ⅶ	H-17	94迫E-6	
43	削器	安山岩	8.9	4.3	1.9	65.5	Ⅷ	14-17住	94迫14-17住上層	
44	削器	安山岩	6.2	7.2	1.9	82.5	Ⅰ	1溝	Ⅰ区1溝	
45	削器	安山岩	6.3	5.4	1.4	39.2	Ⅶ	1溝	94迫1溝上層	
46	削器	安山岩	4.7	4.6	1.8	38.2	H6		94迫表土	
47	削器	安山岩	8.0	3.8	1.1	29.2	Ⅷ	11住	94迫11住上層	先端部欠損
48	削器	安山岩	7.8	4.3	1.8	52.0	Ⅰ	D-11	Ⅰ区D-4	
49	抉入石器	黒曜石	3.5	1.7	0.7	3.9	Ⅰ	C-12	Ⅰ区C-3 1813	
50	抉入石器	黒曜石	2.4	2.6	0.7	3.4	Ⅰ	D-10	Ⅰ区D-5	
51	抉入石器	黒曜石	2.3	1.4	0.5	1.6	Ⅷ		94迫Ⅲ区	
52	抉入石器	黒曜石	2.9	1.9	0.6	3.5	Ⅰ	C-10	Ⅰ区C-5 561	
53	抉入石器	黒曜石	2.8	1.7	0.4	2.0	Ⅵ	4住	94迫4住上層	
54	抉入石器	黒曜石	2.6	2.3	0.8	5.2	Ⅰ	C-10	Ⅰ区C-5	
55	抉入石器	黒曜石	2.2	1.5	0.4	1.2	Ⅷ	G-21	94迫I-5	
56	二次加工	黒曜石	1.5	1.6	0.4	1.0	Ⅷ	H-21	94迫I-6	
57	二次加工	黒曜石	1.6	1.9	0.4	1.2	Ⅰ	C-12	Ⅰ区C-3 1801	
58	二次加工	黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.4	Ⅷ		94迫Ⅲ区	
59	二次加工	黒曜石	3.2	1.4	0.6	3.7	Ⅰ	1溝	Ⅰ区1溝	
60	二次加工	粘板岩	3.6	5.8	1.0	23.6	Ⅰ	B-12	Ⅰ区B-3 1355	
61	二次加工	黒曜石	1.1	2.0	0.8	1.8	Ⅰ	D-12	Ⅰ区D-3 1788	
62	二次加工	ﾁｬｰﾄ	3.0	2.3	0.6	3.6	Ⅱ	A-6	Ⅱ区B-8	
63	二次加工	黒曜石	2.1	1.9	0.5	1.8	Ⅰ	C-13	Ⅰ区C-2	
64	二次加工	黒曜石	2.1	2.0	0.5	1.8	Ⅰ	D-11	Ⅰ区D-4 1429	
65	二次加工	黒曜石	3.1	2.0	0.9	4.3	Ⅷ	5溝	94迫5溝上層	
66	二次加工	粘板岩	5.5	5.1	0.7	19.8	Ⅰ	D-12	Ⅰ区D-3 1734	
67	打製石斧	砂岩	9.3	4.9	1.2	67.5	Ⅷ	14-17住	94迫14-17住上層	
68	打製石斧	砂岩	9.9	4.9	1.5	73.0	Ⅴ		Ⅴ区ｺﾞﾎﾞｳ穴撹乱	
69	打製石斧	砂岩	5.8	4.7	1.2	47.2	Ⅳ		Ⅳ区	下半部欠損
70	打製石斧	砂岩	7.9	5.2	1.4	69.5	Ⅷ	4溝	94迫4溝	
71	打製石斧	砂岩	10.1	4.3	1.4	67.0	Ⅳ	C-1	Ⅳ区D-13 2159	
72	打製石斧	安山岩	7.8	5.5	1.1	71.0	Ⅷ	H-21	94迫I-6	下半部欠損

第７表　出土縄文石器観察表 (2)

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	調査区	出土地点	取上番号	備考
73	打製石斧	砂岩	6.1	6.8	1.4	75.0	I	C-10	Ⅰ区C-5 108	下半部欠損
74	打製石斧	砂岩	12.4	8.3	3.6	430.0	H3		表採	下半部欠損
75	打製石斧	片岩	8.9	6.0	2.0	101.7	Ⅷ	8住	94迫8住 3	未成品
76	磨製石斧	蛇紋岩	8.3	3.0	1.3	62.5	V		Ⅴ区撹乱	基部欠損
77	磨製石斧	蛇紋岩	3.5	4.1	0.9	22.6	Ⅷ	H-21	94迫I-6	上部欠損
78	磨製石斧	砂岩	6.8	6.3	4.0	218.9	Ⅷ	9住	94迫9住 3	上部欠損
79	磨製石斧	蛇紋岩	3.0	3.7	1.0	14.4	I	C-13	Ⅰ区C-2	下部欠損
80	石皿	砂岩	18.0	20.6	10.3	3790.0	I	C-11	Ⅰ区C-4 370	
81	石皿	砂岩	17.2	12.5	10.6	1750.0	I	D-12	Ⅰ区D-3溝状	
82	石皿	砂岩	26.2	30.4	8.0	12100.0	Ⅶ	H-17	94迫E-6	
83	石皿	凝灰岩	20.5	28.0	6.4	6160.0	V	H-15	Ⅴ区H-0	
84	石皿	凝灰岩	17.3	20.1	11.4	4580.0	Ⅷ	7住	94迫7住	
85	石皿	凝灰岩	17.0	15.5	7.8	3020.0	Ⅷ	19住	94迫19住 3	
86	石皿	凝灰岩	20.2	24.1	7.5	5980.0	Ⅷ	8住	94迫8住	
87	石皿	凝灰岩	25.1	26.2	12.0	8280.0	Ⅶ	6住	94迫6住 7	
88	磨石・敲石	凝灰岩	5.2	7.0	3.9	231.0	Ⅱ	A-5	Ⅱ区B-9 6	
89	磨石・敲石	砂岩	5.9	5.8	5.2	202.2	Ⅷ	1掘立	94迫1掘立 P-7	
90	磨石・敲石	凝灰岩	8.2	7.4	4.4	331.8	I	1溝	Ⅰ区1溝	
91	磨石・敲石	凝灰岩	11.8	9.8	4.5	940.0	Ⅶ	H-15	94迫C-6 3	
92	磨石・敲石	凝灰岩	8.9	6.8	3.6	263.5	I	C-12	Ⅰ区C-3 449	
93	磨石・敲石	凝灰岩	9.0	7.7	4.5	407.8	Ⅷ	9住	94迫9住 45	
94	磨石・敲石	凝灰岩	7.7	8.3	4.4	339.4	Ⅷ	G-20	94迫H-5 8	
95	磨石・敲石	凝灰岩	9.2	7.0	4.8	403.6	Ⅷ	G-22	94迫J-5 11	
96	磨石・敲石	砂岩	13.2	6.2	4.8	553.1	Ⅷ	18住	94迫18住 7	
97	磨石・敲石	砂岩	6.1	2.8	2.3	56.5	I	D-12	Ⅰ区D-3 1745	
98	磨石・敲石	砂岩	8.7	6.9	6.0	487.1	Ⅷ	15住	94迫15住 8	
99	磨石・敲石	凝灰岩	7.3	5.2	5.0	216.7	V	H-15	Ⅴ区H-0 2342	
100	磨石・敲石	凝灰岩	11.3	8.9	4.7	640.0	I	C-12	Ⅰ区C-3 1004	
101	磨石・敲石	凝灰岩	14.5	8.8	4.3	700.0	Ⅶ	H-15	94迫C-6 6	
102	磨石・敲石	凝灰岩	5.0	3.5	2.9	59.9	Ⅷ	18住	94迫18住 9	
103	磨石・敲石	凝灰岩	10.4	9.0	5.3	554.1	I	C-10	Ⅰ区C-5 866	
104	磨石・敲石	凝灰岩	9.2	9.1	6.0	700.0	Ⅶ	5住	94迫5住上層	
105	磨石・敲石	凝灰岩	8.0	5.5	4.2	263.2	I	C-9	Ⅰ区C-6 1856	
106	磨石・敲石	砂岩	10.7	7.0	4.8	516.0	Ⅷ	9住	94迫9住 1	
107	磨石・敲石	砂岩	12.3	16.6	5.0	1540.0	I	C-12	Ⅰ区C-3 1884	
108	楔形石器	黒曜石	2.3	1.4	0.6	2.7	I	C-12	Ⅰ区C-3 467	上下面剥離痕、下部折損
109	楔形石器	黒曜石	2.6	2.7	1.0	6.6	I	B-11	Ⅰ区B-4 1599	上下面剥離痕
110	楔形石器	黒曜石	2.5	2.9	1.0	7.3	I	C-11	Ⅰ区C-4 83	上下、両側縁剥離痕
111	楔形石器	黒曜石	2.4	1.9	0.8	3.4	Ⅷ	G-22	94迫J-5上層	上下面剥離痕
112	楔形石器	黒曜石	2.7	2.6	0.9	6.8	I	C-12	Ⅰ区C-3 1981	上下面剥離痕
113	楔形石器	黒曜石	3.0	1.8	1.2	5.1	Ⅶ	G-16	94迫D-5	上下面剥離痕
114	楔形石器	黒曜石	2.3	2.5	0.9	4.3	Ⅶ	5住	94迫5住上層	上下、両側縁剥離痕
115	楔形石器	黒曜石	2.1	2.4	0.6	2.4	I		Ⅰ区2, 3土杭	両側縁剥離痕
116	楔形石器	黒曜石	2.3	2.4	1.1	5.3	I	C-12	Ⅰ区C-3 1804	上下面剥離痕
117	楔形石器	黒曜石	2.0	1.9	0.8	2.5	I	D-12	Ⅰ区D-3 1770	両側縁剥離痕、下部折損
118	楔形石器	黒曜石	2.3	1.5	0.8	2.1	I	C-12	Ⅰ区C-3 6土坑	両側縁剥離痕
119	楔形石器	ﾁｬｰﾄ	3.1	3.7	1.6	21.8	I	D-12	Ⅰ区D-3溝状	上下、両側縁剥離痕、一部折損
120	楔形石器	黒曜石	2.6	1.9	0.8	4.1	Ⅱ	A-5	Ⅱ区B-9	上下面剥離痕、右側縁折損
121	楔形石器	黒曜石	2.3	2.8	1.2	5.8	Ⅵ	D-18	94迫F-2	上下、両側縁剥離痕、一部折損
122	楔形石器	黒曜石	2.7	2.1	1.2	6.0	Ⅵ	1住	94迫1住上層	上下、両側縁剥離痕、右側縁折損
123	楔形石器	黒曜石	3.0	2.2	1.0	5.7	Ⅷ	4溝	94迫4溝	上下面剥離痕、左側縁折損
124	楔形石器	黒曜石	3.3	3.4	1.1	12.6	I	1溝	Ⅰ区1溝	上下面剥離痕、左側縁折損
125	楔形石器	黒曜石	2.2	1.7	0.6	2.2	Ⅷ	H-22	94迫J-6	上下面剥離痕
126	使用痕	安山岩	4.6	2.5	1.1	8.1	I	C-9	Ⅰ区C-6 1896	左縁辺に使用痕
127	使用痕	ﾁｬｰﾄ	2.3	3.4	0.9	4.9	I	C-12	Ⅰ区C-3 526	縁辺に使用痕
128	使用痕	黒曜石	1.7	1.8	0.4	0.9	Ⅵ		94迫Ⅰ区	右縁辺に使用痕
129	使用痕	黒曜石	2.8	1.8	0.6	2.8	I	C-11	Ⅰ区C-4 970	左縁辺に使用痕
130	使用痕	黒曜石	1.6	1.4	0.4	1.0	Ⅷ	H-22	94迫J-6	縁辺に使用痕
131	使用痕	黒曜石	2.5	1.6	0.4	1.2	Ⅵ	4住	94迫4住南東上層	左縁辺に使用痕
132	使用痕	黒曜石	4.0	2.6	0.7	5.9	Ⅷ		94迫Ⅲ区	縁辺に使用痕
133	使用痕	黒曜石	2.6	1.9	0.5	2.6	Ⅶ		94迫Ⅱ区	右縁辺に使用痕
134	使用痕	黒曜石	3.3	2.6	0.7	4.3	Ⅷ	H-22	94迫J-6 40	左縁辺に使用痕
135	使用痕	黒曜石	3.5	2.0	1.1	4.3	Ⅷ	H-20	94迫H-6	左縁辺に使用痕
136	使用痕	黒曜石	3.4	1.2	0.6	1.1	Ⅷ	G-22	94迫J-5	縁辺に使用痕
137	使用痕	黒曜石	3.7	1.9	0.5	2.4	Ⅶ		94迫Ⅱ区	左縁辺に使用痕
138	使用痕	安山岩	3.3	4.4	0.8	10.8	I	C-11	Ⅰ区C-4 917	左縁辺に使用痕
139	石核	安山岩				242.6	V	H-15	Ⅴ区H-0 2358	
140	石核	黒曜石				11.4	H6		94迫	
141	石核	黒曜石				19.6	I		Ⅰ区1溝	
142	不明石器	黒曜石	2.9	1.1	0.6	2.5	I	B-11	Ⅰ区B-4 1383	下部欠損
143	ﾄﾛﾄﾛ石器	ﾁｬｰﾄ	2.6	1.6	0.5	1.5	Ⅷ	8住	94迫8住上層	

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

平成６年度調査において、18基の竪穴住居跡が確認された。内訳は、Ⅵ区が４基、Ⅶ区が２基、Ⅷ区が12基である。いずれの住居跡からも、土師器あるいは須恵器が出土したことから、古墳時代の住居跡と考えられる。このうち、Ⅷ区から内部にかまどを持った住居跡が５基確認された。それぞれの住居跡の詳しい内容については、以下のとおりである。

なお、出土した土師器および須恵器については、主要なものを図化して、住居跡ごとに掲載し、個別の計測値および観察結果については「住居跡出土土器観察表」（第８表）にまとめた。

Ⅵ区１号住居跡（第40図）

Ⅵ区南東部、Ｅ－13・14グリッドで確認された。東側の一部分は削平により消滅して全容は不明であるが、長軸540cm、短軸の残存部410cm、深さ約40cmを測り、方形になると考えられる。主軸の方位はＮ－13°－Ｅである。埋土はさらさらした黒褐色土に少量の炭とロームのブロックを含む。北西部と南西部にはそれぞれベッド状の高まりが見られるが、あまりはっきりとはしない。土坑Pit１、Pit２に柱の痕跡があり、長軸方向に並ぶ２本柱であると思われる。また、中央部西寄りの土坑Pit３からは焼土が検出されており、炉の跡ではないかと思われる。

出土したのはすべて土師器で、このうち、実測可能な９点を掲載した。１と２は壺または甕の口縁部と考えられる破片である。共に頸部で屈曲して外傾するが、１は口唇近くでわずかに内彎する。また、２は内面に指頭痕を残す。３は小型の丸底壺である。器壁は厚く、口縁は外反気味に開く。４は脚付の鉢である。最大径は胴部上半にあり、外反する口縁を持つ。５は坏の上部である。内外面とも研磨され、口縁がわずかに内彎している。６、７、８はいずれも高坏の破片である。６と８は下半部の破片で、裾部は屈曲して外側に開く。７は脚柱部の破片である。９は脚付鉢の脚部と思われる。

Ⅵ区２号住居跡（第41図）

Ⅳ区南側、Ｄ・Ｅ－15グリッドで確認された。長辺440cm、短辺340cm、深さ40cmの方形で、主軸の方位はＮ－63°－Ｗである。埋土は細かくさらさらした黒褐色土で、ニガ土のブロック少量と焼土およびカーボン粒をわずかに含む。土坑Pit１、Pit２に柱の痕跡があり、長軸方向に並ぶ２本柱であると思われる。また、南側隅にベッド状の高まりがある。壁際には壁の補強跡と見られる小坑が並んでいる。炉跡や貯蔵穴と思われる掘り込みは確認できなかった。なお、Pit１の横の硬化面下より柱穴状の土坑Pit３が確認された。このことから、はじめ柱穴としてPit３が掘られたが、何らかの理由で埋められ、改めてPit１が掘られたものと考えることができる。

出土土器はすべて土師器で、このうち、実測可能なものは１点であった。10は小型丸底の鉢型土器で、口縁はわずかに内彎している。また、体部径に比べて口径が大きく、口縁部の高さは体部の高さより大きい。

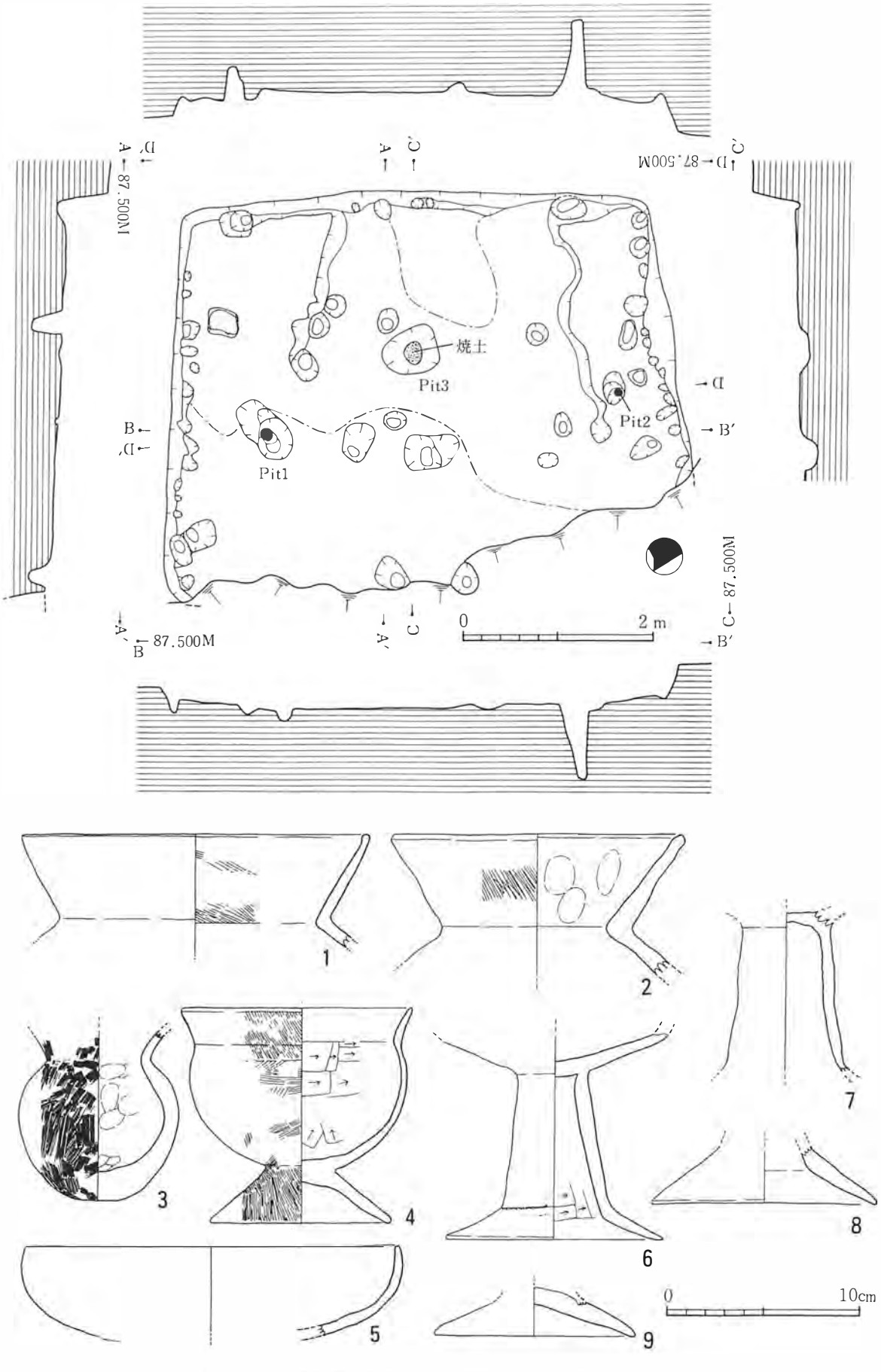
Ⅵ区３号住居跡（第42図）

Ⅳ区北側のＤ－17・18グリッドで確認された。南東隅を後世の土坑に切られ、東側は調査区外になり、全容は不明であるが、南北軸440cm、東西軸の残存部370cm、深さ約50cmの方形と思われる住居跡である。主軸の方位はＮ－69°－Ｗである。埋土は少ししまりのある黄褐色土である。柱穴は位置関係や形状から土坑Pit１、Pit２の２本柱と考えられ、Pit１の底には厚さ２～３cmの粘土が見られた。中央部北寄りにある土坑Pit３周辺からは焼土が検出されており炉跡の可能性がある。また、北側壁際の袋状に掘り込まれた土坑Pit４は貯蔵穴の可能性がある。東南部隅にはベッド状の高まりが見られる。

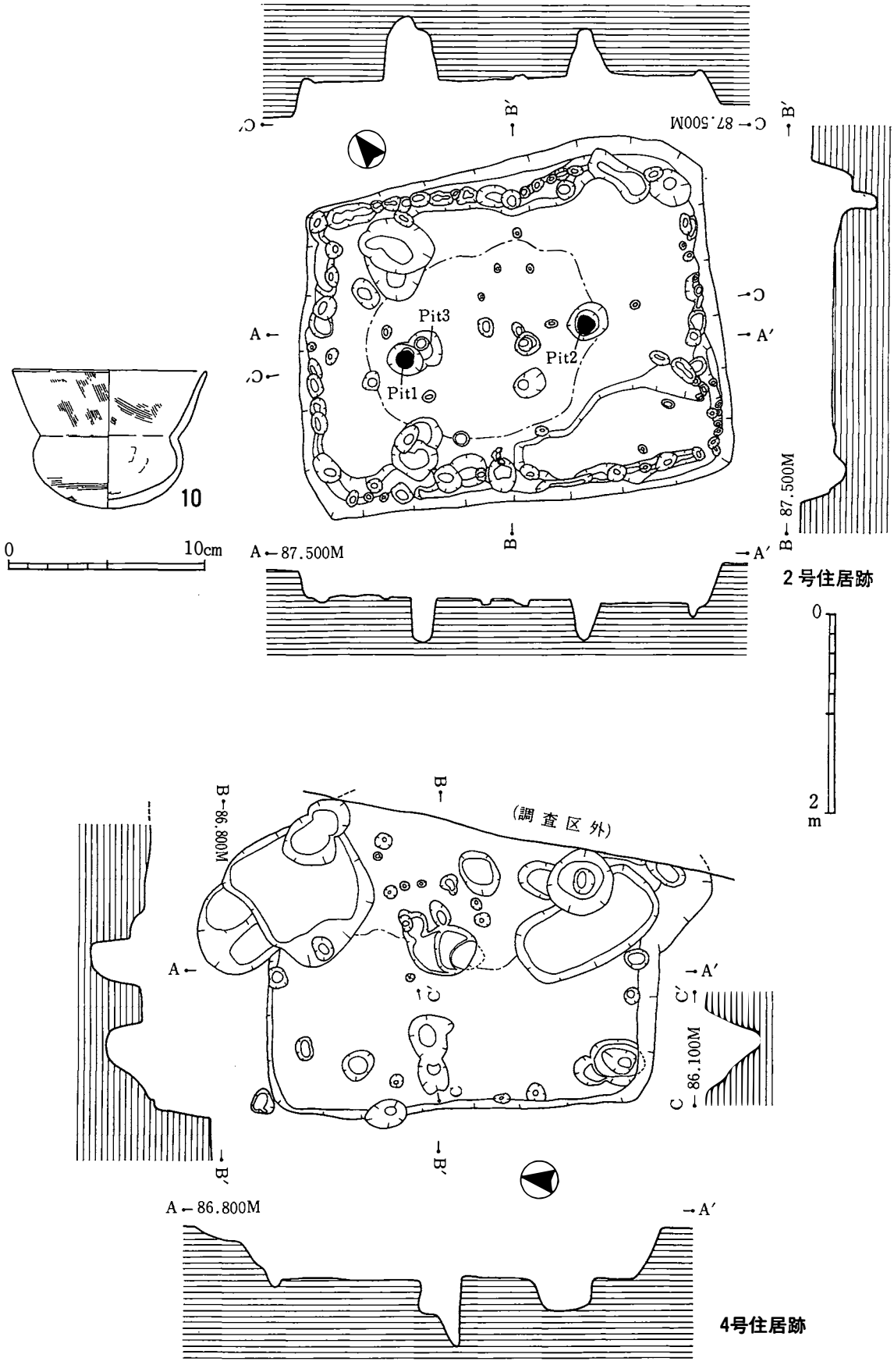
出土土器はすべて土師器で、このうち、実測可能な５点を掲載した。11は壺である。底部を失っているが、丸底と思われる。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、最大径を胴部中央に持ち、口縁部は途中で屈曲して立ち上がっている。12は甕である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整、丸底で最大径を胴部中央に持ち、口縁部は外反する。13～15は高坏の坏部の破片である。13は坏部中位の接合面で　屈曲、外傾して立ち上がる。15も13に似た器形であるが、屈曲部外面に段を有している。14は碗型の坏部で、外面に段を持つ。他に砥石が１点（第61図５）出土している。

第８表　住居跡出土土器観察表

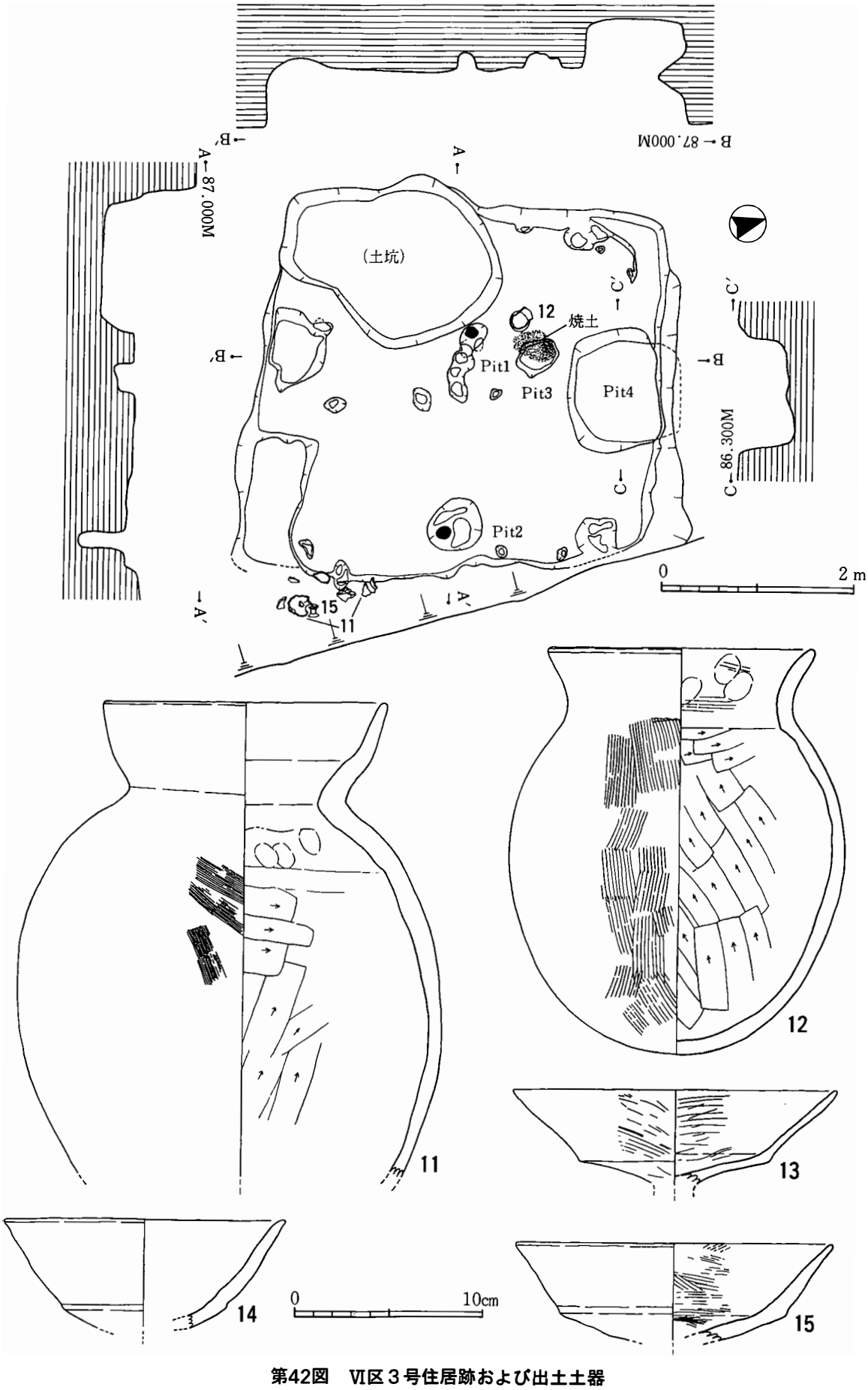
住居跡	遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	現存高(cm)	調整（内面）	調整（外面）	色調（内面）	色調（外面）	胎土	焼成	取上番号	備考
1住	1	壺	18.2		5.9	ナデ、ハケ目	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	1住床直 9	
1住	2	壺	15.4		7.2	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	1住床直 7	
1住	3	小型壺			8.8	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ目	黒褐(2.5Y3/1)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	1住床直北西	
1住	4	脚付鉢	12.1	9.4	11.1	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目	明黄褐(10YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	1住床直 16	
1住	5	坏	20.0		4.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐(2.5YR5/6)	橙(2.5YR6/6)	砂粒微量	良好	1住北西上層	
1住	6	高坏		11.4	10.6	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒微量、石英、長石を含む	良好	1住上層	
1住	7	高坏				ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	1住床直 1	
1住	8	高坏		11.8	3.0	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	1住北東上層	
1住	9	器台		10.6	2.5	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、長石を含む	良好	1住上層	
2住	10	小型壺	9.8		6.9	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	2住南東上層	
3住	11	壺	15.0		24.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	浅黄橙(10YR8/4)	黄橙(10YR8/6)	小石、粗砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	3住 18,22	
3住	12	壺	14.0		21.1	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	小石、粗砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	3住 10	
3住	13	高坏	16.8		4.8	ナデ	ナデ、ﾐｶｷ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	3住 8	
3住	14	高坏	14.8		5.7	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	3住南東上層	
3住	15	高坏	16.4		5.1	ハケ目後ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	3住 20	
5住	16	壺	19.0		17.3	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	灰黄(2.5Y7/2)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	5住 28	
5住	17	壺	16.8		24.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	浅黄橙(7.5YR8/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	5住 21,24	
5住	18	壺	16.6		31.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	褐灰(10YR5/1)	浅黄橙(7.5YR8/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	5住 5,80	
5住	19	壺	16.2		3.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒微量、角閃石、長石を含む	良好	5住床直 4	
5住	20	壺	12.0		5.0	ハケ目	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	5住 49	
5住	21	壺	15.2		4.1	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	5住 32	
5住	22	小型壺			3.3	ナデ	ハケ目	褐灰(10YR4/1)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	5住上層	
5住	23	鉢	17.2		10.7	ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	5住 9,25	
5住	24	高坏				ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR7/4)	小石、砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	5住南東上層	
5住	25	高坏				ハケ目後ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	5住 54	
5住	26	高坏				ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	にぶ赤褐(5YR5/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	5住北東上層	
6住	27	壺	14.4		5.3	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	小石、砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住上層	
6住	28	鉢	12.0		9.7	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ褐(7.5YR5/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住 8	
6住	29	鉢	14.2		7.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住上層	
6住	30	小型壺	11.2		7.8	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	黒(2.5Y2/1)	浅黄橙(2.5Y7/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住上層	
6住	31	坏	14.4		5.7	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目	明褐(7.5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	6住 18	
6住	32	高坏		14.0	2.1	ナデ	ナデ	にぶ赤橙(10R6/4)	にぶ赤橙(10R6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住 21,24	図面朱塗
6住	33	高坏				ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	6住 3	
8住	34	壺				ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ褐(7.5YR5/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒少量、石英、長石を含む	良好	8住ﾋﾄﾞ 18	
8住	35	高坏	17.4	13.0	13.9	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ、ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR7/3)	橙(7.5YR7/6)	小石、砂粒少量、石英、長石を含む	良好	8住ﾋﾄﾞ 22	
8住	36	坏	13.6		4.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	砂粒微量、長石を含む	良好	8住 12	
8住	37	須恵坏	10.9		3.9	回転ナデ、しぼり痕	回転ナデ、回転ケズリ、しぼり痕、ヘラ記号	灰(7.5Y4/1)	灰(7.5Y4/1)	砂粒微量	良好	8住上層	
9住	38	壺	18.2		11.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	9住 18,19	
9住	39	須恵壺	12.8		3.8	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	砂粒微量、長石を含む	良好	9住ﾋﾄﾞ 1	斑点状の自然釉
9住	40	甕	14.6		4.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙(2.5Y4/3)	ｵﾘｰﾌﾞ 褐(2.5Y4/3)	砂粒微量、長石を含む	良好	9住上層	
9住	41	鉢	14.6		6.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	褐灰(5YR4/1)	にぶ橙(5YR6/4)	砂粒多量、石英、長石を含む	不良	9住 40	
10住	42	壺			5.4	ナデ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、長石を含む	良好	10住P-2	
12住	43	壺	18.4		11.2	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(7.5YR8/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	12住土坑	
12住	44	壺	18.8		3.5	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	12住上層	
12住	45	鉢	10.8		9.8	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	にぶ黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	12住床直 17	
12住	46	壺				ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	12住床直 2	
12住	47	小型壺				ナデ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	12住床直 1	
12住	48	壺			3.7	ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	暗灰黄(2.5Y4/2)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	12住床直 7	
13住	49	坏	13.8		4.7	ナデ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	13住 2	
13住	50	高坏	19.0		7.0	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	13住 1	
13住	51	高坏				ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	13住 4	
14-18住	52	壺	16.5		9.2	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	18住 8	
14-18住	53	壺	18.8		5.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	褐灰(7.5YR4/1)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	14-17住上層	
14-18住	54	壺	14.7		8.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	15住 7	
14-18住	55	壺	16.4		6.1	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、タタキ	明黄褐(10YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	14-17住上層	
14-18住	56	小型壺			8.6	ナデ、ヘラケズリ、指頭痕	ハケ目	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	15住 6	
14-18住	57	甕	18.8		5.6	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	18住上層	
14-18住	58	坏	12.6		4.0	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ褐(7.5YR5/4)	砂粒微量、長石、角閃石、雲母を含む	良好	15住 1	
14-16住	59	須恵坏			2.8	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	にぶ黄(2.5Y6/3)	にぶ黄(2.5Y6/3)	砂粒多量、石英、長石を含む	良好	18住上層	
14-19住	60	高坏	16.2		5.7	ナデ	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	14-17住上層	
14-18住	61	高坏	18.8		6.3	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	14-17住上層	
14-18住	62	高坏				ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	15住 5	
14-18住	63	高坏				ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(7.5YR8/6)	砂粒多量、角閃石、長石を含む	良好	14-17住上層	
19住	64	須恵坏	11.7		4.1	回転ナデ	ナデ、ヘラケズリ	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	砂粒少量、長石を含む	良好	19住床直 5	
19住	65	須恵坏	11.9		4.3	ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ	ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ	灰ｵﾘｰﾌﾞ (5Y6/2)	灰白(7.5Y8/1)	小石、砂粒少量、長石を含む	良好	19住床直 4	
19住	66	須恵壺	15.1		5.5	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、カキメ、沈線	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	19住床直 1	
19住	67	壺	17.8		31.7	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケ目	にぶ褐(7.5YR5/4)	橙(5YR7/8)	砂粒少量、長石を含む	良好	19住床直 9	



第40図　Ⅵ区１号住居跡および出土土器



第41図　Ⅵ区２号、４号住居跡および２号住居跡出土土器



第42図　Ⅵ区３号住居跡および出土土器

Ⅵ区４号住居跡（第41図）

Ⅳ区北側、Ｄ－18グリッドで確認された。後世の土坑による切り合いが激しく、また、東側が調査区外になり、全容は不明であるが、南北軸400cm、東西軸の残存部290cm、深さ約50cmの方形と思われる住居跡である。主軸の方位はＮ－83°－Ｅである。埋土はさらさらした黒褐色土である。２本柱と推定され、位置関係からPit１が柱穴ではないかと思われるが、もう１つの柱穴は確認できなかった。出土土器は小片が多く、復原できるものはなかったが、砥石が１点（第61図６）出土している。

Ⅶ区５号住居跡（第44図）

Ⅶ区北側、Ｆ・Ｇ－17グリッドで確認された。北西部は削平により消滅しているが、長辺920cm、短辺850cm、深さ40cmを測る台形状の大型住居である。主軸の方位はＮ－65°－Ｗで、埋土はさらさらしたしまりのない黒褐色土である。柱穴と思われる土坑はPit１、Pit２、Pit３、Pit４またはPit５で、４本柱ではないかと考えられる。また、Pit６、Pit７、Pit８から、焼土とカーボンを多量に含んだ埋土が検出され、炉は３基あったものと推定される。南側中央部壁際のPit９は中から壺が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。南西部隅にはベッド状の高まりが見られる。また、東側中央部には50×40cmほどの高まりがあり、上面は硬化面で、回りを小土坑が囲む形になっている。形状から住居の入り口に伴う何らかの施設の跡ではないかと考えられる。

出土したのはすべて土師器で、このうち、実測可能な11点を掲載した（第43図）。16と17は甕である。ともに外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、最大径を胴部中央やや上に持つ。口縁は16が直口なのに対して、17はわずかに外反する。18は丸底の壺である。直口口縁、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、最大径を胴部中央に持つ。19～21は甕または壺の口縁部である。20はやや厚めの直口口縁、19と21は内彎気味の口縁を持つ。22は小型丸底壺の底部である。23は鉢型土器である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、口縁は内彎している。また、体部径に比べて口径が大きく、口縁部の高さは体部の高さとほぼ同じである。24～26は高坏の脚部の破片である。

Ⅶ区６号住居跡（第45図）

Ⅶ区北側、Ｇ・Ｈ－16・17グリッドで確認された。一辺約360cmで、南東側が少し外に張り出す方形の住居跡である。主軸の方位はＮ－69°－Ｅである。埋土はややしまりを持つ黒褐色土で、カーボン粒をわずかに含む。柱痕は確認できなかったが、位置関係や形状から土坑Pit１、Pit２の２本柱と考えられる。焼土の集中は２か所に確認できた。中央部の焼土の下からは土坑Pit３が検出され、炉跡になる可能性があるが、焼土はそれほどはっきりとした形で層をなしてはいなかった。また、南側の焼土は薄く、下から掘り込みは確認できなかった。壁際には小坑が並ぶが、壁の補強跡の可能性がある。

出土土器はすべて土師器で、このうち、実測可能な７点を掲載した。27は甕または壺の口縁部で、外反気味の口縁を持つ。28～30は鉢型土器である。28と29は体部径と口径はほぼ同じで、口縁部の高さは体部の高さより小さい。口縁は28がわずかに内彎し、29は直口口縁である。30は内彎した口縁を持つ。体部径に比べて口径が大きく、口縁部の高さは体部の高さより大きい。31は碗型土器である。半円形の体部で丸底と思われる。内面はヘラミガキ、外面はハケ目調整である。32、33は高坏の脚部である。32は内外面に朱塗りを施し、裾部は屈曲して外側に開く。他にガラス玉が１点（第61図11）出土している。

Ⅷ区７号住居跡（第45図）

Ⅷ区中央部、Ｇ－20グリッドで確認された。長辺280cm、短辺240cmの小型の方形住居である。主軸の方位はＮ－49°－Ｗである。埋土はさらさらしたしまりのない黒褐色土である。確認面から床面までの深さが非常に浅いため、壁は部分的にしか検出できず、ゴボウ穴による攪乱によって、硬化面もかなり破壊された状態であった。柱穴と思われる土坑はPit１、Pit２で、２本柱ではないかと考えられる。出土土器はほとん

どなく、復原できるものもなかった。

Ⅷ区８号住居跡（第46図）

Ⅷ区中央部、Ｇ－21グリッドで確認された。長辺420cm、短辺400cmの方形住居である。主軸の方位はＮ－４°－Ｗである。埋土はしまりのある黒褐色土である。東側壁の張り出し部分は別の住居との切り合いの可能性があるが、断面や床面の高さからも切り合いを確認できなかった。西側壁のほぼ中央部にかまどがある。かなり破壊されて左側のソデ部のみ残存している。また、かまどの中には高坏（35）が伏せた状態で出土した。柱穴と思われる土坑はPit１、Pit２、Pit３、Pit４で、４本柱と考えられる。

住居内からは土師器と須恵器が出土し、このうち、実測可能な４点を掲載した。34は土師器の甕の胴部で外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整である。35は土師器の高坏でほぼ完形、かまど内に伏せられた状態で出土した。坏部は深皿状で、口唇は外側に開いている。脚柱上部は大きく開き、裾部との境で屈曲している。36は土師器の坏である。深皿形で、内外面とも研磨され、口唇はほぼ直立している。37は須恵器の坏である。蓋受けの立ち上がりは低く、内傾している。底部にはヘラ記号がある。他に鉄製の鋤先が１点（第61図８）と勾玉が１点（第61図10）出土している。

Ⅷ区９号住居跡（第47図）

Ⅷ区中央部、Ｇ－21グリッドで確認された。長辺540cm、短辺440cmの方形住居である。主軸の方位はＮ－11°－Ｗである。埋土は細かくさらさらした黒褐色土で、焼土およびカーボン粒を多く含む。南西部の壁は掘りすぎのため不明である。柱穴は土坑Pit１、Pit２、Pit３、Pit４で、４本柱と考えられるが、Pit４は他の土坑に比べると浅い。東側壁の中央部南寄りに床面より一段高くなっている部分があり、入り口施設の跡ではないかと考えられる。西側壁中央にはかまどが上から潰された状態で確認され、内部からは粘土製の支柱が３点出土した（第59図）。かまどの後ろ側はゴボウ穴により切られており、煙道部分の構造は不明である。また、住居内からは上屋の構造材と思われる炭化材が多く出土し、かまどの外側部分が熱を受けて硬化していたことから、この住居は火災を受けたものと考えられる。ただ、遺物の出土状況などから、住居の廃棄後に燃えた可能性もある。

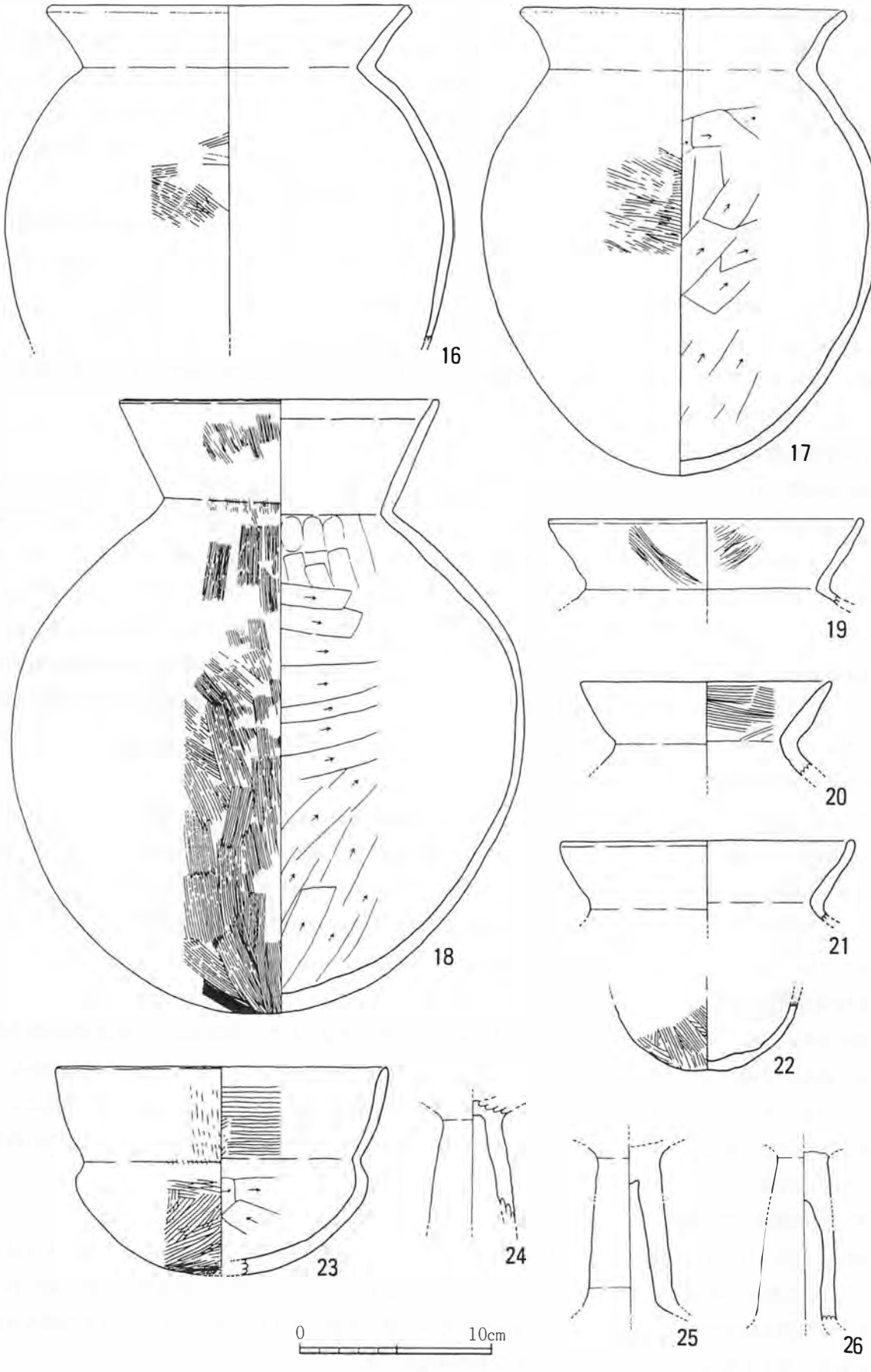
出土した土師器と須恵器のうち、４点を載せた。38は土師器の甕の上半部である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、口縁は外反し、頸部で段をなす。39は須恵器の蓋である。かまど内部より出土した。形は深皿状で、口唇はほぼ直立する。外面はヘラケズリされ、斑点状の自然釉が付着している。40は土師器の蓋である。形は深皿状で、口唇部は外反している。内外面とも研磨されている。41は土師器の鉢の上半部である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、口縁は外傾している。

Ⅷ区10号住居跡（第48図）

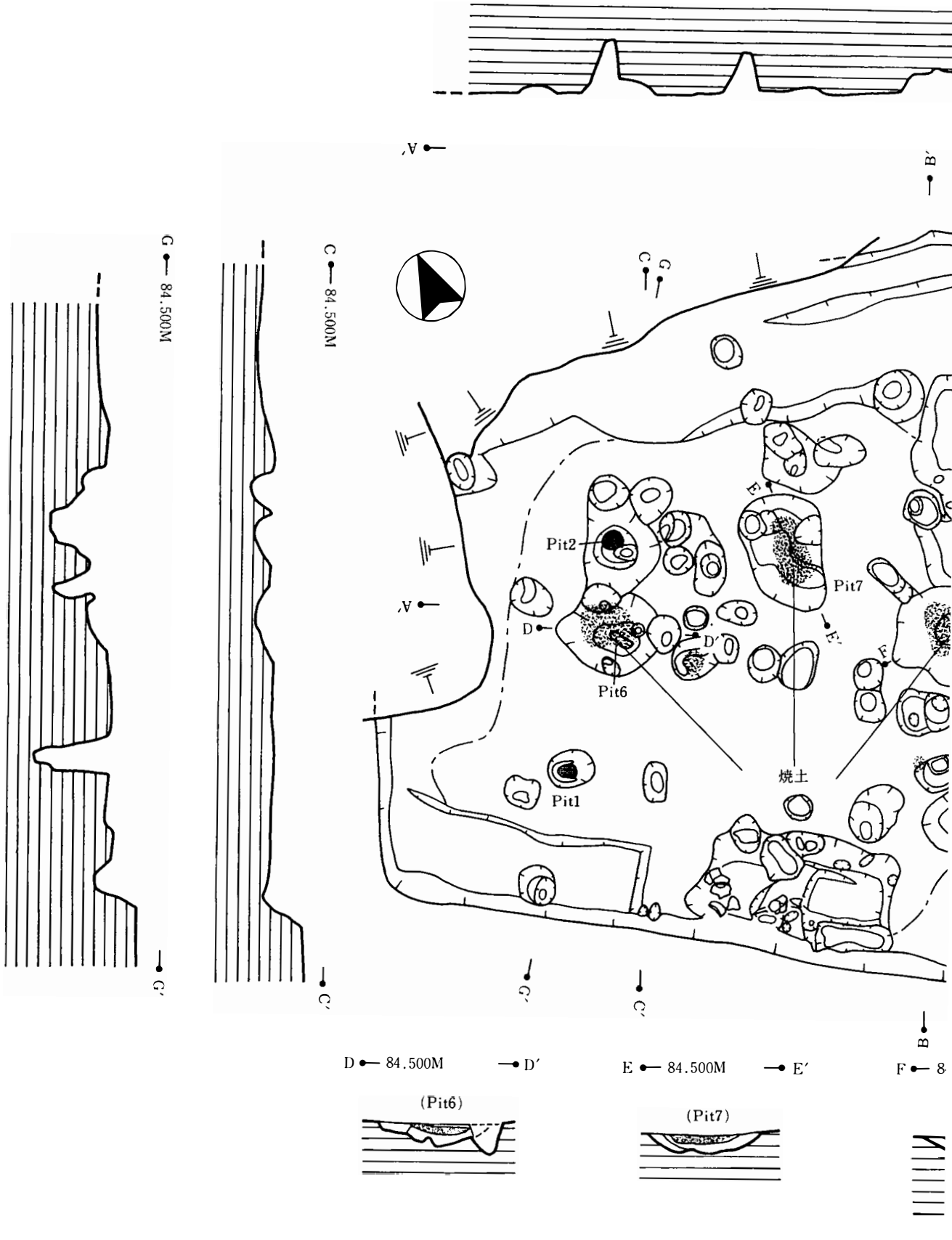
Ⅷ区中央部、Ｇ－20グリッドで、７号住居跡に切られた形で確認された。長辺400cm、短辺340cmの方形住居である。主軸の方位はＮ－21°－Ｗである。埋土は暗褐色土層であるが、ゴボウ穴による攪乱をかなり受けている。柱穴はPit１、Pit２で、２本柱と考えられる。西側壁ほぼ中央にかまどがあるが、攪乱によって煙道など詳しい構造は不明である。遺物はあまり出土せず、１点のみ掲載した。42は甕または壺の口縁部で、口唇は内彎している。

Ⅷ区11号住居跡（第48図）

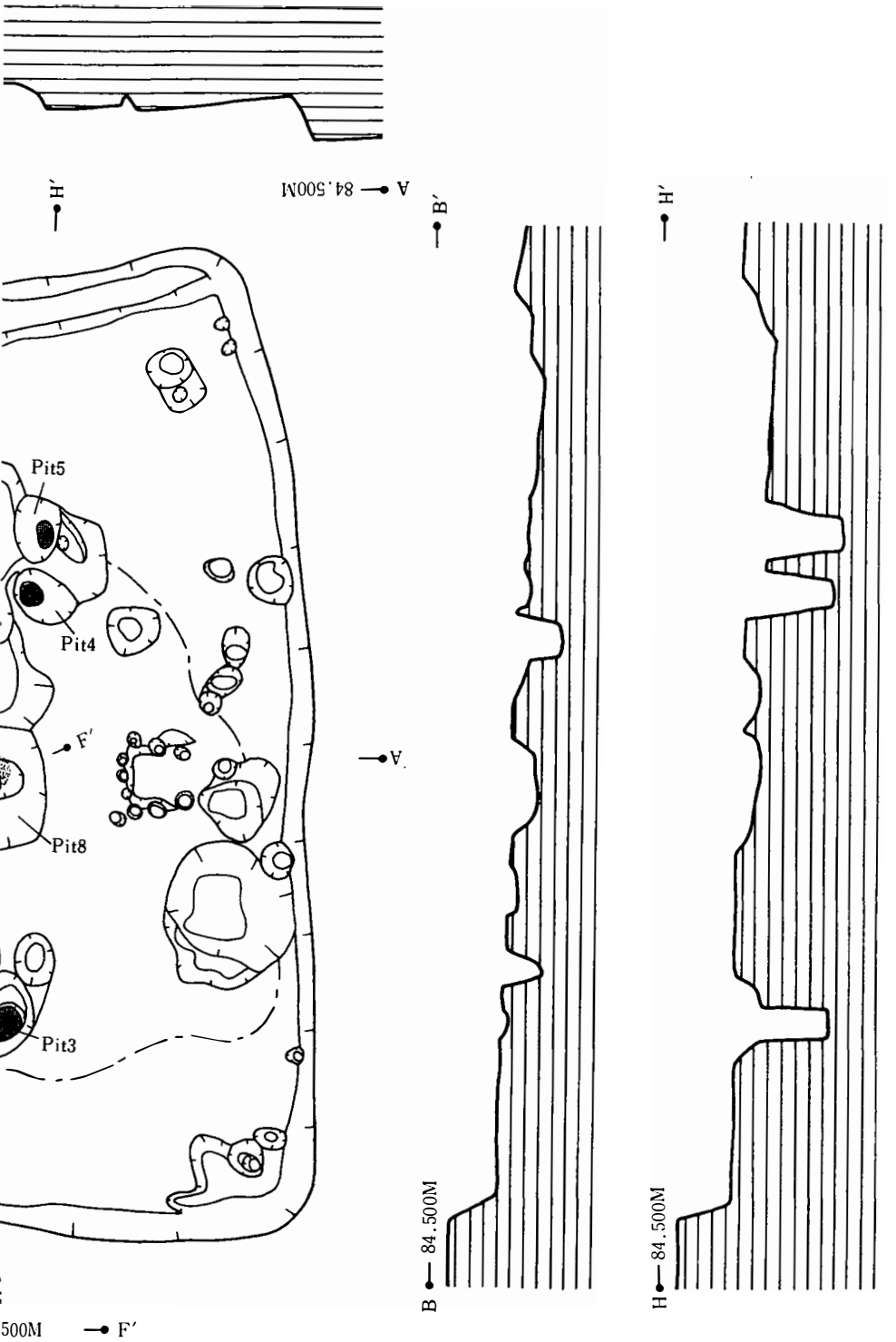
Ⅷ区南東部、Ｈ・Ｉ－19グリッドで確認された。一辺220～230cmの小型の方形住居で、主軸の方位はＮ－20°－Ｅである。埋土はさらさらしたしまりのない黒褐色土である。南側壁の一部は他の土坑に切られている。住居内に柱穴や炉跡と思われる土坑はなかったが、壁の外側を小土坑が囲んでおり、垂木の跡の可能性がある。出土土器は小片が多く、復原できるものはなかった。

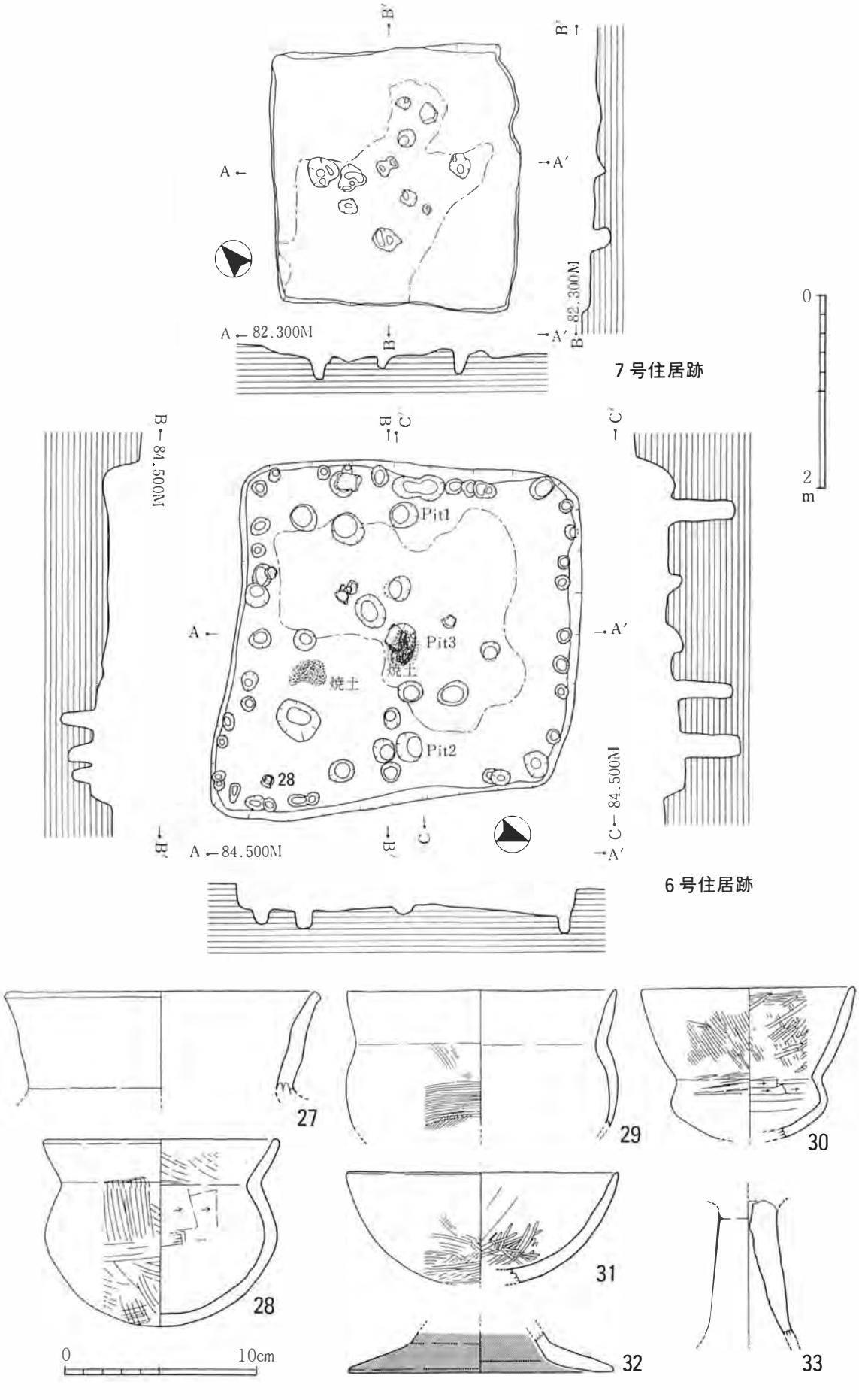


第43図　Ⅶ区５号住居跡出土土器

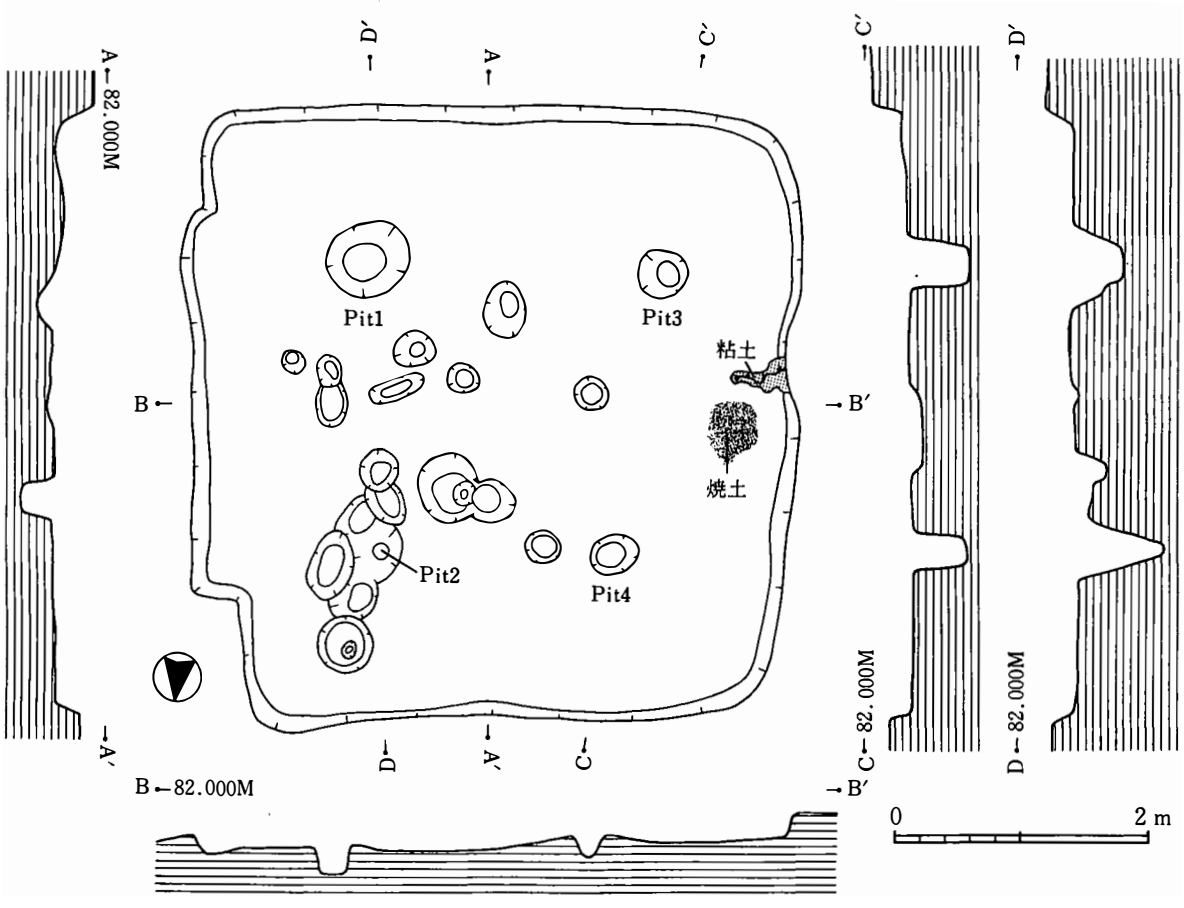


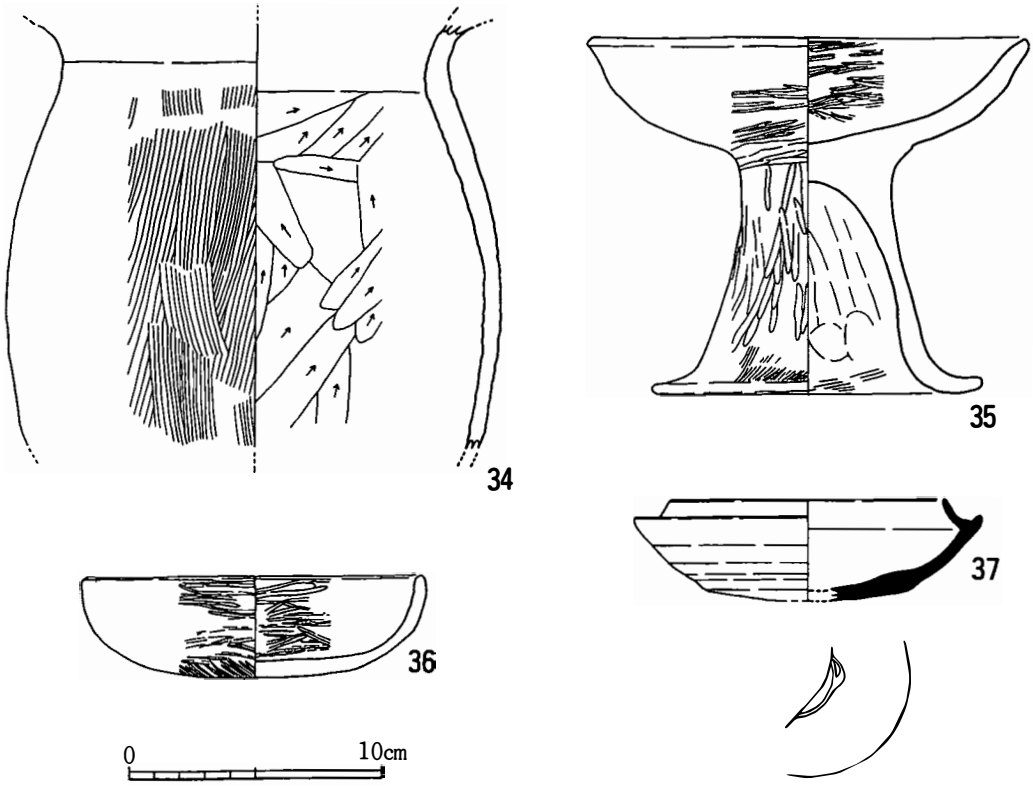
第44図　Ⅶ区５号住居跡


H′
A — 84.500M
B′
H′
Pit5
Pit4
F′
A
Pit8
Pit3
B — 84.500M
H — 84.500M
500M — F′
(Pit8)
0
2 m

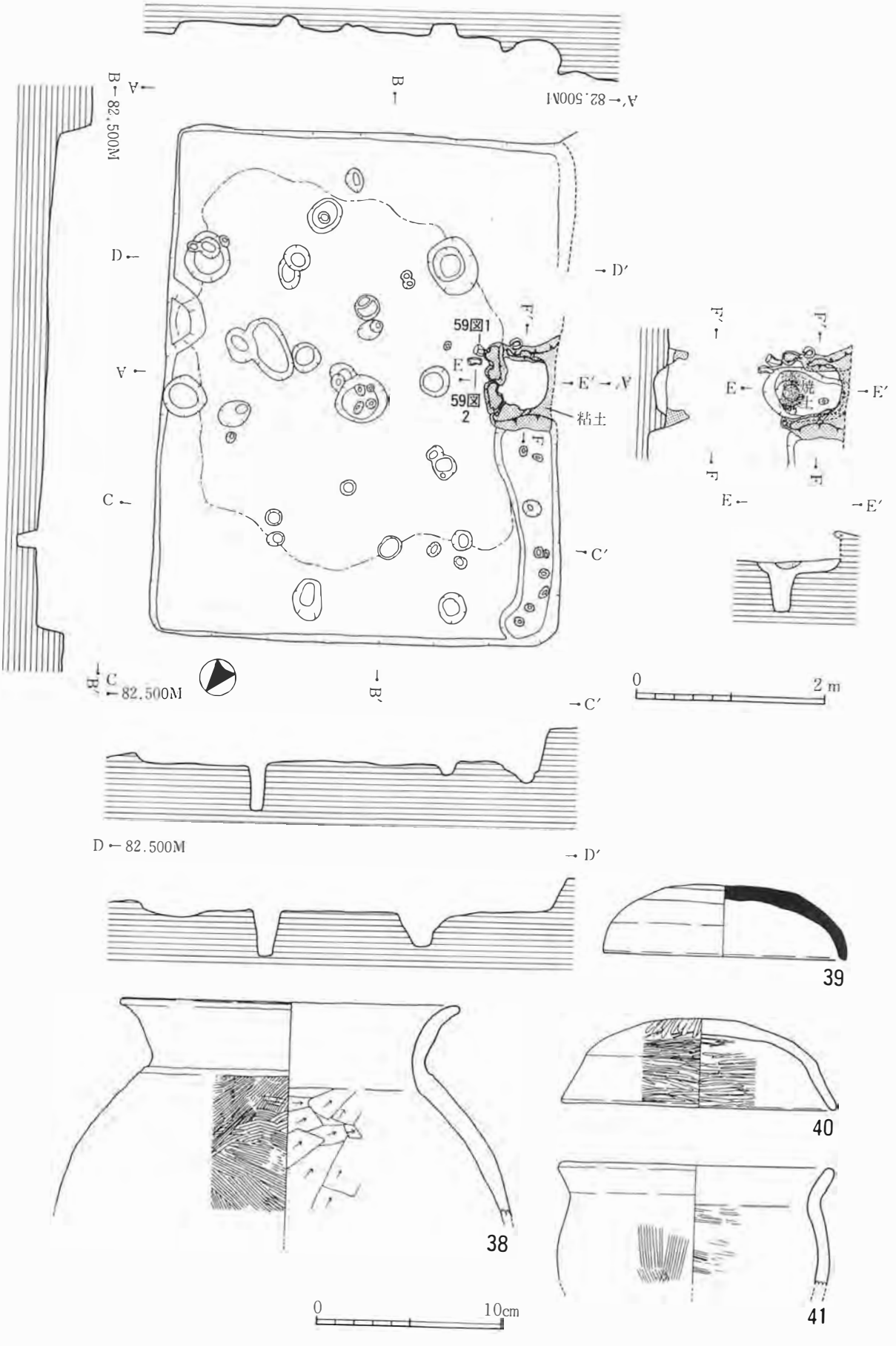


第45図　Ⅶ区６号、Ⅷ区７号住居跡および６号住居跡出土土器

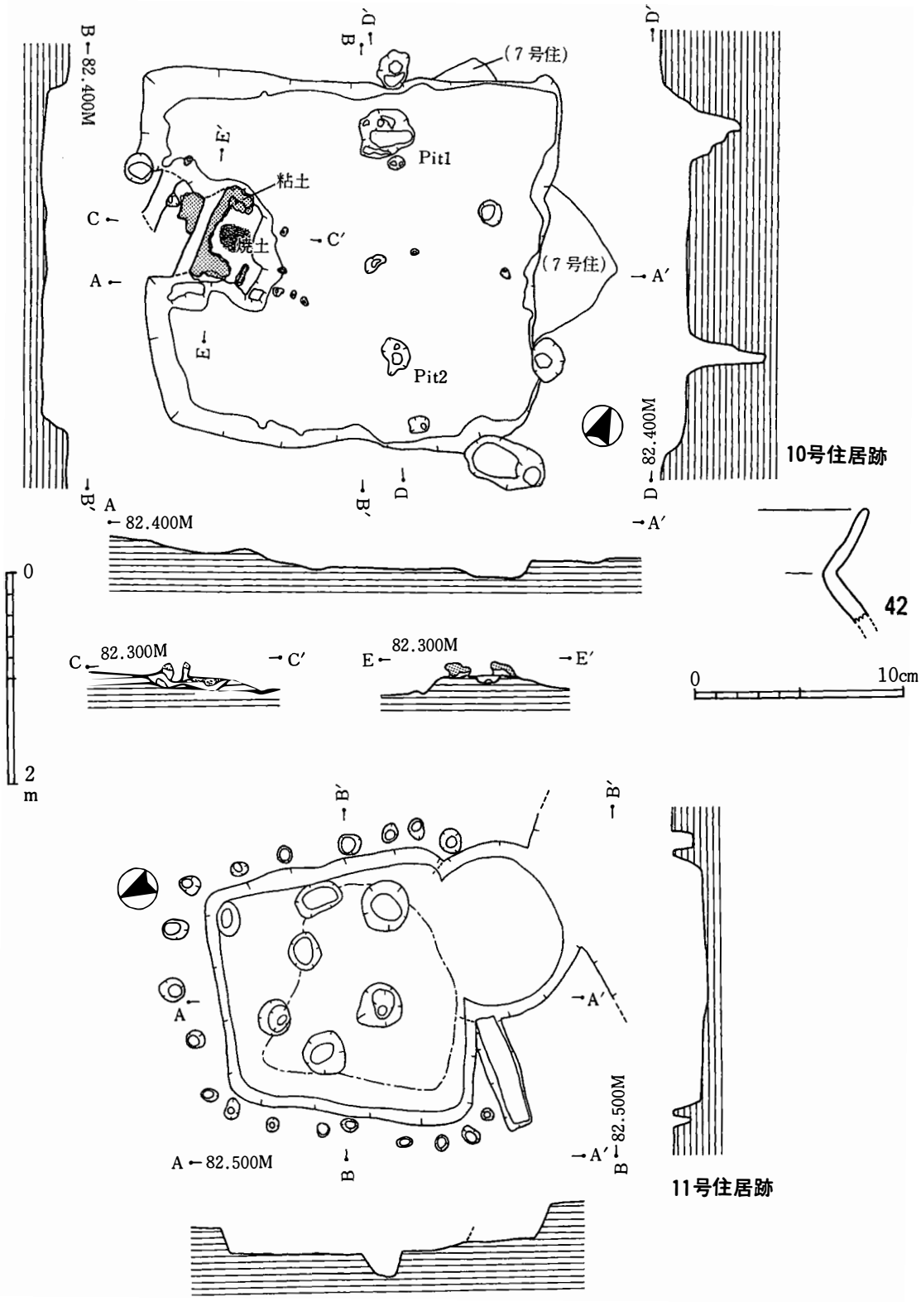




第46図　Ⅷ区８号住居跡および出土土器



第47図　Ⅷ区９号住居跡および出土土器



第48図　Ⅷ区10号、11号住居跡および10号住居跡出土土器

Ⅷ区12号住居跡（第49図）

Ⅷ区南東部、Ⅰ－19グリッドの11号住居跡西側で確認された。長軸430cm、短軸360cmの隅丸方形で、主軸の方位はN－34°－Eである。埋土はさらさらしたしまりのない黒褐色土で、一部に焼土が混ざっている。柱穴はPit１、Pit２で、２本柱と考えられる。中央やや西寄りに焼土を伴う土坑Pit３があり、炉ではないかと思われる。また、南側壁際の土坑Pit４は貯蔵穴の可能性がある。

出土土器はすべて土師器で、このうち、実測可能な６点を掲載した。43は甕の上半部である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、外傾した口縁を持つ。44も甕の口縁部で、外傾口縁である。45は鉢である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、口縁はやや外傾している。46、47は小型壷の胴部、48は壷の底部である。他に砥石が１点（第61図４）出土している。

Ⅷ区13号住居跡（第50図）

Ⅷ区中央部、G－20・21グリッドで確認された。西側部分を９号住居跡、南側部分を後世の土坑によって切られているが、方形になると思われる。主軸の方位はN－33°－Wである。埋土は細かくさらさらした黒褐色土で、焼土およびカーボン粒をわずかに含む。柱の位置、本数は不明であるが、土坑Pit１またはPit２が柱穴にあたるものと思われる。また、北西隅にはベッド状の高まりがある。

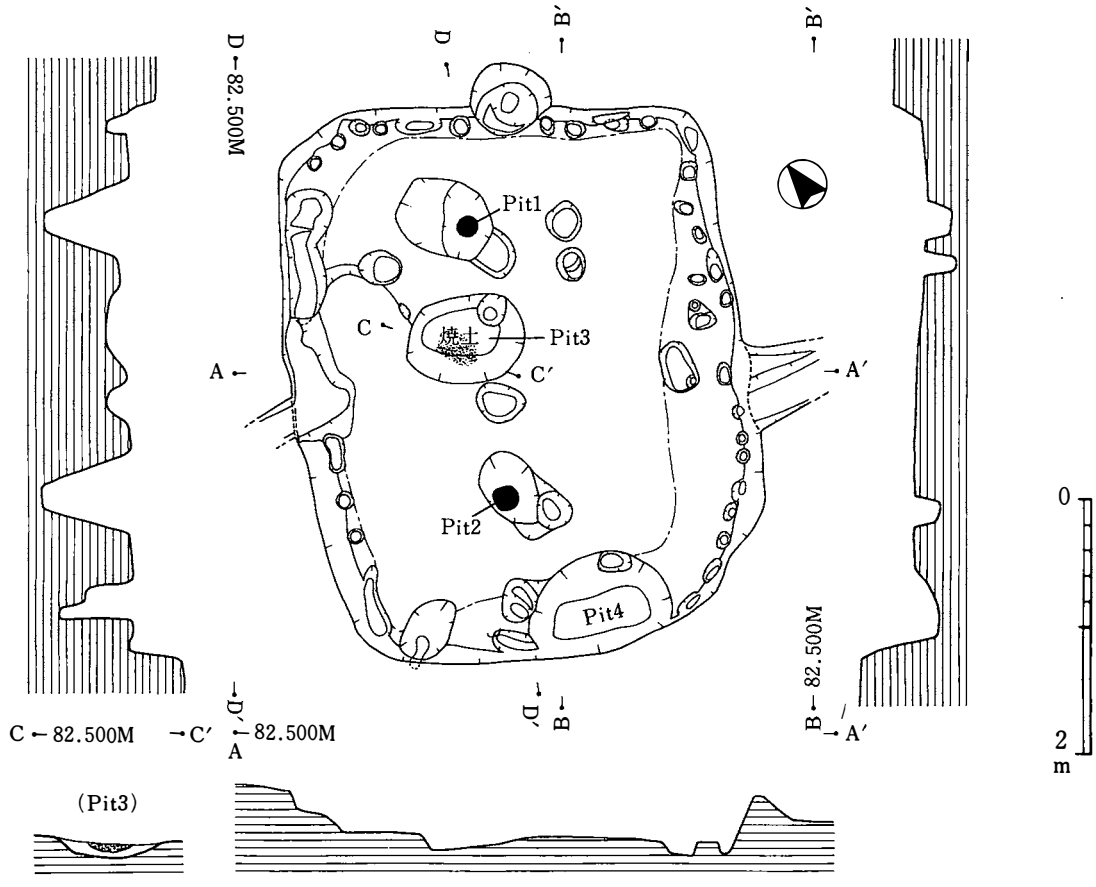
出土土器はすべて土師器で、実測可能な３点を掲載した。49は坏である。半球状の底部を持ち、口唇がわずかに外反する。50は高坏の坏部である。下位の接合面で屈曲し、外傾して立ち上がる。51は高坏の脚部で、裾部は屈曲して外側に開く。他に鉄鏃が１点（第61図７）出土している。

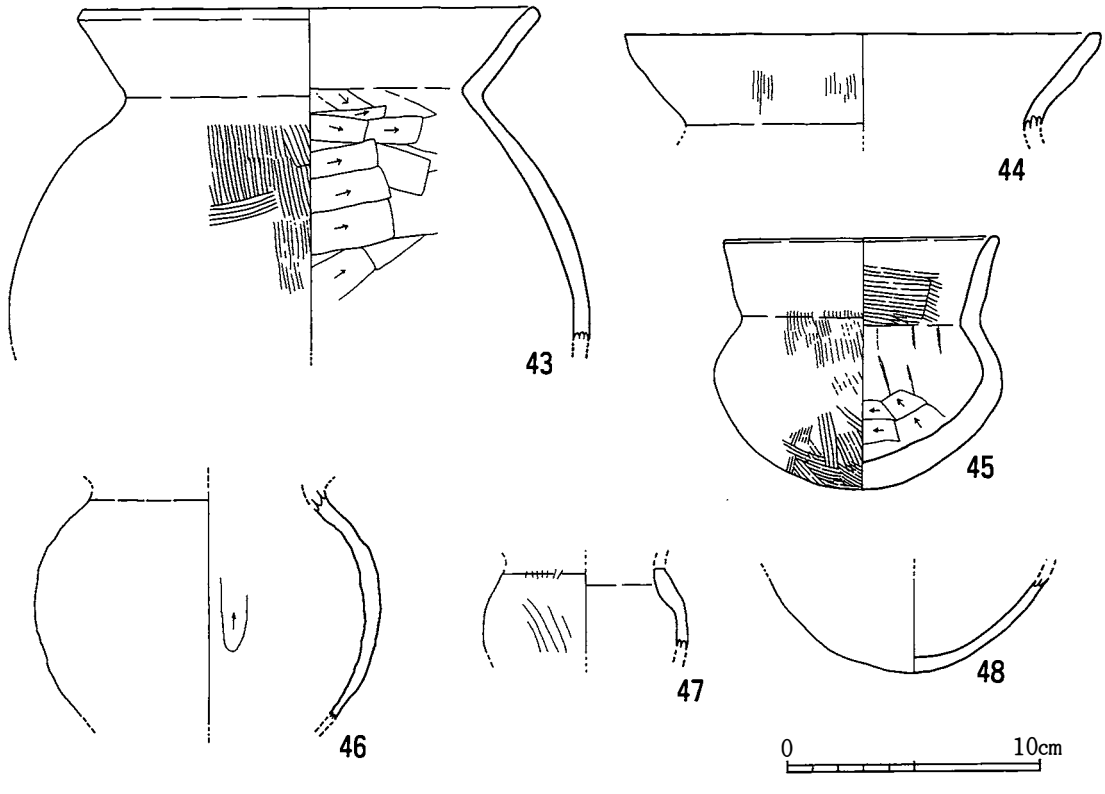
Ⅷ区14号、15号、16号、17号、18号住居跡（第51、52図）

Ⅷ区北東部、G・H－22グリッドにおいて、数基の住居跡が切り合った状態で確認された。この部分の調査は切り合いの埋土が判別しにくく、さらにゴボウ穴による攪乱、少雨による乾燥も加わり困難を極めた。このため、完掘後の壁面の状況等も考慮して、５基の住居跡を想定し、それぞれを14号～18号住居跡とした。それぞれの住居跡の新旧関係は不明である。また、出土遺物についても、上層のものはそれぞれに伴う住居跡が不明であるため、一括して取り上げた。

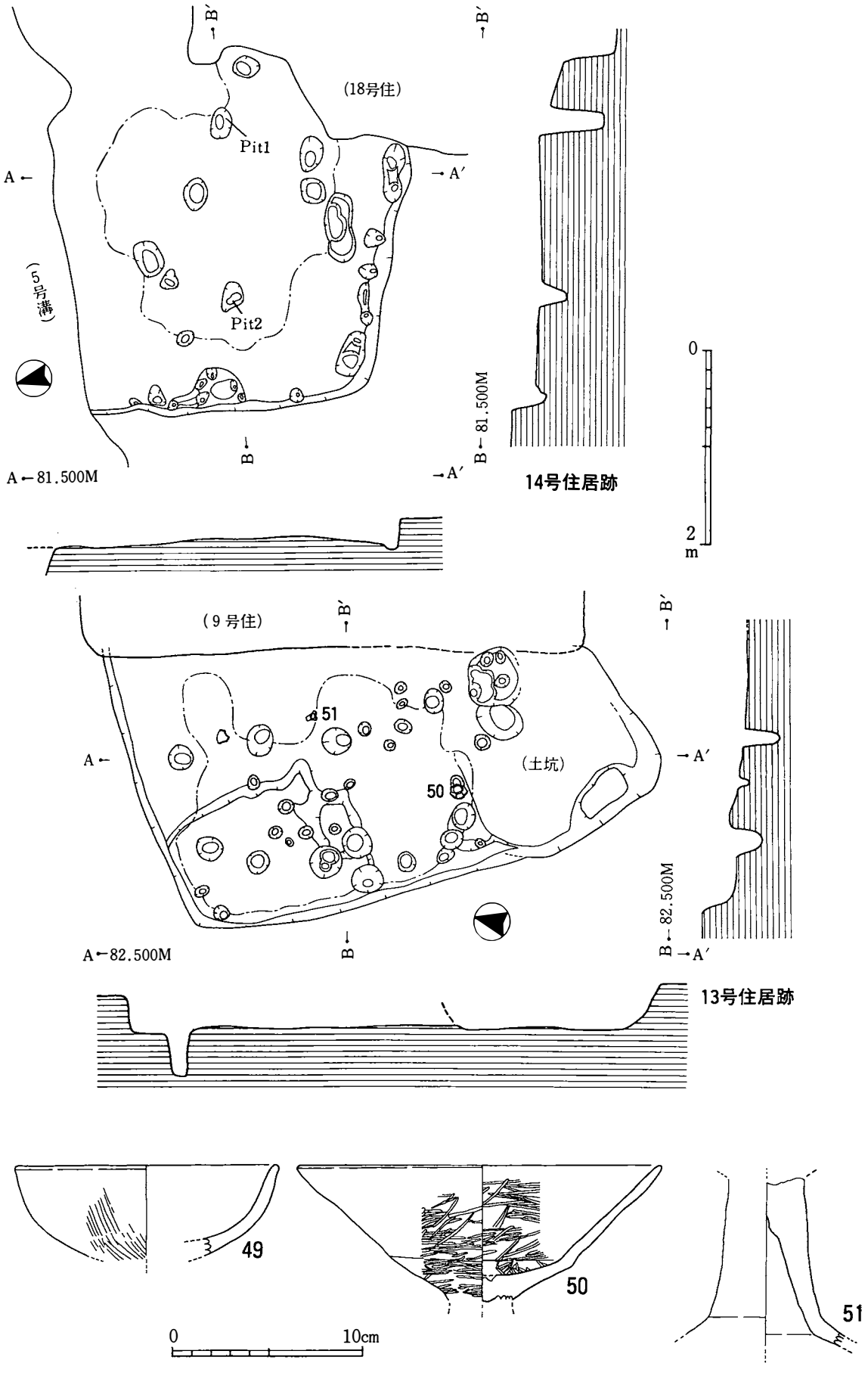
14号住居跡は切り合いの東側にあり、南西側を18号住居跡と切り合い、北側を５号溝に切られている。西側の壁は検出できなかった。全体の規模は不明であるが、柱穴は土坑Pit１、Pit２の２本柱ではないかと思われる。15号住居跡は18号住居跡の上からかまど周辺のみが検出された。住居跡全体の規模等は不明である。かまどの左側ソデにはソデ石が残る。また、焚き口前方の石もソデ石が抜き取られたものと思われる。焚き口奥には石の支柱が残っている。かまど右側から土師器の甕の上半部（第52図54）が上に別の壷の底部（56）を乗せた状態で出土した。切り合いの南側は壁の方向等から２基の住居跡を想定し、西側を16号住居跡、東側を17号住居跡とした。北側は18号住居跡と切り合い、全体の規模、柱穴等は不明である。18号住居跡は切り合いの北東部で確認した。一辺420cmの方形住居で、主軸の方位はN－14°－Eである。南側を16号、17号住居跡と切り合い、北東隅も他の土坑や19号住居跡に切られている。北西部、南東部にそれぞれベッド状の高まりがある。柱穴、かまど等は確認できなかったが、土坑Pit１は貯蔵穴の可能性がある。

出土した土師器と須恵器のうち、実測可能な12点を載せた（第52図）。52は土師器の壷の口縁部である。口唇はわずかに外反して、面をなす。53、54、55は土師器の甕の口縁部である。53、54は外反した口唇、55は外傾する直口の口縁をもつ。56は土師器の小型丸底壷の底部である。57は土師器の甕の上半部で、直線的な胴部をもち、頸部で屈曲して、外傾する口縁をもつ。58は土師器の坏である。半球状の底部を持ち、口唇はほぼ直立する。59は須恵器の坏である。蓋受けは欠損しているが、内傾しているものと思われる。60、61は土師器の高坏の坏部である。ともに下位の接合面で屈曲し、外傾して立ち上がるが、61は屈曲部が稜をなす。62、63は高坏の脚部である。

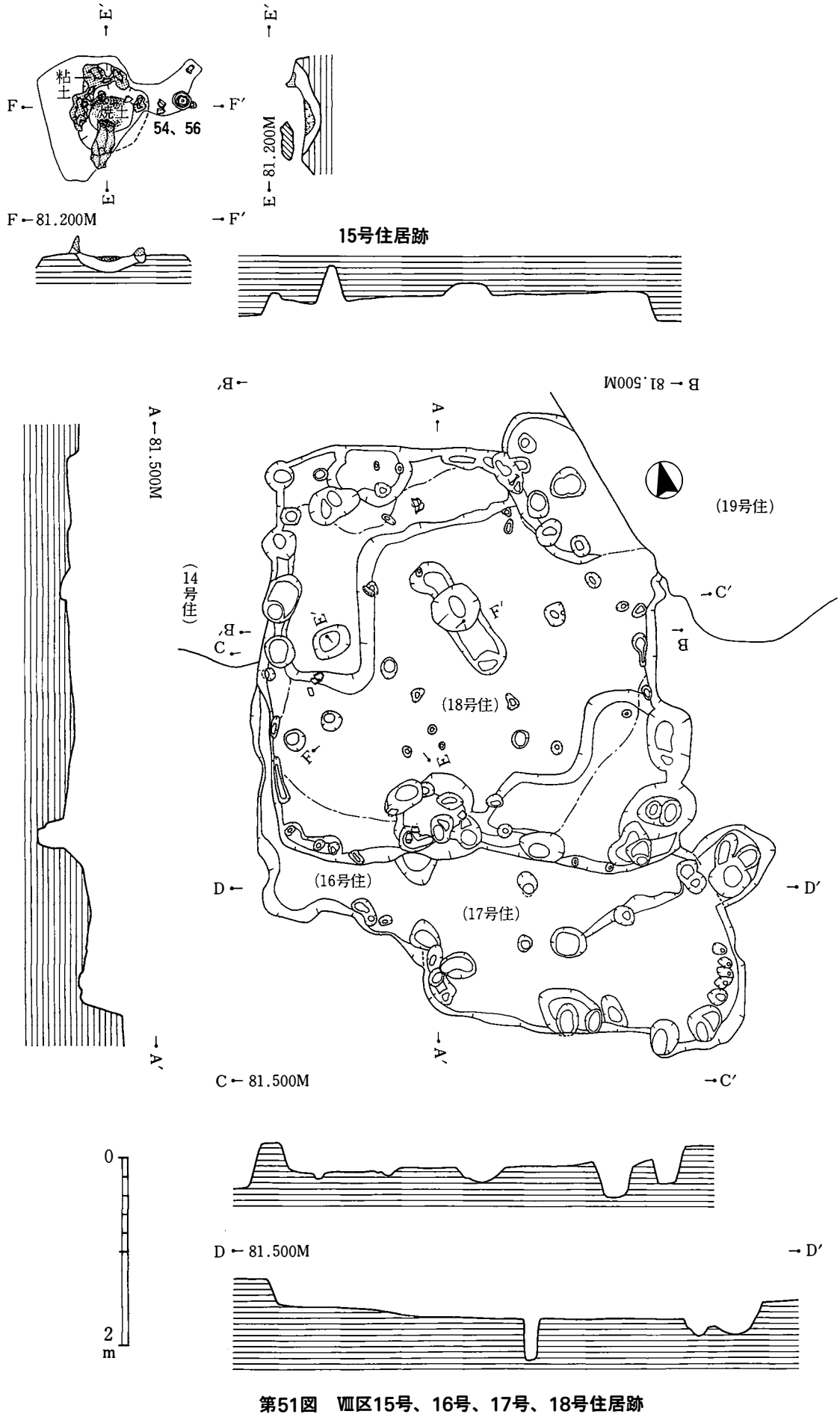




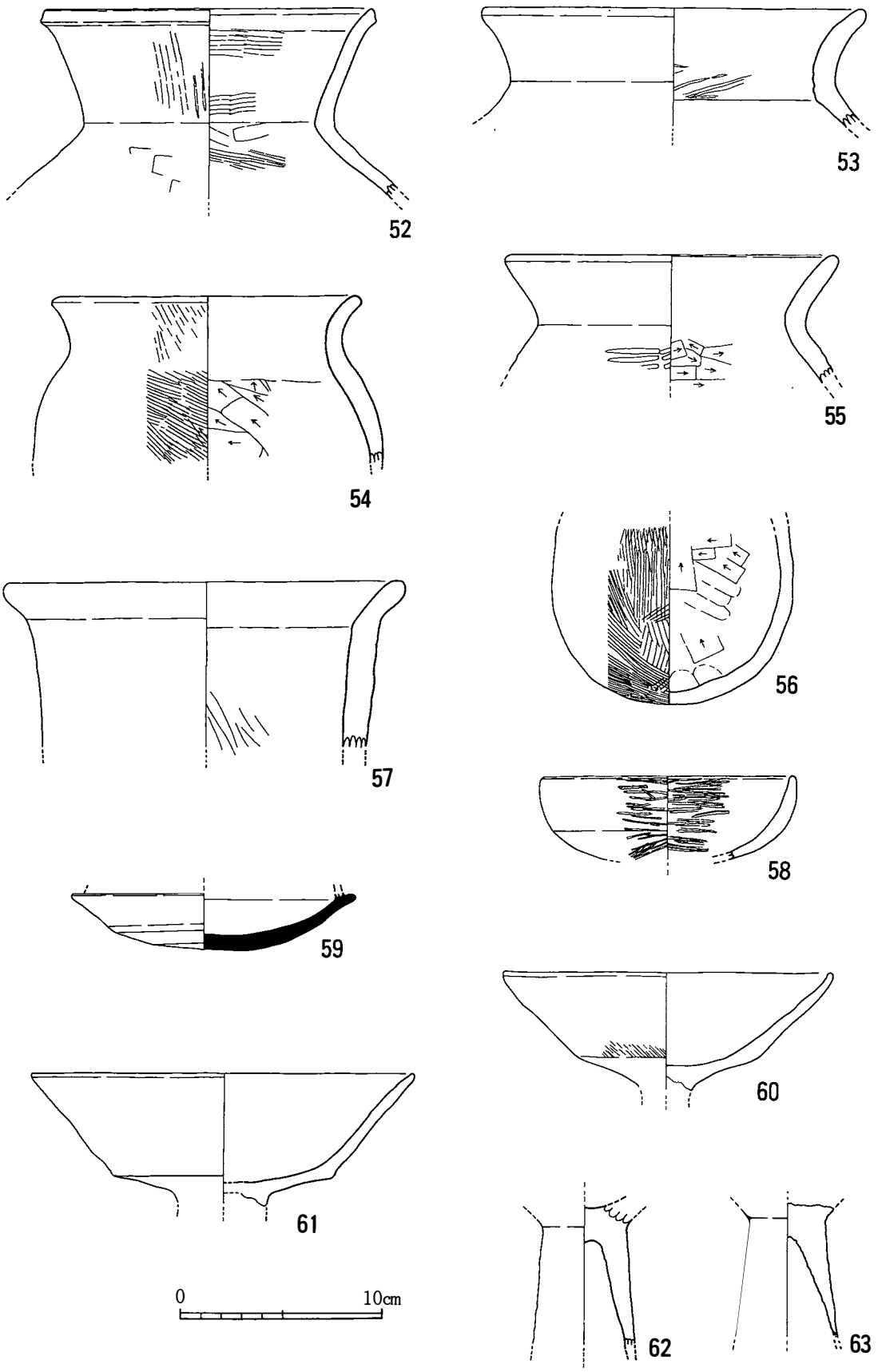
第49図　Ⅷ区12号住居跡および出土土器



第50図　Ⅷ区13号、14号住居跡および13号住居跡出土土器



第51図　Ⅷ区15号、16号、17号、18号住居跡

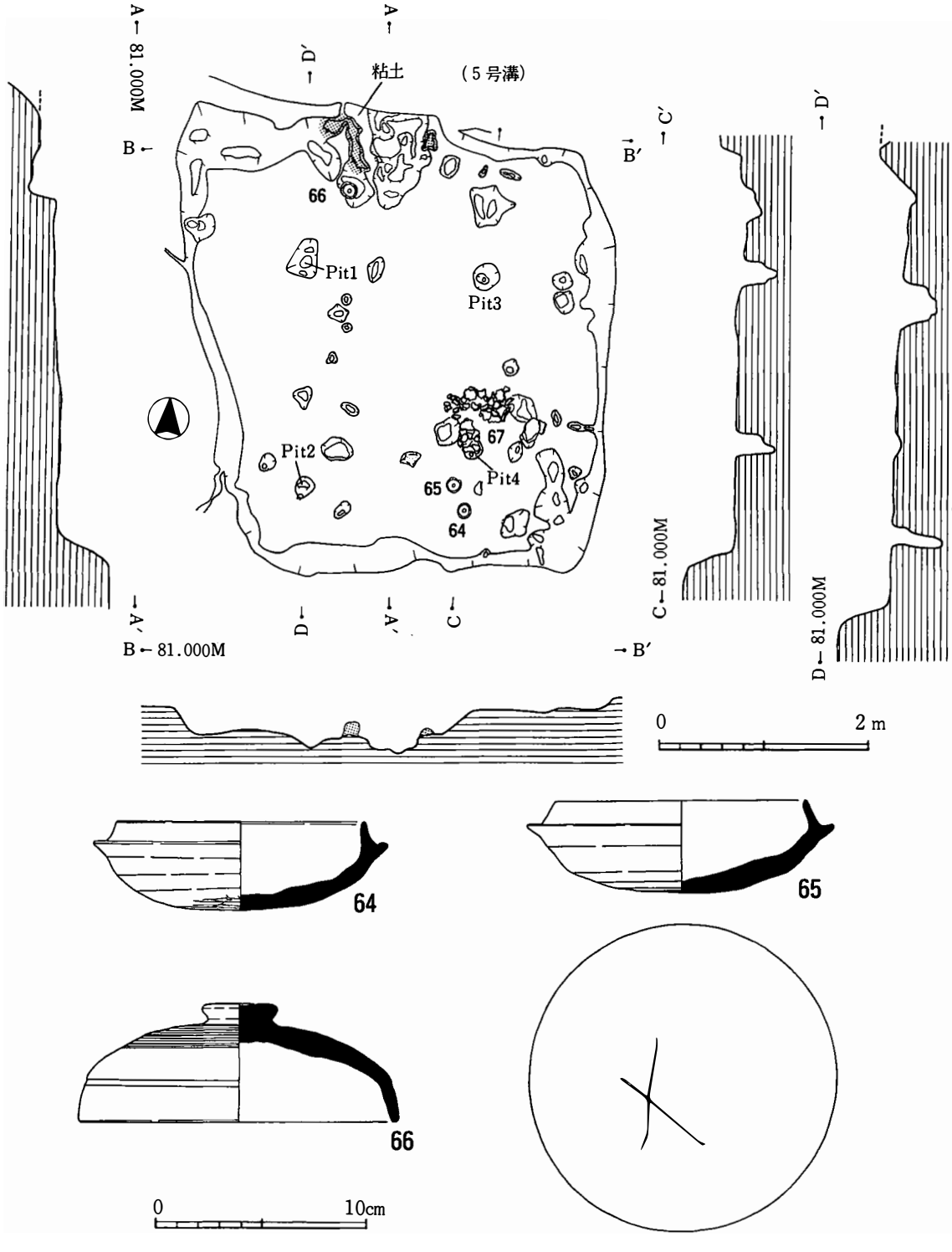


第52図　Ⅷ区15号、16号、17号、18号住居跡出土土器

Ⅷ区19号住居跡（第53図）

Ⅷ区北東部のＨ－22グリッド、18号住居跡の東側で確認された。長軸420cm、短軸380cmの台形で、主軸の方位はＮ－６°－Ｗである。上面での検出が不可能であったため、埋土は不明である。北側壁中央部にかまどを有する。かまどは攪乱を受けており、粘土が一部しか残っていなかった。また、焼土もかたまった状態では検出されなかった。煙道部も北側の５号溝に切られているため消滅している。

出土した土師器と須恵器のうち、実測可能なものは４点である（第53、54図）。64、65は須恵器の坏で、ともに蓋受けの立ち上がりは低く、内傾している。65の底部にはヘラ記号がある。66は須恵器の蓋である。



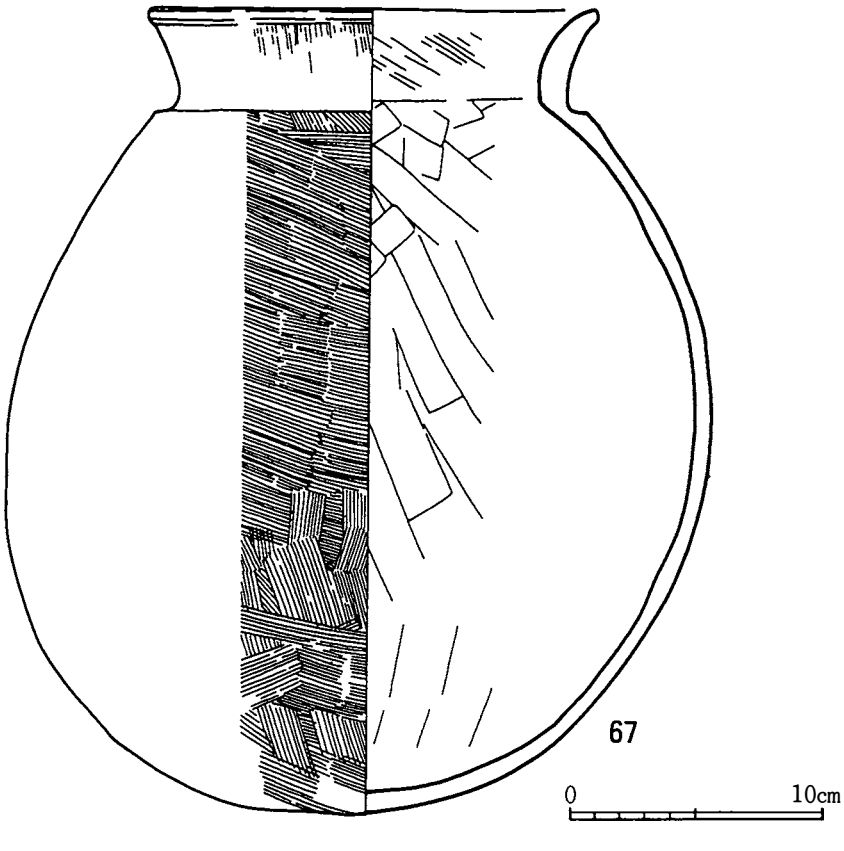
第53図　Ⅷ区19号住居跡および出土土器（1）

形は深皿状で、つまみを持ち、口唇はほぼ直立する。67は甕である。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整、丸底で胴部中位に最大径を持つ。頸部は段をなして直立気味に立ち上がり、口唇で外反する。他に滑石製の紡錘車が１点（第61図９）出土している。

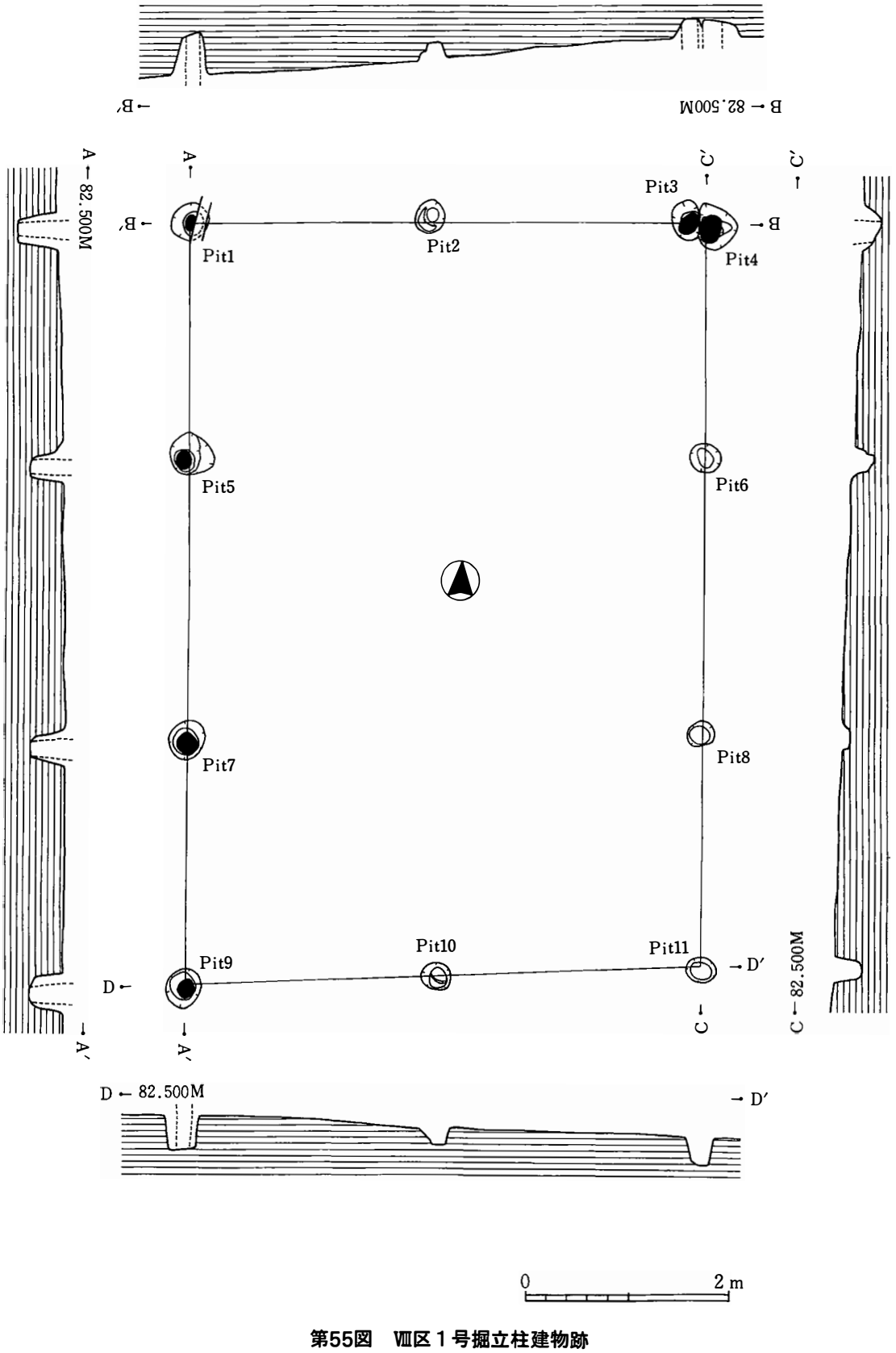
２　掘立柱建物跡

Ⅷ区１号掘立柱建物跡（第55図）

平成６年度調査で、Ⅷ区Ｈ－19・20グリッドから掘立柱建物跡が１基確認された。一部は12号住居跡の桁行３間（約720cm）×梁行２間（510cm）で、棟方向はＮ－４°－Ｗで、建物の一部は12号住居跡を切る形になる。西側のPit１、Pit５、Pit７、Pit９および北東隅のPit３、Pit４には柱痕が残っていた。また、柱穴の埋土中より、土師器片と炭化物が出土した。



第54図　Ⅷ区19号住居跡出土土器 (2)



第55図　Ⅷ区１号掘立柱建物跡

3　土師器（第56～58図）

迫ノ上遺跡から出土した古墳時代の土器は、主にⅠ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ区より出土した。土師器がほとんどで、須恵器は少なく、復原できたものはほとんどなかった。また、器形的には甕・壺が多く、他に小型壺、小型鉢、坏、高坏などが出土した。ここでは、口縁部と底部を中心に器形の推定が可能なものを30点掲載した。これらの土器を器種別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「出土土師器観察表」（第９表）にまとめている。

甕・壺（１～５、７～15）

甕・壺は14点掲載した。多くが口縁部の破片のみで、全体の器形が不明なものであるが、丸底のものがほとんどであると思われる。器面の調整は外面ハケ目、内面ヘラケズリのものが多い。口縁はまっすぐ外傾するもの（１～３、５、７）、内彎するもの（４、８）、外反するもの（９～14）がある。また、胴部の最大径は中位にあるもの（７、８）と上位にあるものとに分けられる。

小型壺（６、17）

小型壺は２点掲載した。いずれも丸底である。６は外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整で、最大径は胴部中位やや上にある。頸部は途中で屈曲して立ち上がり気味になるが、口唇は外反する。17は胴部の破片で、最大径は胴部中位にある。

小型鉢（16、18、19）

小型鉢は３点掲載した。16は胴部片で丸底になるものと思われる。外面ハケ目調整で、頸部は外傾する。18は丸底で、外傾した体部を持ち、口縁は直口になる。19はレンズ状の底部をもち、体部は外に開くが、途中で内彎して立ち上がる。

坏（20、21）

坏は２点掲載した。20は碗形で半球状の底部を持ち、口唇はほぼ直立する。21は須恵器の坏に非常に似た器形を持ち、蓋受けは内傾している。器壁は薄く、内外面とも研磨され、底部にはヘラ記号がある。

高坏（22～30）

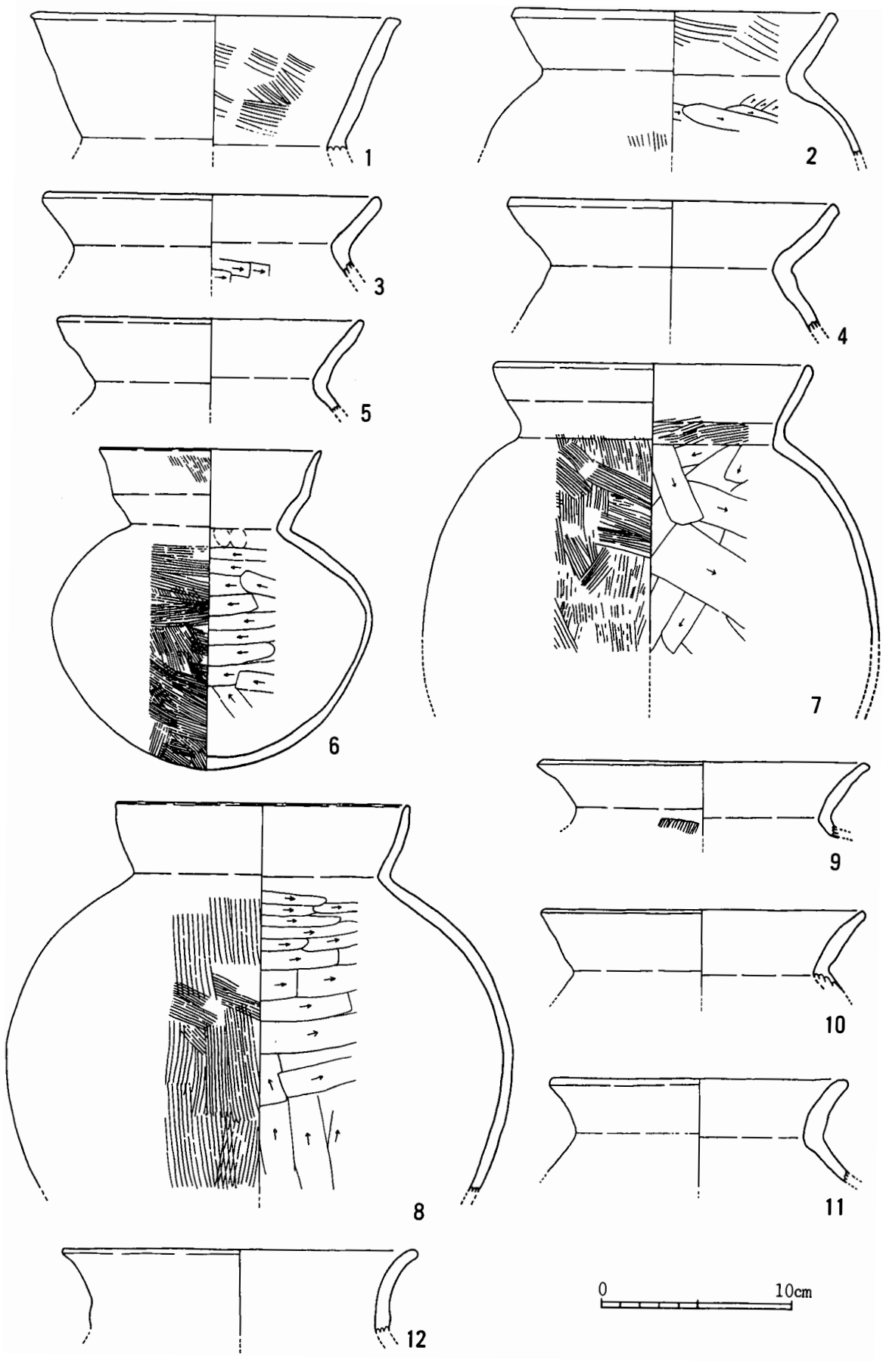
高坏は９点掲載した。坏部は浅く、下位で段をなして外に大きく開くもの（22、23）と深めで下位で稜をなして屈曲し、外に開くもの（24）がある。また、脚部はラッパ状に外反しながら開くもの（26、27）と脚柱部と屈曲して開く裾部をもつもの（24、28、30）がある。

4　その他の遺物

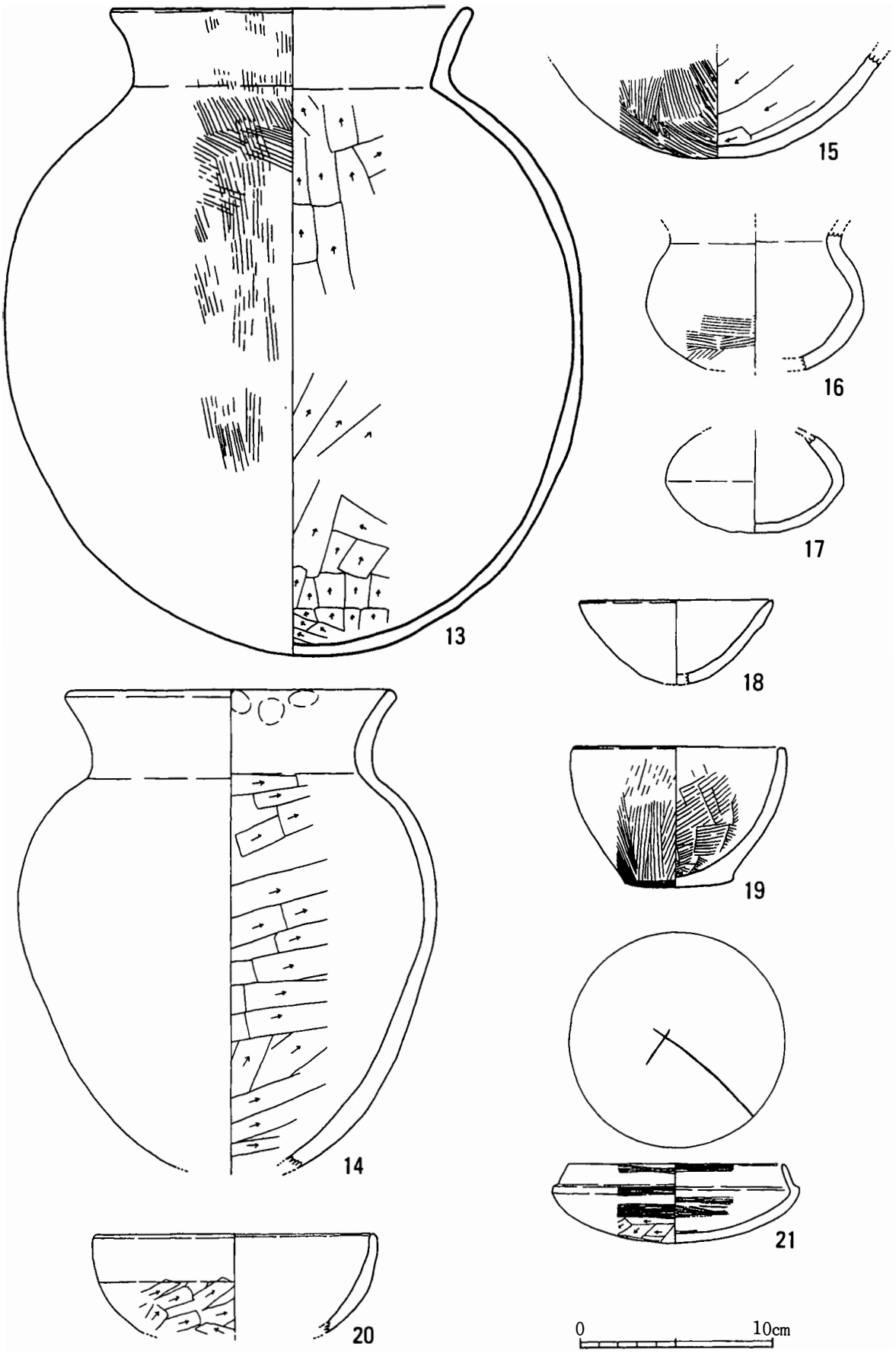
迫ノ上遺跡から出土した土器以外の古墳時代のものと思われる遺物には、かまどの支柱、砥石、鉄器、紡錘車、勾玉、ガラス玉がある。一部を除いてほとんどが住居跡に伴う遺物である。特に鉄器は、多数出土したが、腐食が激しいものが多く、形態を復原できたものは２点に留まった。それぞれの遺物の詳しい内容については、以下のとおりである。

かまど支柱（第59図１、２）

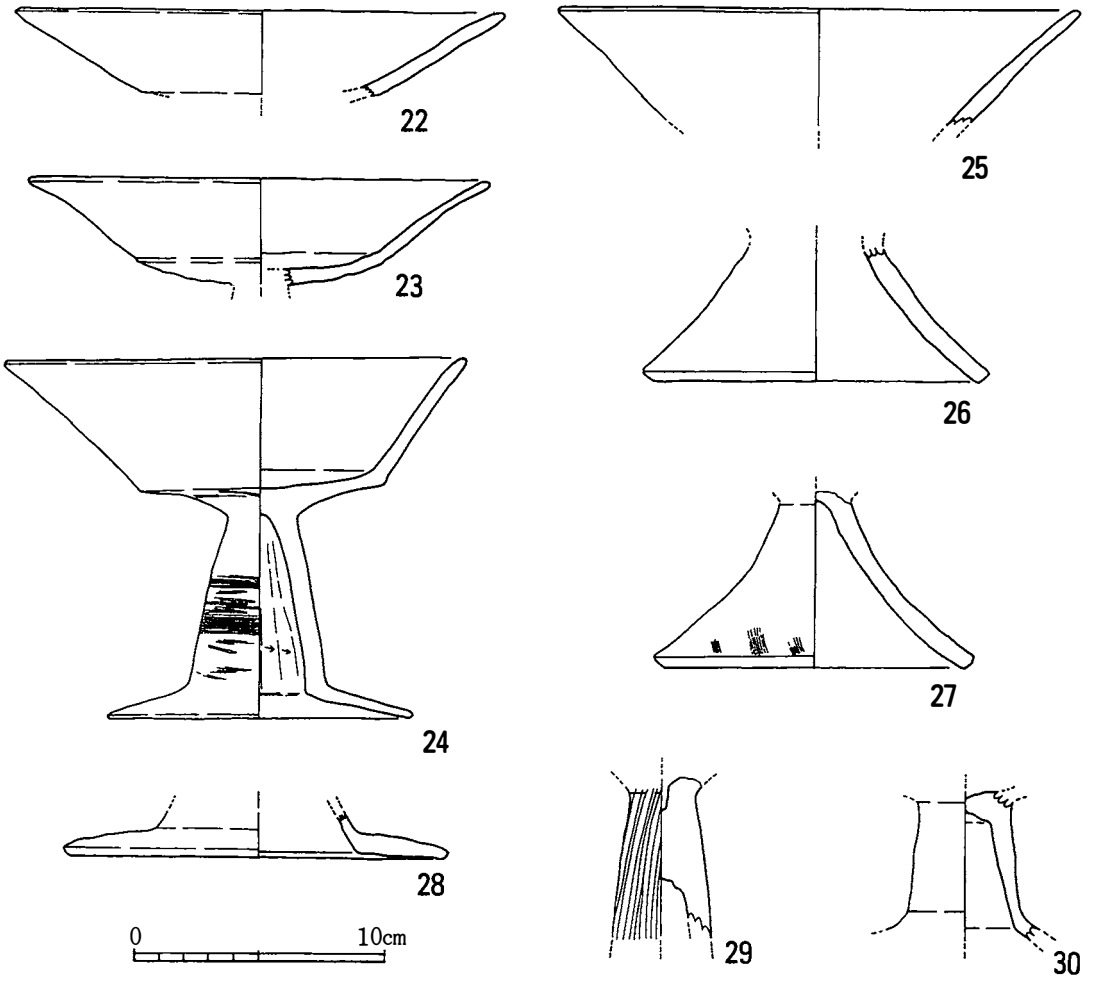
Ⅷ区９号住居跡のかまどの内部と周辺より、土製品が３点出土した。いずれも円柱状であり、上面は丸く、底面は平坦で、中途で屈曲した形をしている。手づくねで整形されたと思われ、表面には指頭痕が多数ついており、火を受けて硬化している。出土状況や形状などから、かまど内部で甕を支えるのに使われた支柱であると考えられる。３点のうち１点は、破損が激しく実測不可能であったので、残り２点を掲載した。１は底面の直径約７cm、高さ11.8cm、重さ466.6ｇで、一部を破損しているが、ほぼ原形を留めている。２は



第56図　出土土師器 (1)



第57図　出土土師器 (2)



第58図　出土土師器 (3)

第９表　出土土師器観察表

遺物番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	現存高 (cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査区	出土地点	取上番号	備考
1	壺	19.2		6.9	ナデ、ハケ目	ナデ	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒多量、長石、雲母を含む	良好	H6		94追	
2	壺	17.0		7.4	ナデ、ハケ目、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追上層	
3	壺	17.6		4.3	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-21	94追I-5	
4	壺	16.8		6.4	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒微量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6	
5	壺	15.8		4.6	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-17	94追E-6 29	
6	壺	11.5		16.7	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	にぶ褐(7.5YR5/4)	橙(2.5YR6/6)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅳ	C-2	Ⅳ区D-12 2269	
7	甕	16.8		17.3	ナデ、ハケ目、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 437	
8	甕	15.4		20.1	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	小石、砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	I	C-11	I区C-4	
9	壺	17.4		3.6	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6 16	
10	壺	16.6		4.3	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	砂粒微量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6	
11	壺	15.4		5.7	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄褐(10YR5/4)	小石、砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-13	I区C-2	
12	壺	18.6		4.3	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追表土	
13	甕	18.8		33.3	ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	I	C-10	I区C-5 115	
14	甕	17.2		24.6	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ、指頭痕	ナデ	にぶ黄(2.5Y6/3)	橙(5YR7/8)	砂粒多量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	I	D-11	I区D-4	
15	壺か甕			5.3	ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	灰黄褐(10YR4/2)	小石、砂粒多量、石英、長石を含む	良好	I	C-11	I区C-4 87	
16	小型鉢				ナデ	ナデ、ハケ目	灰黄褐(10YR5/2)	にぶ黄褐(10YR5/3)	砂粒少量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-16	94追D-6 7	
17	小型壺			5.1	ナデ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶ黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	砂粒微量、石英、長石を含む	良好	H6		94追	
18	小型鉢	10.0			ナデ	ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ後ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	C-12	I区C-3 1977	
19	小型鉢	10.9	5.6	7.2	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	灰黄(2.5Y6/2)	浅黄(2.5Y7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅳ	B-2	Ⅳ区C-12 2270	
20	鉢	15		5	ナデ	ナデ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	にぶ橙(7.5YR7/4)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	良好	V		Ⅴ区ゴボウ穴攪乱	
21	坏	11.2		4.1	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ヘラ記号	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	にぶ黄橙(10YR7/4)	橙(5YR7/8)	砂粒微量、雲母を含む	良好	Ⅷ	G-20	94追H-5	
22	高坏	19.4		3.3	ナデ	ナデ	にぶ黄褐(10YR5/3)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-16	94追D-5 7	
23	高坏	18.2		4.2	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	I	D-11	I区D-4	
24	高坏	18.2	14.3	12.0	ナデ、ハケ目、ﾍﾗﾅﾃﾞﾘ	ナデ、ハケ目、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石、雲母を含む	不良	Ⅶ	G-17	94追E-5 27	
25	高坏	20.6	4.6		ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	H6		94追	
26	高坏		14.0	5	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒微量、長石を含む	良好	V	H-15	Ⅴ区H-0 2442	
27	高坏		12.8	6.9	ナデ	ナデ、ハケ目	にぶ橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-16	94追D-6 20	
28	高坏		25.1	1.9	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	4溝	94追4溝上層	
29	高坏					ハケ目	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/3)	砂粒多量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94追I-6	
30	高坏				ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	V		Ⅴ区	

底面の最大径9.5cm、高さ15.0cm、重さ1,300ｇで、後面を破損している。

砥石（第60図３～第61図６）

砥石は４点出土した。３はⅧ区H－21グリッド出土である。柱状で石灰岩を使用している。長さ14.4cm、幅6.7cm、厚さ3.5cm、重さ221.1gを測る。研磨面は端部の１面と側面４面の計５面で、側面はかなり使い込まれて、中央部が磨り減っている。４はⅧ区12号住居跡から出土した。板状の砂岩の１面を研磨面として使用している。研磨面には敲打痕も残っており、敲石として使用された形跡もある。長さ12.5cm、幅9.7cm、厚さ5.3cm、重さ710.0gを測る。５はⅥ区３号住居跡上層から出土した泥岩製の柱状砥石の一部である。長さ7.5cm、幅6.4cm、厚さ3.3cm、重さ144.6gである。研磨面は端部の１面と側面の３面で、側面はかなり使い込まれて、中央部が磨り減っている。６はⅥ区４号住居跡から出土した。長さ7.9cm、幅8.4cm、厚さ2.6cm、重さ226.3gである。円盤状の砂岩の表裏２面を研磨面として使用しており、表面には断面Ｖ字形の溝が３本ある。

鉄器（第61図７、８）

住居跡から出土した鉄器のうち、復原可能なものは２点であった。７は鉄鏃で13号住居跡から出土した。形態は圭頭斧箭式で、先端部は三角形になっている。長さ8.4cm、頭部の幅2.0cm、厚さ0.2cm、重さ7.5gで、先端の一部を欠損している。８は鉄製の鋤先で８号住居跡から出土した。長さ13.5cm、幅12.5cm、重さ83.0gである。

紡錘車（第61図９）

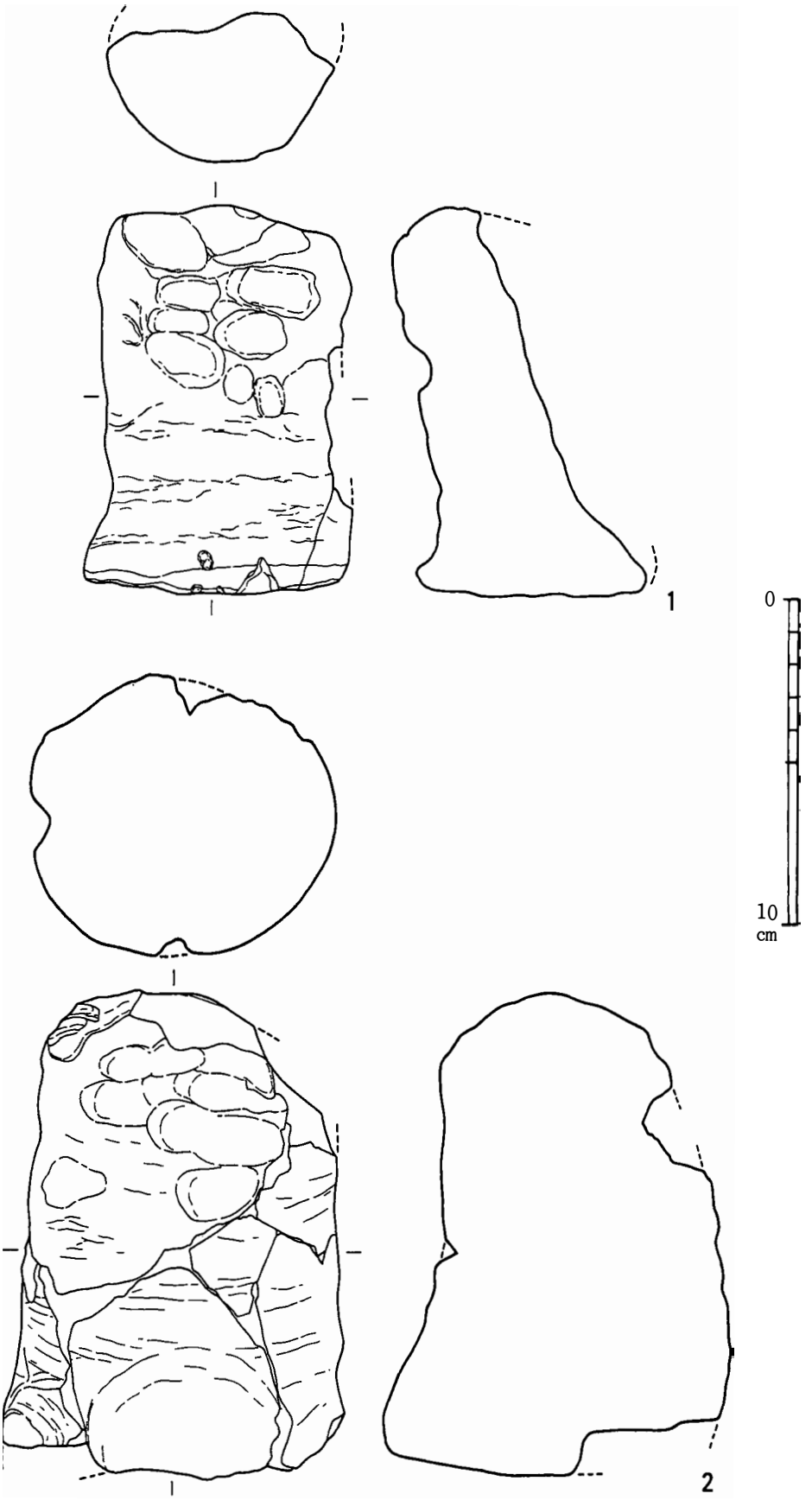
滑石製の紡錘車である。Ⅷ区19号住居跡から出土した。直径3.0cm、孔径0.8cm、厚さ1.1cm、重さ47.6gである。

勾玉（第61図10）

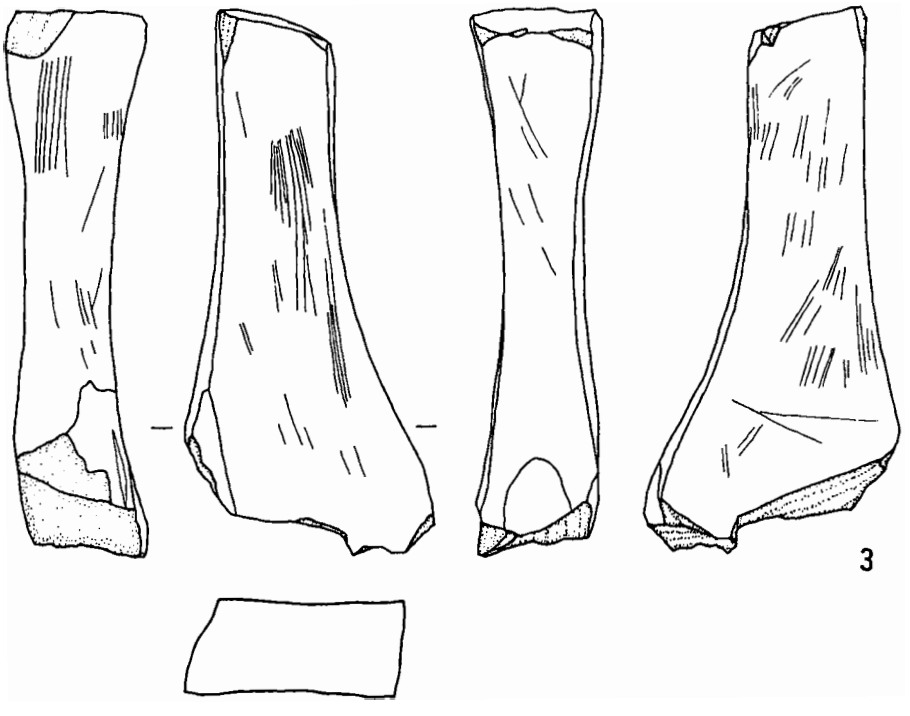
軟玉製である。Ⅷ区８号住居跡から出土した。長さ1.6cm、最大幅0.8cm、厚さ0.5cm、重さ0.9gで、全体的に調整は粗く、頭部に径約２mmの孔が表裏両面から穿孔されている。

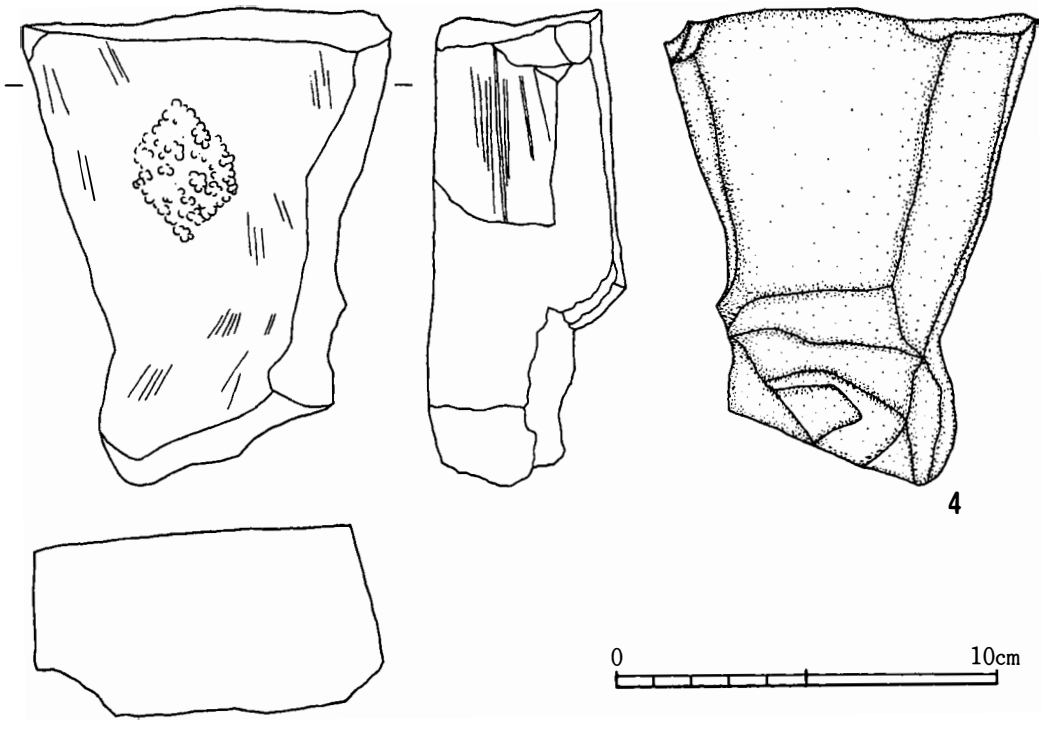
ガラス玉（第61図11）

Ⅶ区６号住居跡から出土した。青緑色で直径0.5cm、孔径0.15cm、厚さ0.3cm、重さ0.1gを計る。

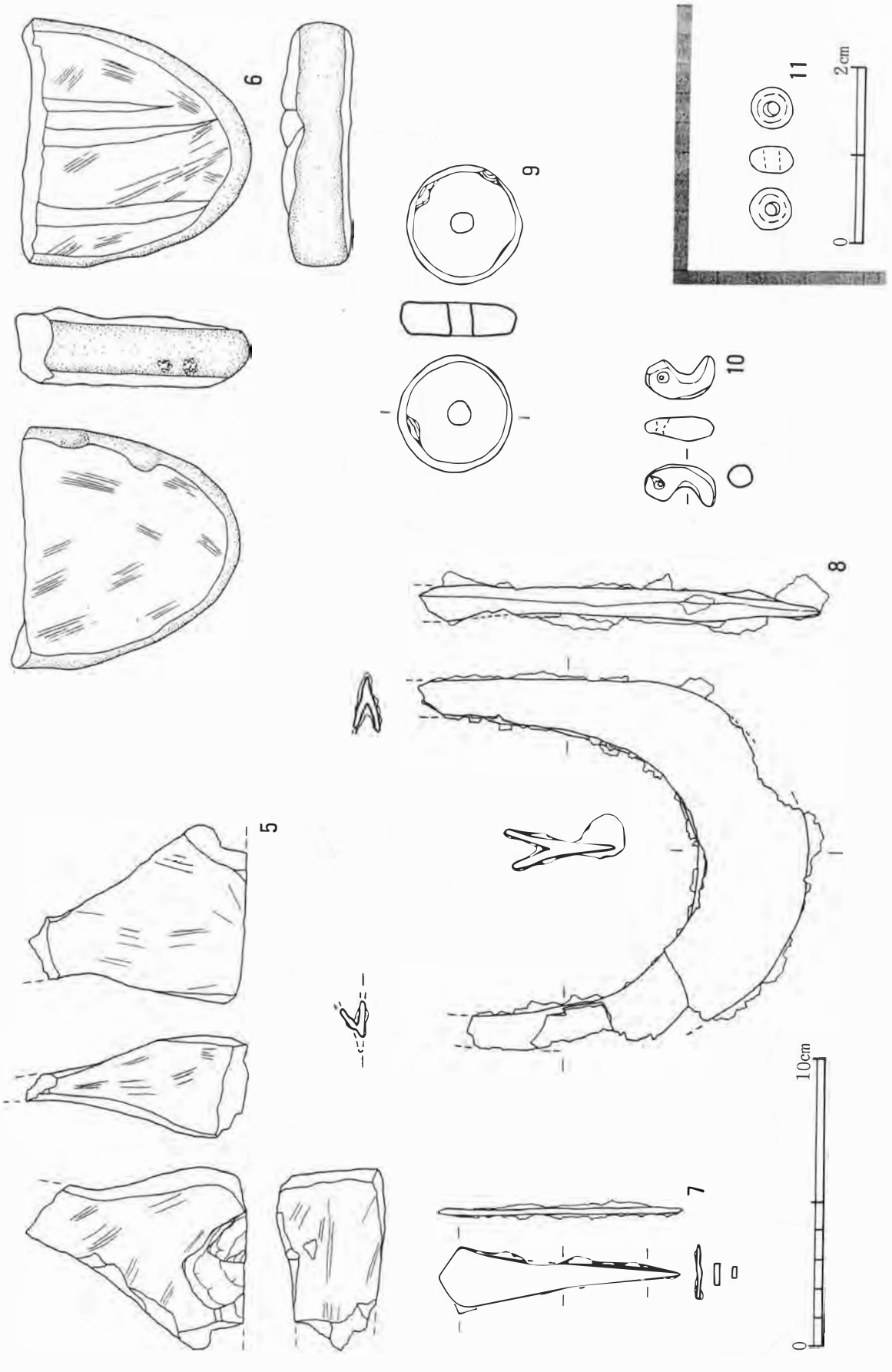


第59図　その他の古墳時代の遺物 (1)





第60図　その他の古墳時代の遺物 (2)



第61図　その他の古墳時代の遺物 (3)

第４節　歴史時代の遺物

１　土器（第62図）

迫ノ上遺跡の包含層からは古代・中世などの歴史時代の土器も出土した。これらの土器は特にⅧ区北東部のＨ－21、Ｇ－22グリッドから集中して出土している。ここでは、復原可能なものを中心に17点を掲載した。これらの土器を器種別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「歴史時代土器観察表」（第10表）にまとめている。

甕・甑（１～３、16、17）

１～３は甕または甑の口縁部である。いずれもわずかに膨らむ胴部で、頸部から外反して外に開く口縁を持つ。16、17は把手である。

坏・碗（４～12）

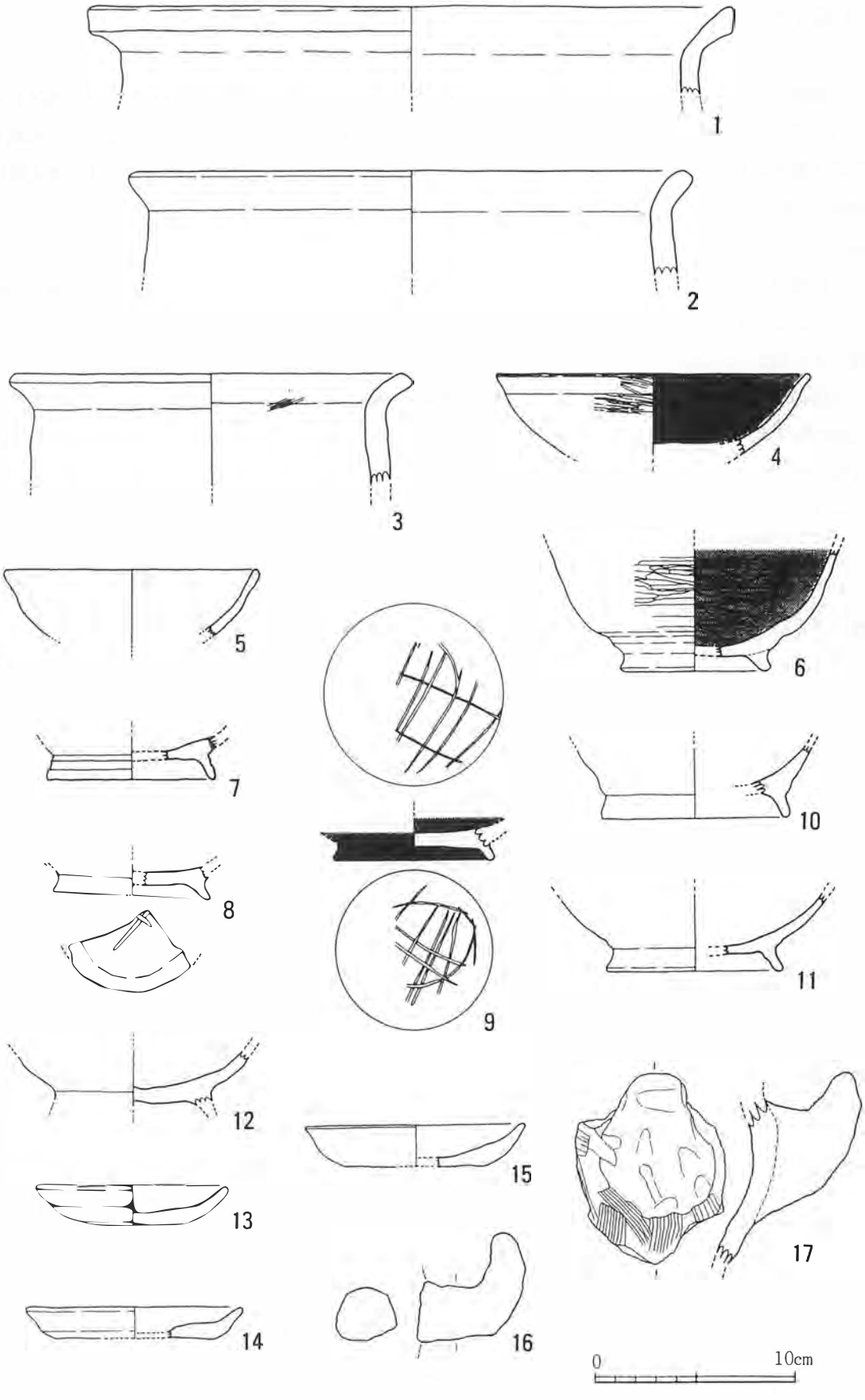
４、５は坏または碗の上半部である。いずれも内彎気味の体部を持ち、４の口唇はわずかに外反する。６～12は碗の下半部で、底部には高台を持つ。４と６は内黒で、内外面とも丁寧なヘラミガキが行われている。８は底部外面、９は底部内外面にヘラ記号を持つ。

皿（13～15）

13～15は皿である。

第10表　歴史時代土器観察表

遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	現存高(cm)	調整 (内面)	調整 (外面)	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調査区	出土地点	取上番号	備考
1	甕	32.2		4.2	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	小石、砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-22	94迫J-5 23	
2	甕	28.2		5.1	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	にぶ橙(7.5YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ6		94迫表土	
3	甕	19.6		5.3	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-22	94迫J-6	
4	碗	15.6		4.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	ｵﾘｰﾌﾞ黒（7.5Y3/2)	橙(5YR6/6)	砂粒微量、角閃石、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94迫I-6	
5	碗	14.6		3.4	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-21	94迫I-6	
6	碗		7.4	6.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ナデ	黒(10YR2/1)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-21	94迫I-6 2	
7	碗		8.2	2.1	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶ橙(7.5YR7/4)	砂粒微量、石英、長石、雲母を含む	良好	Ⅶ	H-21	94迫I-6	
8	碗		7.8	1.6	ヘラミガキ	ナデ、ヘラ記号	にぶ黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ6		94迫表土	
9	碗		8.0	2.0	ヘラミガキ、ヘラ記号	ヘラミガキ、ナデ、ヘラ記号	黒褐(10YR3/1)	褐灰(10YR4/1)	砂粒少量、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ6		94迫表土	
10	碗		9.2	3.4	ナデ	ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	5溝	94迫5溝土層	
11	碗		8.8	3.8	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	にぶ黄橙(10YR7/3)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-22	94迫J-5	
12	碗			2.7	ナデ	ナデ	にぶ橙(7.5YR6/4)	褐灰(7.5YR4/1)	砂粒少量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ6		94迫表土	
13	皿	9.6		2.1	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR7/4)	にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	G-22	94迫J-5	
14	皿	10.8		1.5	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	にぶ黄橙(10YR6/3)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ6		94迫表土	
15	皿	11.0		2.0	ナデ	ナデ	にぶ黄橙(10YR6/4)	にぶ黄橙(10YR6/4)	砂粒微量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅲ3			
16	把手					ナデ		にぶ黄橙(10YR7/4)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅰ	1溝	1区C-5溝	
17	把手					ナデ、ハケ目		浅黄橙(7.5YR8/3)	砂粒多量、石英、角閃石、長石を含む	良好	Ⅶ	H-21	94迫I-6 1	



第62図　出土歴史時代土器

第Ⅲ章　まとめ

1　縄文時代

迫ノ上遺跡からは、竪穴住居跡１基、集石遺構１基、埋甕遺構１基が確認された。本来はもっと多くの遺構が存在していたものと思われるが、削平などで消滅したものと思われる。特徴的な共伴土器がなく、細かい時期を割り出すことはできなかったが、特徴などから、住居跡と埋甕は晩期、集石は早期のものと思われる。

一方、包含層から出土した縄文土器は、早期、中期、後期、晩期のもので、ほぼ縄文時代全体にわたっているが、特に早期前半の押型文系土器と後期後半から晩期の黒色磨研系の土器が多数を占めている。

押型文土器は、木崎康弘氏の編年案によると、早水台式～沈目式にあたり、周辺の庵ノ前遺跡、古閑山遺跡の出土押型文土器の時期とほぼ一致している。

また、後期後半と晩期の土器は、ほぼ三万田式～黒川式にあたり、突帯文系土器も数点出土しているが、主体をなすのは古閑式にあたる時期のものと考えられる。

2　古墳時代

古墳時代と思われる遺構は、竪穴住居跡がⅥ区から４基、Ⅶ区から２基、Ⅷ区から12基の計18基、掘立柱建物跡がⅧ区から１基確認されている。

このうち、１号～６号住居跡と12号住居跡は、かまどを持たず、出土する土器も土師器のみである。一方、８号～10号住居跡、19号住居跡はかまどを持ち、土師器に加えて須恵器も出土する。このことから、古墳時代の集落は、大きく２つの時期に分けることができるものと思われる。

土師器のみの住居跡から出土した甕・壷は、丸底で最大径が中位かやや上位にあり、球形に近い器形をもつ。また、小型丸底壷の口径は、体部径と同じかやや小さい。野田拓治氏による中九州地方の古式土師器編年案をもとに見ると、これらの土師器は、特徴などからⅢ期に該当し、実年代は４世紀末から５世紀初頭に位置するものと考えられる。なお、３号住居跡出土の土師器は、複合口縁や外反口縁など、他のかまどを持たない住居跡に比べると、明確に時期差を付けることはできないものの、外反口縁などやや新しい要素を持っている。また、５号住居跡は３基の炉をもつ台形状の大型住居で、北西部は削平により消滅しているが、長辺９ｍ、短辺8.5ｍを測り、床面積は約60㎡近くになるものと思われる。中央部に３基の炉があり、東側には上面が硬化し、回りを小土坑が囲む50×40cmほどの高まりがあり、出入口に伴う何らかの施設の跡ではないかと考えられる。出土した土師器はⅢ期にあたり、４世紀末から５世紀初頭のものと思われるが、この時期の大型住居は、現在のところ、県内では類例がない。

一方、かまど付き住居跡から出土した須恵器は、坏の蓋受けの部分の立ち上がりが短く内傾し、坏身にヘラケズリが行われている。また、蓋はつまみのあるものとないものがある。つまみのあるものは天井部にカキメ調整と天井部と体部の境に沈線を持ち、つまみのないものは天井部にヘラケズリが行われている。これらの特徴から、出土須恵器は網田龍生氏による古代肥後の土器の編年案における大江－２期に近似した特徴をもつ。大江－２期は北九州における時期区分のⅣ期に対応し、６世紀後半に位置すると考えられる。また共伴する土師器も球形で短かい外反口縁を持つ壷など、６世紀の特徴を持っており、かまど付きの住居跡群はほぼこの時期に位置づけられるものと思われる。このかまどをもつ住居跡群はⅧ区から集中して確認されており、この時期の集落の中心はこの部分にあったものと思われる。

掘立柱建物跡は桁行３間（約720cm）×梁行２間（510cm）の建物で、一部は12号住居跡を切る形になる。時期の特定が可能な遺物は出土しなかったが、柱穴の埋土中より土師器片が出土したことから、古墳時代のものとした。

３　歴史時代

歴史時代の遺構としては、調査区全体より７本の溝が確認されている。埋土から近世の陶磁器等が出土したため、ほとんどは近世以降のものと考えられる。溝は現在の筆境に並行する形で確認されることが多く、耕作に伴って畑の１筆１筆を区画していたものと考えることができる。また、埋土中に道路状の硬化面が確認された溝があるが、このことから溝が一部埋まった時点で通路として使われていたことがわかる。

溝以外の包含層からは近世以降の陶磁器の他に古代から中世にかけての土器も出土している。これらの土器は特にⅧ区北東部のＨ－21、Ｇ－22グリッドから集中して出土しているが、削平等により、対応するような遺構は確認できなかった。しかし、この部分には古墳時代の住居跡が集中していることから、以後も引き続き、この周辺で集落が営まれていた可能性が大きい。

参考文献

『日本地名大辞典43熊本県』角川書店　1987

『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会　1998

『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会　1969

『新熊本市史 史料編第一巻 考古史料』新熊本市史編纂委員会　1996

浦田信智『西谷遺跡』熊本県教育委員会　1985

平岡勝昭『新南部・潤野遺跡』熊本県教育委員会　1986

江本直他『竜田陳内遺跡』熊本県教育委員会　1988

大田幸博他『庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ』熊本県教育委員会　1991

濱田彰久『庵ノ前遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会　1997

大川清他『日本土器事典』雄山閣　1996

戸沢充則他『縄文時代研究事典』雄山閣　1996

鈴木道之助『石器入門事典　縄文』柏書房　1991

可児通宏「押型文系土器様式」『縄文土器大観』小学館　1989

新東晃一「塞ノ神・平栫式土器様式」『縄文土器大観』

新東晃一「九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』

宮本一夫「轟式土器様式」『縄文土器大観』

田中良之「阿高式土器様式」『縄文土器大観』

本田道輝「市来・一湊式土器様式」『縄文土器大観』

松永幸男「九州磨消縄文系土器様式」『縄文土器大観』

島津義昭「黒色磨研系土器様式」『縄文土器大観』

山崎純男「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告Ⅰ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1991

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅱ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1992

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告Ⅱ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場　1993

宮坂孝宏『白鳥平Ａ遺跡』熊本県教育委員会　1993

宮坂孝宏『白鳥平Ｂ遺跡』熊本県教育委員会　1994

坂田和弘『深水谷川遺跡』熊本県教育委員会　1994

古森政次『ワクド石遺跡』熊本県教育委員会　1994

木崎康弘『無田原遺跡』熊本県教育委員会　1995

木崎康弘『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会　1996

坂田和弘『鶴羽田遺跡』熊本県教育委員会　1998

柳田康雄「土師器の編年　２　九州」『古墳時代の研究６』雄山閣　1993

舟山良一「須恵器の編年　２　九州」『古墳時代の研究６』

舟山良一「Ⅰ　北部九州」『須恵器集成図録第５巻西日本編』雄山閣　1996

池田榮史「Ⅱ　南部九州」『須恵器集成図録第５巻西日本編』

野田拓治「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会　1982

古庄浩明「中九州における古式土師器の成立」『國學院大學考古学資料館紀要第５輯』國學院大學考古学資料館　1989

網田龍生『大江遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会　1993

松本健郎他『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県教育委員会　1980

野田拓治『上の原遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会　1985

丸山伸治他『陣山遺跡』熊本県教育委員会　1996

写 真 図 版

Ⅰ区全景（完掘）

Ⅰ区調査風景

Ⅱ区全景（完掘）

図版２

Ⅱ区集石遺構

Ⅱ区土師器出土状況

Ⅱ区土師器出土状況

Ⅲ区全景（完掘）

Ⅳ区全景（完掘）

Ⅳ区１号、２号住居跡

図版４

Ⅴ区全景

Ⅴ区埋甕遺構

Ⅵ区全景（表土剥ぎ後）

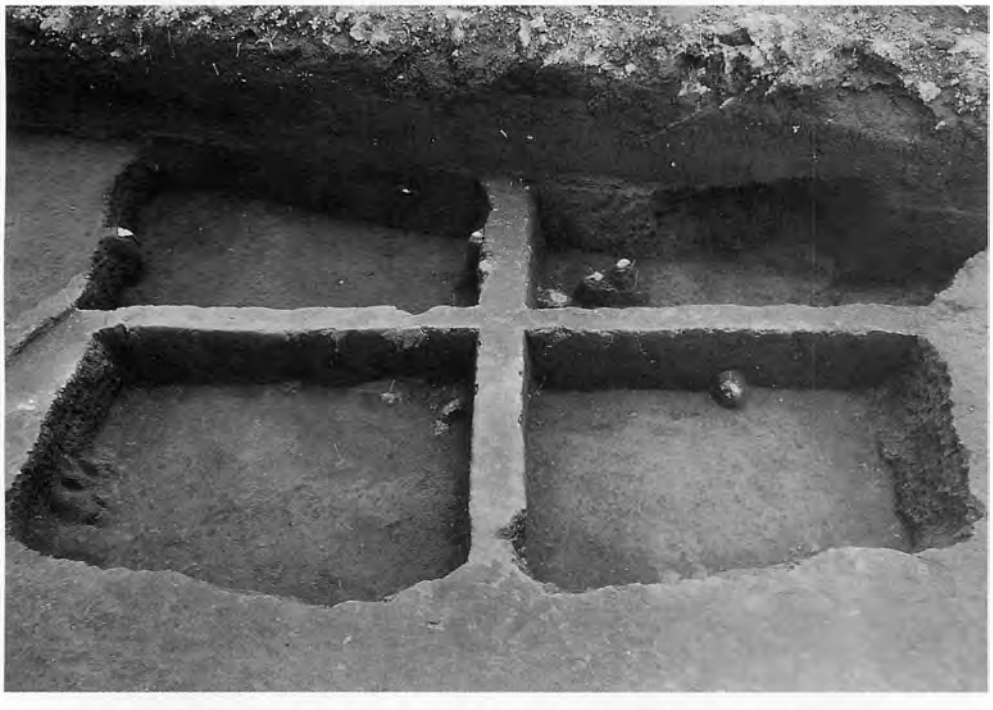
Ⅶ区、Ⅷ区全景
（表土剥ぎ後）

１号住居跡（完掘）

２号住居跡（完掘）

図版６

３号住居跡
（遺物出土状況）

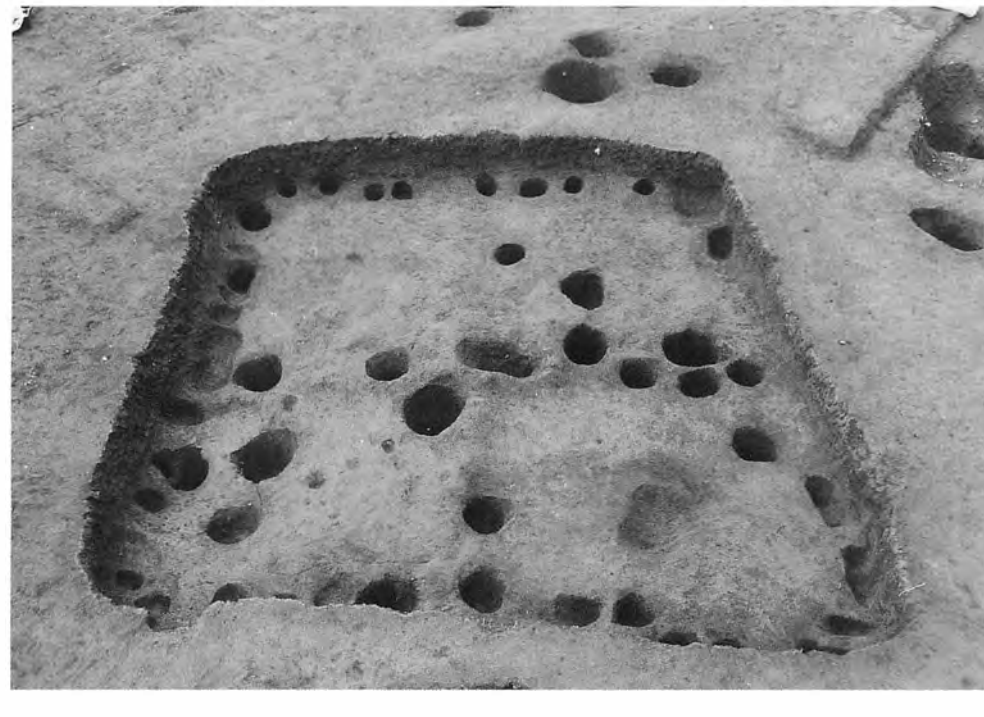


４号住居跡
（遺物出土状況）

５号住居跡
（完掘、南より）

５号住居跡
（完掘、西より）

５号住居跡遺物出土状況



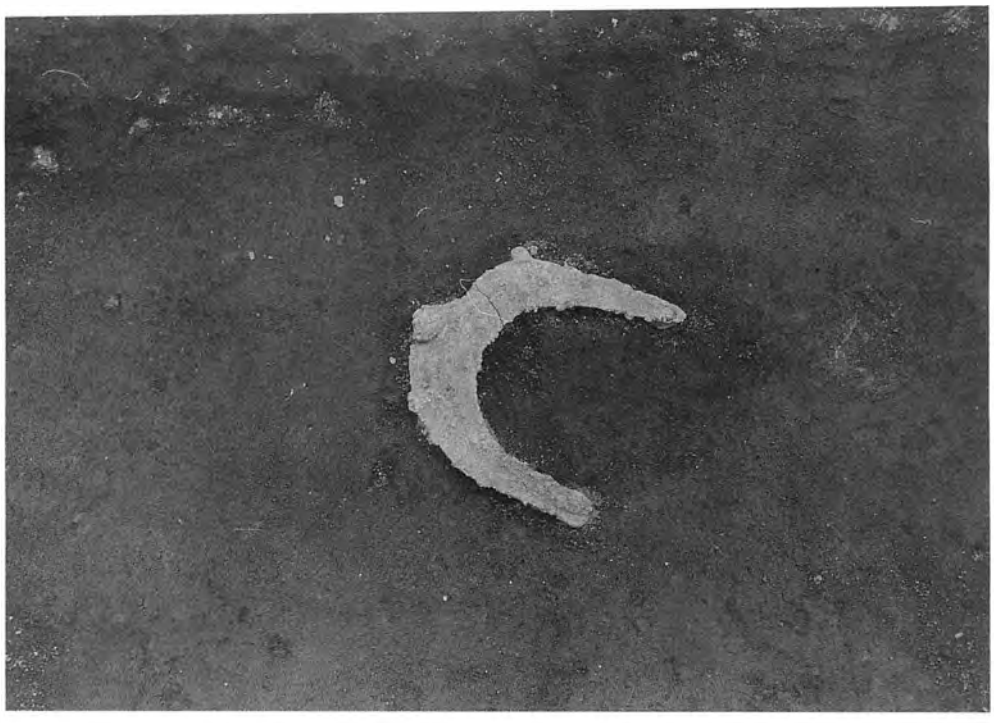
６号住居跡（完掘）

図版８

７号住居跡（完掘）

８号住居跡（完掘）

８号住居跡かまど検出状況



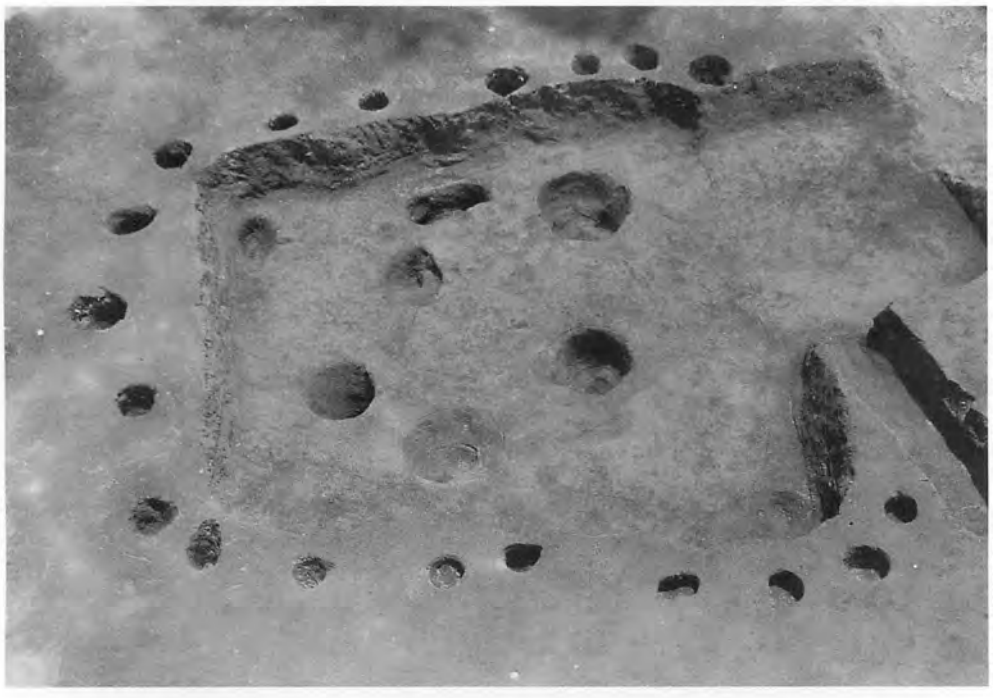
８号住居跡鉄鋤出土状況

９号住居跡（完掘）

９号住居跡かまど検出状況

図版10

10号住居跡（完掘）



11号住居跡（完掘）

12号住居跡（完掘）

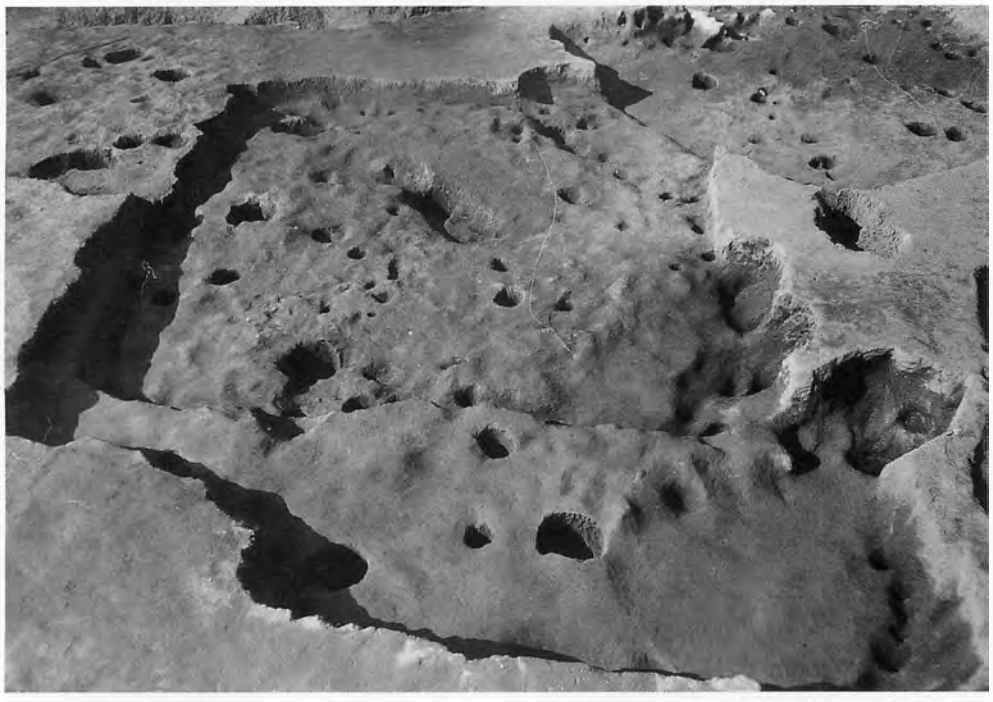
13号住居跡（完掘）

14号住居跡（完掘）

15、16、17、18号住居跡
（遺物出土状況）

図版12

15号住居跡かまど検出
状況



16、17、18号住居跡
（完掘）

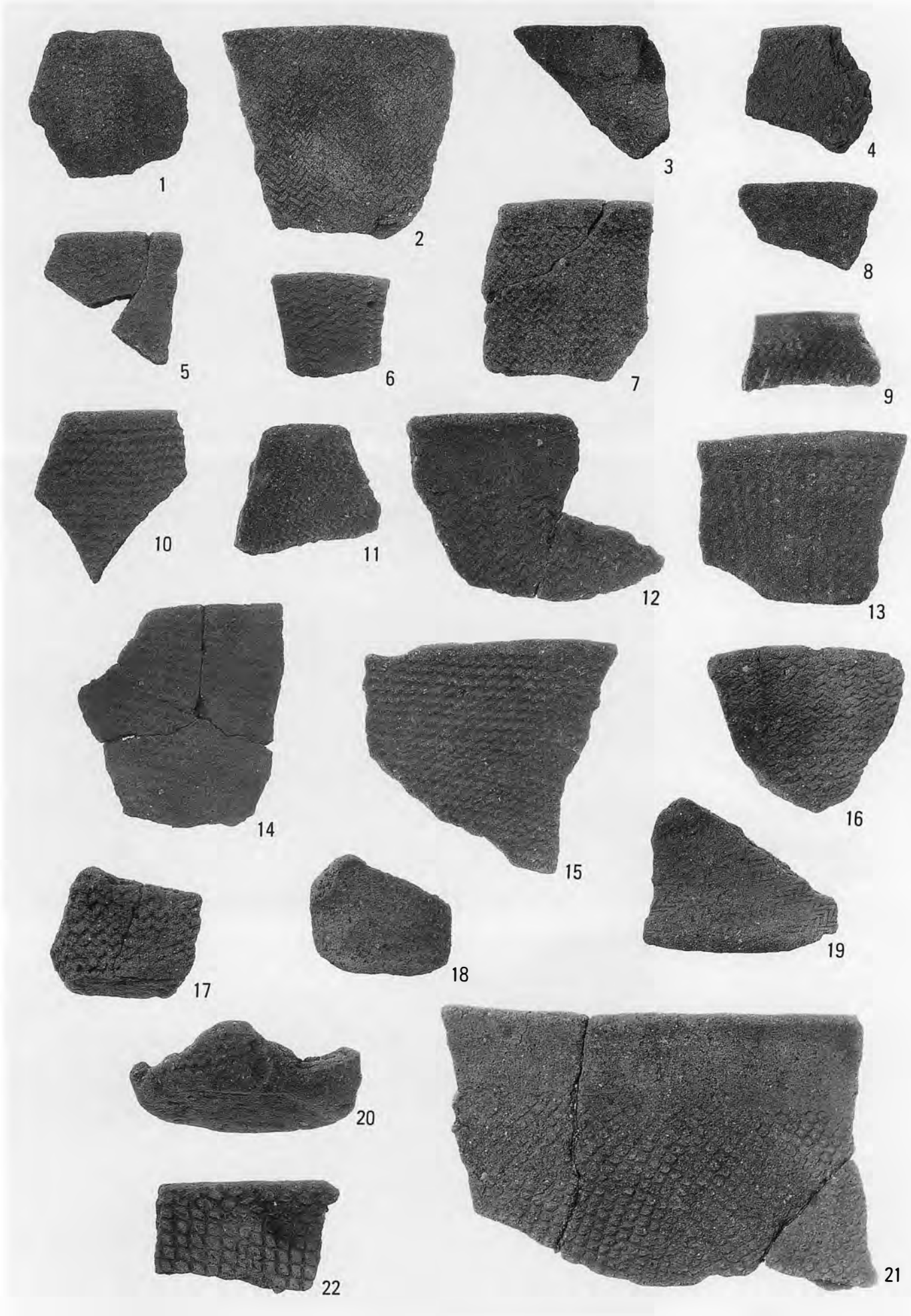
19号住居跡（完掘）

19号住居跡
（遺物出土状況）

１号掘立柱建物跡
（完掘）

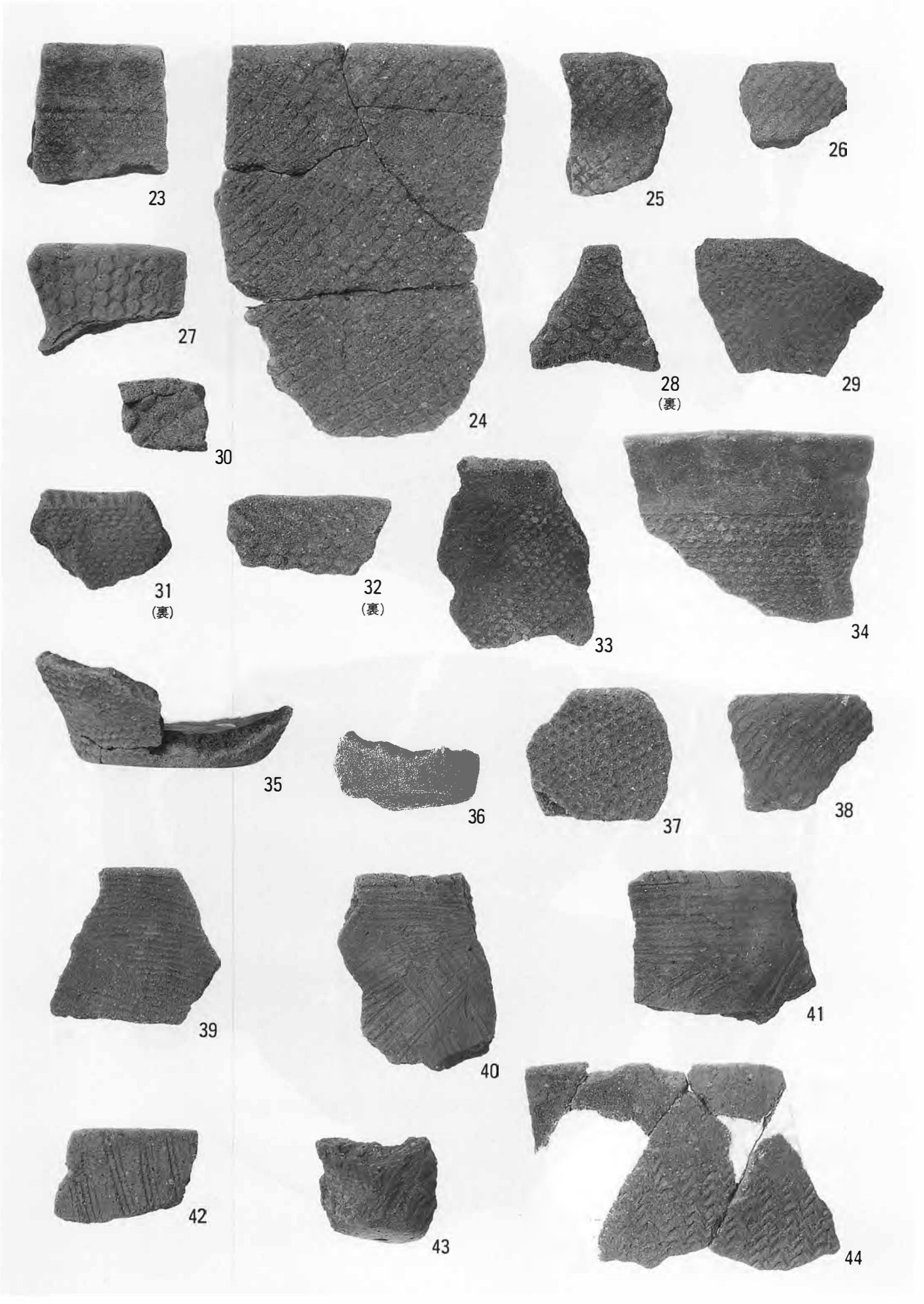
Ⅸ区全景（完掘）

図版14

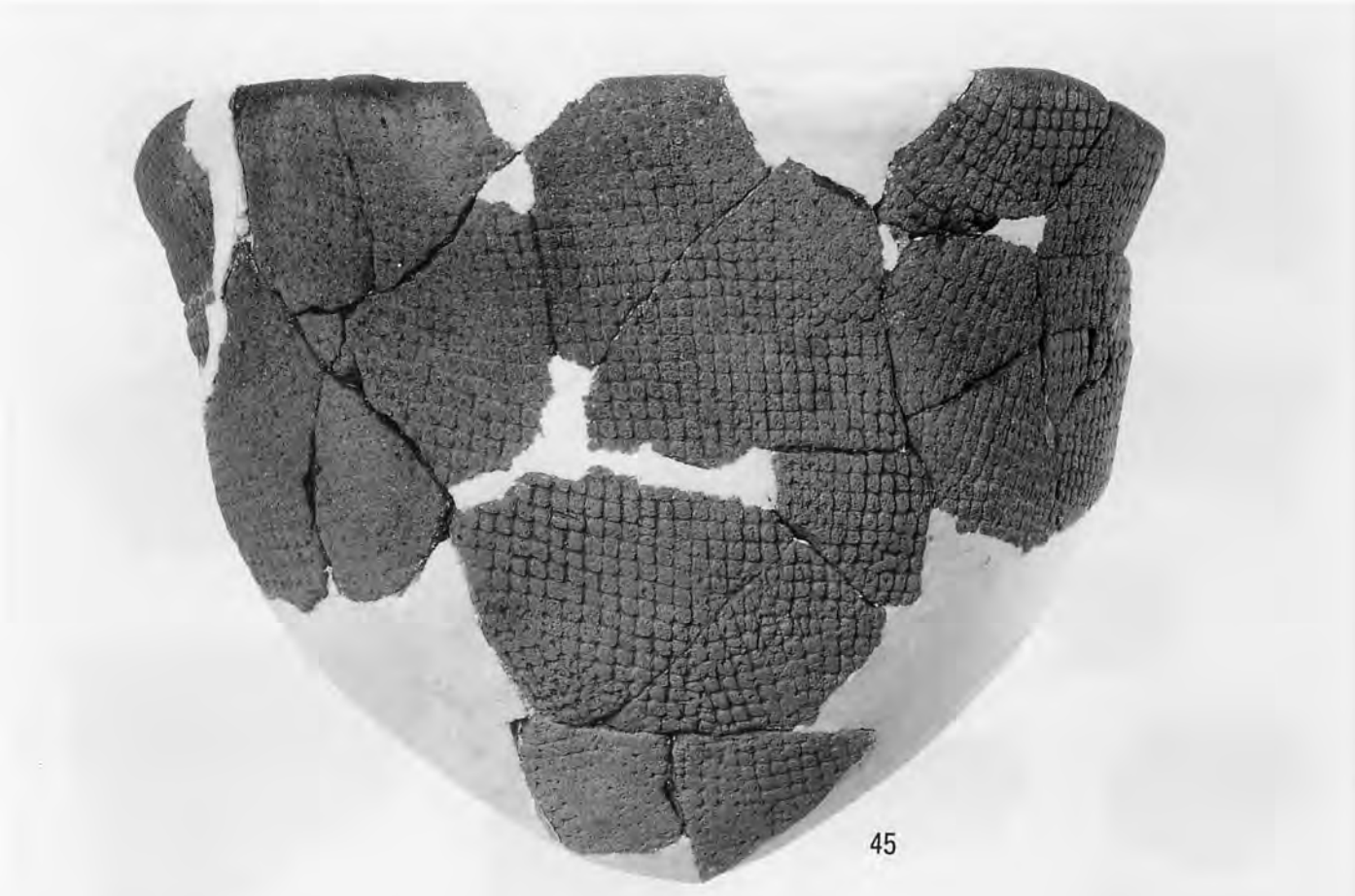


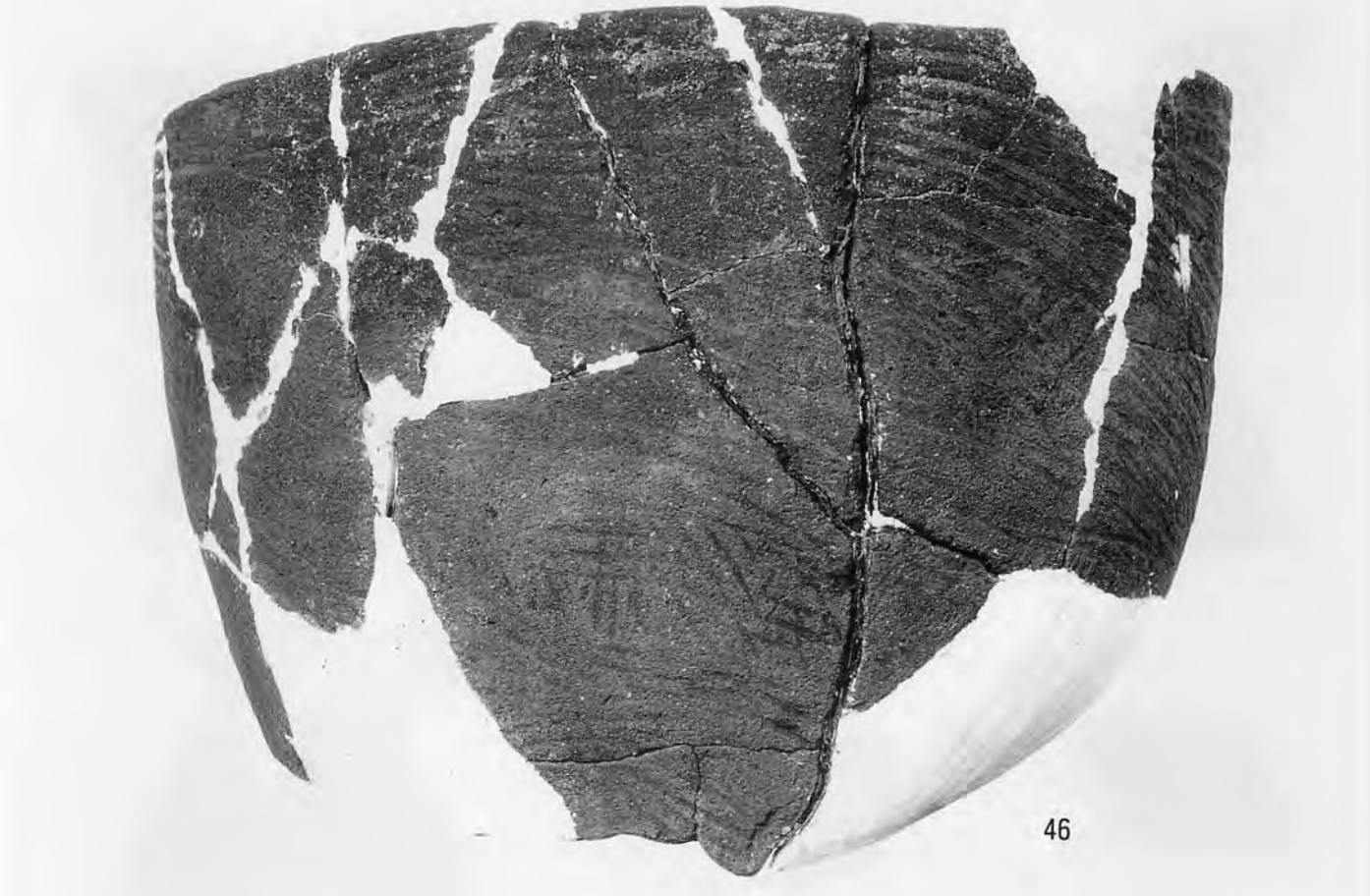
出土縄文土器（１～22）

図版15



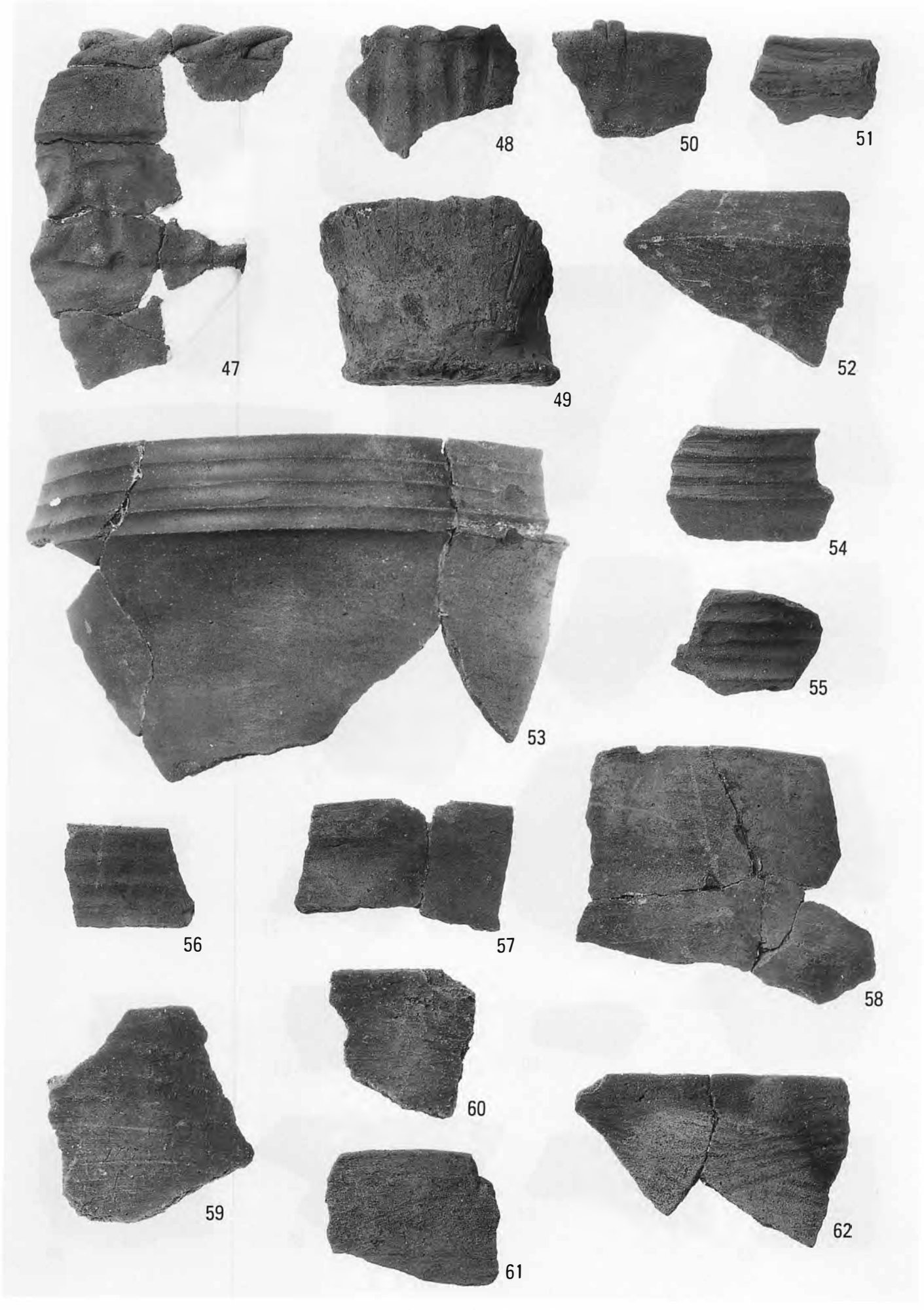
出土縄文土器（23～44）





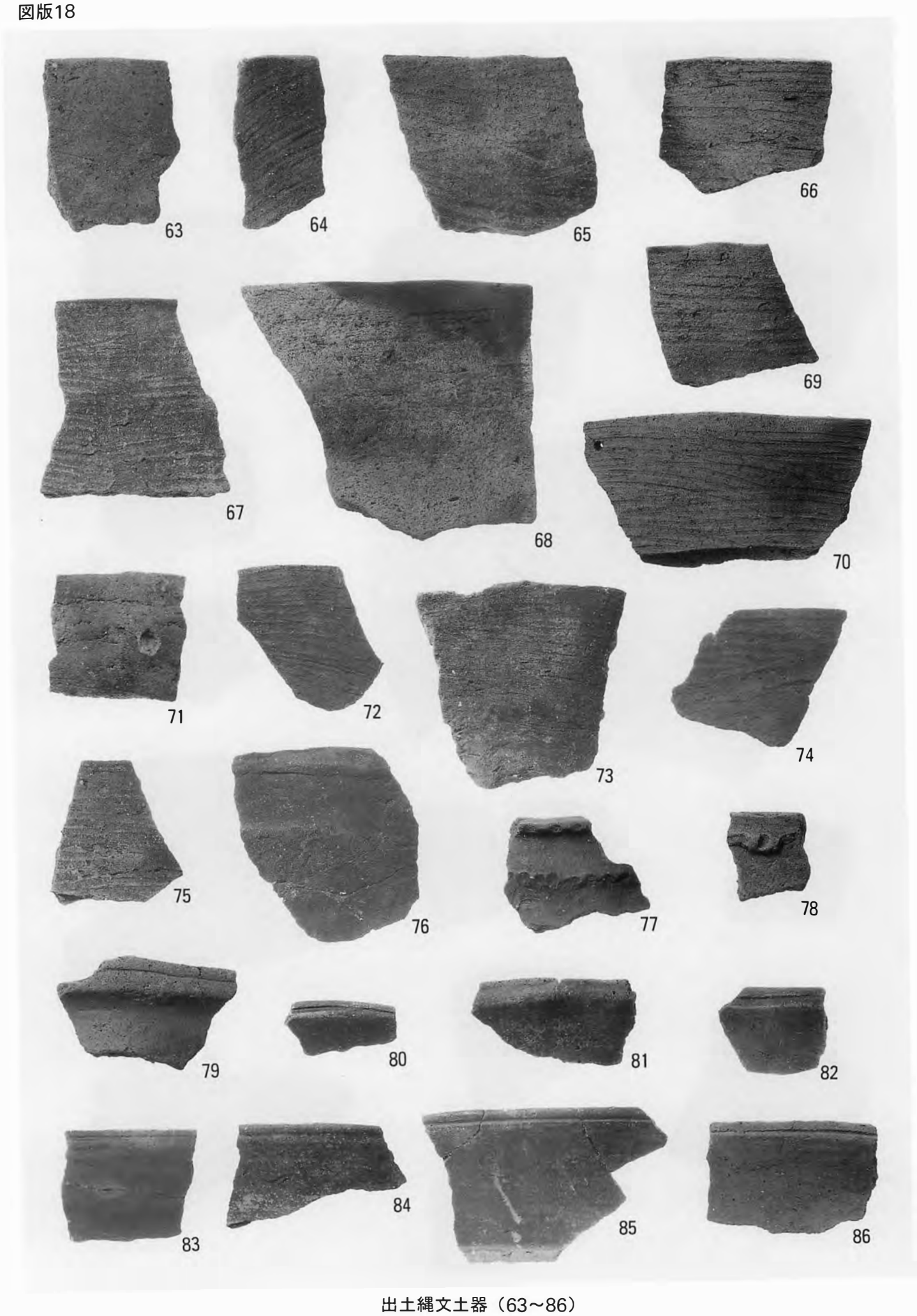
出土縄文土器（45、46）

図版17



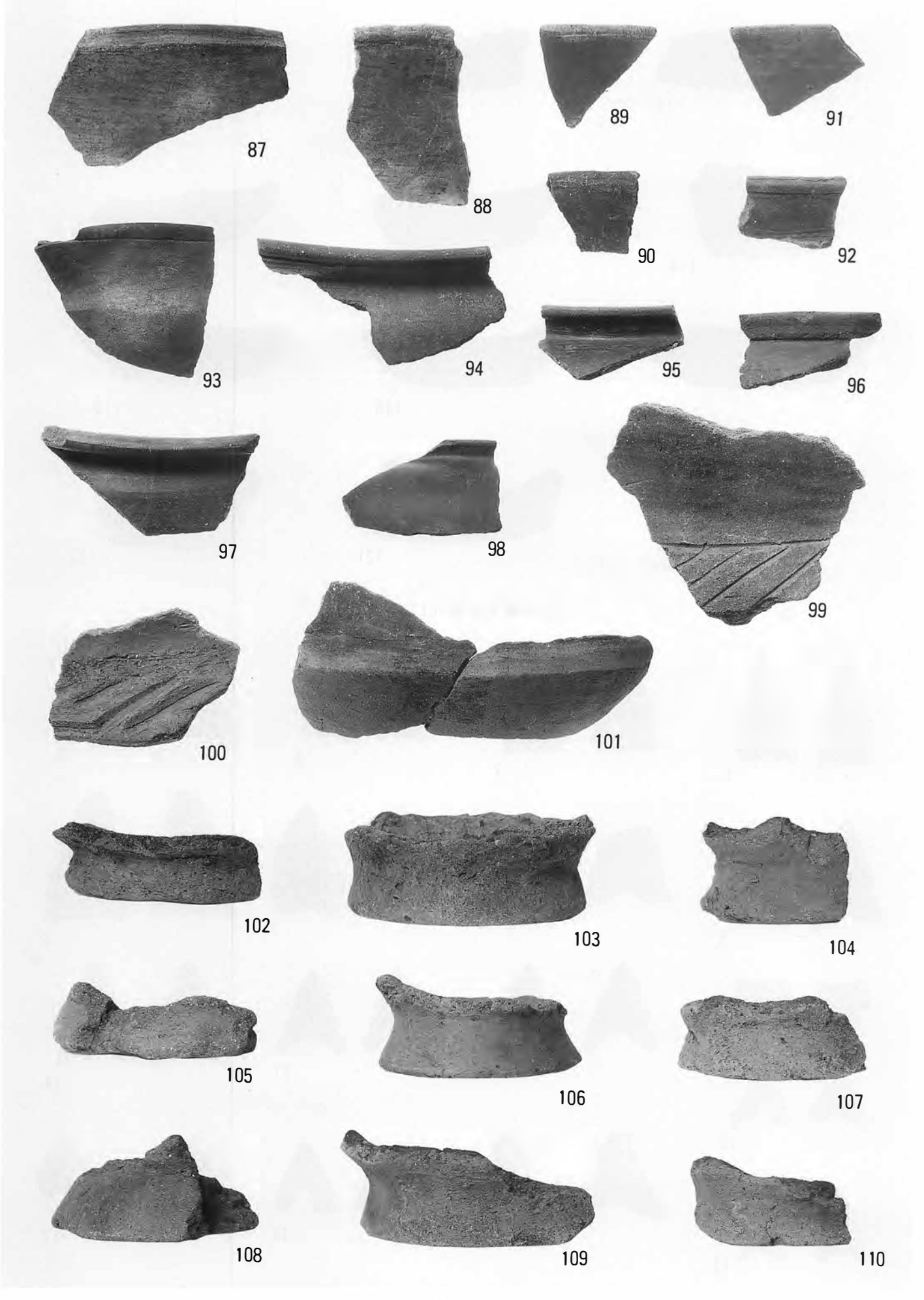
出土縄文土器（47～62）

図版18



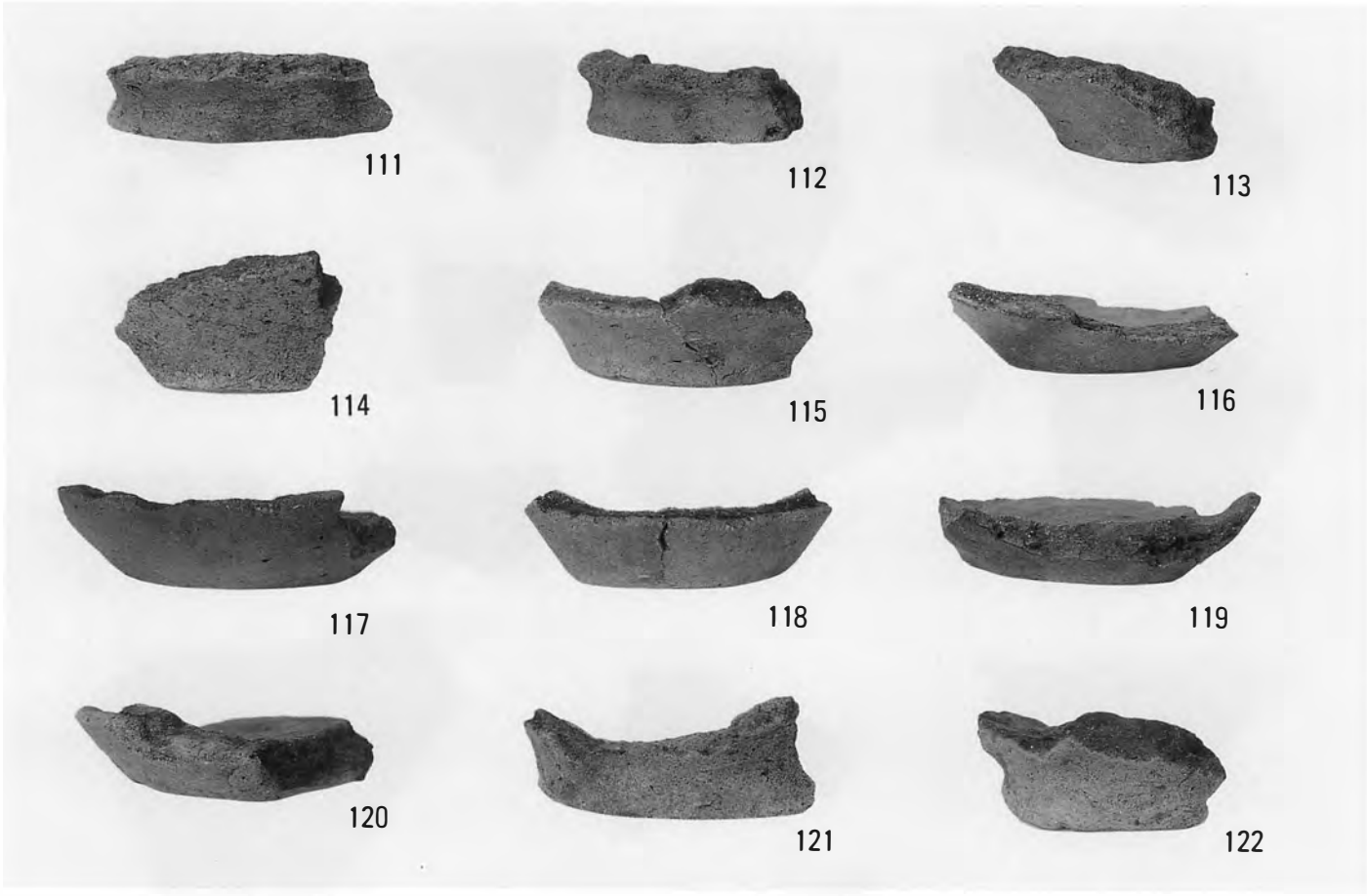
出土縄文土器（63～86）

図版19

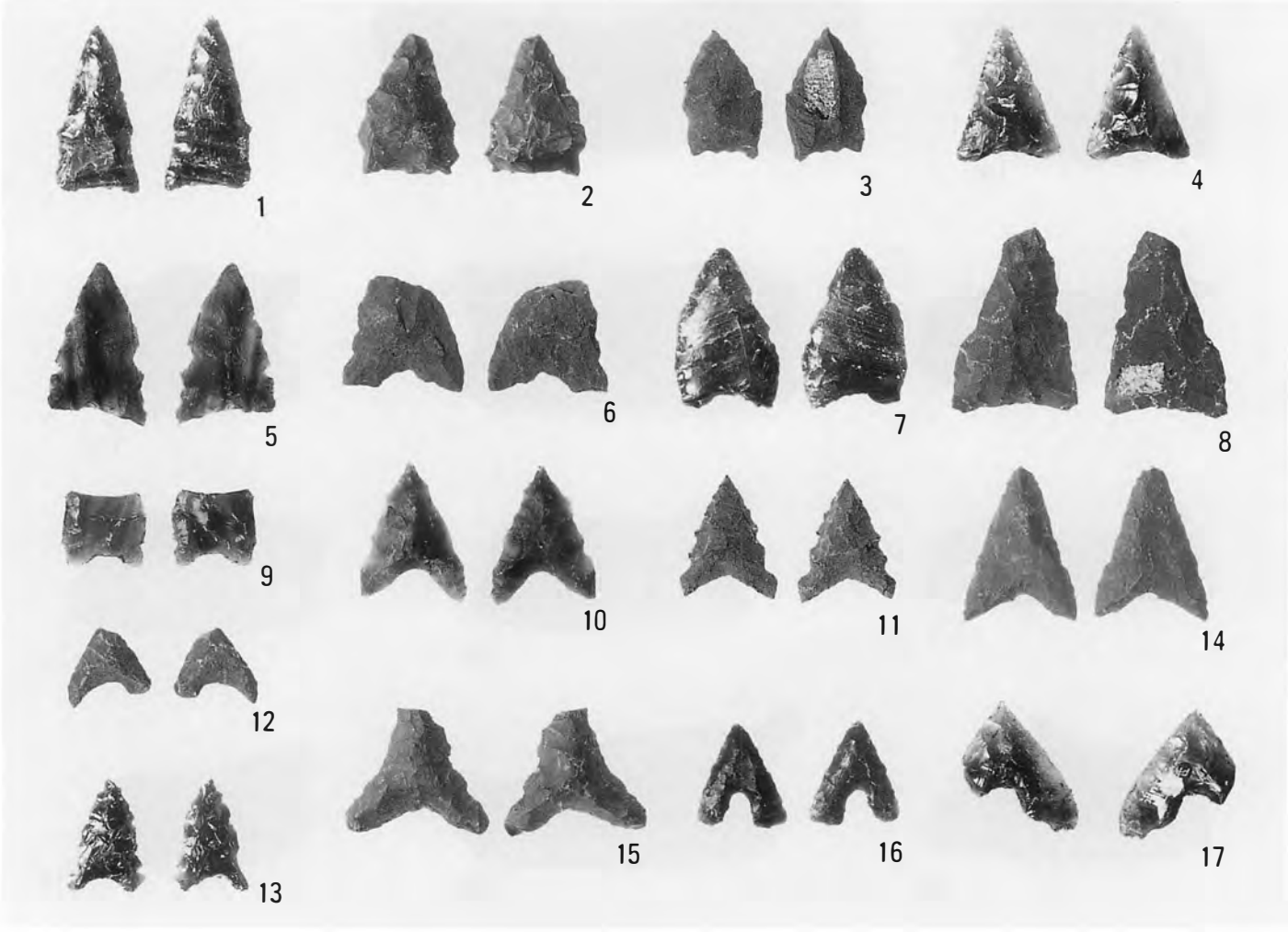


出土縄文土器（87～110）

図版20

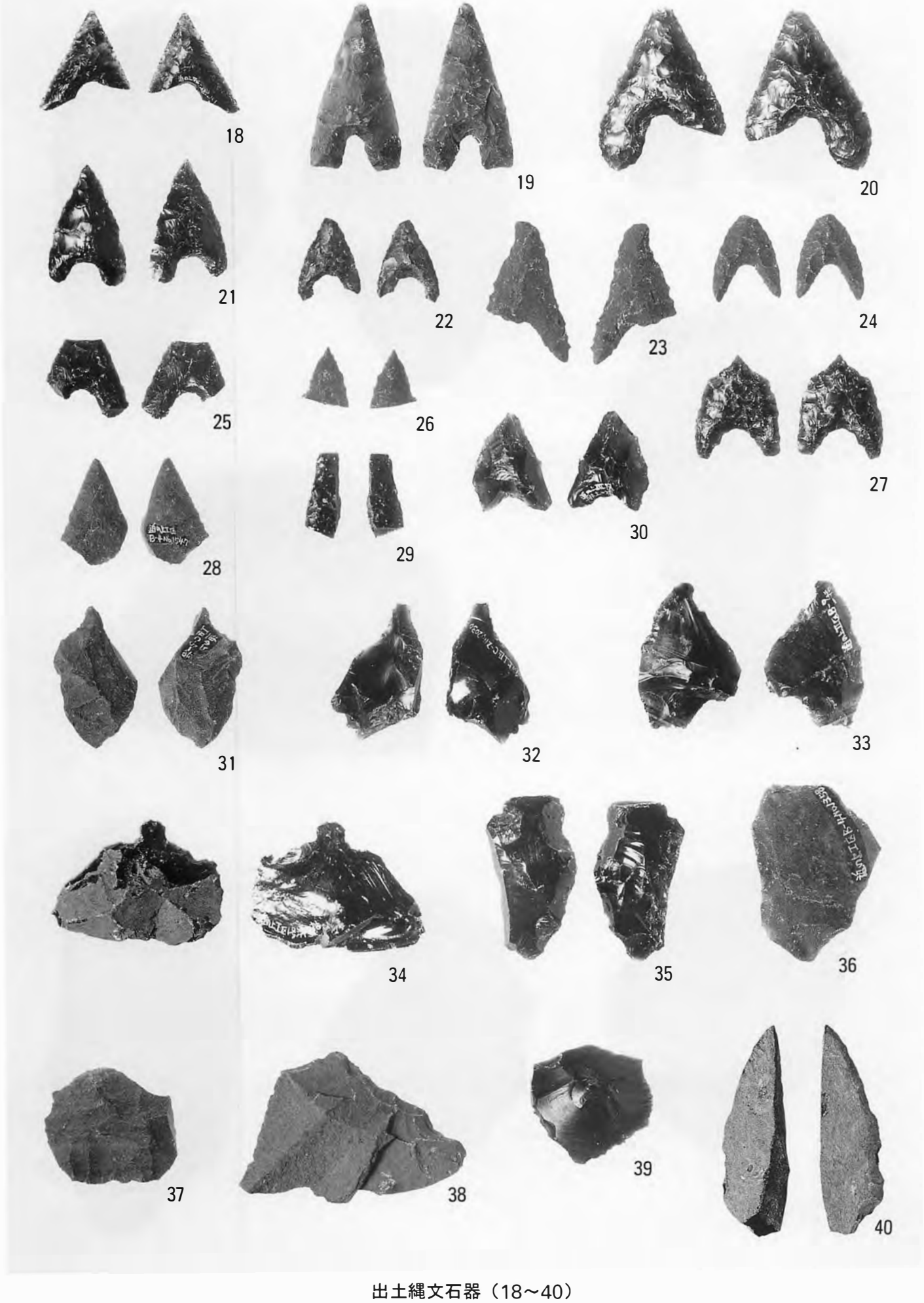


出土縄文土器（111～122）



出土縄文石器（１～17）

図版21



出土縄文石器（18～40）

41

42

43

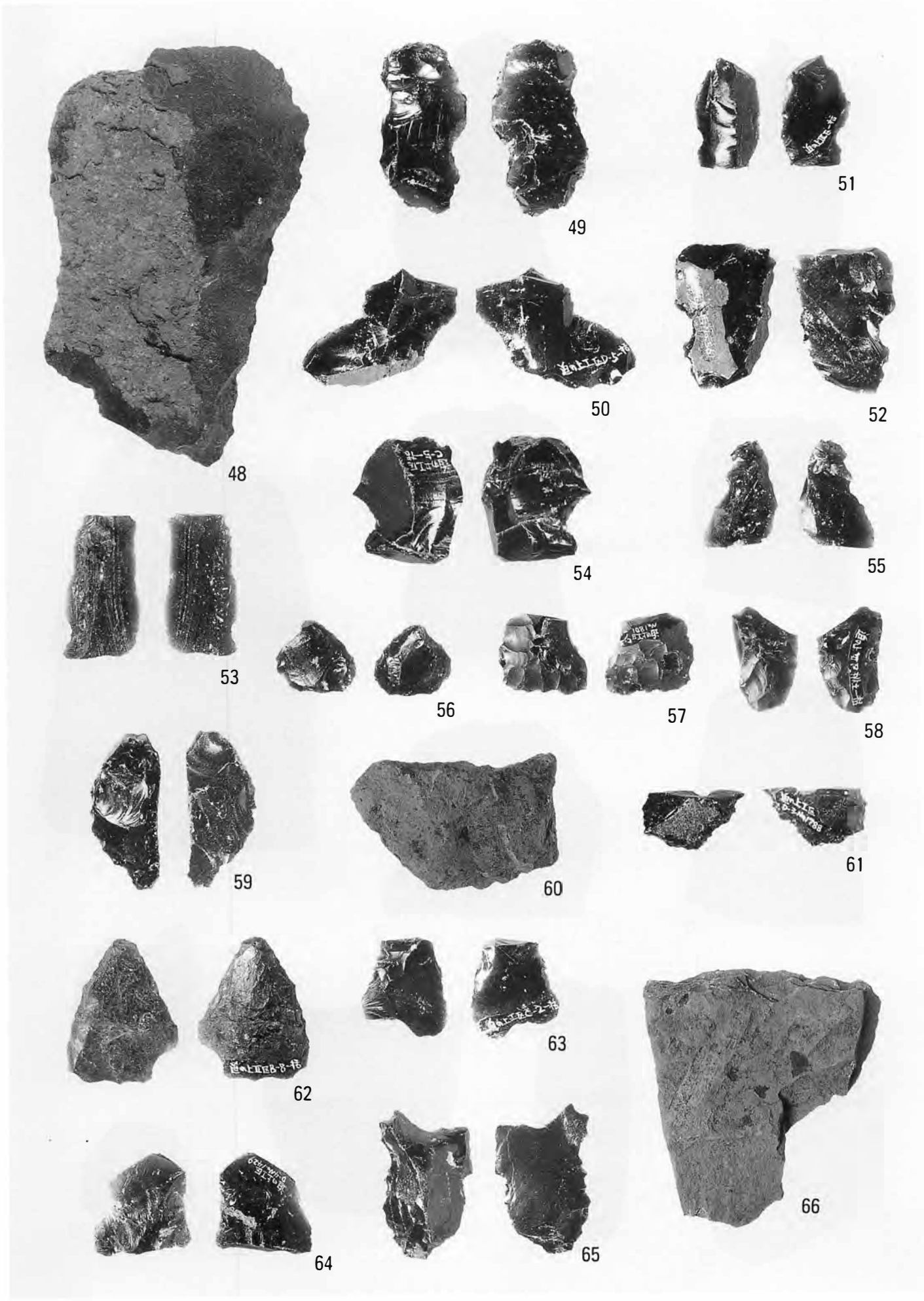
44

45

46

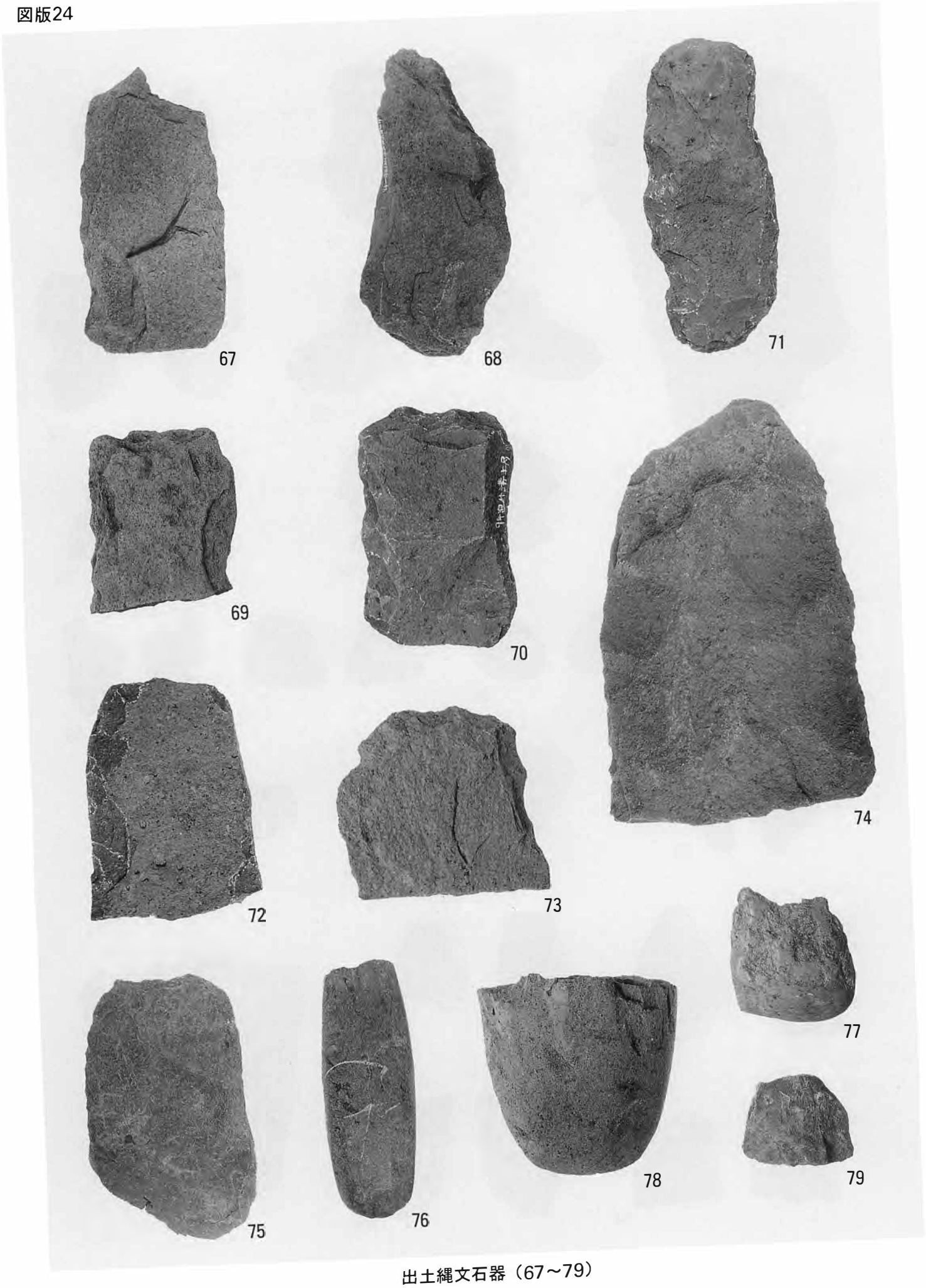
47

出土縄文石器（41～47）



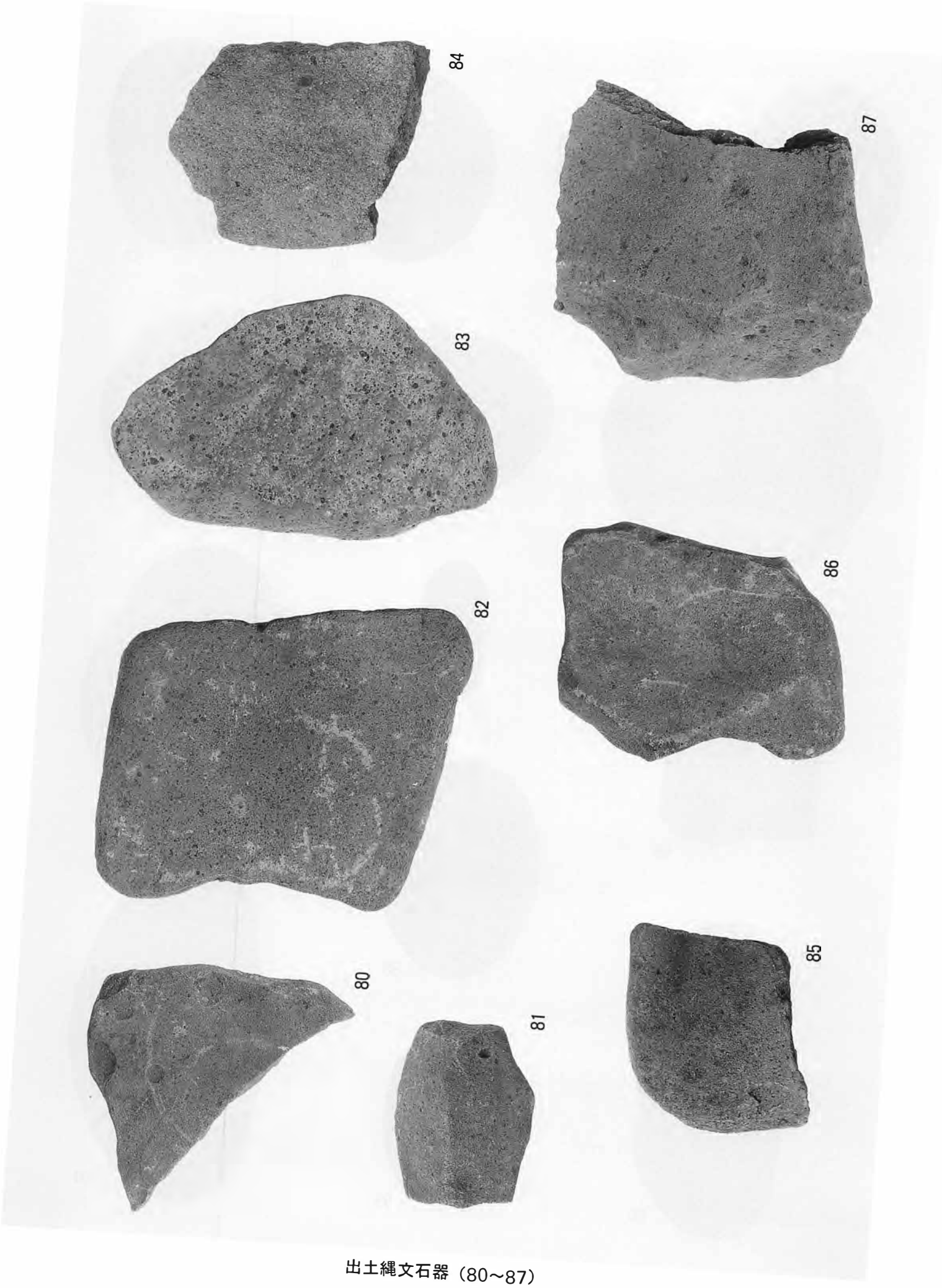
出土縄文石器（48～66）

図版24

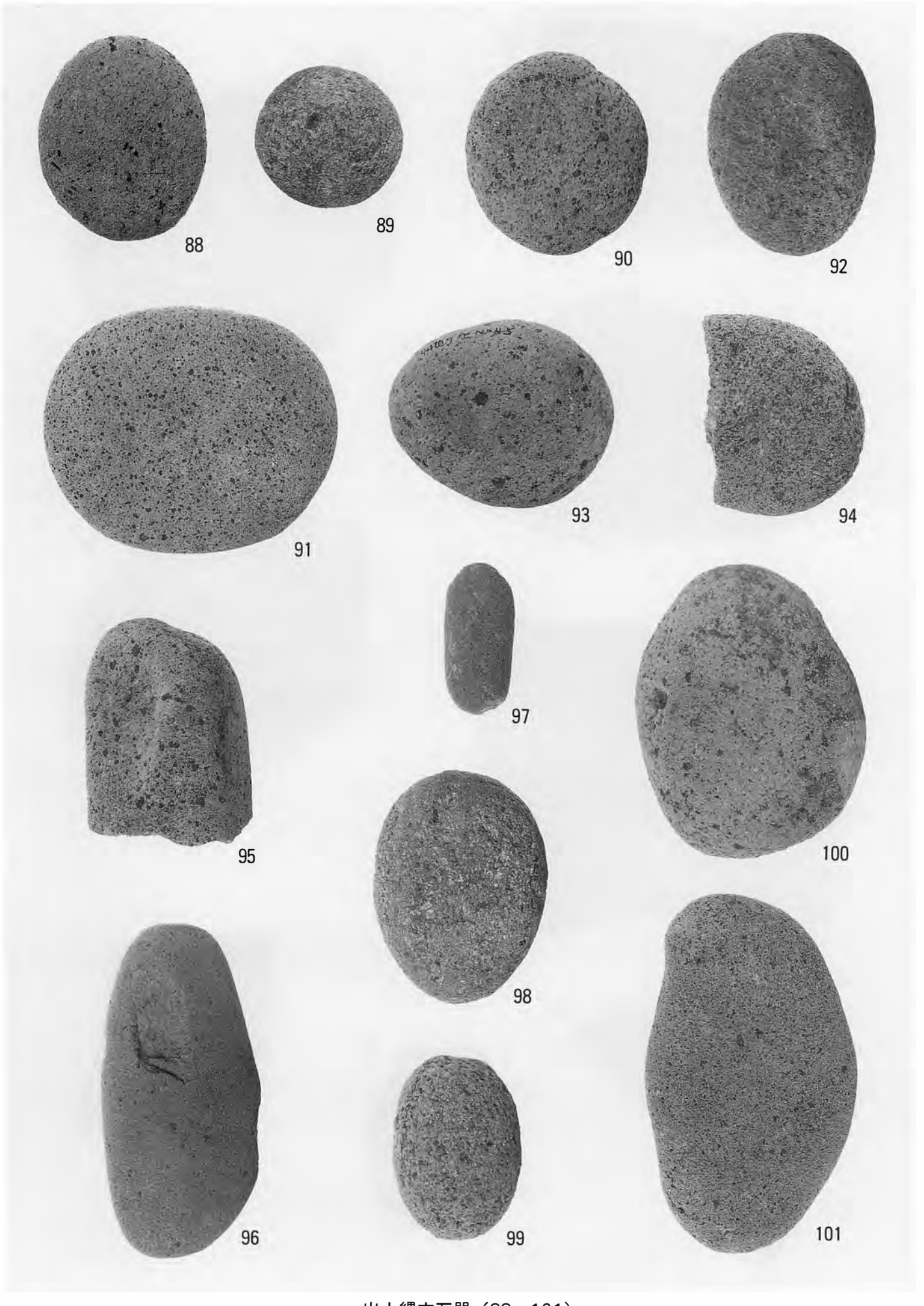


出土縄文石器（67～79）

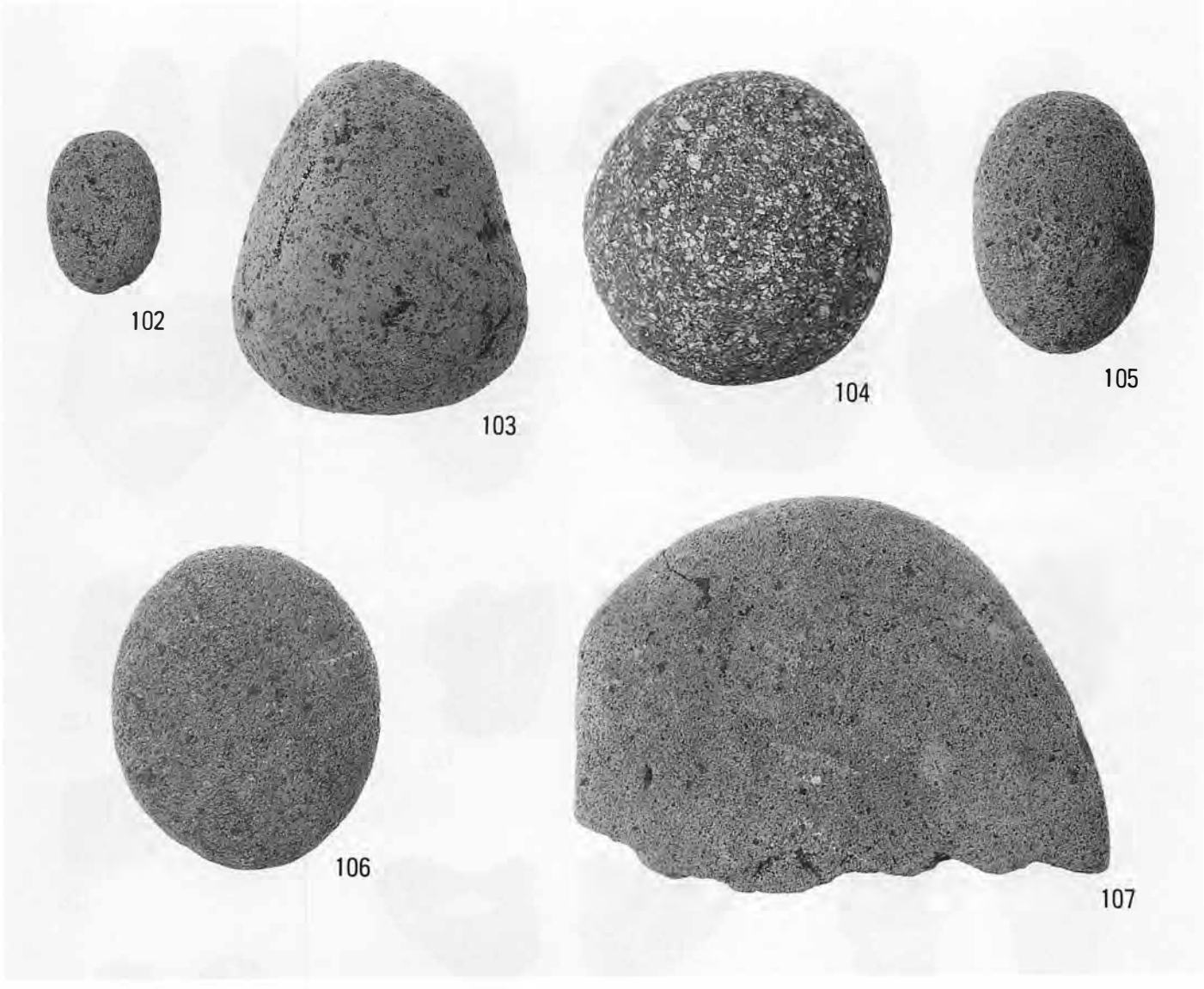
図版25



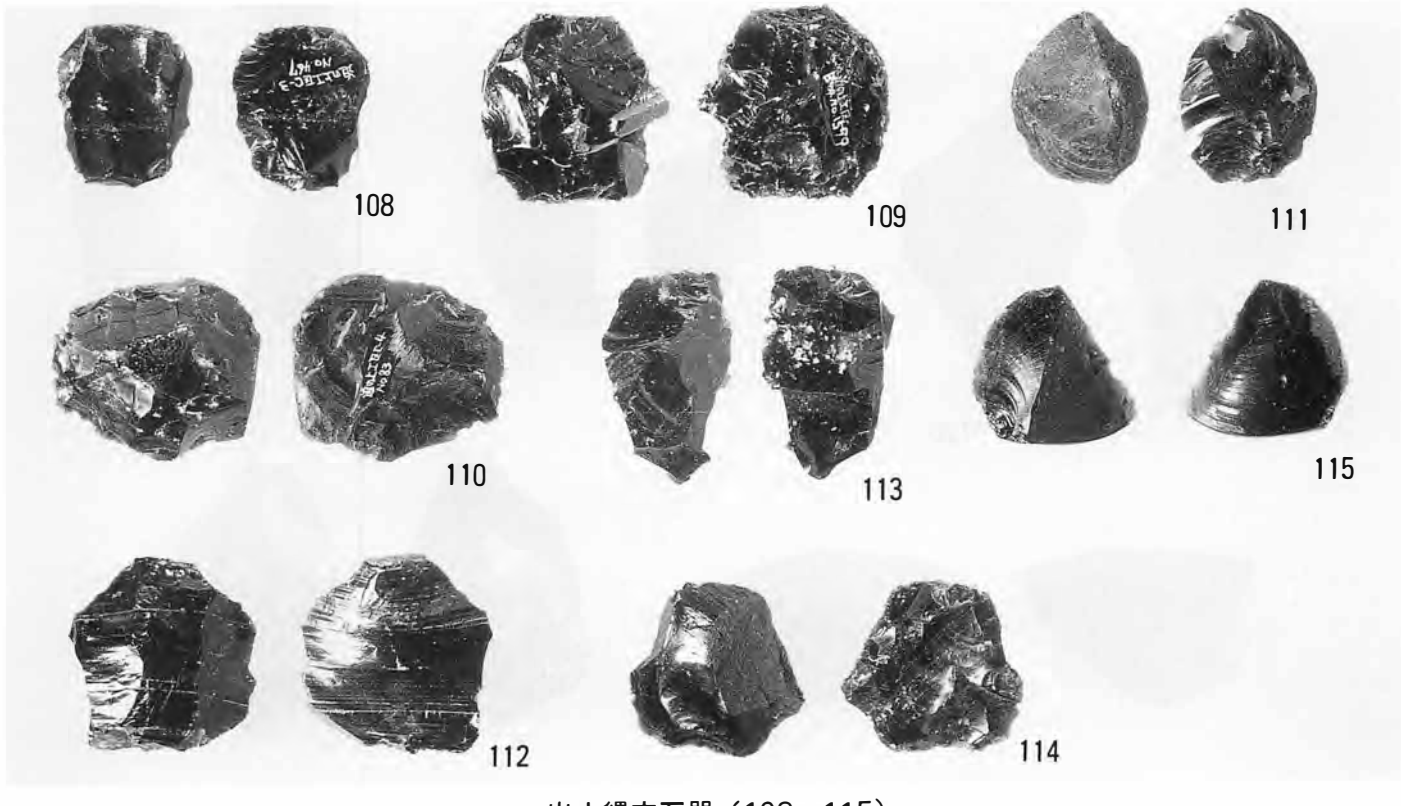
出土縄文石器（80～87）



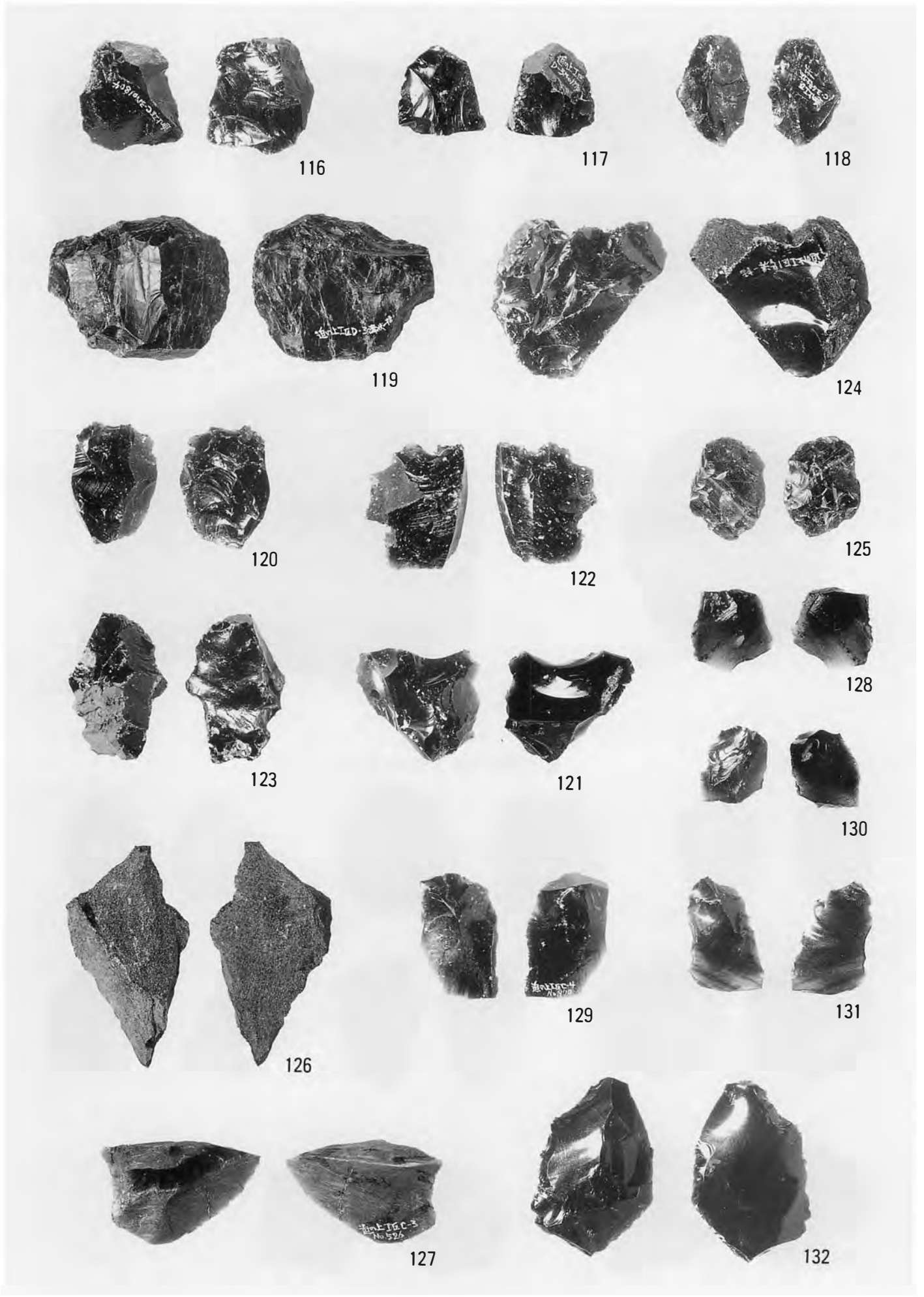
出土縄文石器（88～101）



出土縄文石器（102～107）



出土縄文石器（108～115）



出土縄文土器（116～132）

図版29

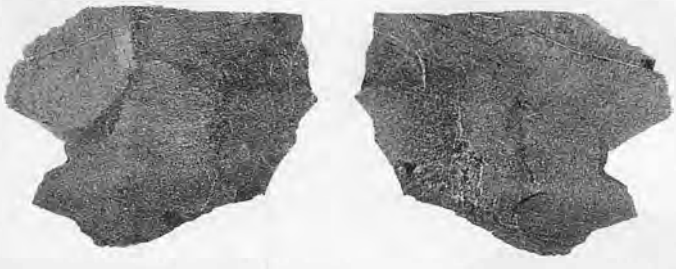
133

134

135

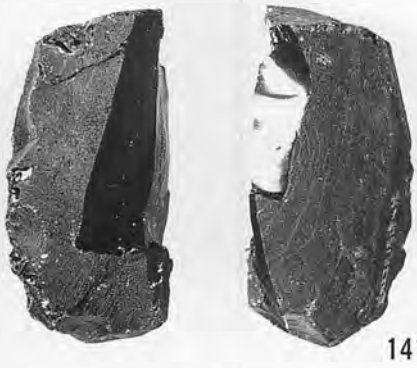
136

137


138

139

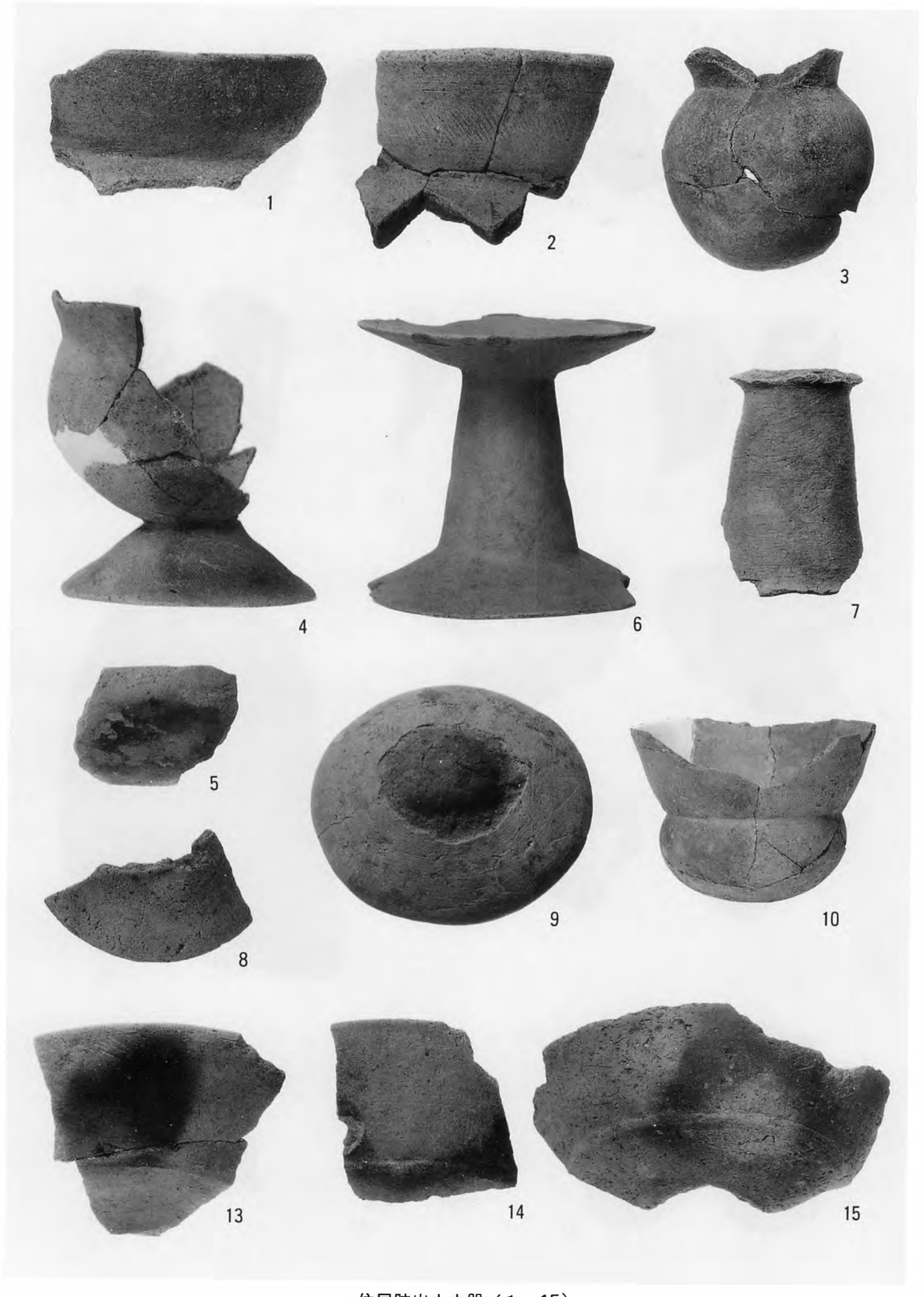
140


141

142

143

出土縄文土器（133～143）



住居跡出土土器（1～15）

12

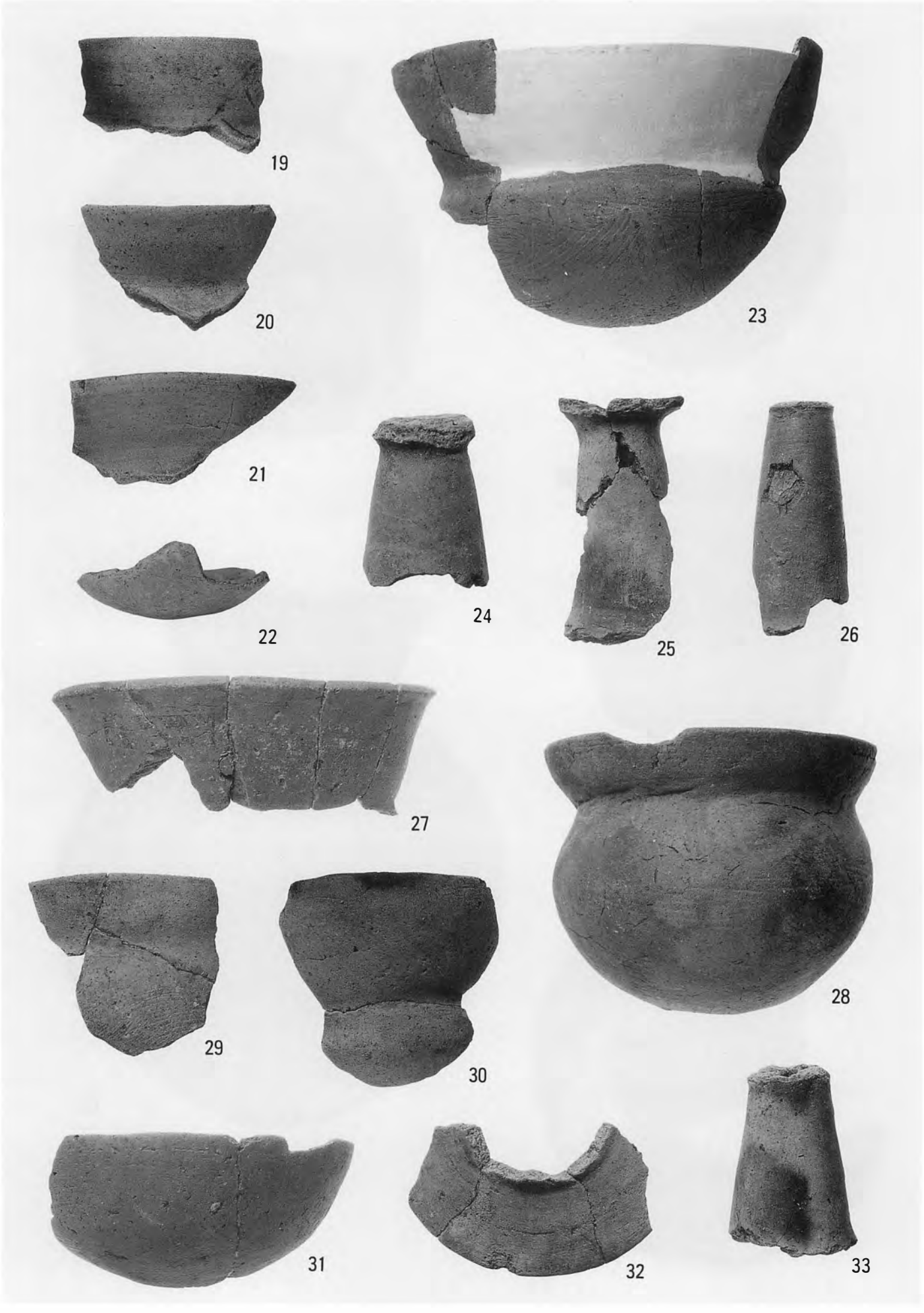
11

16

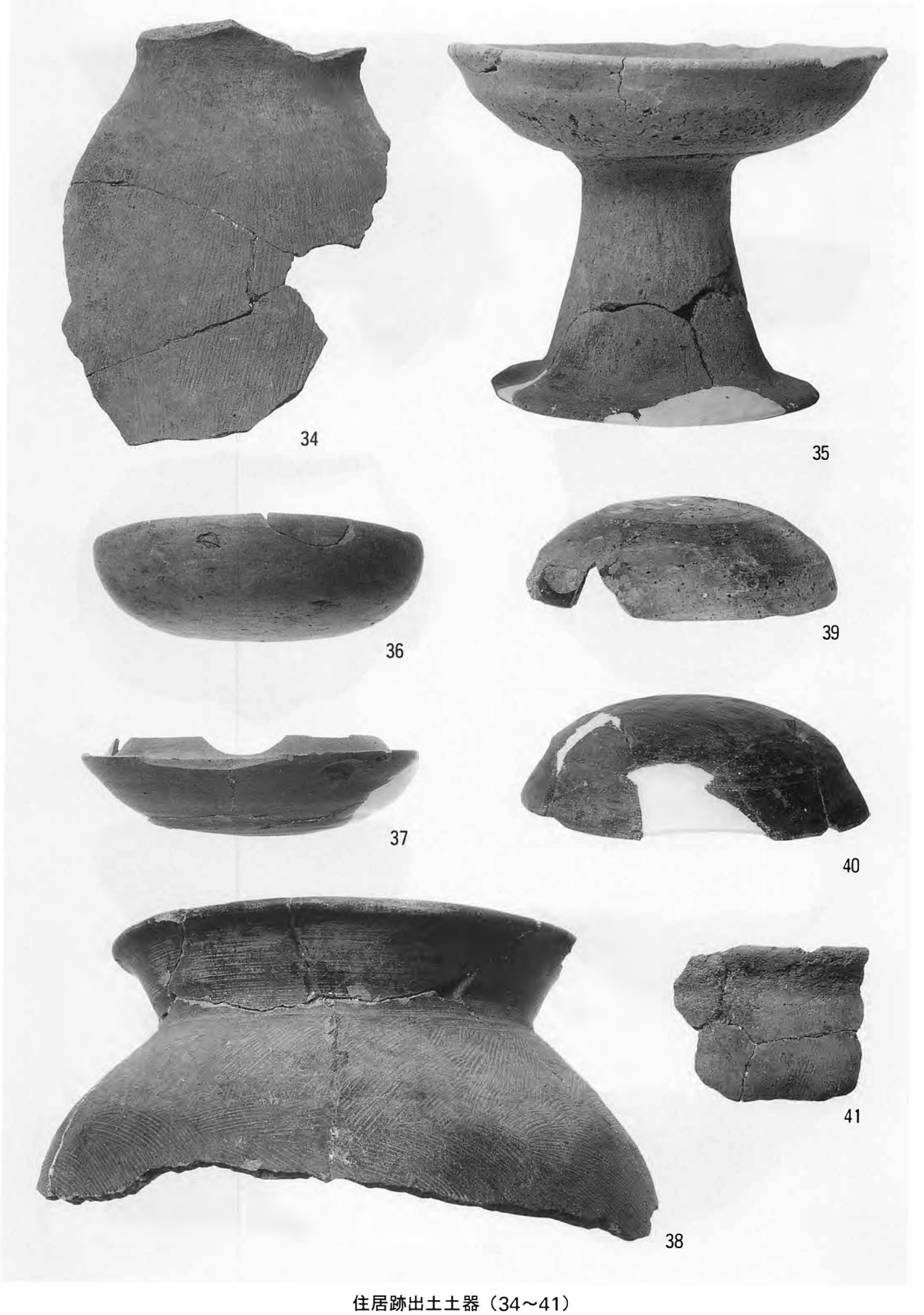
18

17

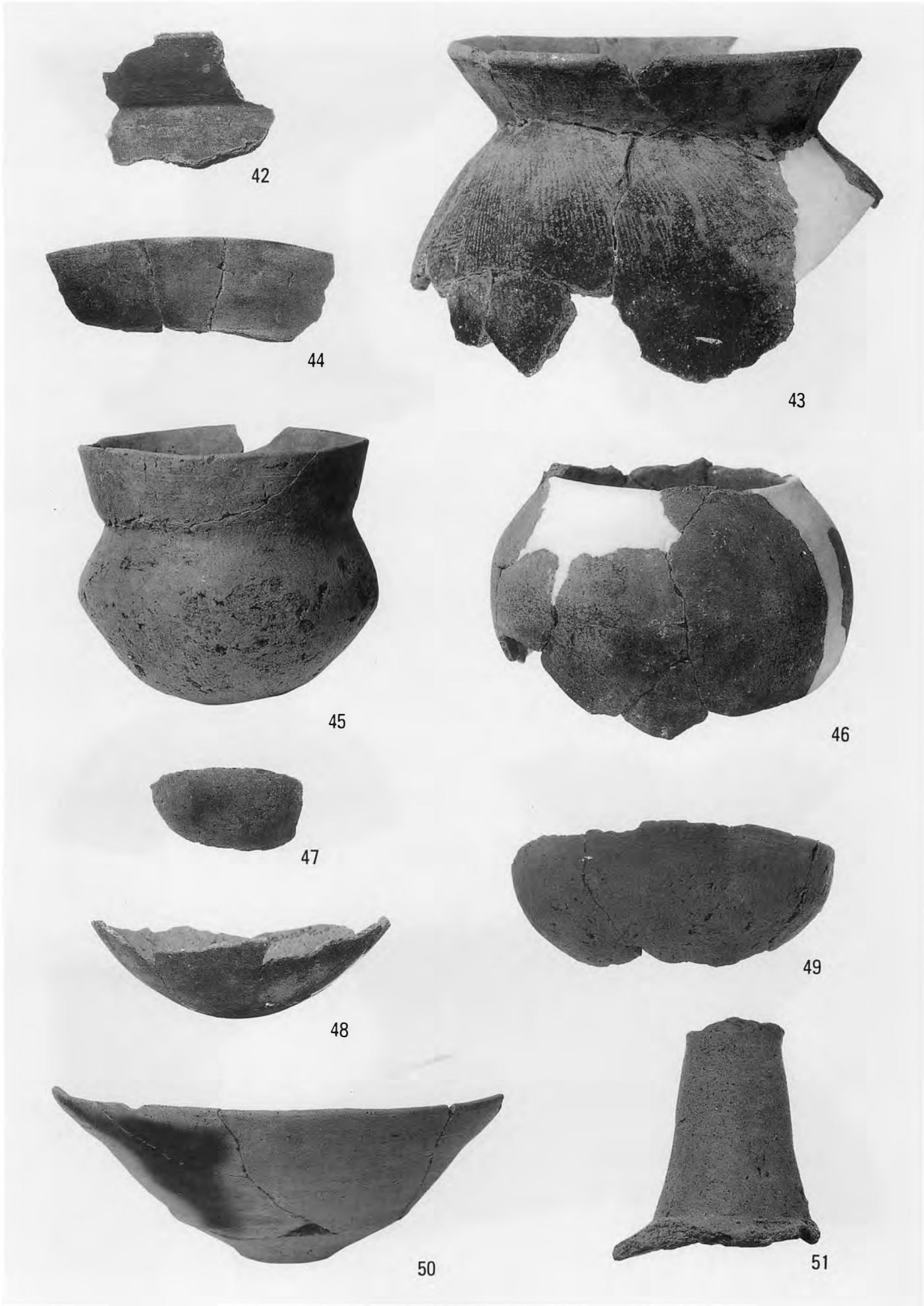
住居跡出土土器（11、12、16～18）



住居跡出土土器（19～33）

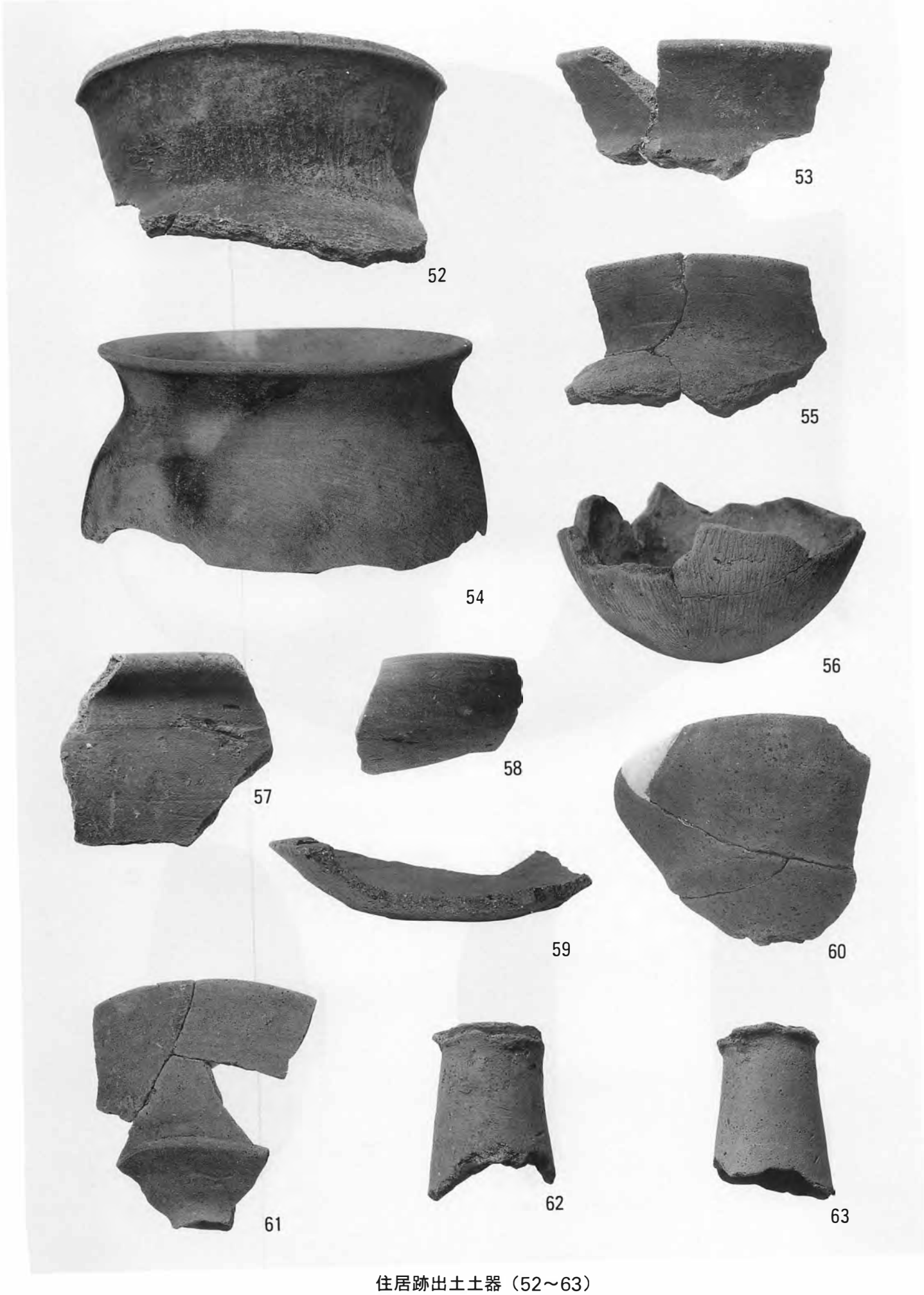


住居跡出土土器（34～41）

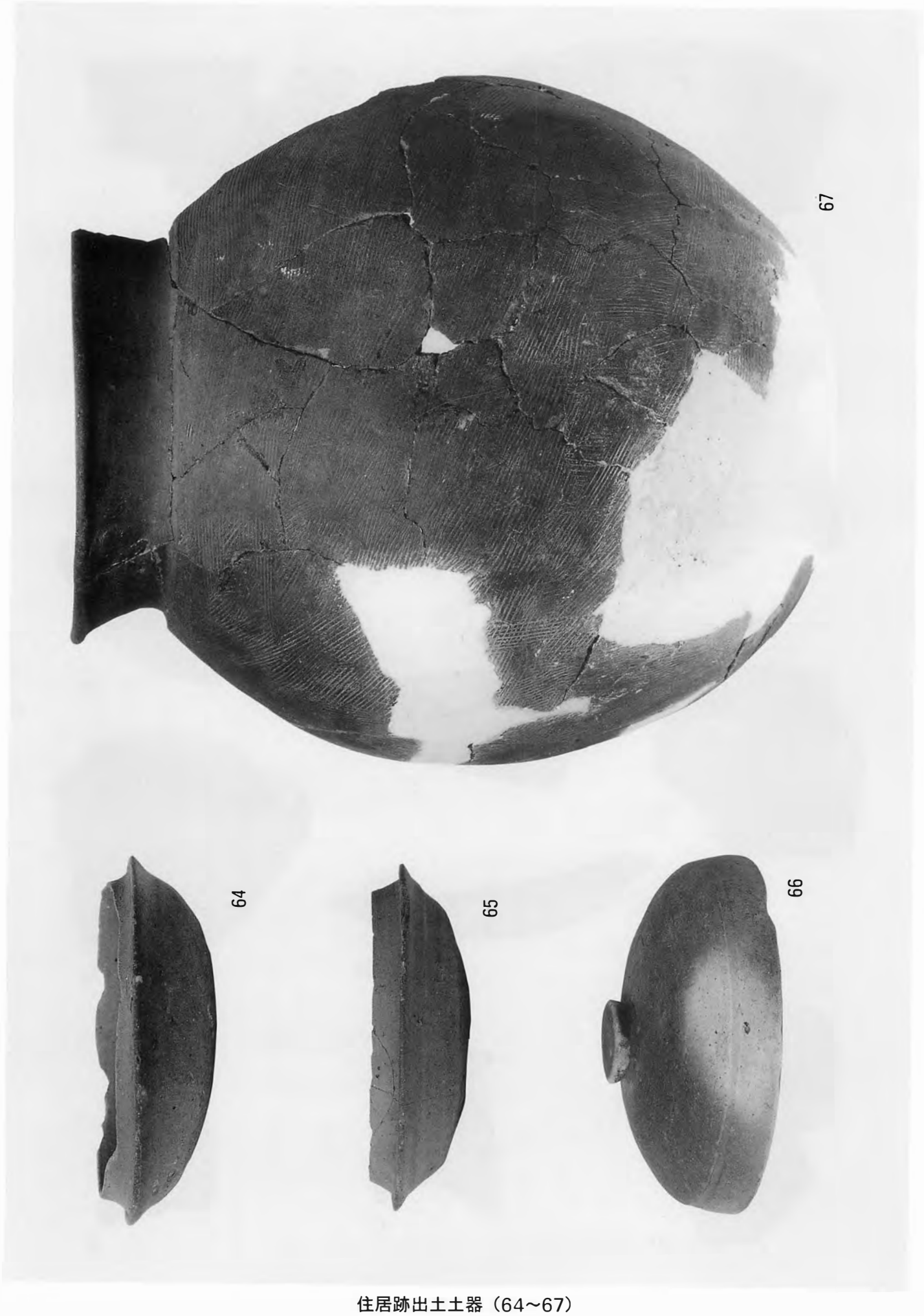


住居跡出土土器（42～51）

図版35



住居跡出土土器（52～63）

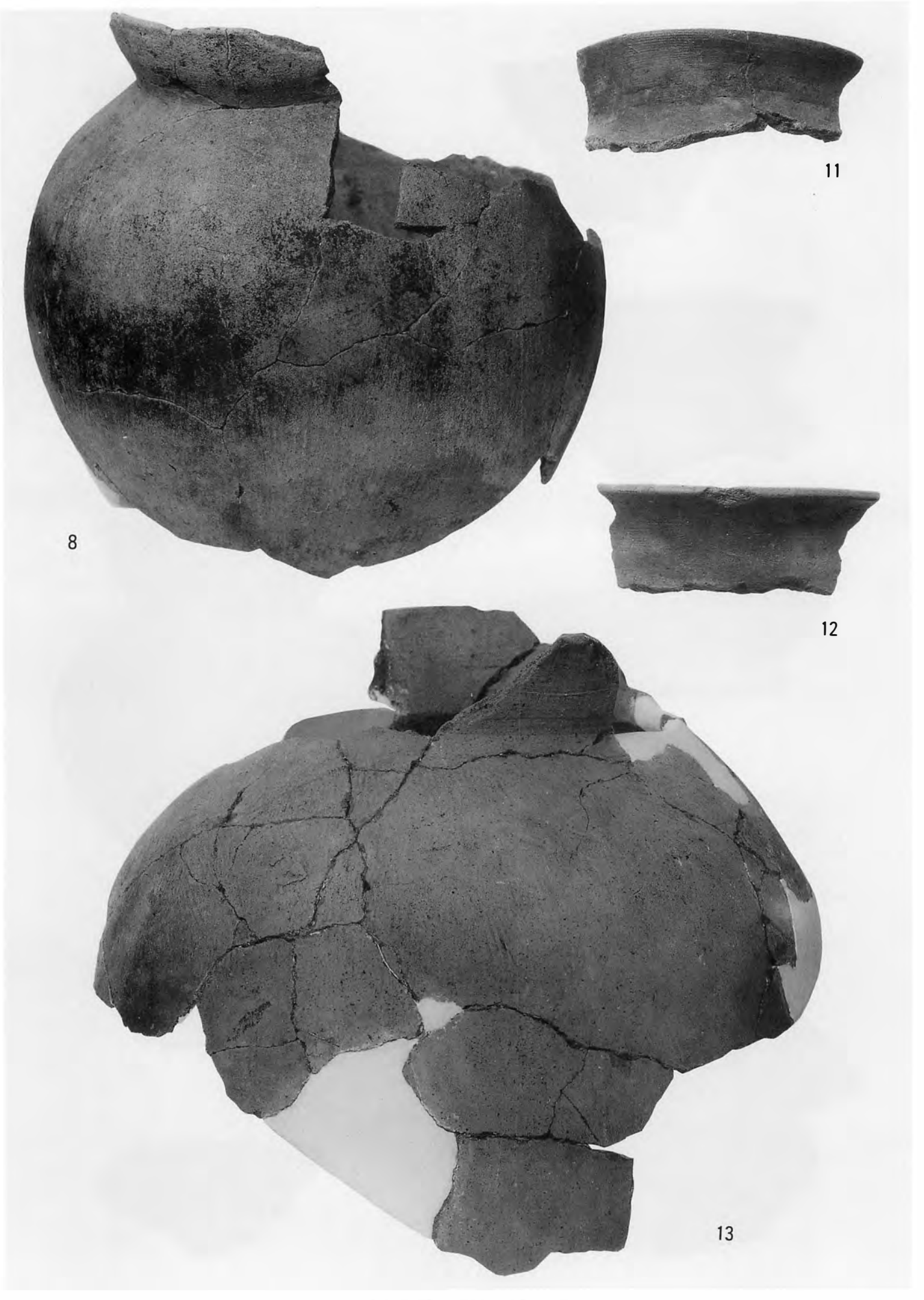


住居跡出土土器（64～67）

図版37

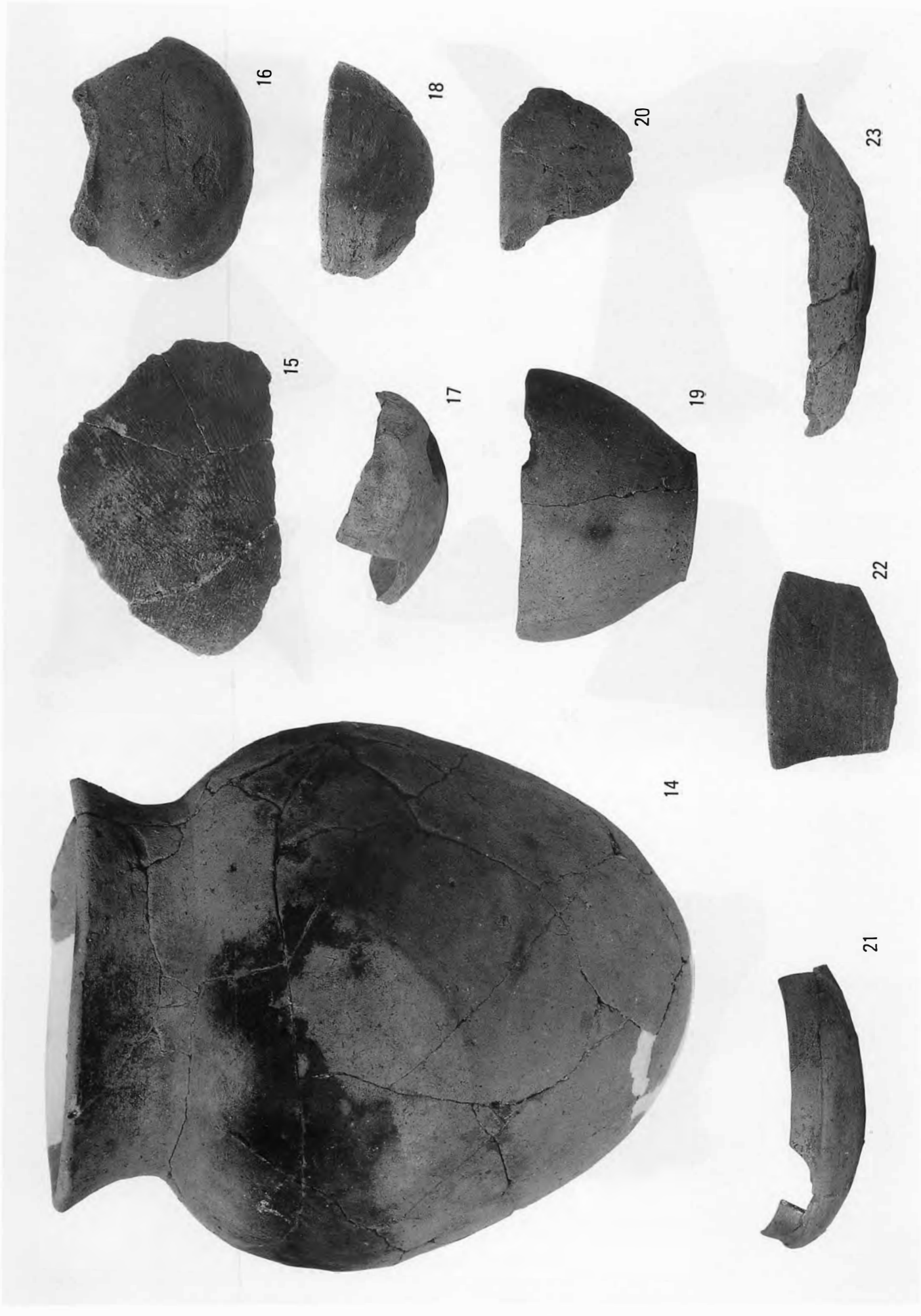
出土土師器（1～7、9、10）

図版38



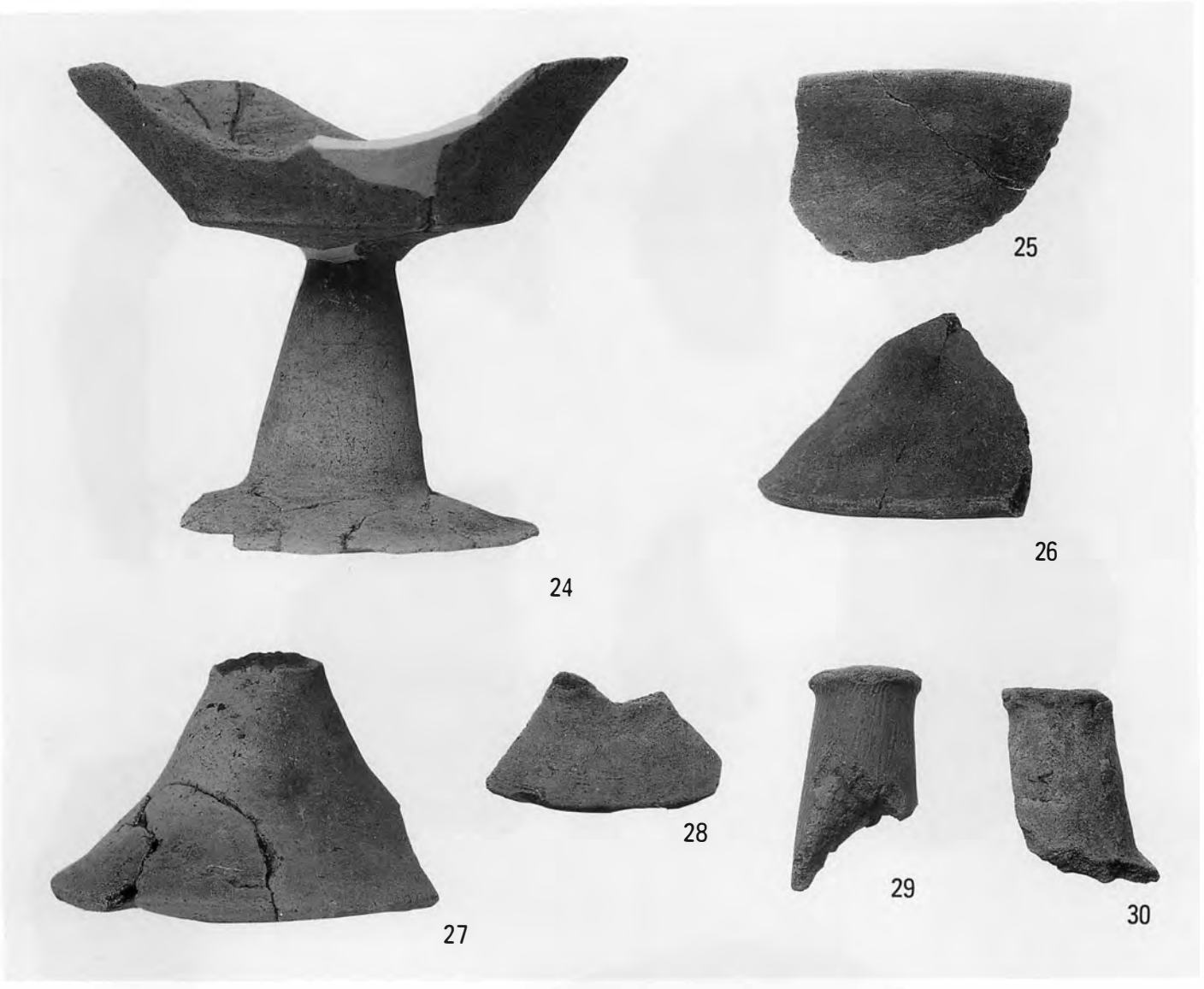
出土土師器（8、11～13）

図版39



出土土師器（14～23）

図版40



出土土師器（24～30）

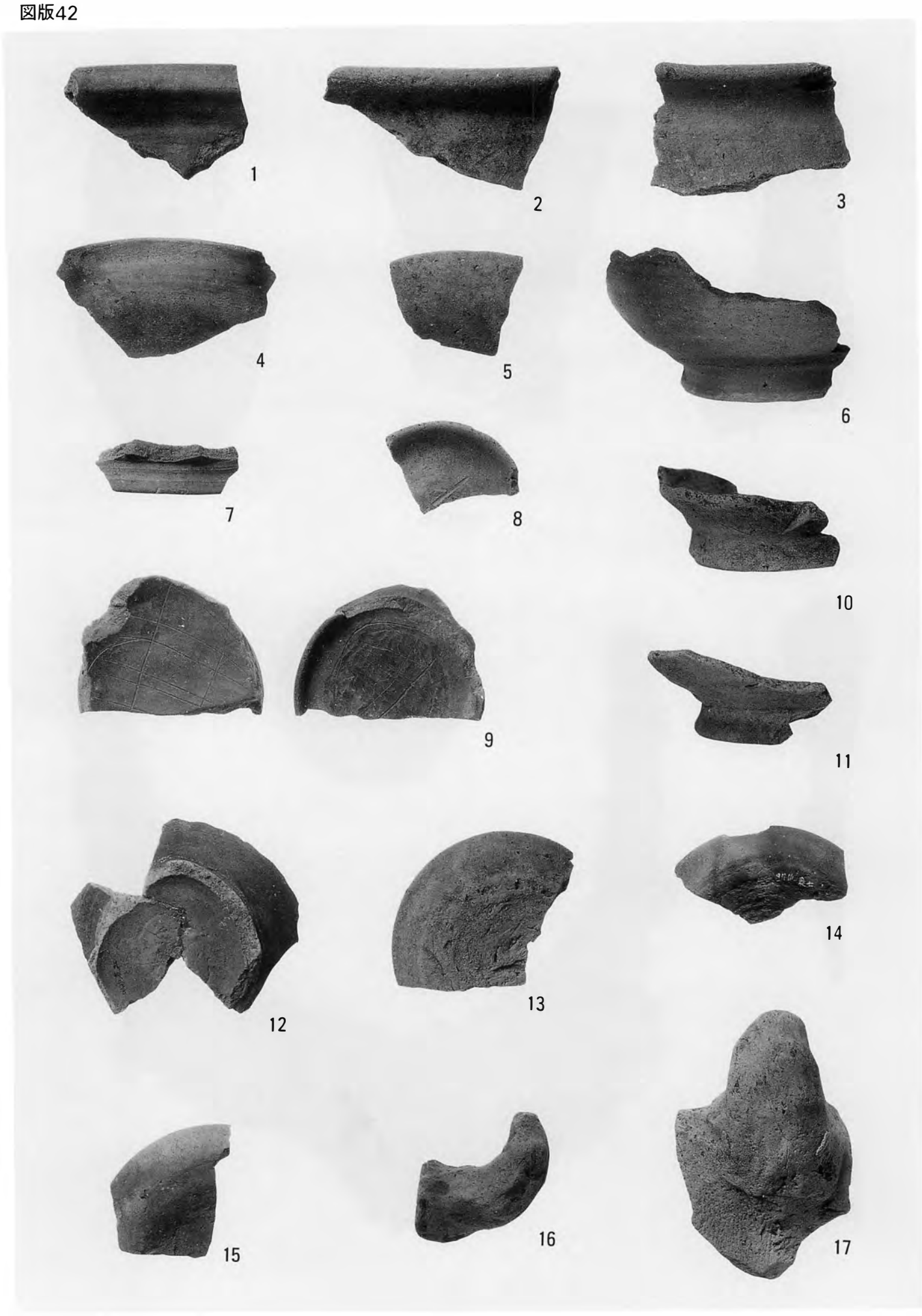
かまど支柱

図版41

出土砥石

出土鉄器・紡錘車・玉類

図版42



出土歴史時代土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	さこの　うえい　せき
書名	迫　ノ　上　遺　跡
副書名	一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第170集
編著者	濱田彰久
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号　　TEL 096-383-1111
発行年	1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
迫ノ上 （さこのうえ）	熊本市（くまもとし）龍田町（たつだまち）大字（おあざ）上立田（かみたつだ） 字迫ノ上（あざさこのうえ） 字高阪（あざたかさか） 字迫屋敷（あざさこやしき）	43201	092			19911105 ～ 19920610 19940419 ～ 19940907 19950512 ～ 19950701	3,310㎡ 2,580㎡ 510㎡	国道改築 （バイパス建設）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
迫ノ上	包含地	縄文時代 早期 中期 後期 晩期	集石１基 埋甕１基 竪穴住居跡 ２基	押型文土器、撚糸文土器、条痕土器、阿高式土器 後期前半土器、黒色磨研土器、粗製深鉢土器、突帯文土器 石鏃、石匙、石錐、削器、抉入石器、楔型石器、打製石斧、磨製石斧、石皿磨石、敲石、不定形石器、使用痕ある剥片、石核、異形石器	古墳時代の竪穴住居跡のうち５基はかまど付き、１基は３つの炉を持つ大型住居跡
	集落	古墳時代	竪穴住居跡 19基 掘立柱建物 １基	土師器、須恵器 砥石、紡錘車、鉄鏃、鉄鋤先、勾玉、ガラス玉	
		歴史時代		土師器、須恵器	

あとがき

熊本北バイパス第３工区関連の埋蔵文化財調査は、発掘調査と整理・報告書編集作業をあわせると足かけ８年に及ぶ長期にわたる事業でありましたが、この報告書の発行で一つの区切りを迎えることができました。

これも、発掘・整理作業に携わって頂いた多くの皆様のご協力とご努力のおかげであります。

報告書を終えるにあたって、そのご芳名を記し、感謝の意を表したいと思います。

発掘作業

穴見サトミ　荒木えみ子　池袋　隆行　石田ミネ子　犬塚冨美代　岩崎　将
岩田　政秀　魚住　尚子　有働　春美　江藤　一也　小田　信子　甲斐美紀代
甲斐由貴子　貝瀬　千秋　河上タツコ　木村　智加　熊谷　美里　合志カツ子
合志ミツ子　後藤　幸子　斉藤美由紀　境　喜美栄　島村　政和　清水たつよ
白井　勝子　菅原　貴明　杉浦りえ子　杉浦　泰子　高野　美香　立花　幸一
立原　恵子　田中　強　谷口ヨシエ　谷富　久恵　土田　俊雄　内藤なおみ
中西　陽子　中林留利子　中村　孝子　中山　森重　西嶋　功　西村　栄子
野口　康雄　野口ヨシノ　野崎千枝子　野田　隆　橋本スミ子　畠田　壮仁
馬場美智子　馬場　義美　早田　輝美　原田　菊代　番山　明子　淵上久美子
本田　貴博　松田　計子　松村喜代子　水野美知子　宮田　日文　宮本　典美
村上　春枝　森　せい子　森永恵美子　山内真千代　山城　玲子　横田　浩士
米田　靖史　渡辺　佳子

整理作業

江島　園子　大塚トシ子　緒方千代子　興梠富貴子　重永　照代　白井美恵子
塩田喜美子　津留富美枝　徳永みどり　橋本由美子　早野　弘子　宮本　幸子
村山　紀子　山切　律子　山下千栄子　山元　友子　吉本　清子

熊本県文化財調査報告　第170集

迫ノ上遺跡（さこのうえ）

一般国道３号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成11年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862-8570　熊本市水前寺６丁目18番１号

☎（096）381-9211

印刷　株式会社　城野印刷所

〒861-2296　熊本県上益城郡益城町広崎1630-1

☎（096）286-3366

10	教　教文
②	002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 170 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：迫ノ上遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/